秋　田　市

河　原　崎　遺　跡

― 経営体育成基盤整備事業に伴う発掘調査報告書 ―

2009.3　秋田市教育委員会

遺跡遠景航空写真（南から）

調査区全景航空写真（南東から）

調査３区第Ⅴ層面発見遺構（北から）

調査３区第Ⅴ層面土器出土状況

序

秋田県秋田地域振興局は、秋田市雄和相川地内に経営体育成基盤整備事業を予定していることから、秋田市教育委員会に事前調査の依頼があり、試掘調査を実施したところ河原崎遺跡が発見されました。そこで、遺跡の保護について協議を重ね、工事着手前に発掘調査を実施して遺跡を記録保存することにしました。

調査の結果、縄文時代前期の土坑や焼土遺構が多数、また中期の竪穴住居跡２軒などが発見されました。市内では縄文時代前期の遺跡は少なく、地域の歴史を考える上で貴重な成果を得ることができました。

本報告書はその調査結果をまとめたものであり、地域の文化財保護のため、また研究資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

刊行にあたり、発掘調査の実施と報告書作成にご指導、ご協力くださいました関係各位の皆様に深く感謝申しあげます。

平成21年３月

秋田市教育委員会

教育長　髙　橋　健　一

例　　言

1　本報告書は、経営体育成基盤整備事業に伴う河原崎遺跡（秋田市雄和相川字河原崎）の緊急発掘調査報告書である。

2　本事業は、事業主体者が秋田県秋田地域振興局、調査担当者が秋田市教育委員会となって実施した。本発掘調査経費については、経営体育成基盤整備事業主体者である秋田県秋田地域振興局が95％を負担し、農家負担分の５％を国庫補助金および県費補助金の交付を受けた。

3　本発掘調査は、調査区を１～３区に分けて行い、１区を秋田市教育委員会、２、３区を駒澤大学考古学研究室が担当した。整理作業についても同様に、１区を秋田市教育委員会、２、３区を駒澤大学考古学研究室が担当した。

4　本報告書の執筆は、安田忠市、進藤　靖、駒澤大学考古学研究室が行い、編集は石郷岡誠一、安田忠市の指導を得て進藤　靖が行った。

5　遺跡の地形・地質は、「土地分類基本調査　羽後和田　秋田県　1975年３月」を参照した。

6　調査３区の第Ⅴ層土壌試料の珪藻分析・花粉分析および調査２区の１号竪穴住居跡石囲炉の埋土試料の微細物分析は、株式会社パリノ・サーヴェイに委託した。

7　発掘調査による出土遺物・実測図・写真・その他の記録は、秋田市教育委員会が保管する。

8　発掘調査、整理作業の過程で下記の各氏より指導、助言を賜った。（敬称略・順不同）
秋田県秋田地域振興局農林部農村整備課、雄和中央土地改良区、文化庁、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、冨樫泰時、大野憲司、利部　修、武藤祐浩、新海和広

凡　　例

1　調査１区の調査区・グリッド・遺構配置図や遺構図の方位は真北を、調査２、３区の遺構図の方位は磁北を示す。

2　図中の地図は、秋田市管内図１／50,000、国土地理院　羽後和田・新波１／25,000を使用した。

3　本文中の遺物については、土器・土製品・石器の基礎分類ごとに記述した。

4　調査１区の焼土遺構の範囲は、 のスクリーントーンで表現した。また、調査２、３区の焼土遺構および遺物の表現方法については、第49図に示したとおりである。

5　遺構図の、調査１区のＰは土器（片）、調査２、３区の○は土器、●は石器、Ｓは石（礫）を示している。

目　　次

序

例言

凡例

目次

第１章　調査の概要 …… 1
　1　調査に至るまでの経過 …… 1
　2　調査期間と体制 …… 1
　3　整理作業期間と体制 …… 2
　4　調査の経過 …… 3

第２章　遺跡の環境 …… 3
　1　遺跡の位置と地形・地質 …… 3
　2　周辺の遺跡 …… 5

第３章　調査の記録 …… 8
　1　１区（秋田市教育委員会担当） …… 8
　　⑴　調査の方法 …… 8
　　⑵　基本層序 …… 8
　　⑶　遺構と遺物 …… 8
　2　２、３区（駒澤大学担当） …… 42
　　⑴　調査の方法 …… 42
　　⑵　基本層序 …… 42
　　⑶　遺構と遺物 …… 45

第４章　河原崎遺跡の自然科学分析調査 …… 112

第５章　まとめ …… 118

第1章　調 査 の 概 要

1　調査に至るまでの経過

秋田県秋田地域振興局は、遺跡が所在する可能性がある秋田市雄和相川地内に銅屋地区経営体育成基盤整備事業を予定していることから、秋田市教育委員会と埋蔵文化財に関する事前協議を行い、平成18年９月26日付けで秋田市教育委員会に埋蔵文化財事前調査の依頼があった。

これを受けて秋田市教育委員会は、平成19年２月20日～３月１日、３月19日に分布調査および試掘調査を実施した。その結果、雄和相川字河原崎地内において土坑等の遺構や遺物包含層が確認された。そこで、これまで当該地では遺跡が確認されていなかったことから、新発見の遺跡「河原崎遺跡」として平成19年５月23日付けで秋田県教育委員会に届出をし、登録した。

そして、秋田県秋田地域振興局と秋田市教育委員会は遺跡の保護について協議した結果、事業予定地や設計等の変更は困難であることから、発掘調査による記録保存を行うこととし、秋田市教育委員会はこの結果を秋田県教育委員会に報告した。秋田地域振興局は平成19年６月22日付けで秋田県教育委員会に土木工事等のための発掘の通知書（文化財保護法第94条第１項）を提出し、６月28日付け教生－706で周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について、工事着手前に発掘調査を実施することを条件とする通知を受けた。

この通知を受けて秋田地域振興局は、工事着手前に発掘調査を実施することとし、平成19年７月２日付けで秋田市教育委員会に事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を依頼、平成19年７月６日付けで秋田県秋田地域振興局と秋田市は銅屋地区経営体育成基盤整備事業　第92146号業務委託として埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、秋田市教育委員会が河原崎遺跡の発掘調査を実施することとなった。

2　調査期間と体制

調 査 期 間　平成19年７月17日～10月１日
調 査 面 積　5,000㎡
事業主体者　秋田県秋田地域振興局
調査担当者　秋田市教育委員会
調 査 体 制　文化振興室　　室　　長　小　松　正　夫
　　参　　事　赤　川　　衛
　　室長補佐　加　藤　隆　子
　文化財担当
　　主席主査　西　谷　　隆
　　主席主査　安　田　忠　市（調査担当）
　　主　　事　進　藤　　靖（調査担当・主務者）
　　主　　事　鎌　田　英　智
　　主　　事　小　野　隆　志
　　主　　事　伊　藤　才　城
　調査作業員　伊藤　悟、久米鉄雄、浅野省三、工藤忠彦、加藤徳義、加藤　渉、

岡部一郎、秋元真貴子、工藤南海子、長谷部良美

発掘調査にあたっては、駒澤大学考古学研究室の協力を得て行った。体制については下記のとおりである。

駒澤大学考古学研究室

駒澤大学文学部　教　授　飯　島　武　次
教　授　酒　井　清　治
教　授　設　楽　博　己

駒澤大学大学院　院　生　藤野一之、瀧音　大、松下　賢、三原翔吾

駒澤大学文学部　学　生　中山雄市、青木純一郎、赤星純平、新井　努、有坂恭祐、石井直毅、市川岳朗、伊東　潔、大河原務、金杉佑太、金成愛子、河合太一、菊池栄輝、黒松　旭、残間　睦、塩野由理、島崎達也、菅原郁美、鈴木詩織、清野大徳、高橋弘成、丹　洋輔、丹沢菜美子、千野慎太郎、中泉雄太、野澤宏光、林　和樹、藤田智文、三船　咲、宮部俊周、村木真由、八木澤美香、山本堅二郎、油布憲昭、吉田彩恵子、吉田　愛、和多田裕己

3　整理作業期間と体制

作業期間　平成20年９月24日～平成21年３月30日

事業主体者　秋田県秋田地域振興局

調査担当者　秋田市教育委員会

調査体制　文化振興室　室　長　石郷岡　誠　一
参　事　赤　川　　衛
室長補佐　加　藤　隆　子

文化財担当
副参事　安　田　忠　市（整理担当）
主席主査　西　谷　　隆
主　査　進　藤　　靖（整理担当・主務者）
主　事　鎌　田　英　智
主　事　伊　藤　才　城

整理作業員　鈴木留美子、正木祐子、安西大樹、相場美喜子

整理作業にあたっては、駒澤大学考古学研究室の協力を得て行った。体制については下記のとおりである。

駒澤大学考古学研究室

駒澤大学文学部　教　授　酒　井　清　治

駒澤大学大学院　院　生　藤野一之、瀧音　大、松下　賢、三原翔吾

駒澤大学文学部　学　生　中山雄市、青木純一郎、赤星純平、新井　努、有坂恭祐、石井直毅、市川岳朗、伊東　潔、大河原務、金杉佑太、金成愛子、河合太一、菊池栄輝、坂爪恵美、残間　睦、塩野由理、島崎達也、菅原郁美、鈴木詩織、清野大徳、丹　洋輔、丹沢菜美子、千野慎太郎、中泉雄太、野澤宏光、林　和樹、三船　咲、宮部俊周、村木真由、八木澤美香、山本堅二郎、油布憲昭、吉田彩恵子、吉田　愛、和多田裕己

4　調査の経過

平成19年度の発掘調査は平成19年７月17日から10月１日まで実施した。７月17日、調査範囲を設定し、調査を開始した。重機による表土除去作業を行った（７月20日まで)。７月23日、調査区の測量を実施し、グリッド設定後、測量杭の打設を行った（７月27日まで)。調査区は１区から３区まで設定し、１区を秋田市教育委員会、２、３区を駒澤大学考古学研究室が担当した。７月23日、１区の遺物包含層の掘り下げと遺構の精査を開始した（９月６日まで)。８月６日、２、３区の遺物包含層の掘り下げと遺構の精査を開始した（８月11日まで)。８月13日、２、３区の各遺構の掘り下げと記録化を開始した（９月２日まで)。９月１日、遺跡全景の航空写真撮影を行った。９月３日、１区の遺構確認状況と２、３区の遺構調査状況の写真撮影を行い、２、３区の調査を終了した。９月７日、１区の各遺構の掘り下げと記録化を開始した（９月20日まで)。９月18日、１区の平面実測を行った（９月20日まで)。９月19日、調査区東半の遺跡全景航空写真撮影と１区の遺構調査状況の写真撮影を行った。９月21日、１区の第Ⅴ層以下の状況を確認するため幅２ｍのトレンチを３本設定し重機により掘り下げを行い、検出遺構および土層断面の記録化を行った（10月１日まで)。10月１日、機材を撤去し、調査を終了した。

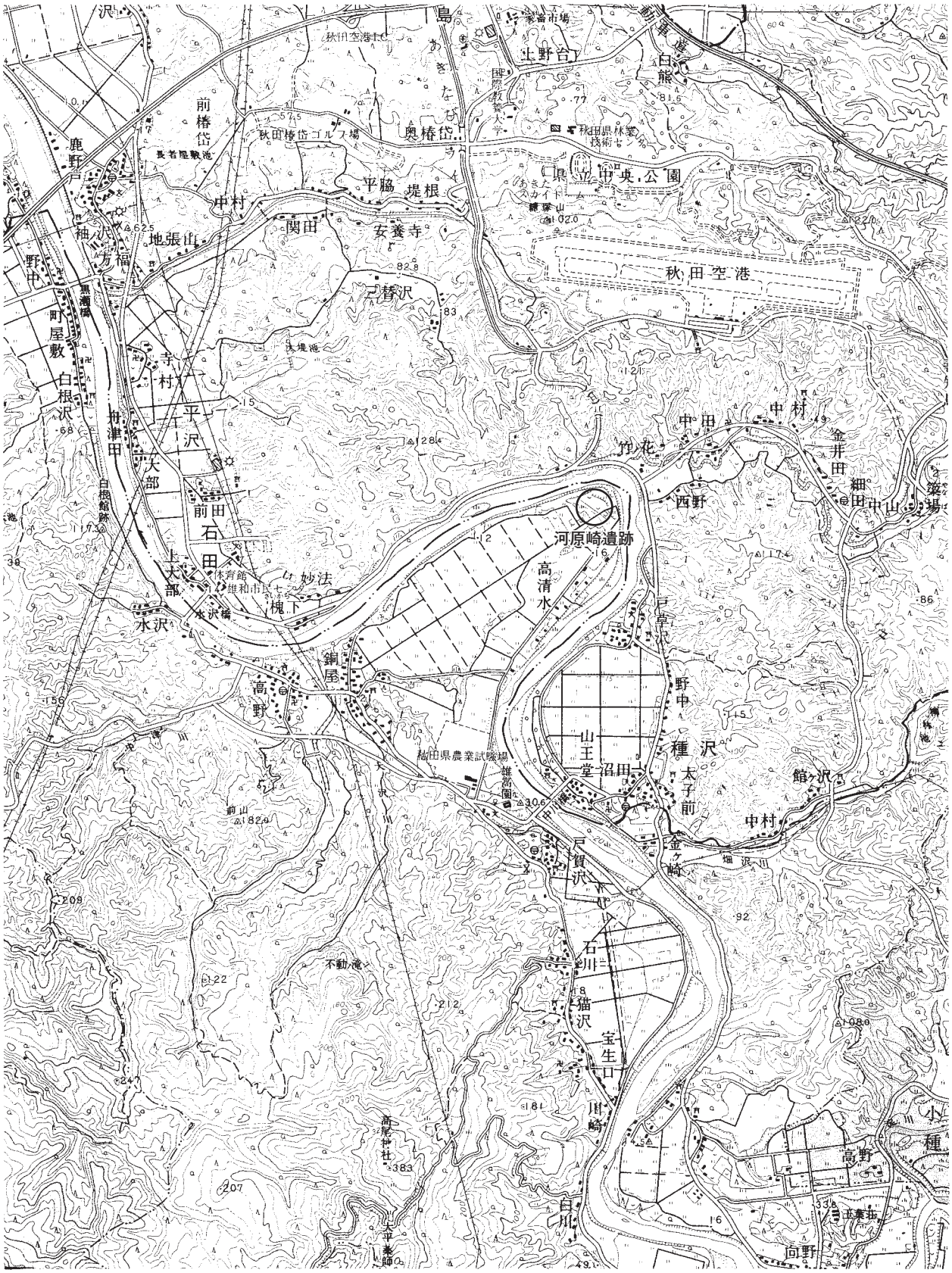
平成20年度の整理作業は、２、３区の調査を担当した駒澤大学考古学研究室が平成19年から整理作業を始め、平成20年８月31日まで室内整理作業を行った。注記（10月)、接合（10月～11月)、実測（11月～６月下旬)、トレース（12月上旬～８月上旬)、写真撮影（１月)、版下作業（６月末～８月）を行った。

秋田市教育委員会が調査を担当した１区の整理作業は平成20年９月24日から始め、出土遺物の洗浄を開始した。10月17日から平成21年２月６日まで室内整理作業を行った。接合（10月)、注記（11月)、実測（11月～12月中旬)、トレース（12月下旬～１月中旬)、写真撮影（１月)、版下作業（１月)、編集作業（２月）を行い、印刷業者に入稿した。３月30日までに校正・製本作業を実施し、全工程を終了した。

第２章　遺跡の環境

1　遺跡の位置と地形・地質

河原崎遺跡は、秋田市南部の雄和地域、北緯39°35′50″、東経140°12′29″、秋田市雄和相川字河原崎地内の雄物川左岸の標高約14ｍの沖積低地上に所在する。主要地方道秋田雄和本荘線沿いに位置する秋田県農業試験場から北東へ約2.7㎞、秋田空港から南へ約２㎞、秋田市雄和市民センターから西へ約3.5㎞の地点で、日本海からは約13㎞内陸へ入った所である。



0　2,000m

第１図　遺跡の位置

遺跡が所在する河原崎地区は、地形区分では雄物川低地に位置する。雄物川低地は、県内最長河川で東北４大河川のひとつである雄物川（幹線流路延長129.8㎞、流域面積4,635.2㎢、支川数31）沿いに発達する沖積低地で、雄和地域はこの雄物川の中・下流域にあたる。雄物川は両側の山地や丘陵・段丘地を切って先行性河谷の谷底平野を造り、その幅は約1,000ｍで、川幅は約200ｍで緩やかに大きく蛇行し、両岸に攻撃斜面と防禦斜面とが交互に発達し、後者の河岸には自然堤防が形成されている。雄物川の中流域にあたる大仙市付近は、特に大きく蛇行して氾濫原となっており、水田の冠水被害が多い所である。そして、遺跡周辺にも大きな蛇行がみられ、東にコの字状に迂回し、遺跡はその内側ともいえる左岸に位置している、一帯は谷底平野であるが河岸は周辺よりも高くなっており、砂の堆積による自然堤防を形成している。

当該地一帯の地質は砂がち堆積物（沖積層）と呼ばれ、粘土とシルトを主体とし、腐植土・礫・砂が介在する。詳細は、上面から表土層、粘土層、粘土質の砂層、粘土層、砂質のシルト層、腐植土混じりの砂層、砂礫層、粘土質のシルト層、粘土層、砂層、砂礫層の互層で、表層は多湿黒ボク土壌である。

２　周辺の遺跡（第２図）

秋田市雄和地域では、平成15年度に秋田県教育委員会が実施した遺跡分布調査で63箇所の遺跡が確認されている[註１]。この分布調査に基づいて、平尾鳥・相川・種沢・戸賀沢・女米木周辺の遺跡について概観する。

旧石器時代の遺跡は、この地域で現在のところ確認されていない。

縄文時代は、御倉館（１）、下野遺跡（５）、銅屋遺跡（７）、上野遺跡（９）、雄和金ヶ崎遺跡（11）、宮田沢遺跡（13）が所在する。下野遺跡は平成19年10月23日～10月26日に実施した経営体育成基盤整備事業に伴う試掘調査で新たに発見された遺跡で、平成20年５月20日～８月29日に発掘調査を実施し、縄文時代前期の土坑・焼土遺構、縄文時代後期の竪穴遺構・土坑・焼土遺構が検出され、縄文土器・石器が出土している。その他の遺跡では、土器・石器が採集されている。

弥生時代の遺跡は、この地域で現在のところ確認されていない。

古代は、小谷地遺跡（６）から土師器・木製品が、御江田遺跡（12）から土師器が採集されている。

中世は、平尾鳥城跡[註２]（３）が平尾鳥川左岸の標高約70ｍの丘陵上に位置する。館は連郭で郭・空堀・井戸跡が認められる。種沢館[註３]（10）は雄物川右岸の標高約80ｍの丘陵上に位置する。館は連郭で、主郭・二の丸・帯郭・空堀・井戸跡が認められる。また、石川Ⅰ遺跡（14）から土師器が採集されている。

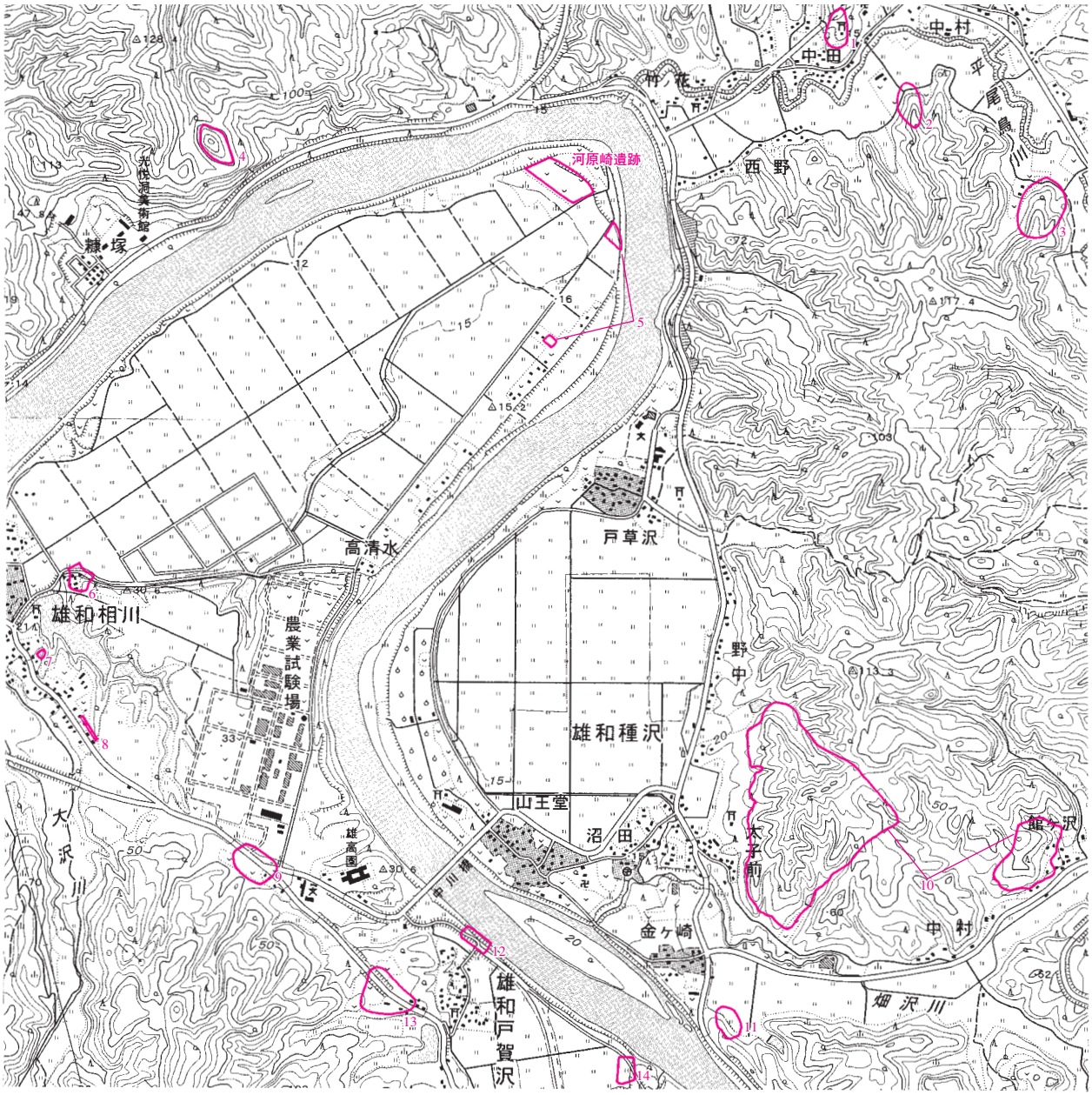
近世は、街道の松（８）が市指定史跡となっている。

また、時代は不明であるが、菅生沢の柵（２）で井戸跡が、小平の柵遺跡（４）で鍛冶場跡が確認されている。

註１　「秋田県遺跡地図（秋田・河辺地区版）」秋田県教育委員会　2004年３月

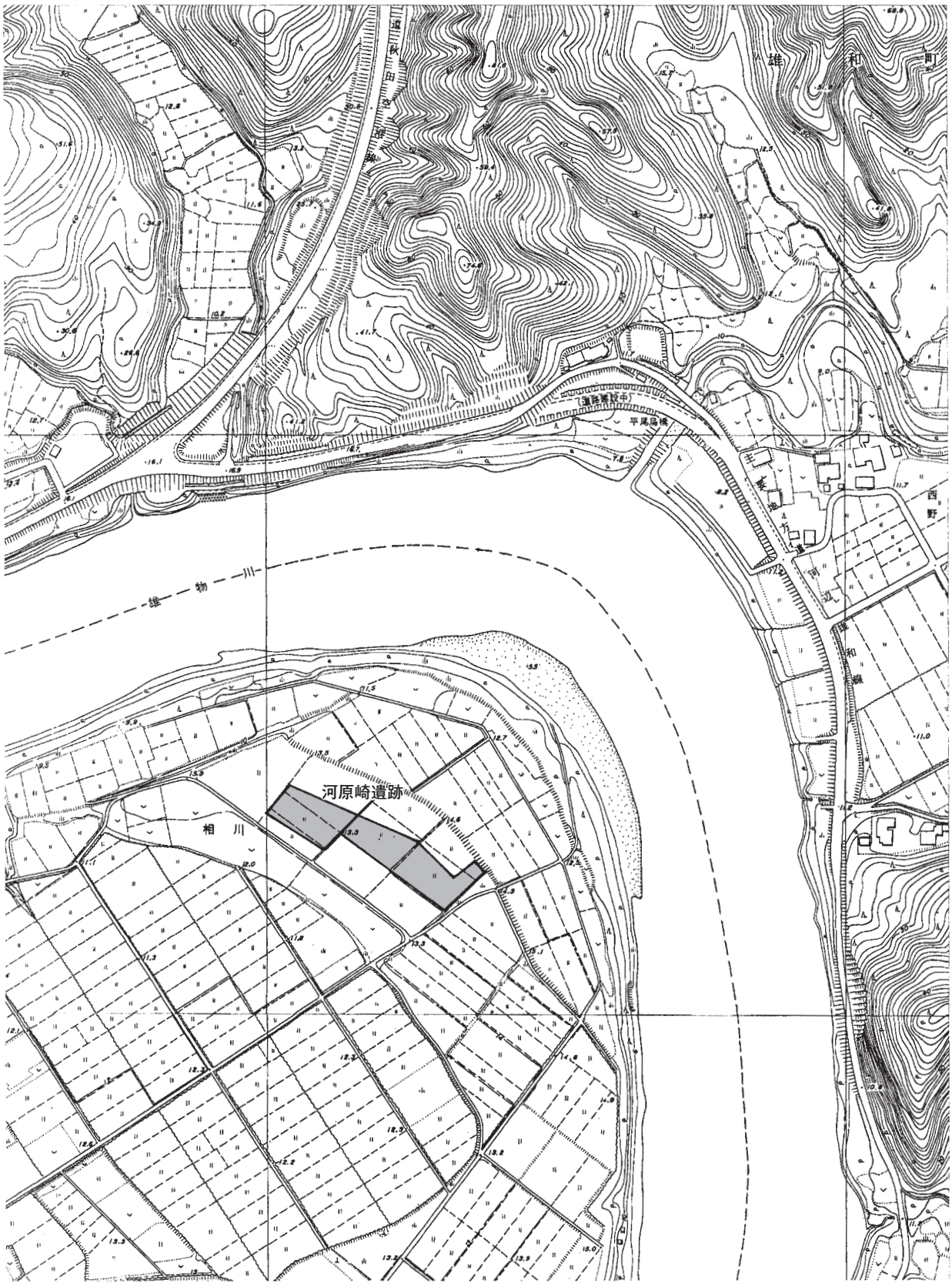
註２　「秋田県の中世城館」秋田県文化財調査報告書第86集　秋田県教育委員会　1981年３月

註３　註２に同じ



第２図　周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	遺構・遺物
1	御倉館	秋田市雄和平尾鳥字中田	遺物包含地	縄文	縄文土器・石匙・石器
2	菅生沢の柵	秋田市雄和平尾鳥字長田	柵跡		井戸跡
3	平尾鳥城跡	秋田市雄和平尾鳥字細田	城跡	中世	建物跡・土塁・井戸跡
4	小平の柵遺跡	秋田市雄和平尾鳥字小平	柵跡		鍛冶場跡
5	下野遺跡	秋田市雄和相川字下野	集落跡	縄文	竪穴遺構・土坑・焼土遺構、縄文土器・石器
6	小谷地遺跡	秋田市雄和相川字小谷地	遺物包含地	平安	土師器・木製品
7	銅屋遺跡	秋田市雄和相川字上野	遺物包含地	縄文	縄文土器・石鏃・石斧
8	街道の松	秋田市雄和相川字銅屋	松	近世	秋田市指定史跡
9	上野遺跡	秋田市雄和相川字上野	遺物包含地		剥片
10	種沢館	秋田市雄和種沢字館ヶ沢	館跡	中世	土塁
11	雄和金ヶ崎遺跡	秋田市雄和種沢字金ヶ崎	遺物包含地	縄文	縄文土器・石器
12	御江田遺跡	秋田市雄和戸賀沢字御江田	遺物包含地	奈良・平安	土師器
13	宮田沢遺跡	秋田市雄和戸賀沢字御江田	遺物包含地		剥片
14	石川Ⅰ遺跡	秋田市雄和女米木字水里	遺物包含地	中世	土師器



第３図　遺跡周辺の地形

第3章　調 査 の 記 録

調査にあたっては、調査区を３地区に分け、１区を秋田市教育委員会が、２、３区を駒澤大学考古学研究会が担当した（第４図）。なお、整理作業にあたっても、同様に１区を秋田市教育委員会が、２、３区を駒澤大学考古学研究会が行った。

１　１区（秋田市教育委員会担当）

⑴　調査の方法

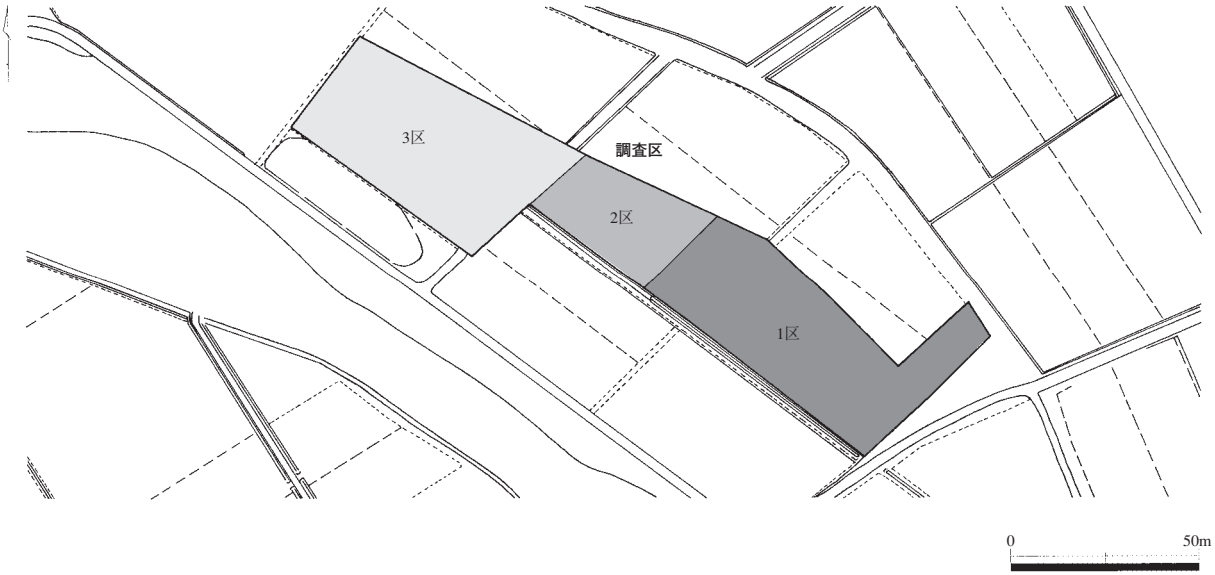
調査区に任意の点18箇所を選定し、この基準杭から東西基線とこれに直交する南北基線に４×４ｍのグリッドを設定した（第５図）。グリッドは、東西方向（Ｘ軸）に２文字のアルファベット、南北方向（Ｙ軸）に算用数字を付し、各グリッドの南東隅の交点で両者を組み合わせてグリッド名とした。

⑵　基本層序（第６図）

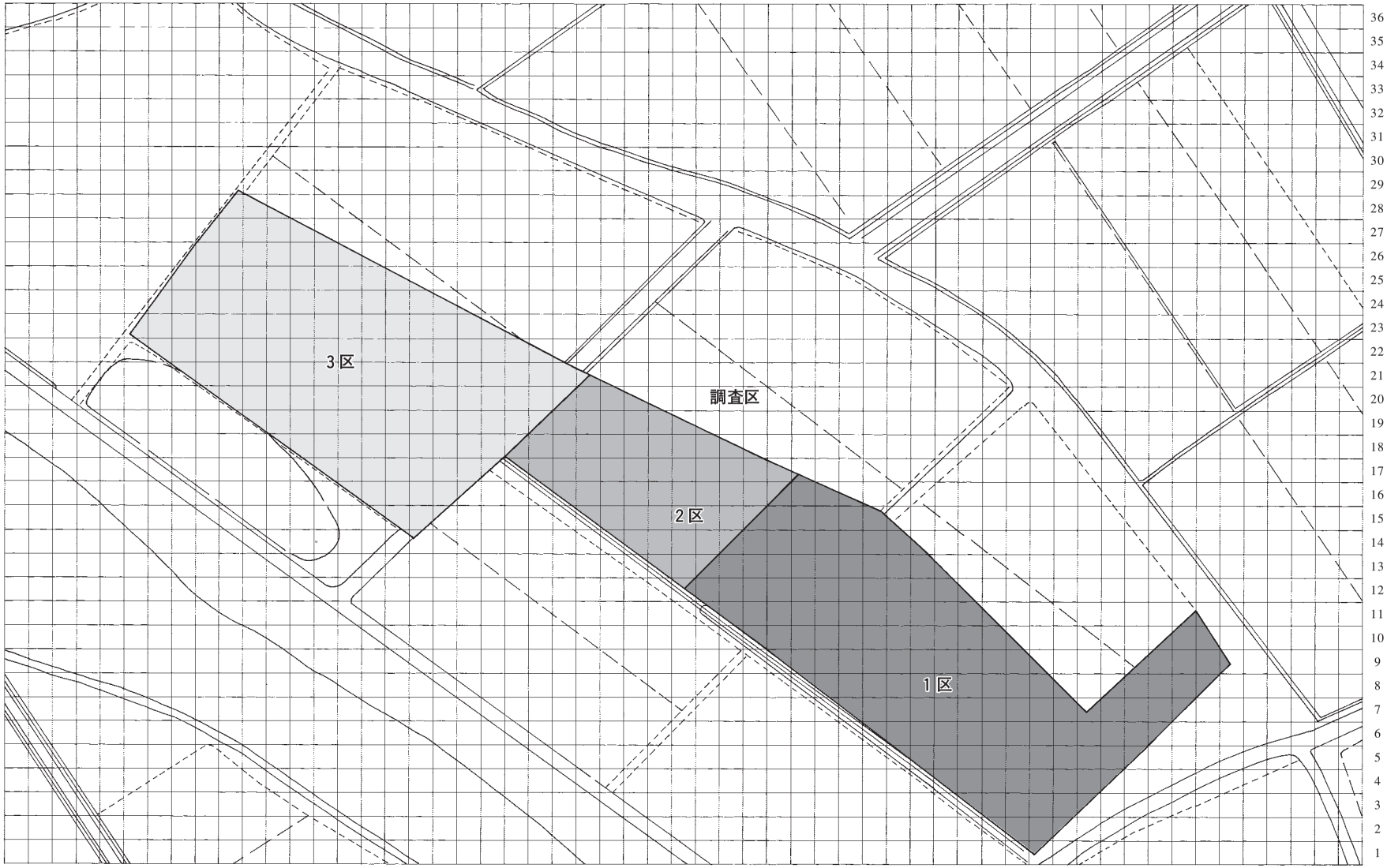
調査区の基本層序は、第Ⅰ層 暗褐色土（表土・耕作土）、第Ⅱ層 黄褐色粘質土が少し混じる黒褐色土（旧河道埋土）、第Ⅲ層 黄褐色粘質土・明褐色粘質土（旧河道埋土）、第Ⅳ層 褐色砂（旧河道埋土）、第Ⅴ層 褐色砂（遺物包含層）、第Ⅵ層 黄褐色粘質土（自然堆積層）、第Ⅶ層 褐色砂（自然堆積層）、第Ⅷ層 褐色砂が混じる灰白色砂（自然堆積層）、第Ⅸ層 褐色砂（自然堆積層）、第Ⅹ層 褐色砂が混じる灰白色砂（自然堆積層）、第Ⅺ層 褐色砂（自然堆積層）、第Ⅻ層 褐色砂が混じる灰白色砂（自然堆積層）である。

⑶　遺構と遺物

遺構は、土坑12基、焼土遺構37基、溝跡１条、土器埋設遺構２基が確認された（第７図）。



第４図　調査区配置図


3区
調査区
2区
1区
NC NB NA MZ MY MX MW MV MU MT MS MR MQ MP MO MN MM ML MK MJ MI MH MG MF ME MD MC MB MA LZ LY LX LW LV LU LT LS LR LQ LP LO LN LM LL LK LJ LI LH LG LF LE LD LC LB LA KZ KY
36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
0
25m

第5図　グリッド配置図

土坑

１号土坑（第９図、図版３）

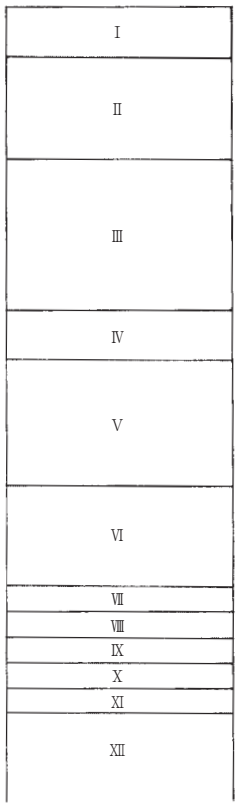
調査区北西側の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸1.6ｍ、短軸0.7ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは40㎝である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は西側に段が付き、東側は中華鍋状に掘り込まれている。

２号土坑（第９図、図版３）

調査区西側の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸1.6ｍ、短軸0.8ｍの不整楕円形を呈し、確認面からの深さは35㎝である。壁は外傾しながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。３号土坑と重複し、これより新しい。

３号土坑（第９図、図版３）

調査区西側の第Ⅴ層面で確認された。平面形は南側が２号土坑に切られていることから不明であるが、長軸1.1ｍ以上、短軸0.7ｍの楕円形を呈すると考えられ、確認面からの深さは50㎝である。壁は緩く外傾しながら立ち上がり、底面は南側が径15㎝の円形に一段深く掘り込まれているが、他は中華鍋状に掘り込まれている。２号土坑と重複し、これよりも古い。



第６図　基本土層柱状図

出土遺物

埋土より縄文土器片が少量出土したが、小破片であり図示できなかった。

４号土坑（第９図、図版３）

調査区中央の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸２ｍ、短軸0.7ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは20㎝である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

出土遺物

赤褐色土器（第14図１、図版５）

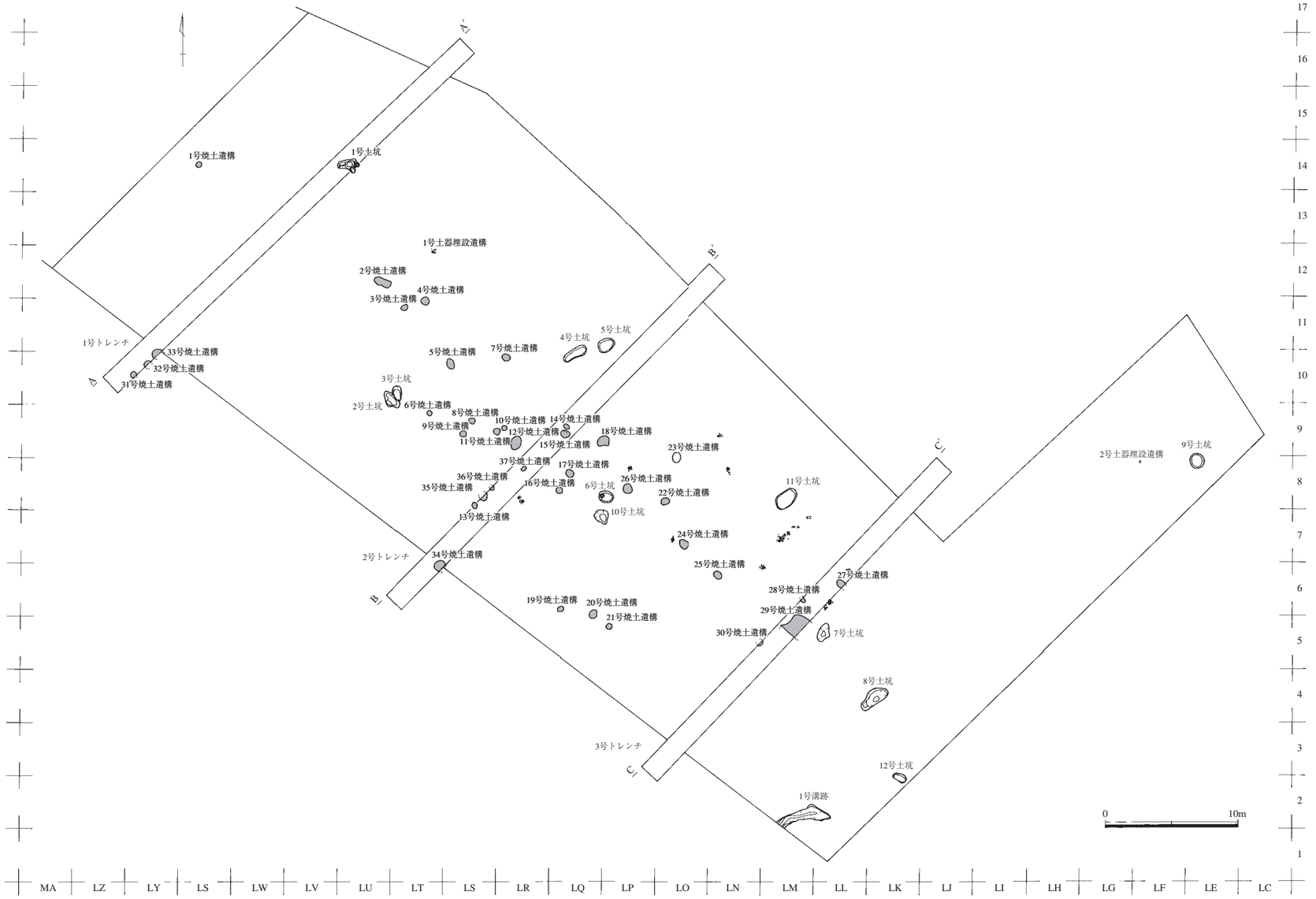
１は埋土出土の坏で、底部を欠く。この他、埋土より縄文土器片が少量出土したが、小破片であり図示できなかった。

５号土抗（第９図、図版３）

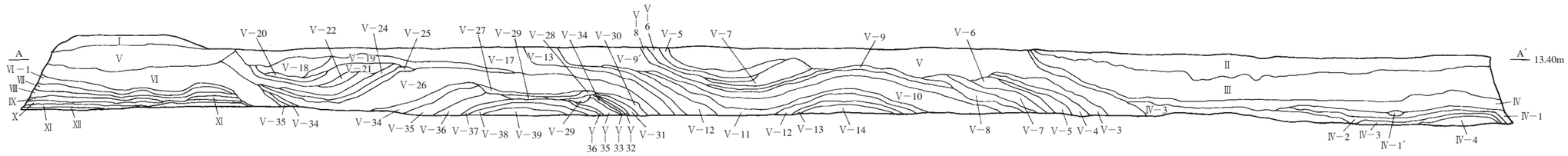
調査区中央の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸1.3ｍ、短軸１ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは15㎝である。壁は外傾しながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

出土遺物

埋土より縄文土器片が少量出土したが、小破片であり図示できなかった。


A
A'
B
B'
C
C'
1号焼土遺構
1号土坑
1号土器埋設遺構
2号焼土遺構
3号焼土遺構
4号焼土遺構
1号トレンチ
33号焼土遺構
32号焼土遺構
31号焼土遺構
5号焼土遺構
7号焼土遺構
4号土坑
5号土坑
3号土坑
2号土坑
6号焼土遺構
8号焼土遺構
9号焼土遺構
10号焼土遺構
14号焼土遺構
12号焼土遺構
18号焼土遺構
11号焼土遺構
15号焼土遺構
23号焼土遺構
37号焼土遺構
17号焼土遺構
36号焼土遺構
35号焼土遺構
16号焼土遺構
6号土坑
26号焼土遺構
22号焼土遺構
11号土坑
13号焼土遺構
10号土坑
24号焼土遺構
2号トレンチ
34号焼土遺構
25号焼土遺構
19号焼土遺構
20号焼土遺構
21号焼土遺構
28号焼土遺構
27号焼土遺構
29号焼土遺構
30号焼土遺構
7号土坑
8号土坑
3号トレンチ
12号土坑
1号溝跡
2号土器埋設遺構
9号土坑
0
10m
MA
LZ
LY
LS
LW
LV
LU
LT
LS
LR
LQ
LP
LO
LN
LM
LL
LK
LJ
LI
LH
LG
LF
LE
LC
17
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1

第７図　１区遺構配置図



第Ⅰ層　暗褐色土（10YR3/3）
第Ⅱ層　黄褐色粘質土（10YR5/6）が少し混じる黒褐色土（10YR3/2）
第Ⅲ層　黄褐色粘質土（10YR5/6）・明褐色粘質土（7.5YR5/6）
第Ⅳ層　褐色砂（10YR4/4）
第Ⅳ－１層　明褐色粘質土（7.5YR5/6）
第Ⅳ－１′層　明褐色粘質土（7.5YR5/6）・灰白色砂（10YR8/2）に炭水化物混入
第Ⅳ－２層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅳ－３層　褐色砂（10YR4/4）・明褐色粘質土（7.5YR5/6）
第Ⅳ－４層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅳ－５層　褐色砂（10YR4/4）
第Ⅳ－６層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅳ－７層　褐色砂（10YR4/4）・明褐色粘質土（7.5YR5/6）
第Ⅳ－８層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅳ－９層　褐色砂（10YR4/4）
第Ⅳ－10層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）

第Ⅴ層　褐色砂（10YR4/4）
第Ⅴ－１層　褐色砂（10YR4/4）・黄褐色粘質土（10YR5/6）
第Ⅴ－２層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅴ－３層　褐色砂（10YR4/4）
第Ⅴ－４層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅴ－４′層　褐色砂（10YR4/4）・灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅴ－５層　褐色砂（10YR4/4）
第Ⅴ－６層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅴ－７層　褐色砂（10YR4/4）
第Ⅴ－８層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅴ－９層　灰白色砂（10YR8/2）が少し混じる褐色砂（10YR4/4）
第Ⅴ－９′層　黄褐色粘質土（10YR5/6）
第Ⅴ－10層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅴ－11層　灰白色砂（10YR8/2）が少し混じる褐色砂（10YR4/4）
第Ⅴ－12層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅴ－13層　褐色砂（10YR4/4）
第Ⅴ－14層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅴ－15層　褐色砂（10YR4/4）
第Ⅴ－16層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅴ－17層　黄褐色粘質土（10YR5/6）
第Ⅴ－18層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）

第Ⅴ－19層　黄褐色粘質土（10YR5/6）・灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅴ－20層　褐色砂（10YR4/4）
第Ⅴ－21層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅴ－22層　褐色砂（10YR4/4）・灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅴ－23層　灰白色砂（10YR8/2）が少し混じる褐色砂（10YR4/4）
第Ⅴ－24層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅴ－25層　褐色砂（10YR4/4）
第Ⅴ－26層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅴ－27層　灰白色砂（10YR8/2）が少し混じる褐色砂（10YR4/4）
第Ⅴ－28層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅴ－29層　褐色砂（10YR4/4）に炭化物多量混入
第Ⅴ－30層　褐色砂（10YR4/4）
第Ⅴ－31層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅴ－32層　褐色砂（10YR4/4）
第Ⅴ－33層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅴ－34層　褐色砂（10YR4/4）
第Ⅴ－35層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅴ－36層　褐色砂（10YR4/4）
第Ⅴ－37層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅴ－38層　褐色砂（10YR4/4）
第Ⅴ－39層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）

第Ⅵ層　黄褐色粘質土（10YR5/6）
第Ⅳ－１層　灰白色砂（10YR8/2）が少し混じる褐色砂（10YR4/4）
第Ⅶ層　褐色砂（10YR4/4）
第Ⅶ－１層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅶ－２層　明褐色粘質土（7.5YR5/6）・褐色砂（10YR4/4）
第Ⅶ－３層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅶ－４層　明褐色粘質土（7.5YR5/6）
第Ⅶ－５層　褐色砂（10YR4/4）
第Ⅷ層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）
第Ⅸ層　褐色砂（10YR4/4）
第Ⅹ層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）に炭化物混入
第Ⅺ層　褐色砂（10YR4/4）
第Ⅻ層　褐色砂（10YR4/4）が少し混じる灰白色砂（10YR8/2）

第８図　１区１～３号トレンチ土層断面図

６号土坑（第９図、図版３）

調査区中央の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸1.1ｍ、短軸0.9ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは25㎝である。壁は外傾しながら立ち上がり、底面はレンズ状に緩くくぼんでおり、北西側に径30㎝、深さ27㎝のピットが１個認められている。

出土遺物

赤褐色土器（第14図２、図版５）

２は埋土出土の坏である。糸切り無調整で、体部内面下半に煤状炭化物が付着していることから、灯明皿に転用されたと考えられる。

７号土坑（第９図、図版３）

調査区南東側の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸1.5ｍ、短軸0.6～0.9ｍの不整形を呈し、確認面からの深さは40㎝である。壁は緩く外傾しながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

８号土坑（第９図、図版３）

調査区南東側の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸2.4ｍ、短軸1.1ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは65㎝である。壁は緩く外傾しながら立ち上がり、底面はレンズ状に緩くくぼんでいる。

９号土坑（第10図、図版３）

調査区東側の第Ⅴ層面で確認された。平面形は径1.1ｍの円形を呈し、確認面からの深さは35㎝である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はレンズ状に緩くくぼんでいる。

10号土坑（第10図、図版４）

調査区中央の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸1.2ｍ、短軸1.1ｍの不整形を呈し、確認面からの深さは30㎝で、壁は緩く外傾しながら立ち上がり、底面はレンズ状に緩くくぼんでいる。

出土遺物

埋土より縄文土器片が少量出土したが、小破片であり図示できなかった。

11号土坑（第10図、図版４）

調査区中央東側の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸1.8ｍ、短軸1.1ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは30㎝である。壁は北東側が外傾しながら、他はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

出土遺物

土器（第15図４、図版５）

４は埋土出土の深鉢形土器の胴部で、綾絡文が施されている。

12号土坑（第10図、図版４）

調査区南東側の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸1.1ｍ、短軸0.5ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは20㎝である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

焼土遺構

１号焼土遺構（第10図）

調査区北西側の第Ⅴ層面で確認された。平面形は径45㎝の円形を呈し、強く火熱を受けており、深さ７㎝まで焼痕が認められる。

２号焼土遺構（第10図）

調査区北西側の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸1.3ｍ、短軸0.5ｍの楕円形を呈し、強く火熱を焼けており、深さ10㎝まで焼痕が認められる。

３号焼土遺構（第10図）

調査区北西側の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸60㎝、短軸45㎝の楕円形を呈し、強く火熱を受けており、深さ８㎝まで焼痕が認められる。

４号焼土遺構（第10図）

調査区北西側の第Ⅴ層面で確認された。平面形は径65㎝の円形を呈し、強く火熱を受けており、深さ11㎝まで焼痕が認められる。

５号焼土遺構（第10図）

調査区中央の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸85㎝、短軸60㎝の楕円形呈し、強く火熱を受けており、深さ20㎝まで焼痕が認められる。

６号焼土遺構（第10図）

調査区中央の第Ⅴ層面で確認された。平面形は径40㎝の円形を呈し、強く火熱を受けており、深さ14㎝まで焼痕が認められる。

７号焼土遺構（第10図）

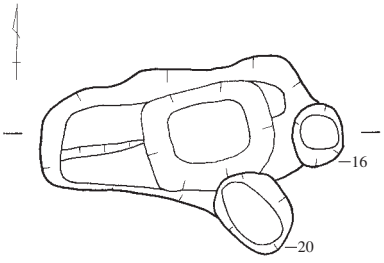
調査区中央の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸65㎝、短軸50㎝の楕円形を呈し、強く火熱を受けており、深さ14㎝まで焼痕が認められる。

８号焼土遺構（第10図）

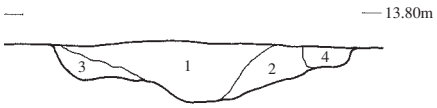
調査区中央の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸50㎝、短軸40㎝の楕円形を呈し、強く火熱を受けており、深さ16㎝まで焼痕が認められる。

９号焼土遺構（第10図）

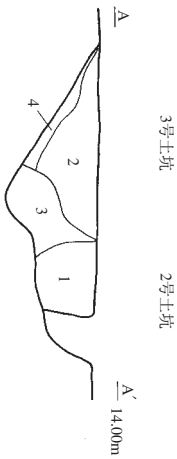
調査区中央の第Ⅴ層面で確認された。平面形は径50㎝の円形を呈し、強く火熱を受けており、深さ12㎝まで焼痕が認められる。



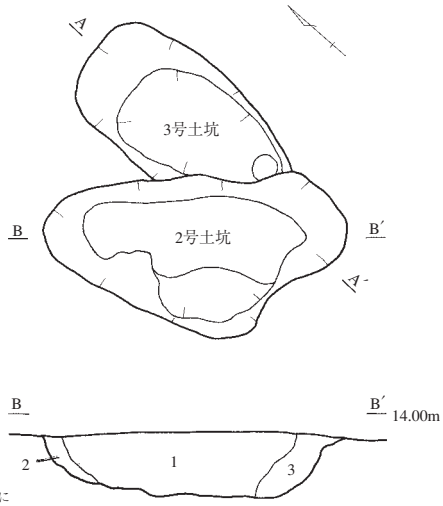
1号土坑



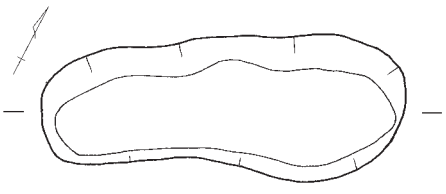
1　暗褐色土(10YR3/4)に黄褐色粘土(10YR5/6)ブロック･炭化物少量混入
2　褐色砂(10YR4/4)に黄褐色粘土(10YR5/6)ブロック･褐灰色粘土(10YR4/1)小ブロック混入
3　褐色砂(10YR4/6)･黄褐色粘質土(10YR5/6)
4　にぶい黄褐色粘質土(10YR5/3)･黄褐色粘質土(10YR5/6)･暗褐色土(10YR3/3)



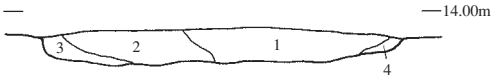
1　黄褐色砂(10YR5/6)が少量混じる黒褐色土(10YR2/2)に黄褐色粘土(10YR5/6)ブロック･炭化物少量混入
2　黒褐色土(10YR2/2)が少量混じる暗褐色土(10YR3/4)に炭化物少量混じる
3　暗褐色土(10YR3/4)･黒褐色土(10YR2/2)
4　暗褐色土(10YR3/4)に黄褐色粘土(10YR5/6)ブロック・炭化物少量混入



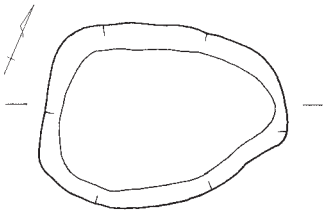
1　黄褐色砂(10YR5/6)が少量混じる黒褐色土(10YR2/2)に黄褐色粘土(10YR5/6)ブロック・炭化物少量混入
2　暗褐色土(10YR3/3)に黄褐色粘土(10YR5/6)ブロック混入
3　黄褐色粘土(10YR5/6)が混じる暗褐色土(10YR3/3)に炭化物少量混入



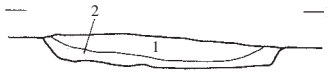
4号土坑



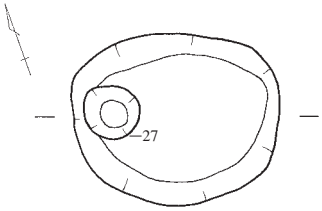
1　暗褐色土(10YR3/3)に黄褐色粘土(10YR5/6)ブロック・炭化物混入
2　黄褐色砂(10YR5/6)が混じる褐色土(10YR4/4)に黄褐色粘土ブロック(10YR5/6)･炭化物少量混入
3　褐色砂(10YR4/4)が混じる黄褐色砂(10YR5/6)
4　褐色土(10YR3/3)が混じる黄褐色粘質土(10YR5/6)



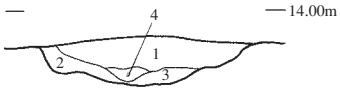
5号土坑



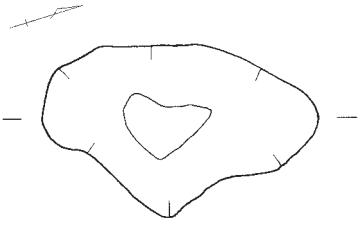
1　暗褐色土(10YR3/4)に黄褐色粘土(10YR5/6)ブロック混入・炭化物微量混入
2　褐色粘質土(10YR4/4)に黄褐色粘土(10YR5/6)ブロック混入・炭化物微量混入



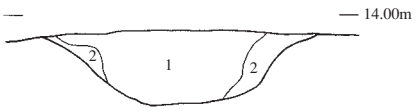
6号土坑



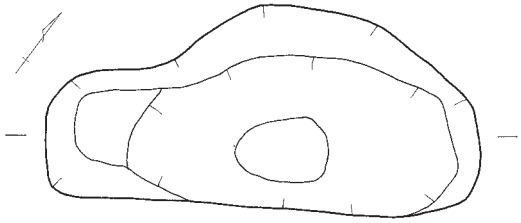
1　暗褐色土(10YR3/3)に黄褐色粘土(10YR5/6)ブロック・炭化物少量混入
2　黄褐色砂(10YR5/6)が混じる暗褐色土(10YR3/3)に炭化物少量混入
3　暗褐色土(10YR3/3)に炭化物微量混入
4　黄褐色砂(10YR5/6)が少量混じる暗褐色土(10YR3/3)に炭化物微量混入



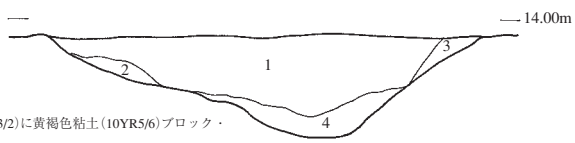
7号土坑



1　黒褐色土(10YR2/2)に黄褐色粘土(10YR5/6)ブロック･炭化物少量混入
2　黒褐色土(10YR2/2)が混じる黄褐色粘質土(10YR5/6)に黄褐色粘土(10YR5/6)ブロック･炭化物少量混入

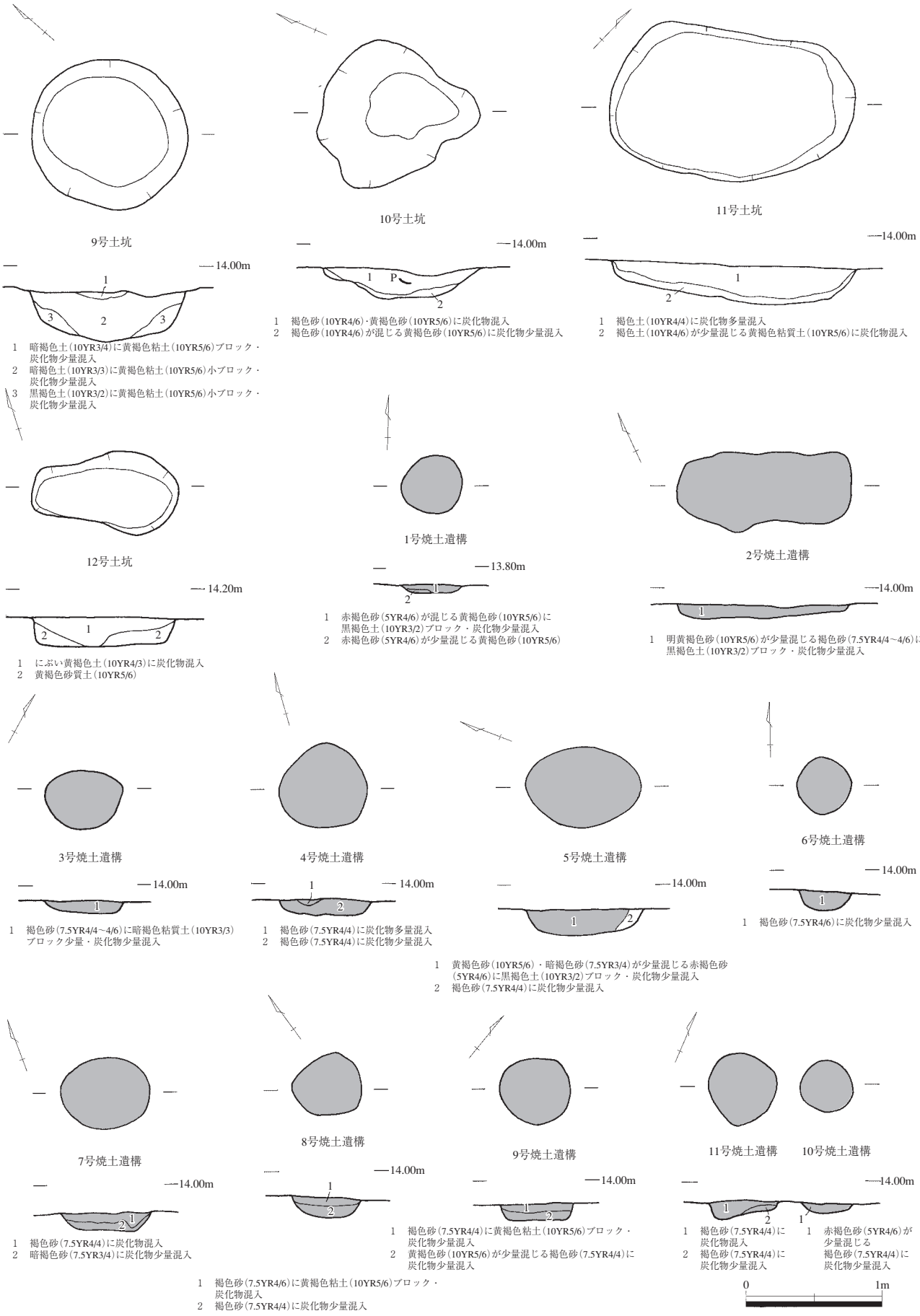


8号土坑



1　黒褐色土(10YR3/2)に黄褐色粘土(10YR5/6)ブロック・炭化物少量混入
2　暗褐色土(10YR3/3)に黄褐色粘土(10YR5/6)ブロック混入
3　暗褐色土(10YR3/3)が少量混じる黄褐色粘土(10YR5/6)に炭化物少量混入
4　黒褐色土(10YR3/2)に黄褐色粘土(10YR5/6)ブロック・炭化物少量混入

第9図　土　坑


9号土坑
14.00m
1
3
2
3
1 暗褐色土(10YR3/4)に黄褐色粘土(10YR5/6)ブロック・炭化物少量混入
2 暗褐色土(10YR3/3)に黄褐色粘土(10YR5/6)小ブロック・炭化物少量混入
3 黒褐色土(10YR3/2)に黄褐色粘土(10YR5/6)小ブロック・炭化物少量混入
10号土坑
14.00m
1
P
2
1 褐色砂(10YR4/6)・黄褐色砂(10YR5/6)に炭化物混入
2 褐色砂(10YR4/6)が混じる黄褐色砂(10YR5/6)に炭化物少量混入
11号土坑
14.00m
1
2
1 褐色土(10YR4/4)に炭化物多量混入
2 褐色土(10YR4/6)が少量混じる黄褐色粘質土(10YR5/6)に炭化物混入
12号土坑
14.20m
2
1
2
1 にぶい黄褐色土(10YR4/3)に炭化物混入
2 黄褐色砂質土(10YR5/6)
1号焼土遺構
13.80m
1
2
1 赤褐色砂(5YR4/6)が混じる黄褐色砂(10YR5/6)に黒褐色土(10YR3/2)ブロック・炭化物少量混入
2 赤褐色砂(5YR4/6)が少量混じる黄褐色砂(10YR5/6)
2号焼土遺構
14.00m
1
1 明黄褐色砂(10YR5/6)が少量混じる褐色砂(7.5YR4/4～4/6)に黒褐色土(10YR3/2)ブロック・炭化物少量混入
3号焼土遺構
14.00m
1
1 褐色砂(7.5YR4/4～4/6)に暗褐色粘質土(10YR3/3)ブロック少量・炭化物少量混入
4号焼土遺構
14.00m
1
2
1 褐色砂(7.5YR4/4)に炭化物多量混入
2 褐色砂(7.5YR4/4)に炭化物少量混入
5号焼土遺構
14.00m
1
2
1 黄褐色砂(10YR5/6)・暗褐色砂(7.5YR3/3)が少量混じる赤褐色砂(5YR4/6)に黒褐色土(10YR3/2)ブロック・炭化物少量混入
2 褐色砂(7.5YR4/4)に炭化物少量混入
6号焼土遺構
14.00m
1
1 褐色砂(7.5YR4/6)に炭化物少量混入
7号焼土遺構
14.00m
1
2
1 褐色砂(7.5YR4/4)に炭化物混入
2 暗褐色砂(7.5YR3/4)に炭化物少量混入
8号焼土遺構
14.00m
1
2
1 褐色砂(7.5YR4/6)に黄褐色粘土(10YR5/6)ブロック・炭化物混入
2 褐色砂(7.5YR4/4)に炭化物少量混入
9号焼土遺構
14.00m
1
2
1 褐色砂(7.5YR4/4)に黄褐色粘土(10YR5/6)ブロック・炭化物少量混入
2 黄褐色砂(10YR5/6)が少量混じる褐色砂(7.5YR4/4)に炭化物少量混入
11号焼土遺構
14.00m
1
2
1 褐色砂(7.5YR4/4)に炭化物混入
2 褐色砂(7.5YR4/4)に炭化物少量混入
10号焼土遺構
14.00m
1
1 赤褐色砂(5YR4/6)が少量混じる褐色砂(7.5YR4/4)に炭化物少量混入
0
1m

第10図　土坑・焼土遺構

10号焼土遺構（第10図）

調査区中央の第Ⅴ層面で確認された。平面形は径40㎝の円形を呈し、強く火熱を受けており、深さ９㎝まで焼痕が認められる。

11号焼土遺構（第10図）

調査区中央の第Ⅴ層面で確認された。平面形は径50㎝の円形を呈し、強く火熱を受けており、深さ12㎝まで焼痕が認められる。

12号焼土遺構（第11図）

調査区中央の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸105㎝、短軸75㎝の楕円形を呈し、強く火熱を受けており、深さ23㎝まで焼痕が認められる。

13号焼土遺構（第11図）

調査区中央の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸50㎝、短軸40㎝の楕円形を呈し、強く火熱を受けており、深さ５㎝まで焼痕が認められる。

14号焼土遺構（第11図）

調査区中央の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸50㎝、短軸35㎝の楕円形を呈し、強く火熱を受けており、深さ８㎝まで焼痕が認められる。

15号焼土遺構（第11図）

調査区中央の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸70㎝、短軸55㎝の楕円形を呈し、強く火熱を受けており、深さ15㎝まで焼痕が認められる。

16号焼土遺構（第11図）

調査区中央の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸55㎝、短軸50㎝の楕円形を呈し、強く火熱を受けており、深さ９㎝まで焼痕が認められる。

17号焼土遺構（第11図）

調査区中央の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸60㎝、短軸50㎝の楕円形を呈し、強く火熱を受けており、深さ８㎝まで焼痕が認められる。

18号焼土遺構（第11図）

調査区中央の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸95㎝、短軸85㎝の不整楕円形を呈し、強く火熱を受けており、深さ23㎝まで焼痕が認められる。

19号焼土遺構（第11図）

調査区中央南側の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸50㎝、短軸40㎝の楕円形を呈し、弱く火熱を

受けており、深さ２㎝まで焼痕が認められる。

20号焼土遺構（第11図）

調査区中央南側の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸70㎝、短軸55㎝の楕円形を呈し、強く火熱を受けており、深さ９㎝まで焼痕が認められる。

21号焼土遺構（第11図）

調査区中央南側の第Ⅴ層面で確認された。平面形は径45㎝の円形を呈し、弱く火熱を受けており、深さ４㎝まで焼痕が認められる。

22号焼土遺構（第11図）

調査区中央の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸65㎝、短軸50㎝の楕円形を呈し、強く火熱を受けており、深さ14㎝まで焼痕が認められる。

23号焼土遺構（第11図）

調査区中央の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸75㎝、短軸60㎝の楕円形を呈し、強く火熱を受けており、深さ17㎝まで焼痕が認められる。

24号焼土遺構（第11図）

調査区中央の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸80㎝、短軸60㎝の不整楕円形を呈し、強く火熱を受けており、深さ17㎝まで焼痕が認められる。

25号焼土遺構（第11図）

調査区中央の第Ⅴ層面で確認された。平面形は長軸65㎝、短軸50㎝の楕円形を呈し、強く火熱を受けており、深さ15㎝まで焼痕が認められる。

26号焼土遺構（第11図）

調査区中央の第Ⅴ層面で確認された。平面形は径70㎝の不整円形を呈し、強く火熱を受けており、深さ21㎝まで焼痕が認められる。

27号焼土遺構（第11図）

調査区南東側の第Ⅴ－７層面で確認された。平面形は南東側がトレンチ外であることから不明であるが、長軸70㎝以上、短軸55㎝の楕円形を呈すると考えられる。弱く火熱を受けており、深さ６㎝まで焼痕が認められる。

28号焼土遺構（第11図）

調査区南東側の第Ⅴ－７層面で確認された。平面形は北西側がトレンチ外であることから不明であるが、長軸35㎝以上、短軸55㎝の楕円形を呈すると考えられる。強く火熱を受けており、深さ８㎝まで焼

痕が認められる。

29号焼土遺構（第12図）

調査区南東側の第Ⅴ層面で確認された。平面形は南東側がトレンチ外であることや南西側が重機により掘削されてしまったことから不明であるが、長軸1.7m以上、短軸1.6m以上の不整形を呈すると考えられる。強く火熱を受けており、深さ18㎝まで焼痕が認められる。

30号焼土遺構（第12図）

調査区南東側の第Ⅴ－６層面で確認された。平面形は北西側がトレンチ外であることから不明であるが、長軸45㎝、短軸25㎝以上の楕円形を呈すると考えられる。強く火熱を受けており、深さ17㎝まで焼痕が認められる。

31号焼土遺構（第12図）

調査区西側の第Ⅻ層面で確認された。平面形は南東側がトレンチ外であることから不明であるが、長軸55㎝以上、短軸45㎝の楕円形を呈すると考えられる。強く火熱を受けており、深さ18㎝まで焼痕が認められる。

32号焼土遺構（第12図）

調査区西側の第Ⅻ層面で確認された。平面形は南東側がトレンチ外であることから不明であるが、長軸65㎝、短軸30㎝以上の楕円形を呈すると考えられる。強く火熱を受けており、深さ７㎝まで焼痕が認められる。

33号焼土遺構（第12図）

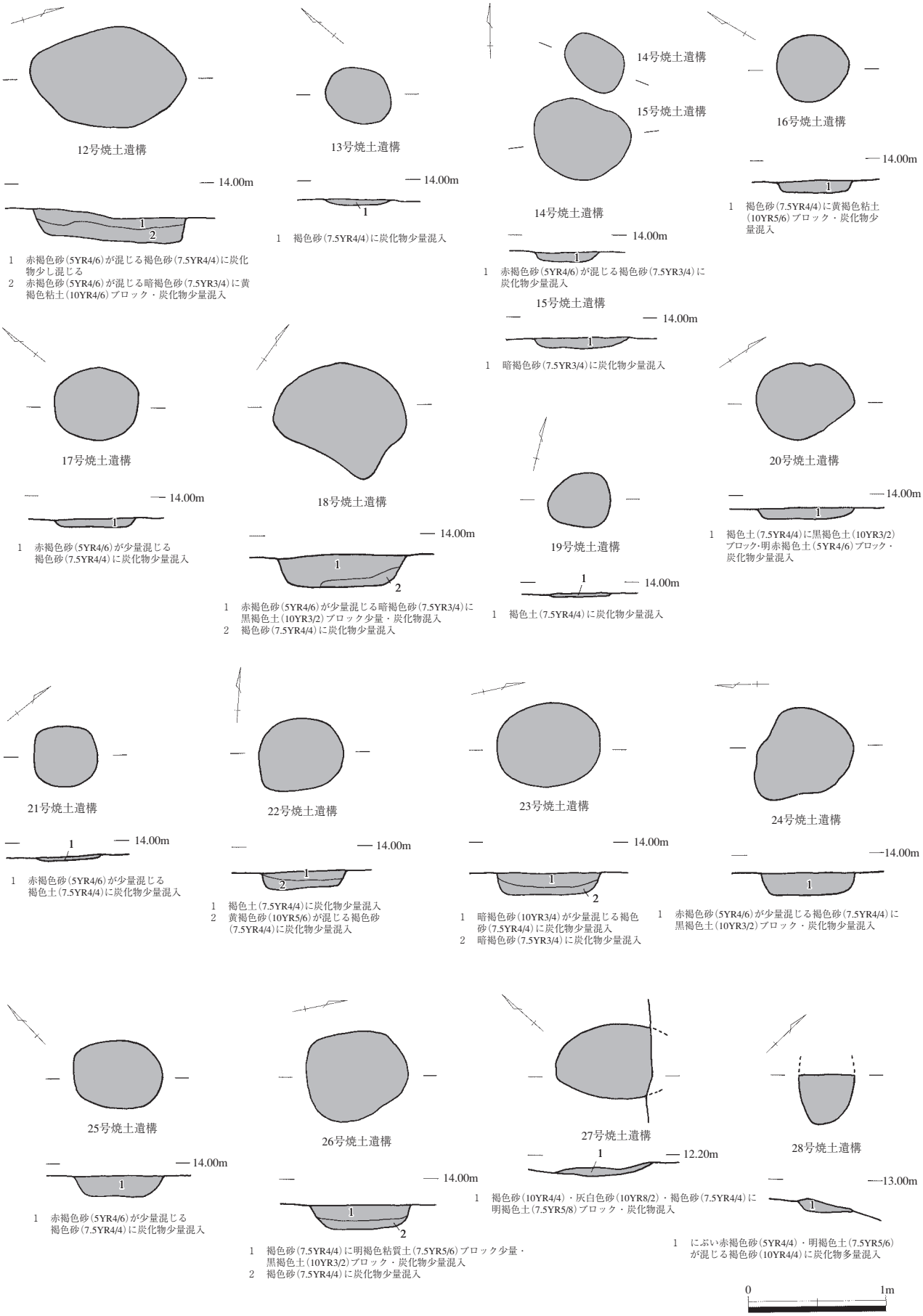
調査区西側の第Ⅻ層面で確認された。平面形は南東側がトレンチ外であることから不明であるが、長軸95㎝、短軸45㎝以上の楕円形を呈すると考えられる。強く火熱を受けており、深さ16㎝まで焼痕が認められる。

34号焼土遺構（第12図）

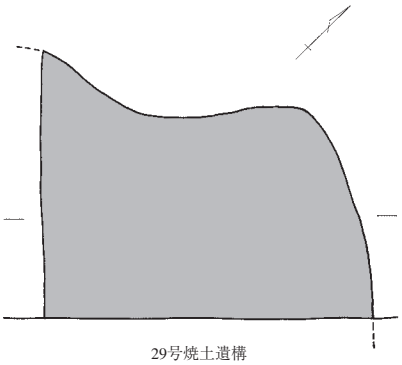
調査区中央南側の第Ⅹ層面で確認された。平面形は南東側がトレンチ外であることから不明であるが、長軸90㎝、短軸60㎝以上の楕円形を呈すると考えられる。強く火熱を受けており、深さ15㎝まで焼痕が認められる。

35号焼土遺構（第12図）

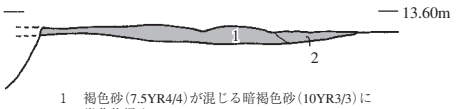
調査区中央の第Ⅶ－１層面で確認された。平面形は北西側がトレンチ外であることから不明であるが、長軸65㎝、短軸35㎝以上の楕円形を呈すると考えられる。強く火熱を受けており、深さ14㎝まで焼痕が認められる。


12号焼土遺構
14.00m
1 赤褐色砂(5YR4/6)が混じる褐色砂(7.5YR4/4)に炭化物少し混じる
2 赤褐色砂(5YR4/6)が混じる暗褐色砂(7.5YR3/4)に黄褐色粘土(10YR4/6)ブロック・炭化物少量混入
13号焼土遺構
14.00m
1 褐色砂(7.5YR4/4)に炭化物少量混入
14号焼土遺構
15号焼土遺構
14号焼土遺構
14.00m
1 赤褐色砂(5YR4/6)が混じる褐色砂(7.5YR3/4)に炭化物少量混入
16号焼土遺構
14.00m
1 褐色砂(7.5YR4/4)に黄褐色粘土(10YR5/6)ブロック・炭化物少量混入
15号焼土遺構
14.00m
1 暗褐色砂(7.5YR3/4)に炭化物少量混入
17号焼土遺構
14.00m
1 赤褐色砂(5YR4/6)が少量混じる褐色砂(7.5YR4/4)に炭化物少量混入
18号焼土遺構
14.00m
1 赤褐色砂(5YR4/6)が少量混じる暗褐色砂(7.5YR3/4)に黒褐色土(10YR3/2)ブロック少量・炭化物混入
2 褐色砂(7.5YR4/4)に炭化物少量混入
19号焼土遺構
14.00m
1 褐色土(7.5YR4/4)に炭化物少量混入
20号焼土遺構
14.00m
1 褐色土(7.5YR4/4)に黒褐色土(10YR3/2)ブロック・明赤褐色土(5YR4/6)ブロック・炭化物少量混入
21号焼土遺構
14.00m
1 赤褐色砂(5YR4/6)が少量混じる褐色土(7.5YR4/4)に炭化物少量混入
22号焼土遺構
14.00m
1 褐色土(7.5YR4/4)に炭化物少量混入
2 黄褐色砂(10YR5/6)が混じる褐色砂(7.5YR4/4)に炭化物少量混入
23号焼土遺構
14.00m
1 暗褐色砂(10YR3/4)が少量混じる褐色砂(7.5YR4/4)に炭化物少量混入
2 暗褐色砂(7.5YR3/4)に炭化物少量混入
24号焼土遺構
14.00m
1 赤褐色砂(5YR4/6)が少量混じる褐色砂(7.5YR4/4)に黒褐色土(10YR3/2)ブロック・炭化物少量混入
25号焼土遺構
14.00m
1 赤褐色砂(5YR4/6)が少量混じる褐色砂(7.5YR4/4)に炭化物少量混入
26号焼土遺構
14.00m
1 褐色砂(7.5YR4/4)に明褐色粘質土(7.5YR5/6)ブロック少量・黒褐色土(10YR3/2)ブロック・炭化物少量混入
2 褐色砂(7.5YR4/4)に炭化物少量混入
27号焼土遺構
12.20m
1 褐色砂(10YR4/4)・灰白色砂(10YR8/2)・褐色砂(7.5YR4/4)に明褐色土(7.5YR5/8)ブロック・炭化物混入
28号焼土遺構
13.00m
1 にぶい赤褐色砂(5YR4/4)・明褐色土(7.5YR5/6)が混じる褐色砂(10YR4/4)に炭化物多量混入
0
1m

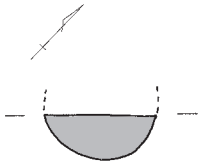
第11図　焼土遺構



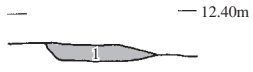
29号焼土遺構



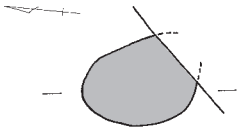
1　褐色砂(7.5YR4/4)が混じる暗褐色砂(10YR3/3)に炭化物混入
2　暗赤褐色砂(5YR3/6)が混じる褐色砂(10YR4/4)に炭化物少量混入



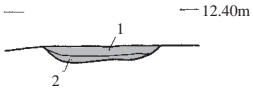
30号焼土遺構



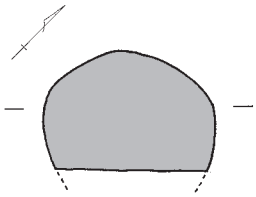
1　明褐色粘質土(7.5YR5/6)が少量混じる褐色砂(10YR4/4)に炭化物多量混入



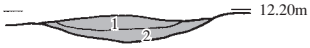
31号焼土遺構



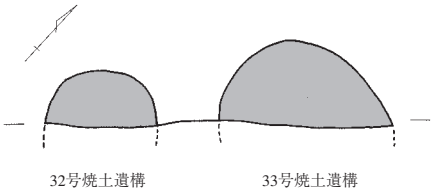
1　暗赤褐色砂(5YR3/4)が混じる褐色砂(10YR4/4)に炭化物少量混入
2　暗赤褐色砂(5YR3/4)が混じる灰白色砂(10YR8/2)に炭化物少量混入



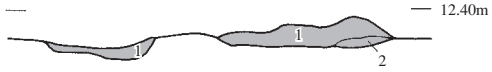
34号焼土遺構



1　暗赤褐色砂(5YR3/6)が混じる褐色砂(10YR4/4)に炭化物混入
2　暗赤褐色砂(5YR3/6)が混じる灰白色砂(10YR8/2)に炭化物少量混入

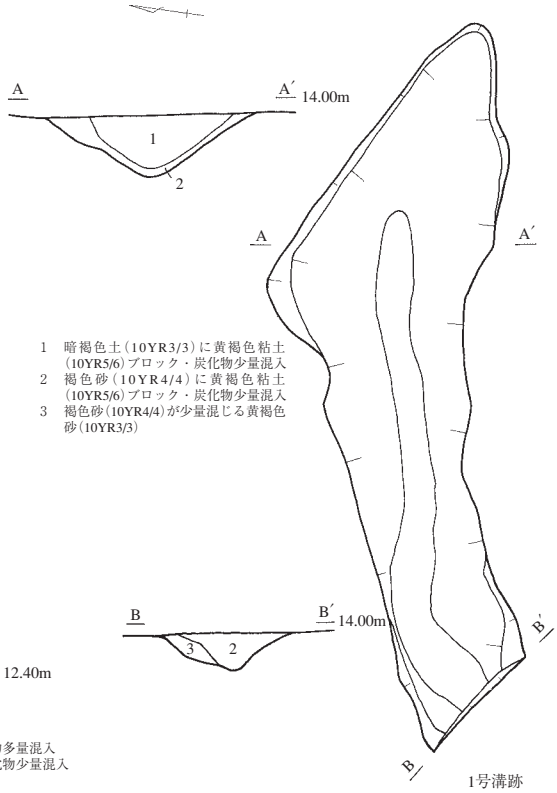


32号焼土遺構　　33号焼土遺構



1　暗赤褐色砂(5YR3/4)が混じる褐色砂(10YR4/4)に炭化物混入

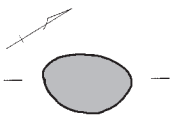
1　暗赤褐色砂(5YR3/4)が混じる褐色砂(10YR4/4)に炭化物混入
2　暗赤褐色砂(5YR3/4)が少量混じる灰白色砂(10YR8/2)



1　暗褐色土(10YR3/3)に黄褐色粘土(10YR5/6)ブロック・炭化物少量混入
2　褐色砂(10YR4/4)に黄褐色粘土(10YR5/6)ブロック・炭化物少量混入
3　褐色砂(10YR4/4)が少量混じる黄褐色砂(10YR3/3)

35号焼土遺構　　36号焼土遺構

1　にぶい赤褐色砂(5YR4/4)が混じる褐色砂(10YR4/4)に炭化物多量混入



37号焼土遺構

1　褐色砂(10YR4/4)に炭化物多量混入
2　灰白色砂(10YR8/2)に炭化物少量混入

1　明褐色粘質土(7.5YR5/6)が少量混じる褐色砂(10YR4/4)に炭化物多量混入

第12図　焼土遺構・溝跡

0　1m

36号焼土遺構（第12図）

調査区中央の第Ⅶ－１層面で確認された。平面形は北西側がトレンチ外であることから不明であるが、長軸40㎝、短軸25㎝以上の楕円形を呈すると考えられる。強く火熱を受けており、深さ８㎝まで焼痕が認められる。

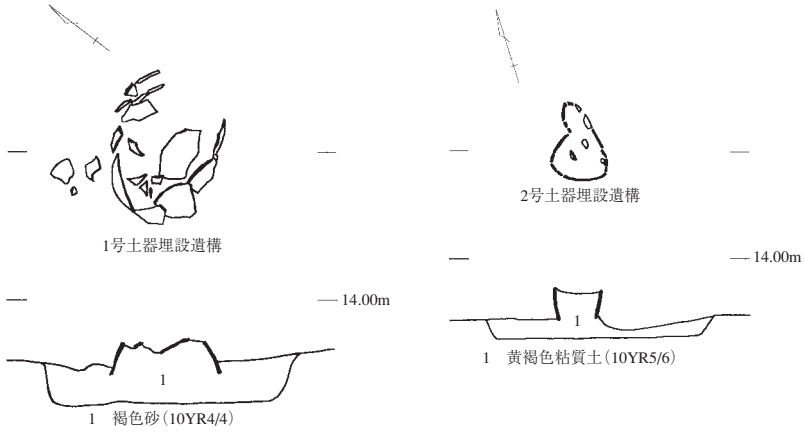
37号焼土遺構（第12図）

調査区中央の第Ⅶ－２層面で確認された。平面形は長軸45㎝、短軸30㎝の楕円形を呈し、弱く火熱を受けており、深さ６㎝まで焼痕が認められる。

溝跡

１号溝跡（第12図、図版４）

調査区南東側の第Ⅴ層面で確認された。平面形は南西側が調査区外であることから不明であるが、長さ3.7ｍ以上、幅0.7～1.1ｍで、確認面からの深さは30～35㎝である。壁は外傾しながら立ち上がり、底面はレンズ状に緩くくぼんでいる。溝の方向は、西で約16度南に振れている。

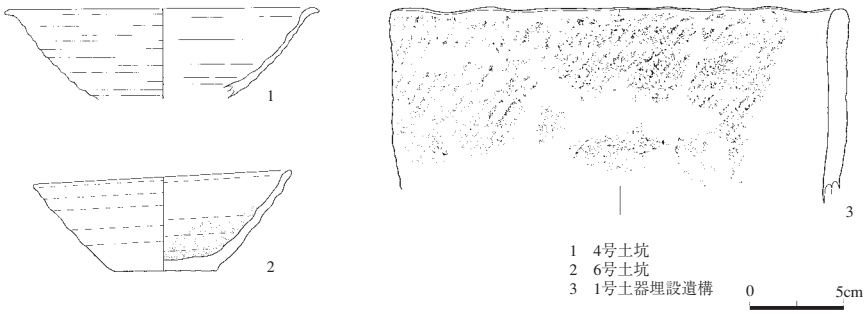


第13図　土器埋設遺構

土器埋設遺構

１号土器埋設遺構（第13図、図版４）

調査区北西側の第Ⅴ層面で確認された。深鉢形土器の胴上半を倒立して埋設したものである。

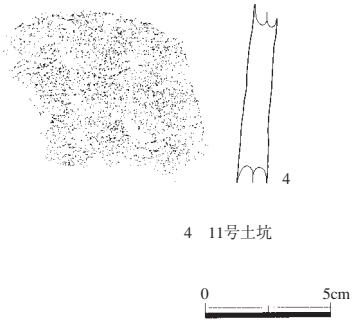


第14図　遺構内出土土器

出土遺物

土器（第14図３、図版５）

３は深鉢形土器で、口縁部がほぼ垂直に立ち上がる。端部に環の付いた原体を回転施文しており、地文はＬＲ単節斜縄文（横位・斜位回転）である。



第15図　遺構内出土土器

２号土器埋設遺構（第13図、図版４）

調査区北西側の第Ⅴ層面で確認された。深鉢形土器の胴下半を正位に埋設したものである。

出土遺物

深鉢形土器は埋設された状態で平面実測を行ったが、現場で取り上げを行った際、非常に脆いことから小破片になったことと摩滅が著しいことから、図示できなかった。

遺構外出土土器

遺構外出土土器を施文様により類に分類した。なお、出土土器は全て第Ⅴ層であることから、遺物包含層における層位的な区別は認められなかった。

１類（第16図８、第17図12～23、図版５、６）

端部に環の付いた原体を施すものである。全て深鉢形土器で、口縁部が８、12～15、17、19は緩く外反しながら、16はほぼ垂直に立ち上がり、12、16は波状口縁をなすと考えられる。地文は13、17、20はＬＲ単節斜縄文（横位回転）、その他はＲＬ単節斜縄文（横位回転）である。

２類（第17図24～29、図版６）

側面に環の付いた原体を施すものである。全て深鉢形土器で、口縁部が24～26は緩く外反しながら立ち上がる。24は山形口縁をなすと考えられ、頂部から垂下する短い粘土紐を貼り付けている。29の地文はＲＬ単節斜縄文（横位回転）が施されている。

３類（第17、18図30～38、図版６、７）

不整撚糸文を施すものである。全て深鉢形土器で、口縁部が30、31は外反しながら、32、33は内湾しながら立ち上がり、33は波状口縁をなすと考えられる。

４類（第16図５、第18、19図39～60、図版７、８）

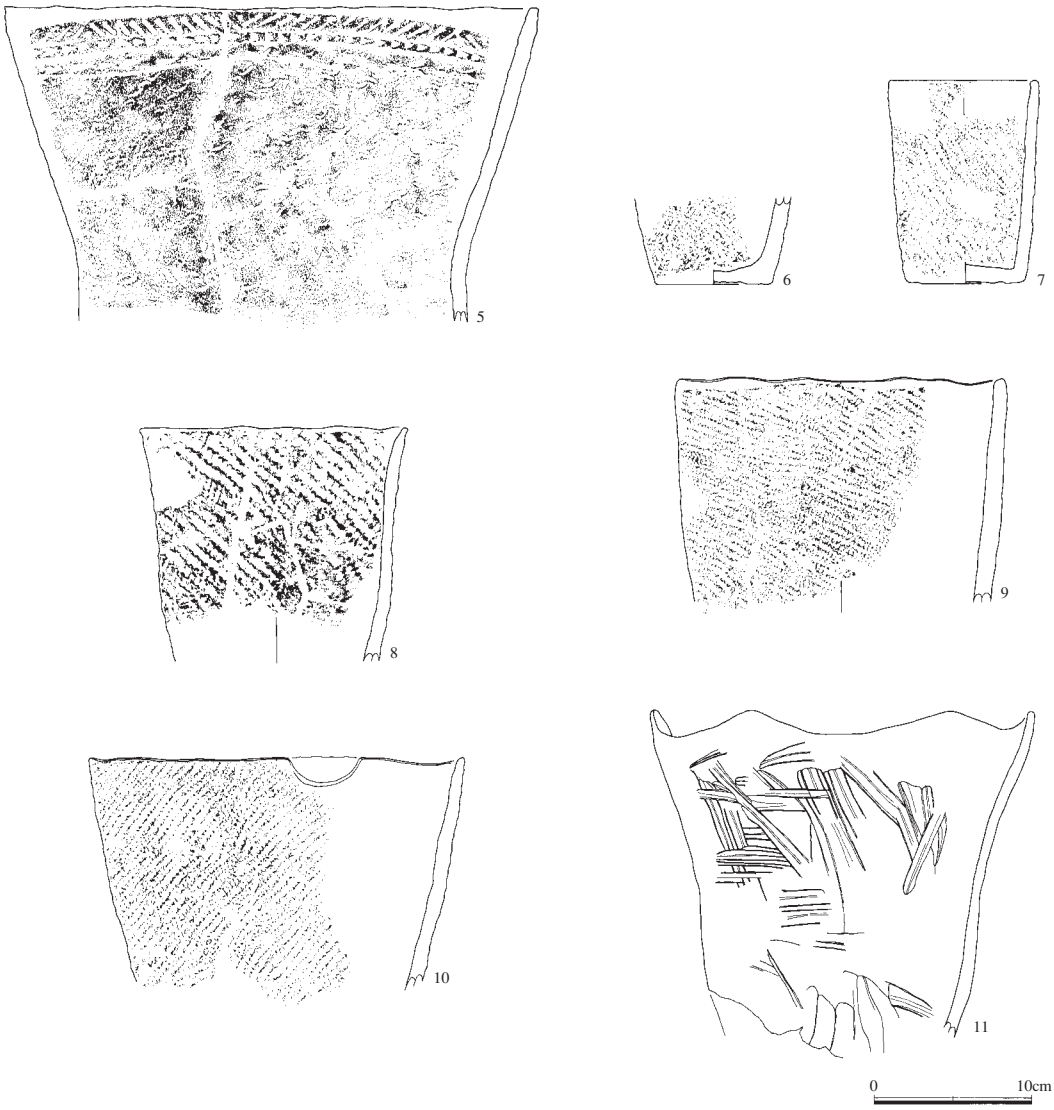
綾絡文を施すものである。全て深鉢形土器で、５、39～49は綾絡文の原体に縄目は認められない。５は口縁部が大きく外反しながら立ち上がる。口縁部に斜方向からの刺突を施した粘土紐を１本貼り付け、その下に刺突列を１列施している。粘土紐の上部には左上と右上から短い斜方向の刻目を十数本ごとに平行して巡らしている。39、40、44は同一個体で、口縁部が緩く外反しながら立ち上がる。口唇部に突起を持ち、ここから垂下する粘土紐を１本貼り付けている。突起には１本の刻目が、粘土紐には斜方向から刺突が施されている。また、口縁と平行する２本の粘土紐が貼り付けられ、斜位に刻目が施されている。41は口縁部が緩く外反しながら立ち上がる。口唇部と頸部に２本の平行する粘土紐を貼り付け、粘土紐には刺突を施している。42、43、50～55は口縁部が緩く外反しながら立ち上がり、54は波状口縁をなすと考えられる。

５類（第19、20図61～89、図版８、９）

羽状縄文を施すもので、全て深鉢形土器である。61～85は結束羽状縄文で、口縁部が61～63、65、68は緩く外反しながら、64、66、67は緩く内湾しながら立ち上がる。67は口唇部に刻目を、口縁上部に縄文地文施文後に指頭状の圧痕を施している。83は胴部下半の破片であり、丸底を呈する可能性がある。71、75、78は０段多条の原体を、その他はＲＬ・ＬＲ単節原体を用いており、79～81は不整撚糸文が認められる。86～89は非結束羽状縄文で、86は口縁部がほぼ垂直に立ち上がる。これらはＲＬ・ＬＲ単節原体を用いている。

６類（第20図90～94、図版９）

結束のある原体を施すものである。全て深鉢形土器で、90は口縁部が内湾しながら立ち上がる。地文は90、91、93がＬＲ単節斜縄文（横位回転）、92、94がＲＬ単節斜縄文（横位回転）である。



第16図　遺構外出土土器

７類（第20図95～98、図版９）

組紐による原体で回転文を施すものである。全て深鉢形土器で、95は口縁部に不整撚糸文を施している。

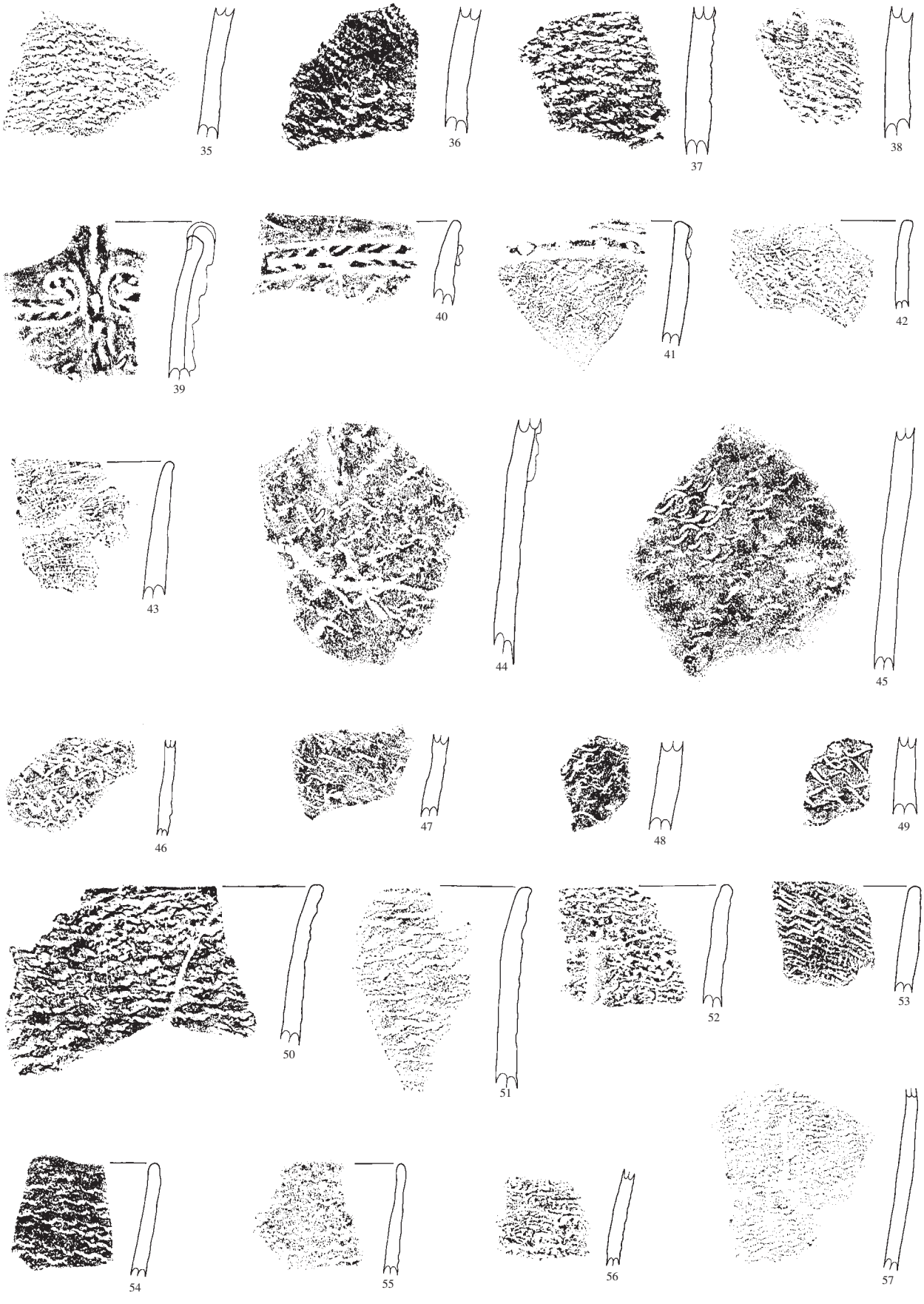
８類（第16図６、第20、21図99～111、図版５、９、10）

網目状撚糸文を施すものである。６は鉢形、他は深鉢形土器で、６、109～111は原体の縄目が確認されるものである。６は胴部下半から底部にかけての破片で、底部外面にも網目状撚糸文が施されている。105、106は網目状撚糸文の間に不整撚糸文が施されている。

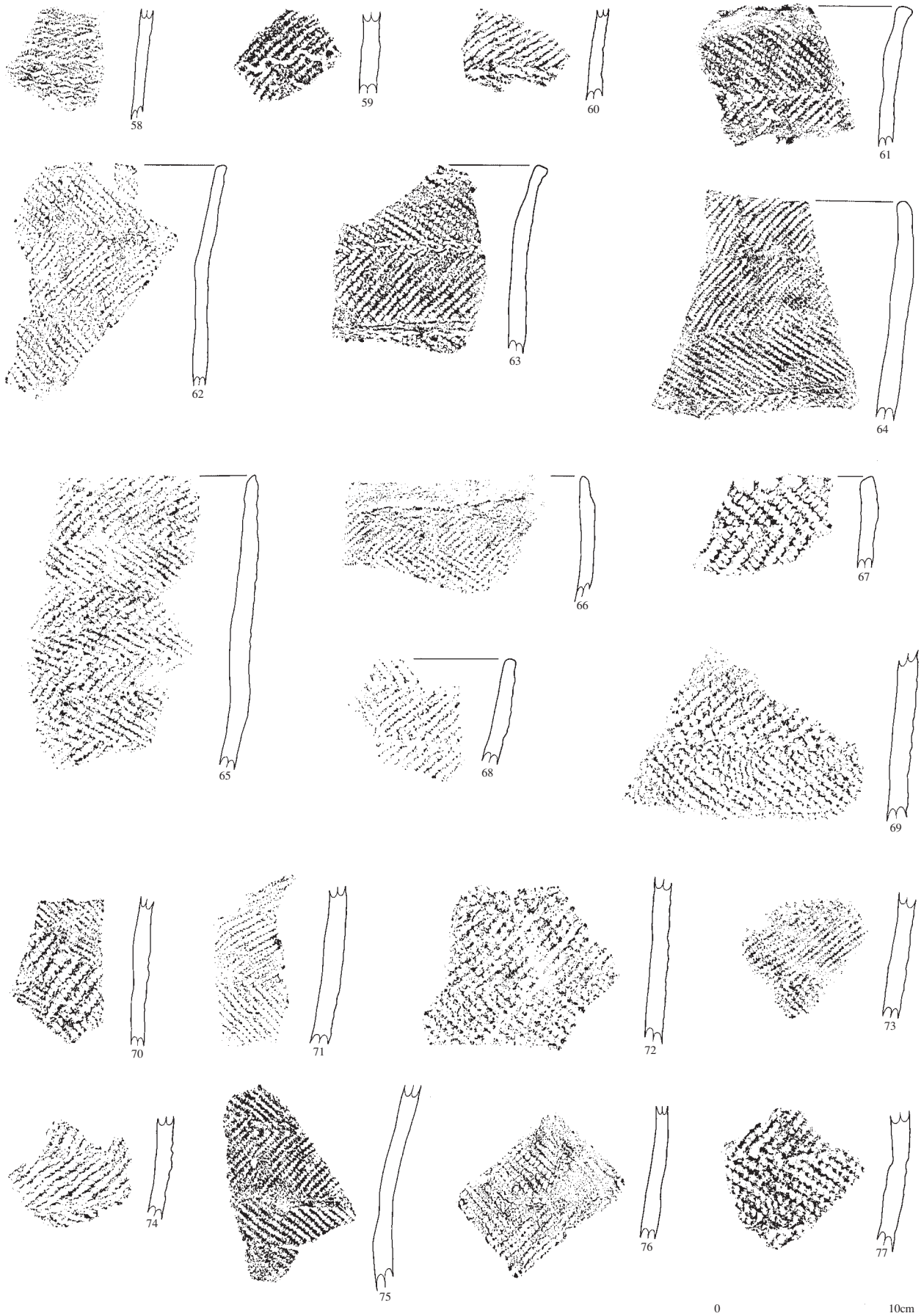
９類（第21図112～117、図版10）

刺突を施すもので、全て深鉢形土器である。112は口縁部が緩く外反しながら立ち上がる。山形口縁をなすと考えられ、頂部から垂下する粘土紐と口縁に平行する粘土紐を１本ずつ貼り付け、粘土紐には刺突が施されている。さらに横方向の粘土紐の下には平行する２列の刺突を施している。113は口縁部が緩く外反しながら立ち上がる。口縁部に刺突を施す粘土紐を１本巡らせ、その下に斜方向から２列の刺突を施している。114は口縁部が緩く外反しながら立ち上がる。口縁部に２列の平行する刺突を施し、

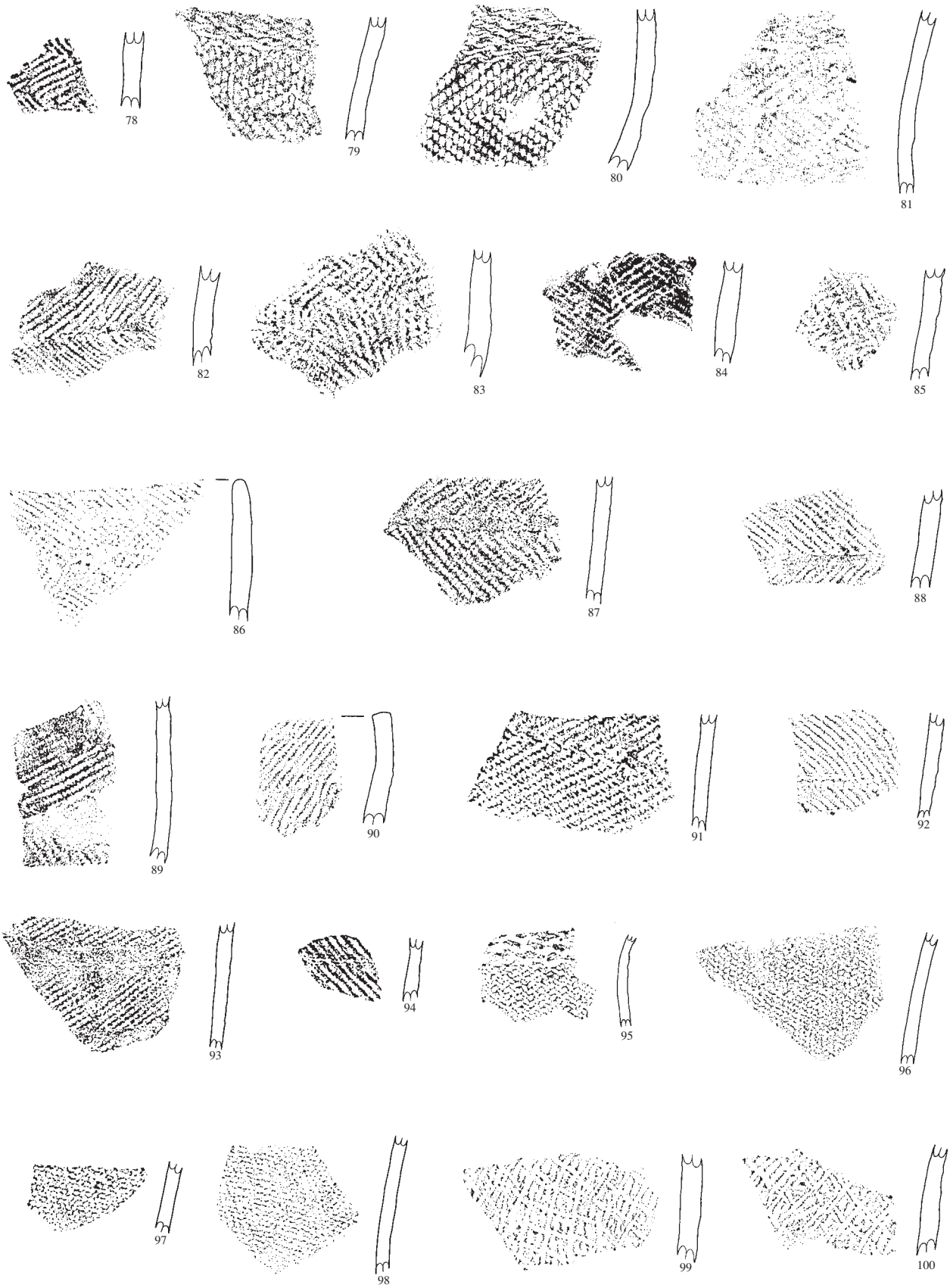
第17図　遺構外出土土器



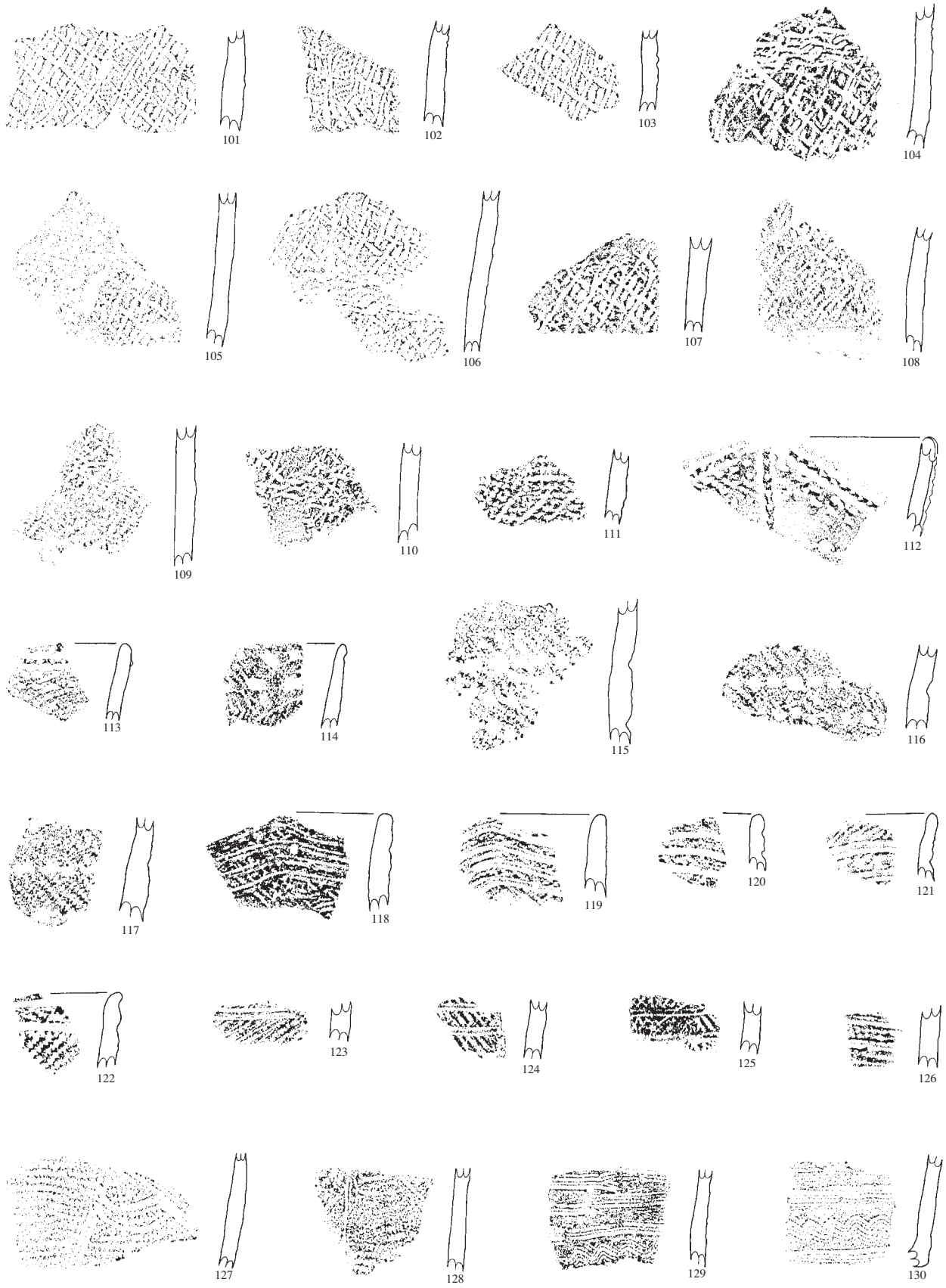
第18図　遺構外出土土器



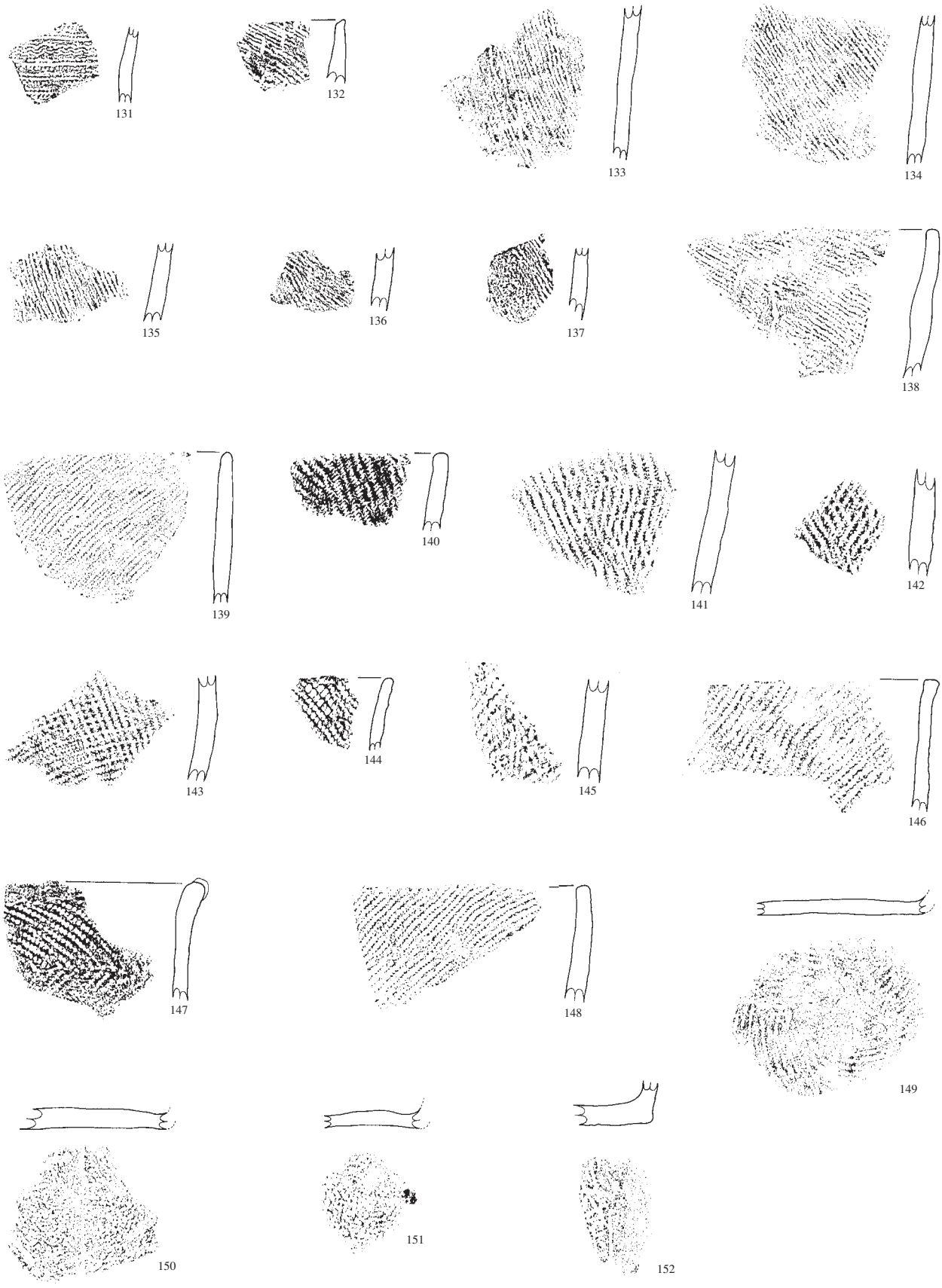
第19図　遺構外出土土器



第20図　遺構外出土土器



第21図　遺構外出土土器



第22図　遺構外出土土器

ＲＬ・ＬＲ単節原体を用いた結束羽状縄文が施されている。115～117は平行する刺突を２列施し、115、117の地文はＲＬ単節斜縄文（横位回転）である。

10類（第21、22図118～131、図版10、11）

沈線で文様を施すもので、全て深鉢形土器である。118、119は口縁部が緩く外反しながら立ち上がる。山形口縁をなすと考えられ、口縁に平行する４本の沈線が施されている。地文はＲＬ単節斜縄文（横位回転）である。120は口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、平行沈線を曲線状に施している。121、122は口縁部が外反しながら立ち上がる。121は山形口縁をなすと考えられ、横方向の平行沈線間に刺突が施されている。122はＲＬ・ＬＲ単節原体を用いた羽状縄文が施されている。123の地文はＬＲ単節斜縄文（横位回転）である。124、125は同一個体で、地文はＲＬ単節斜縄文（横位回転）である。126は沈線間に撚糸圧痕が施されている。127、128は沈線によって幾何学的文様を施すもので、地文はＬＲ単節斜縄文（斜位回転）である。129、130はヘラ状工具による櫛歯状の平行沈線や波状文が施されている。131は平行沈線間に櫛歯状の波状文と微小の刺突を施している。

11類（第16図７、９、10、第22図132～148、図版５、11）

地文のみのもので、７は鉢形、他は深鉢形土器である。７、９、10、146～148は単節斜縄文を施すものである。口縁部が７、９はほぼ垂直に、10、146、147は緩く外反しながら、148は緩く内湾しながら立ち上がる。７は口唇部に刻目を施し、９の口縁は小波状をなし、147は口唇部に粘土粒を貼り付けている。地文は７、９、147はＲＬ単節斜縄文（横位回転）、10、146、148はＬＲ単節斜縄文（横位回転）である。132～137は撚糸文を施すもので、132は口縁部が緩く外反しながら立ち上がる。138はＲｌ無節斜縄文（横位回転）を施すもので、口縁部が緩く外反しながら立ち上がる。139～144は０段多条を施すものである。139、140は口縁部がほぼ垂直に、144は緩く外反しながら立ち上がる。地文は139、144は０段多条のＲＬ単節斜縄文（横位回転）、140は０段多条のＲＬ単節斜縄文（横位・斜位回転）、141は０段多条のＲＬ単節斜縄文（横位・斜位回転）、142は０段多条のＲＬ単節斜縄文（縦位・横位回転）、143は０段多条のＬＲ単節斜縄文（縦位・横位回転）である。145はＬＲＬ複節斜縄文（横位回転）を施すものである。

12類（第16図11、図版５）

無文のものである。深鉢形土器で、口縁部は内湾しながら立ち上がり、６単位の山形口縁をなすと考えられる。外面はヘラ状工具で器面を整形している。

13類（第22図149～152、図版11）

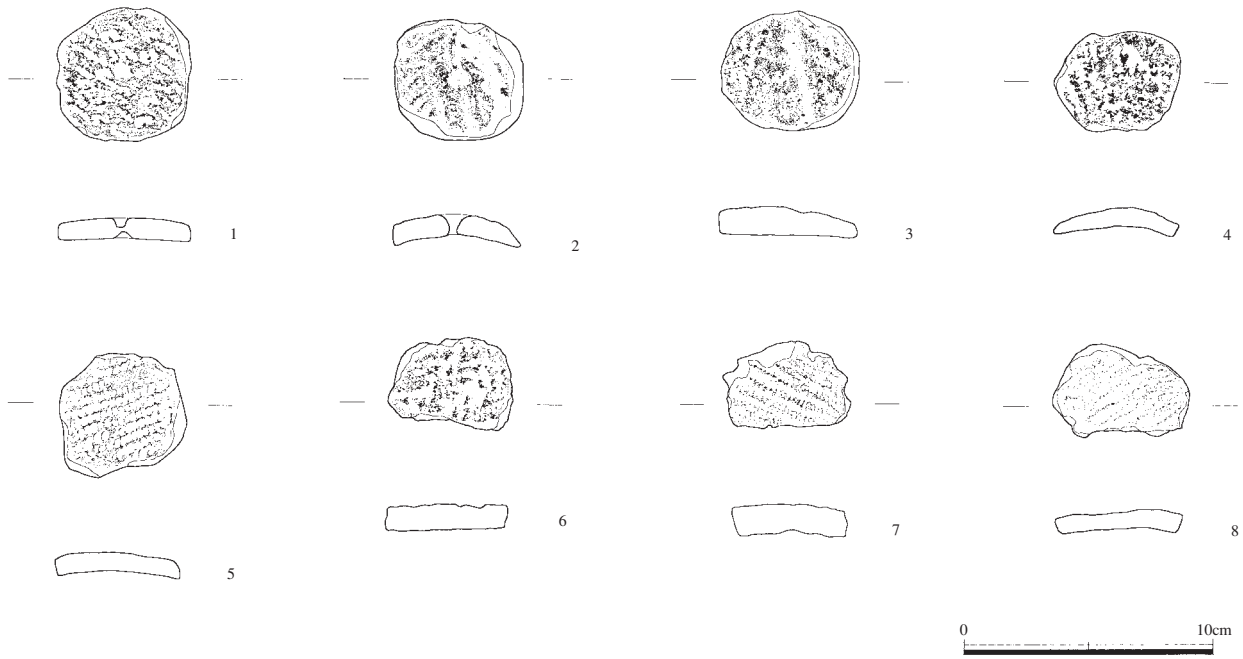
深鉢形土器の底部で、いずれも平底である。底部外面に149～151は縄文が、152は網代と考えられる圧痕が施されている。

土製品（第23図１～８、図版11）

第Ⅴ層の遺構外から８点出土している。土器片を再利用したもので、円形ないしは楕円形を呈する。１は両面から孔を穿とうとしているが、未貫通である。２はほぼ中心部に表面から孔が穿たれている。いずれも土器の補修孔と考えられる。６～８は一部が欠けている。

石器

全て遺構外からの出土である。２、９、30、31、40～45、69は昭和20年代に行われた水田整備の造成



第23図　土製品

土、３、13、46、47は平成18年度の試掘調査埋戻土、22は旧河道埋土、27、37は第Ⅲ層、他は第Ⅴ層からの出土である。

石鏃（第24図１～11、図版12）

11点出土し、１～10は無茎、11は棒状をなすものである。３、７、９のように丁寧な調整が全面に及ぶものと、１、２、４～６、８、10、11のように主要剥離面を広く残すものがある。１～９の基部は側縁が外側に広がり抉りを持つもので、９の基部先端部は丸味が認められる。10の基部は直線的である。石質は全て硬質頁岩である。

石匙（第24図12～17、図版12）

６点出土し、全て縦型である。刃部は13が３縁辺、他は２縁辺からなるものである。両側縁は線対象であるが、13、14、15がほぼ直線的なのに対し、12、16、17は曲線的である。13は主要剥離面にも調整を施しているが、他は無調整である。石質は全て硬質頁岩である。

石槍（第24、25図18～24、図版12）

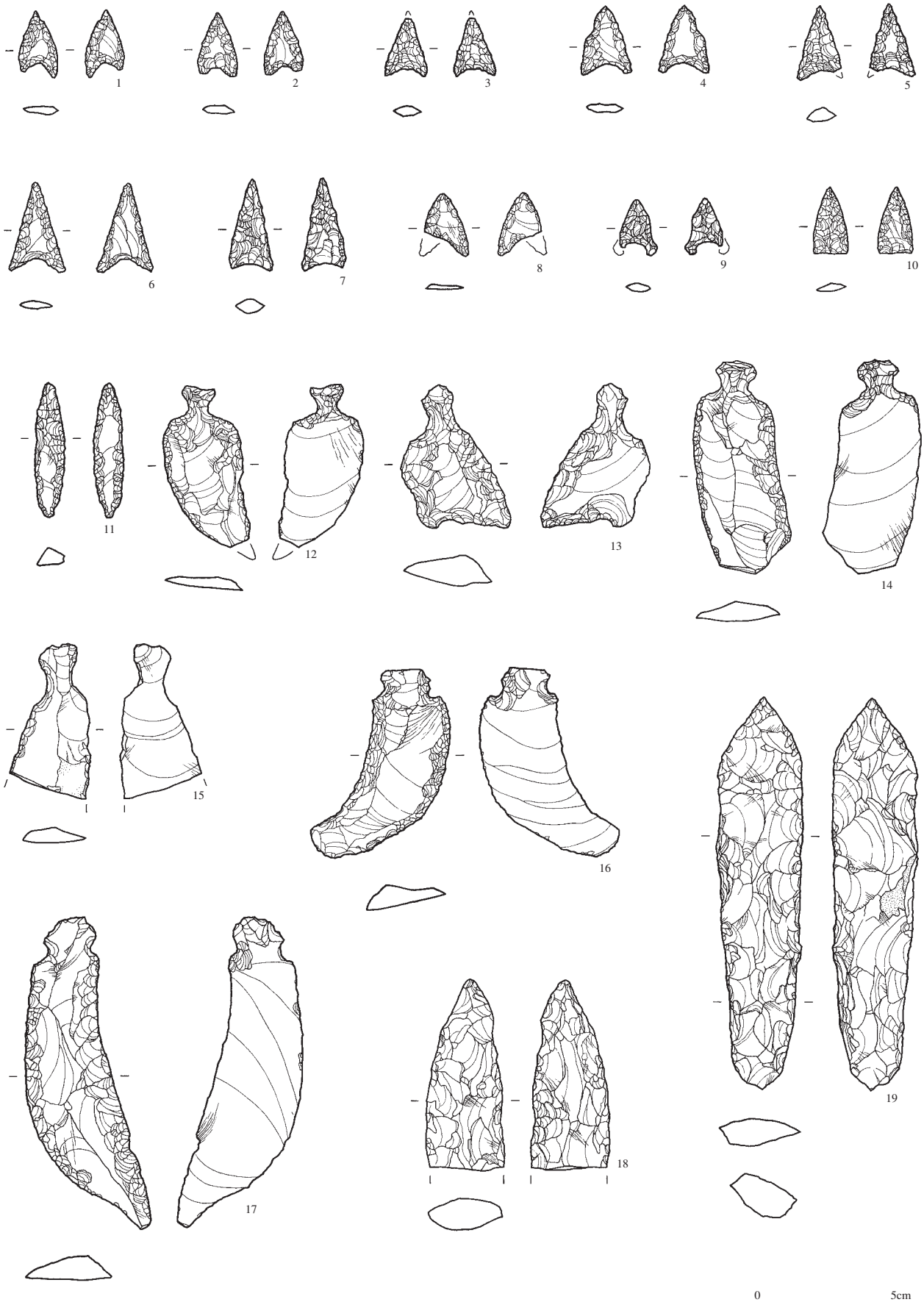
７点出土している。18、19のように細身のものと、20～24のように木葉形に近い形状があり、基部を尖らせているものと丸みのあるものが認められる。18～22は両面全面に調整を施すものであるが、23は裏面の一部が無調整である。24は表面のみの剥離調整である。石質は全て硬質頁岩である。

削器（第25図25～27、図版12、13）

３点出土しており、表面の両側縁に調整を施すものである。25は断面が三角形の縦長剥片で、先端が尖っている。石質は全て硬質頁岩である。

ヘラ状石器（第26、27図28～39、図版13）

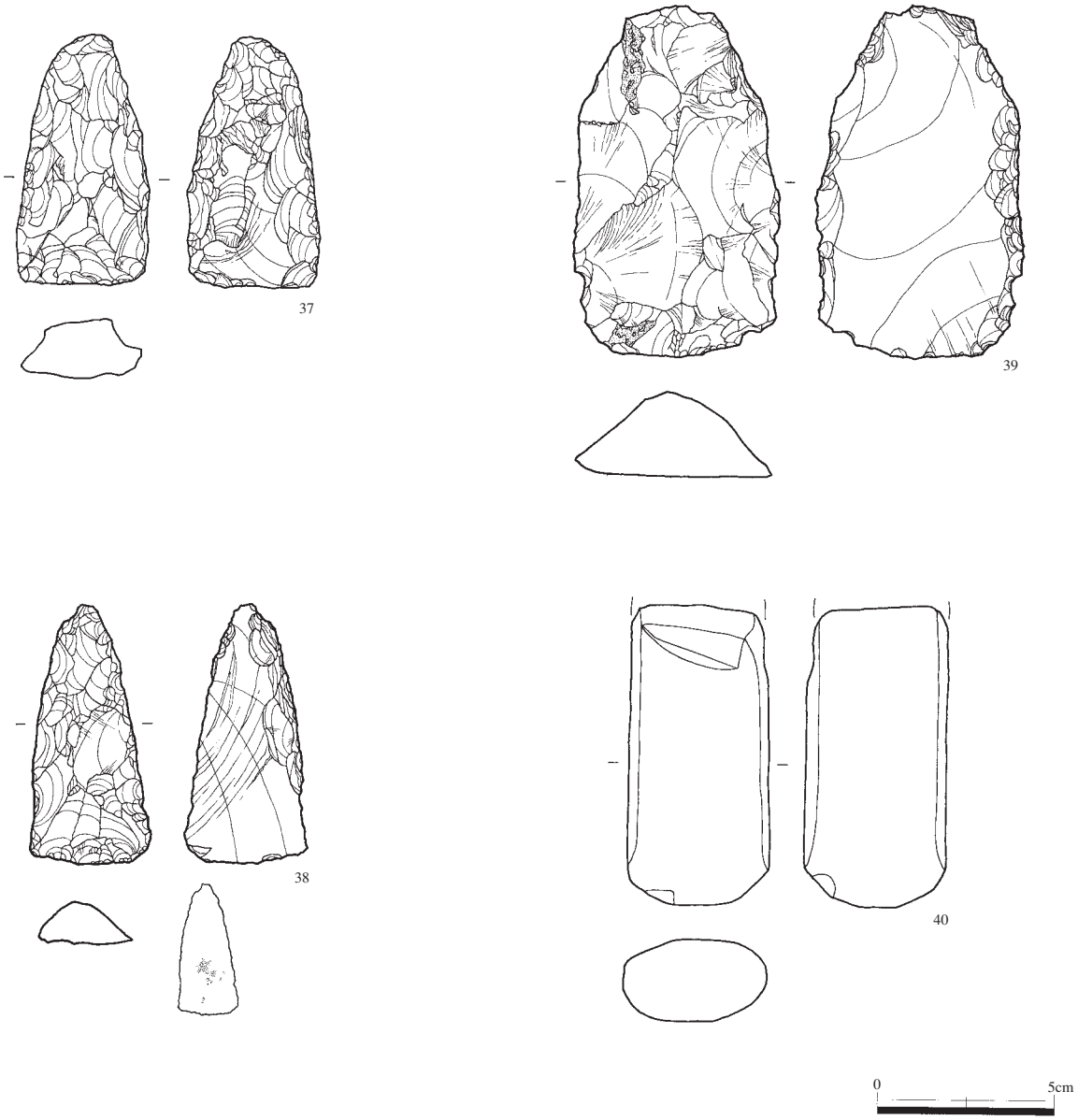
12点出土している。平面形が短冊形や撥形を呈し、刃部形状は直刃状である。表面は全て全体に剥離調整を施すが、裏面は剥離調整を全面的に施すものと側縁のみに施すものがある。39は他と比較して大型で、厚みがある。石質は全て硬質頁岩であるが、30は自然面を加工したものである。32、33は両面に、



第24図　遺構外出土石器

第25図　遺構外出土石器

第26図　遺構外出土石器



第27図　遺構外出土土石器

38は表面にアスファルトの付着が認められる。

磨製石斧（第27図40、図版13）

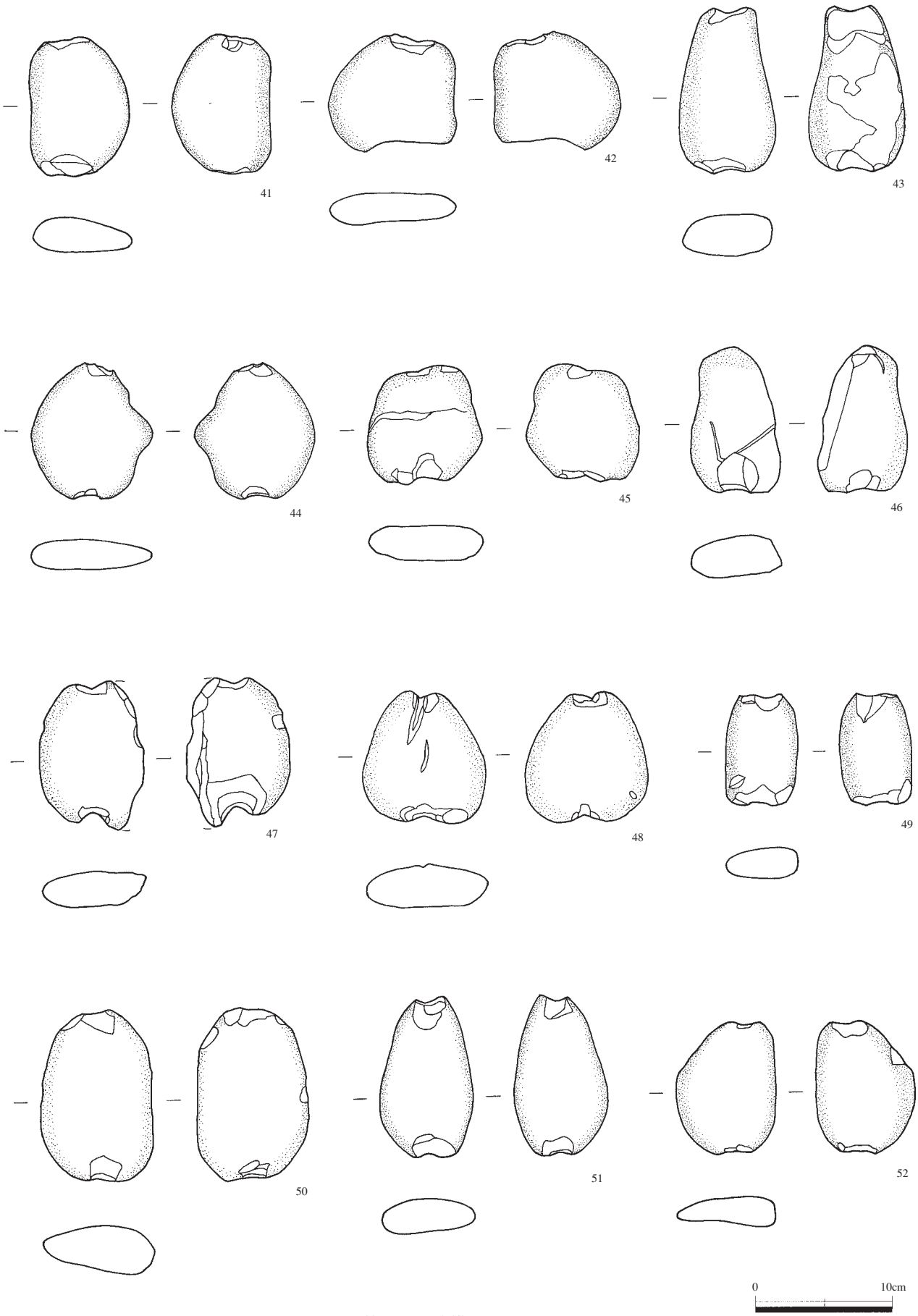
１点のみの出土である。比較的小型で、基部を欠いている。石質は凝灰岩である。

石錘（第28～30図41～70、図版13、14）

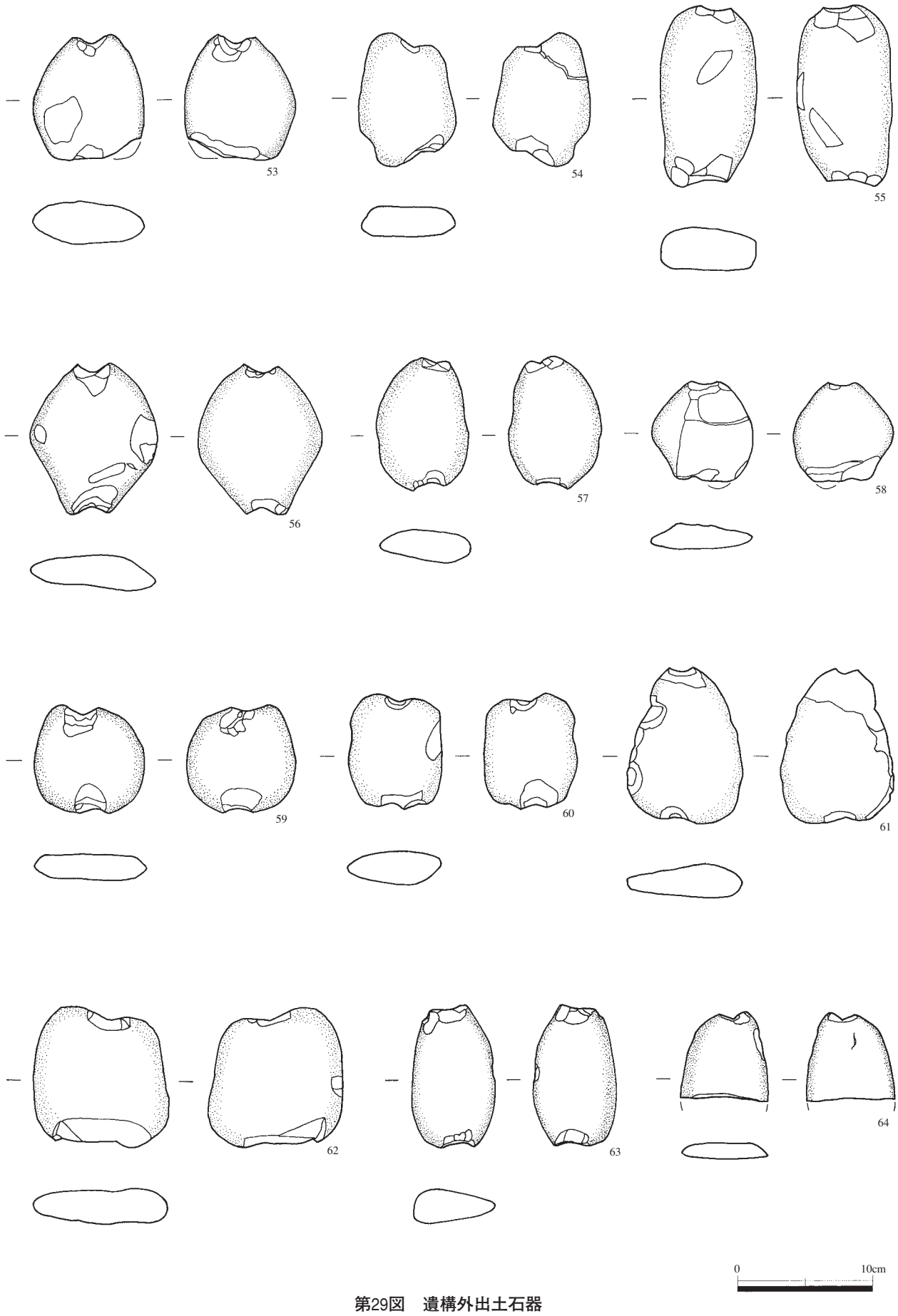
30点出土している。ほぼ扁平な自然礫の両端に抉りを入れているもので、楕円形を呈するものが多い。69、70のように、くぼみ石として使用されているものもある。

くぼみ石（第30図71～75、図版14）

５点出土している。円形および楕円形・長方形を呈する自然礫の両面に、１～２ヵ所くぼみが認められるものである。71の石質は泥岩でもろいものである。



第28図　遺構外出土石器



第29図　遺構外出土石器

第30図　遺構外出土石器

2　2、3区（駒澤大学担当）

⑴　調査の方法

本調査は平成19年８月６日から平成19年９月２日まで行った。

発掘調査は鋤簾を用い、人力で遺構確認・精査をすることから始まった。遺構確認の結果、住居跡・土坑・焼土遺構・石器集中地点、遺物包含層が検出され、それぞれに順番に番号を与えていった。検討の結果、欠番が生じた遺構については整理作業の段階で新たに番号を振り直した。

各遺構の掘削は、一層ごと掘り下げ、遺物の出土状況および埋土の堆積状況を記録化した。10、25号土坑については十字にベルトを設定して４分割し、石器集中地点ではベルト・トレンチを設定し、それ以外の遺構・付属施設では長軸を半截して土層観察を行った。土層断面図は、基本的に南・東側土層断面図を使用することにした。

各遺構および遺構全体の平面図は、トータルステーションを用いて適宜、上端・中端・下端を測量し、平面座標を記録した。

出土遺物は、基本的に各遺構から出土したものについては、標高はトータルステーション用いて三次元的に遺物出土状況を記録して取り上げた。記録化できなかったものに関しては、各遺構の一括遺物とし、調査区内の遺構外から出土した遺物は一括遺物とした。

遺構の記録写真には、６×７判・35㎜判カメラ、デジタル一眼レフカメラを使用した。６×７判カメラではモノクロームフィルムを、35㎜判カメラではモノクロームフィルム・カラーポジフィルムを用いて、基本的に各遺構の確認写真・土層断面写真・遺物出土状況写真・完掘写真の撮影を行い、多くの情報を記録できるように努めた。その他、デジタルカメラについてはその特質上、経過写真・補助記録として多く使用した。

発掘調査および整理作業では下記の方々よりご協力、ご指導を賜った。（敬称略・順不同）

淺間陽、池尻篤、井出浩正、植田雄已、大井和実、金子直行、上敷領久、佐藤絵里奈、嶋田圭吾、田中麻衣子、中村慶子、林紘太郎、平井幸弘、正木未央

調査区の設定

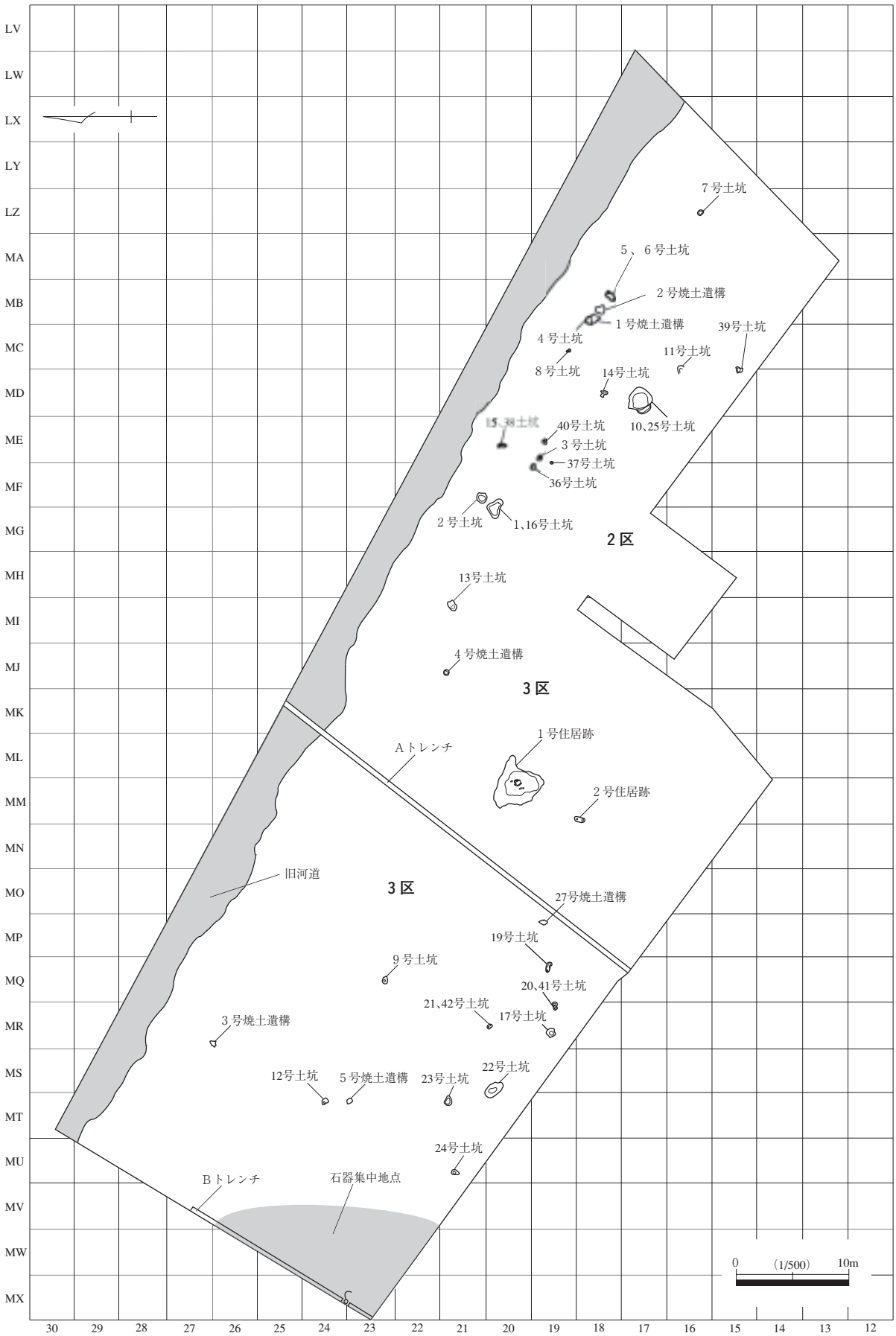
調査区の設定にあたっては、LW－17～MA－13グリッドを中心とし、当該グリッドより東を１区、西を２、３区とした。１区を秋田市教育委員会が、２、３区を駒澤大学が担当した。なお、MG－22～ML－13グリッドより西を３区とする。

⑵　基本層序

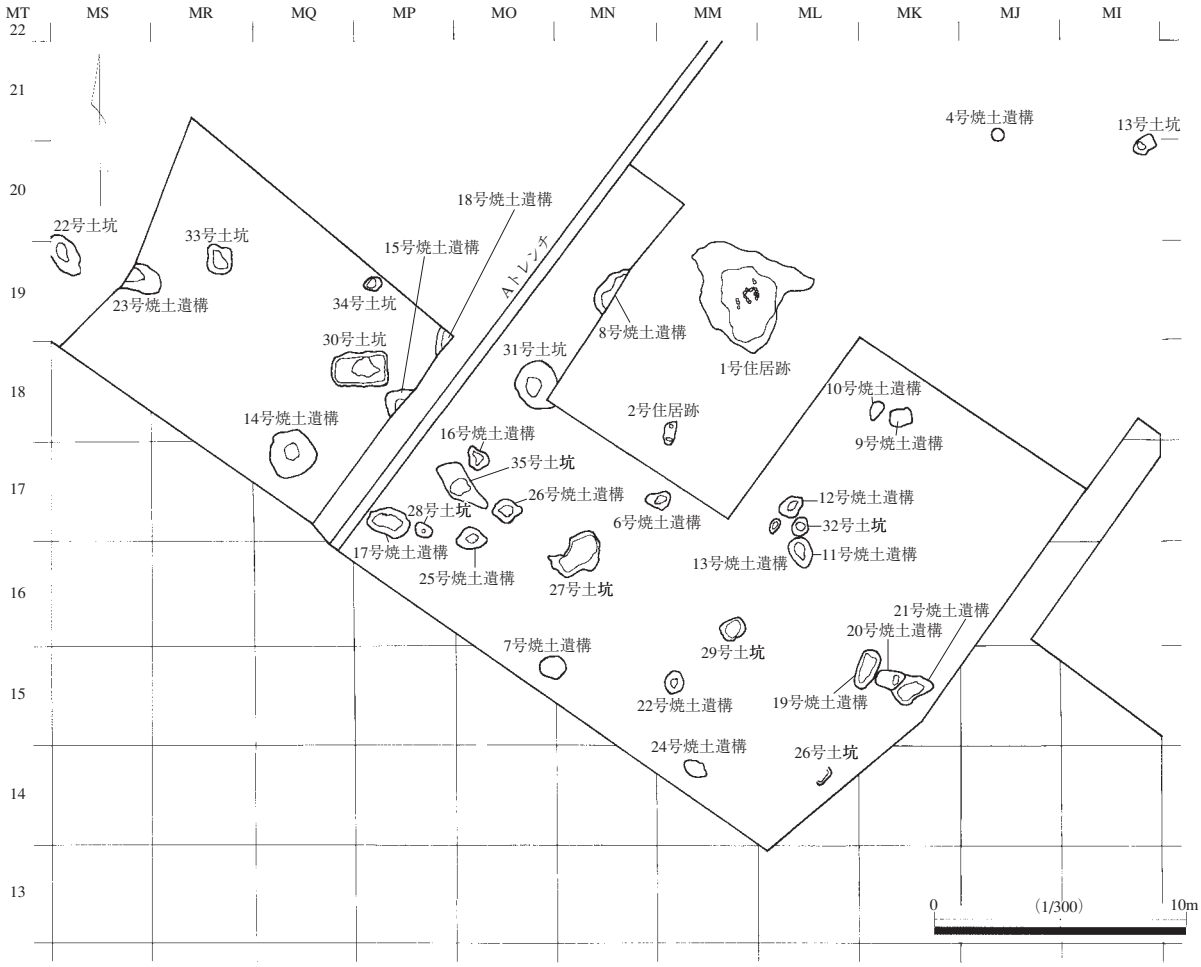
基本層序は３区南壁の土で観察した（第33図）。

基本層序は第Ⅺ層まで確認したが、第Ⅴ層以下では遺物の出土が認められなかった。第Ⅳ層では縄文時代前期の遺物に加え中期の遺物が出土するが、削平を受けているために正確な時期の特定に至らず、第Ⅴ層との関係から縄文時代前期以降とした。第Ⅴ層からは縄文時代前期の遺構・遺物が検出されたため、遺物包含層として調査を行った。なお、調査区の西端に位置する石器集中地点については土層の堆積状況が異なり、基本層序と対応しない層も存在するが、それについては石器集中地点で述べる。

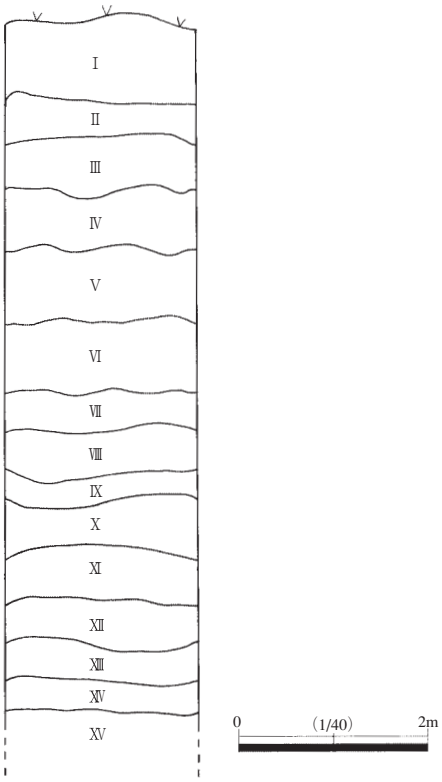
（中山雄市）



第31図　2、3区全体図（1）



第32図　3区全体図（2）



層位	色　調	粘性	締まり	備　考
第Ⅰ層	黒褐色(10YR2/2)	強い	やや弱い	表土。
第Ⅱ層	暗褐色(10YR3/3)	強い	普通	黒色土にローム質の土が混じる。
第Ⅲ層	にぶい黄褐色(10YR4/3)	強い	強い	ローム質の層。 縄文時代中期の層。
第Ⅳ層	黄褐色(10YR5/6)	強い	やや強い	砂層。一部黒色土が混じる。
第Ⅴ層	褐色(10YR4/4)	強い	普通	砂層。遺物包含層。 縄文時代前期の層。
第Ⅵ層	褐色(10YR4/6)	強い	強い	
第Ⅶ層	褐色(10YR4/6)	やや強い	やや強い	石英粒子１％。
第Ⅷ層	にぶい黄褐色(10YR5/4)	弱い	やや弱い	砂層。黒色粒子１％。
第Ⅸ層	にぶい黄褐色(10YR6/4)	やや弱い	強い	
第Ⅹ層	明黄褐色(10YR6/6)	弱い	やや弱い	砂層。粒子が細かい。石英粒子１％。
第Ⅺ層	黄褐色(10YR5/6)	やや強い	強い	
第Ⅻ層	褐色(10YR4/4)	弱い	やや弱い	砂層。黒色粒子１％。
第XIII層	暗褐色(10YR3/4)	弱い	やや弱い	粒子が粗い。ガラス質粒子１％。
第XIV層	褐色(10YR4/6)	やや弱い	普通	黒色粒子１％。白色粗砂３％。
第XV層	灰黄褐色(10YR5/2)	弱い	やや弱い	砂層。粒子が粗い。白色粗砂10％。

第33図　基本土層柱状図

⑶ 遺構と遺物

遺構は住居跡２軒、土坑41基、焼土遺構27基、石器集中地点、遺物包含層が検出された（第31、32図）。

住居跡

１号住居跡（第34～36図、図版15）

MM－19グリッド南に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。重機による削平のため大部分は破壊されており、壁の明確な立ち上がりは確認できなかった。残存した床面の範囲は長軸3.96ｍ、短軸3.8ｍである。そのため本来の形は不明である。また、炉の周囲径約３ｍの範囲に貼床を確認できたが、柱穴は確認できなかった。２号住居跡が炉から南西約5.4ｍの地点に位置している。

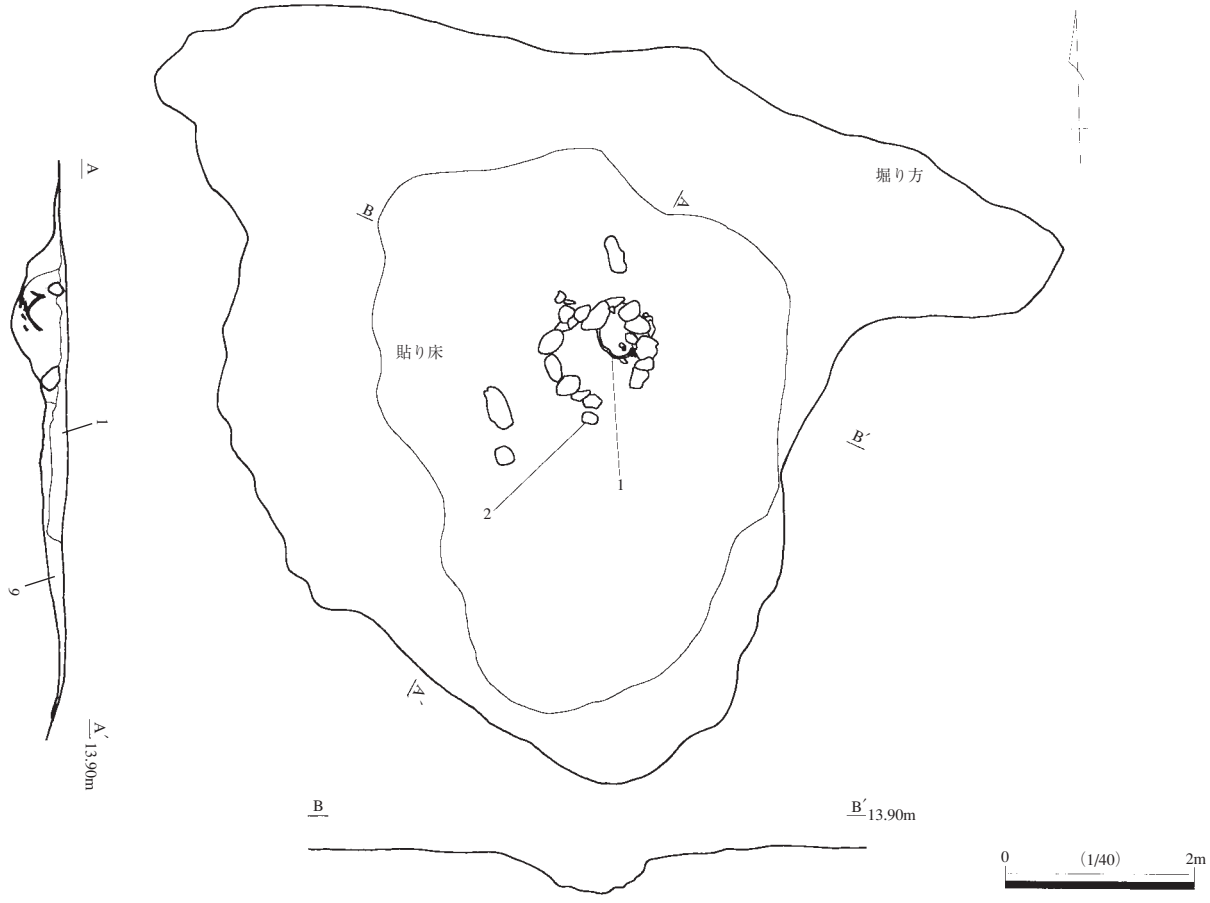
炉　土器埋設炉が先行し、石囲炉が後行する。床面の範囲が明確でないため、住居内での炉の位置は不明である。土器埋設炉は長軸24㎝、短軸19㎝、深さ22㎝、石囲炉は長軸60㎝、短軸64㎝、深さ40㎝を測る。掘り方の平面は楕円形を呈し、底面は緩やかに傾斜する。壁は緩やかに立ち上がる。

埋土は９層に分けられる。１、２層は炉の廃棄後に堆積した土である。３～５層は石囲炉の構築土、６～８層は土器埋設炉の構築土である。９層は貼床である。なお、炭化物は検出されなかった。

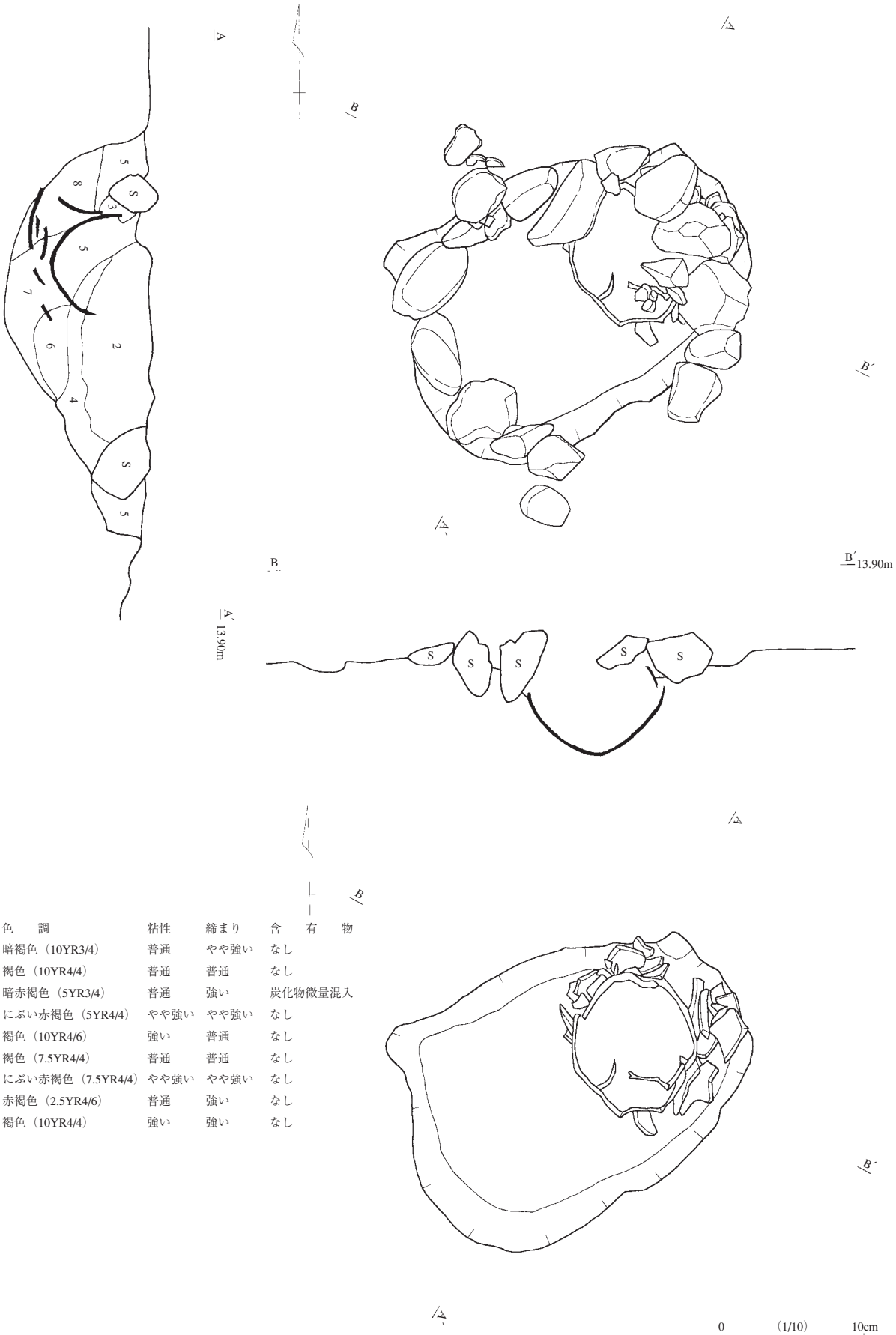
出土遺物は炉体土器の他、石囲炉に接するように磨製石斧が出土した。

出土遺物（第36図１、２、図版24）

縄文土器　縄文土器１点（１）を図示した。



第34図　１号住居跡（１）



層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	暗褐色（10YR3/4）	普通	やや強い	なし
2	褐色（10YR4/4）	普通	普通	なし
3	暗赤褐色（5YR3/4）	普通	強い	炭化物微量混入
4	にぶい赤褐色（5YR4/4）	やや強い	やや強い	なし
5	褐色（10YR4/6）	強い	普通	なし
6	褐色（7.5YR4/4）	普通	普通	なし
7	にぶい赤褐色（7.5YR4/4）	やや強い	やや強い	なし
8	赤褐色（2.5YR4/6）	普通	強い	なし
9	褐色（10YR4/4）	強い	強い	なし

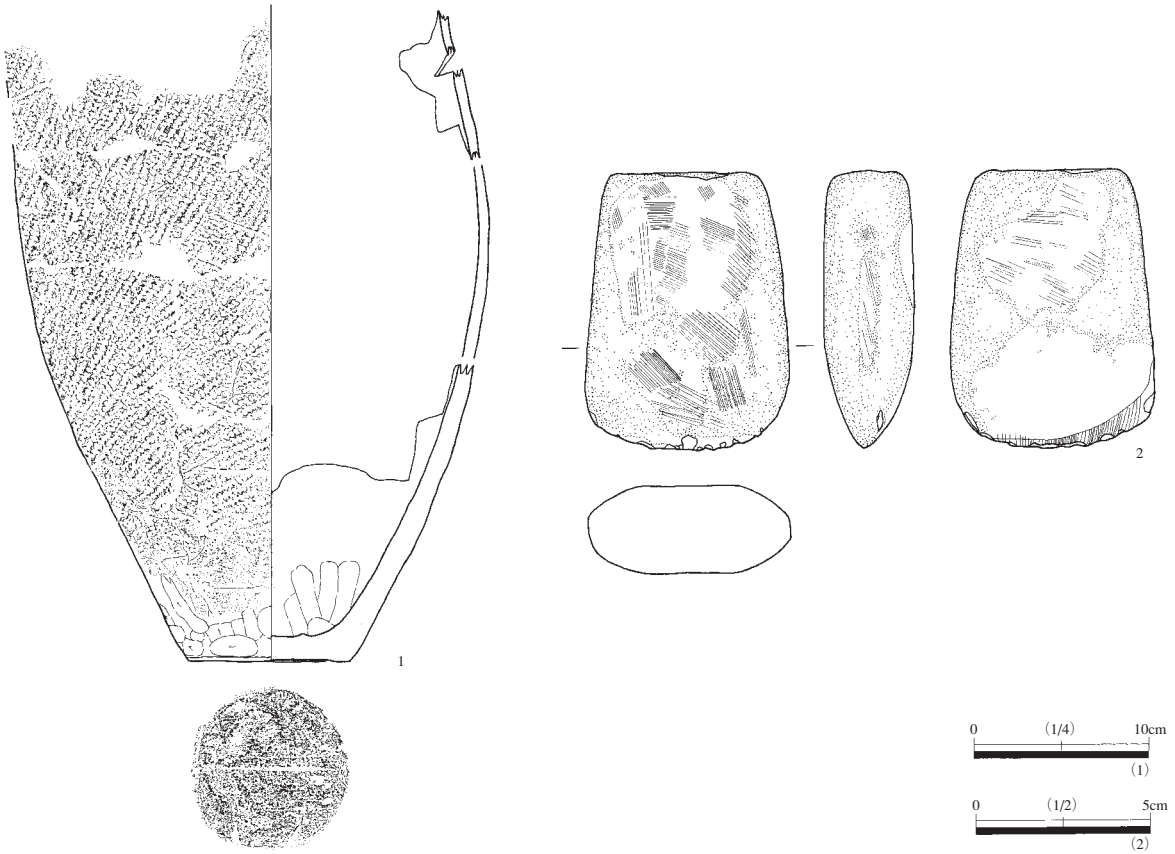
第35図　1号住居跡（2）

１は胴部中位に最大径をもつ深鉢の平底土器である。底部から胴部にかけて残存しており、底径8.9㎝を測る。胴部文様は斜行縄文（単節 LR）が施文され、胴部下位にはナデがみられる。底部外面には成形時に使用されたと思われる木葉の痕跡が確認できるが、木葉の種類は不明である。大木10式に相当する。

石器　磨製石斧（２）を図示した。

全体に丁寧な研磨が施されており、使用痕は認められない。石材は緑色凝灰岩である。

所見　削平により、大部分が破壊されているため不明な点が多い。時期は出土遺物が大木10式に相当することから、縄文時代中期末と判断できる。　（中泉雄太）



第36図　１号住居跡出土遺物

第１表　１号住居跡出土土器観察表

図番号	器種	法量(cm) 残存部位	色　調	含　有　物	文様・調整	出土位置	備考
第36図 1	深鉢	底径：8.9 ほぼ完形	外面：淡黄(2.5YR8/4) 内面：浅黄(2.5YR7/4)	石英１％・長石２％ 白色砂粒３％	文様：斜行縄文(単節 LR)を施文。胴部下位はナデ消されている。 調整：内面ナデ･ミガキ。	炉	—

第２表　１号住居跡出土石器観察表

図番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	出土位置	備　考
第36図 2	磨製石斧	8.0	5.8	2.5	216.0	緑色凝灰岩	床面	完形。全体を丁寧な叩きと研磨によって整形する。

２号住居跡（第37、38図、図版16）

MM－17グリッド北西に位置しており、第Ⅳ層中に掘り込まれて検出された。重機による削平のため、炉のみの確認となった。

炉　倒卵型の土器埋設炉で、土器は斜位に配置されている。規模は長軸30㎝、短軸21㎝、深さ11㎝を測り、掘り方の規模は長軸135㎝、短軸42㎝、深さ18㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、中央部分はややくぼむ。底面は皿状で一部が盛り上がり、壁は緩やかに立ち上がる。遺構確認面において炉周辺は被熱を受けていた。

炉で使用されている土器は３個体（１～６）である。中央に１を配置し、２～６で外周を囲っており、計画性をもって構築していることが分かる。１面は３～６によって、２面は２により、３面は１によって構築されている。

埋土は６層に分けられる。１～４層は炉が放棄された後に堆積した層である。５、６層は炉の構築土である。

遺物は土器の他に、チップが３層から少量出土した。

出土遺物（第38図１～６図、図版24）

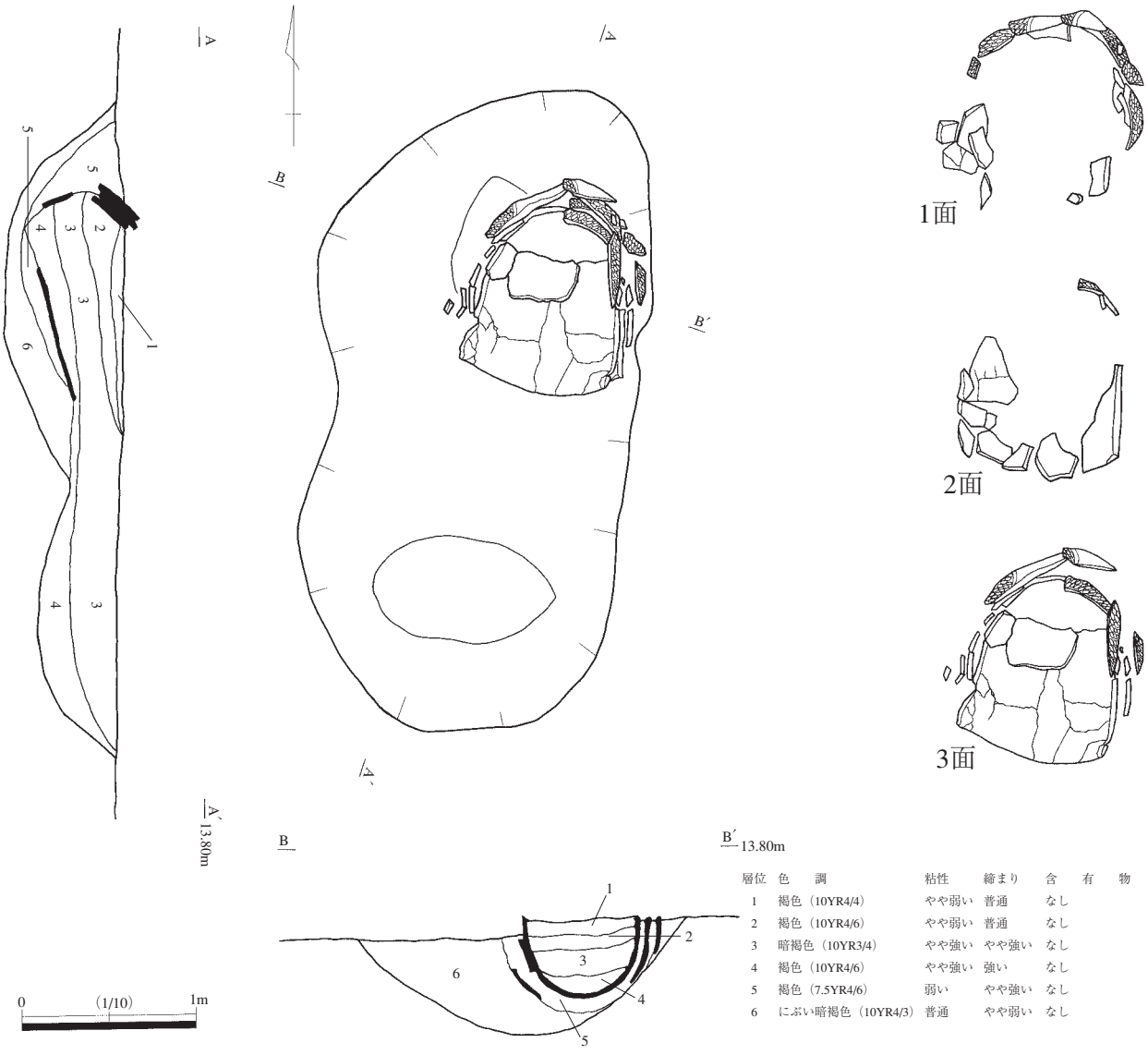
縄文土器　縄文土器６点（１～６）を図示した。

１は円筒形の平底土器である。口縁部文様は条（無節Ｌ）を軸に約２㎜間隔で巻き付けた絡条体を横位施文、胴部文様は縦位施文し、胴部下位は文様がナデ消されている。また胎土に金雲母を含有する。２は緩やかな波状口縁の深鉢形土器である。口縁部から胴部にかけてのみ残存しているため、底部形状は不明である。口縁部に無文帯が見られ、胴部文様は条（単節 LR）を軸に密に巻き付けた絡条体を縦位施文する。また内外面に丁寧なミガキが見られる。３～６は同一個体であると考えられ、３、４は胴部～底部片、５、６は口縁部片である。３、４は胴部に斜行縄文（単節 LR）を施文している。４は胴部下位の文様がナデ消されている。５、６は斜行縄文（単節 LR）を施文した後に、胴部上位に薄い隆帯を貼付し、磨消縄文を施す。

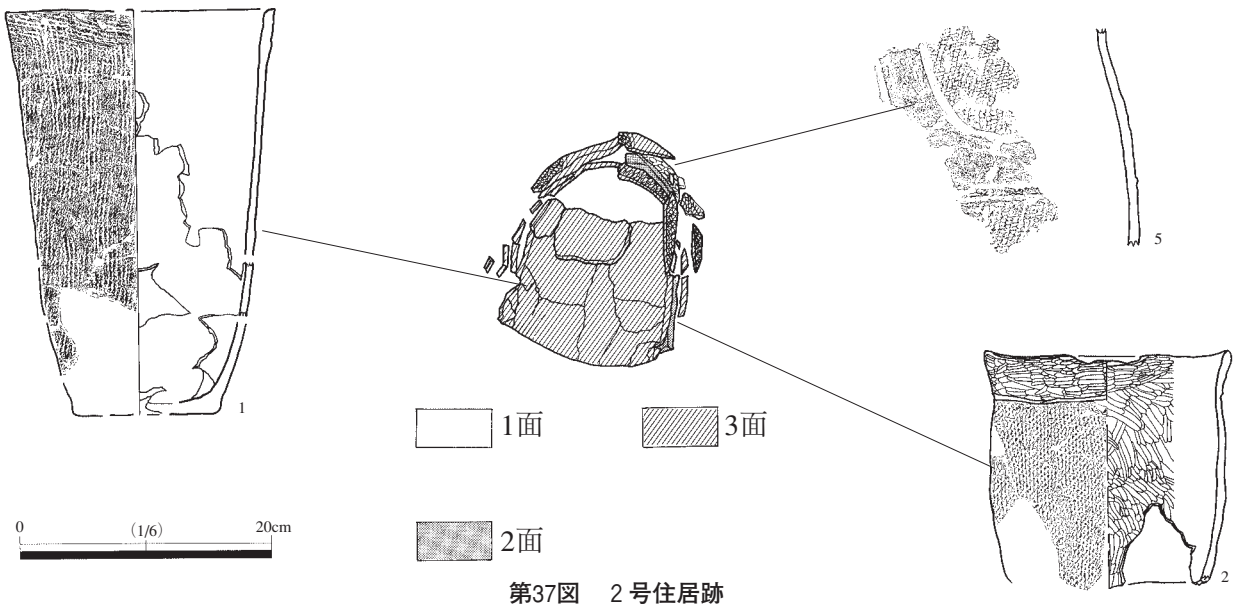
所見　削平により、大部分は破壊されているため不明な点が多い。時期は出土遺物が大木10式に相当することから、縄文時代中期末と判断できる。　（市川岳朗）

第３表　２号住居跡出土土器観察表

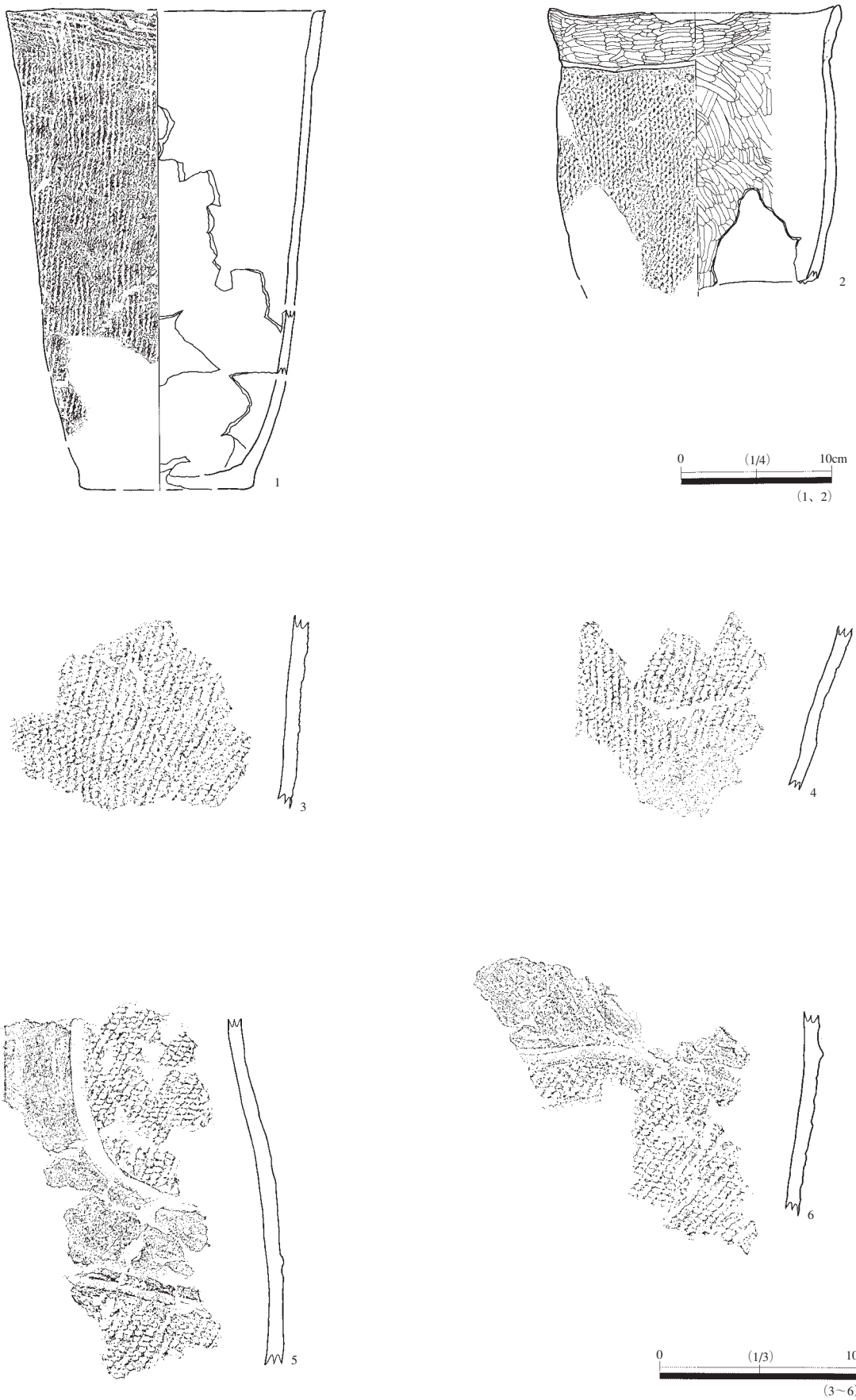
図番号	器種	法量(cm) 残存部位	色　調	含　有　物	文様・調整	出土位置	備考
第38図 1	深鉢	口径：(20.0) 底径：(12.0) ほぼ完形	外面：明黄褐(10YR7/6) 内面：にぶい黄橙(10YR7/4)	金雲母・石英１％ 長石１％	文様：口縁部は条(無節Ｌ)を軸に２㎜間隔で巻き付けた絡条体を横位施文、胴部は縦位施文。胴部下位はナデ消されている。 調整：内面ナデ･ミガキ。	炉	—
第38図 2	深鉢	口径：19.0 ほぼ完形	外面：橙(7.5YR6/6) 内面：にぶい黄橙(10YR7/4)	石英・長石１％	文様：口縁部に無文帯があり、胴部は条(単節 LR)を軸に密に巻き付けた絡条体を縦位施文。 調整：外面(口縁部)ミガキ。内面ミガキ。	炉	—
第38図 3	—	胴部片	外面：にぶい橙(7.5YR6/4) 内面：にぶい黄橙(10YR6/4)	石英２％・長石３％ 白色砂粒１％	文様：斜行縄文(単節 LR)を施文。 調整：内面ミガキ。	炉	—
第38図 4	—	胴部～底部片	外面：にぶい黄橙(10YR6/4) 内面：浅黄(2.5YR7/4)	石英・長石２％	文様：胴部は斜行縄文(単節 LR)を施文、胴部下位はナデ消されている。 調整：外面(底部)ナデ。内面ミガキ。	炉	—
第38図 5	深鉢	胴部片	外面：浅黄橙(7.5YR8/6) 内面：にぶい黄橙(10YR7/4)	石英・長石２％	文様：斜行縄文(単節 LR)を施文後、胴部上位に薄い隆帯を貼付して、隆帯に沿って浅い沈線を施し、沈線外部は磨り消して無文になっている。胴部中位以下は斜行縄文(単節 LR)を施文。 調整：内面ミガキ。	炉	—
第38図 6	深鉢	胴部片	外面：にぶい橙(5YR6/4) 内面：にぶい黄橙(10YR7/4)	石英・長石２％	文様：斜行縄文(単節 LR)を施文後、胴部上位に薄い隆帯を貼付して、隆帯に沿って浅い沈線を施し、沈線外部は磨り消して無文になっている。胴部中位以下は斜行縄文(単節 LR)を施文。 調整：内面ミガキ。	炉	—



層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	褐色（10YR4/4）	やや弱い	普通	なし
2	褐色（10YR4/6）	やや弱い	普通	なし
3	暗褐色（10YR3/4）	やや強い	やや強い	なし
4	褐色（10YR4/6）	やや強い	強い	なし
5	褐色（7.5YR4/6）	弱い	やや強い	なし
6	にぶい暗褐色（10YR4/3）	普通	やや弱い	なし



第37図　2号住居跡



第38図　2号住居跡出土遺物

土坑

１、16号土坑（第39図）

MI－19グリッド北東に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。平面で遺構の切り合いを確認することができなかったため、規模は深さのみで判断した。１号土坑は深さ16㎝を測り、平面・底面は不明である。16号土坑は深さ16㎝を測る。平面は不明であり、底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。１号土坑が16号土坑に切られている。

出土状況　１号土坑の底面直上から石器が出土したが、小破片のため図示し得なかった。

所見　出土遺物から時期・性格は判断できないが、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられる。（丹沢菜美子）

２号土坑（第39図）

MF－20グリッド南西に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は長軸90㎝、短軸89㎝、深さ32㎝を測る。平面は円形を呈しており、底面はほぼ平坦で壁は急に立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられるが、性格は不明である。（大河原務）

３号土坑（第39図）

MF－18グリッド北西に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は長軸54㎝、短軸52㎝、深さ10㎝を測る。平面は不整円形を呈しており、底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられるが、性格は不明である。（市川岳朗）

４号土坑（第39図）

MB－17グリッド北西に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は長軸13㎝、短軸78㎝、深さ７㎝を測る。平面は円形を呈しており、底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。１号焼土遺構に切られている。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられるが、性格は不明である。（村木真由）

５、６号土坑（第39図）

MB－17グリッド付近に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は５号土坑が長軸28㎝、短軸24㎝、深さ12㎝を測る。平面は円形を呈しており、底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。６号土坑は長軸100㎝、短軸44㎝、深さ12㎝の楕円形を呈しており、底面はやや起伏が見られ、壁は緩やかに立ち上がる。５号土坑が６号土坑に切られている。

出土状況　５号土坑から縄文土器が出土したが、小破片のため図示し得なかった。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられるが、性格は不明である。（野澤宏光）

７号土坑（第39図）

LZ－15グリッド西に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は長軸66㎝、短軸52㎝、深さ10㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面はほぼ平坦で壁はやや急に立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられるが、性格は不明である。

（金成愛子）

８号土坑（第39図、図版17）

MC－18グリッド西に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は長軸44㎝、短軸22㎝、深さ６㎝を測る。平面は不整形を呈しており、底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられるが、性格は不明である。

（河合太一）

９号土坑（第39図）

MQ－22グリッド西に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は長軸60㎝、短軸40㎝、深さ39㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面は傾斜をなし、壁は緩やかに立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられるが、性格は不明である。

（三船　咲）

10、25号土坑（第40図、図版19）

MD－16グリッド北西に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は10号土坑が径2.2ｍ、深さ80㎝を測る。平面は円形を呈しており、底面はフラスコ状で壁はやや急に立ち上がる。25号土坑は深さ60㎝を測る。平面・底面は不明である。10号土坑が25号土坑を切っている。

出土状況　縄文土器・石器・チップ・クルミ片が出土した。縄文土器の中には結束のある羽状縄文（結束第１種）を施文したもの、尖底土器などがある。ほとんどの遺物が10号土坑からの出土であり、25号土坑との境界である南壁を中心に認められる。なおクルミ片を含む炭化物は２～４層で確認できた。

出土遺物（第45、46図、図版25）縄文土器１点（１）と石器７点（５～11）を図示した。

縄文土器　１は胴部であり、羽状縄文（結束第１種）が施文されている。繊維の混入が認められる。

石器　石材は全て頁岩である。石鏃（５）は凹基無茎鏃に分類できる。尖頭器（６）は尖頭器の先端部であり、薄手である。先端部は弧状・直線状の両者により整形されている。石匙（７～10）は全て縦型石匙であり、鎌形に分類できる。茎はつまみ状に作り出されており、７、８は左方向に、９、10は右方向に湾曲する。磨石（11）は扁平な楕円形で、研磨が全体に及ぶ。

所見　時期は、遺構が確認された層位や羽状縄文を持つ土器や尖底土器などが出土していることから、縄文時代前期の遺構と推定できる。チップが多く出土していることから廃棄場であると考えられる。25号土坑は出土遺物が少なく時期・性格ともに不明である。

（千野慎太郎）

11号土坑（第40図）

MC－15グリッド北西に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。南西部は撹乱によって確認できないが、規模は確認できる範囲で長軸74㎝、短軸48㎝、深さ12㎝を測る。平面は楕円形を呈すると予想さ

れ、底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられるが、性格は不明である。

（塩野由理）

12号土坑（第40図、図版17）

MI－20グリッド北東に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は長軸94㎝、短軸80㎝、深さ３㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面はややくぼみ、壁はやや急に立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられるが、性格は不明である。

（宮部俊周）

13号土坑（第41図、図版17）

MT－23グリッド北東に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は長軸68㎝、短軸42㎝、深さ24㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面は皿状で一部が深く落ち込み、壁は緩やかに立ち上がる。

出土状況　埋土中から石器・チップが出土している。石器は小破片のため図示し得なかった。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられるが、性格は不明である。

（大河原務）

14号土坑（第41図）

MQ－17グリッド北西に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は長軸62㎝、短軸32㎝、深さ７㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面は凹凸があり壁は西側が緩やかに、東側がやや急に立ち上がる。

出土状況　石器・クルミ片が底面直上から出土した。石器は小破片のため図示し得なかった。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられるが、性格は不明である。

（吉田彩恵子）

15、38号土坑（第41図）

ME－19グリッド北西に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は15号土坑が長軸不明、短軸40㎝、深さ８㎝を測る。平面は不明で、底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。38号土坑は長軸30㎝、短軸20㎝、深さ６㎝を測る。平面は不整円形を呈しており、底面は緩い傾斜をなし一部が深く落ち込み、壁は緩やかに立ち上がる。15号土坑が38号土坑に切られている。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられるが、性格は不明である。

（吉田　愛）

17号土坑（第41図、図版17）

MR－18グリッド北西に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は長軸84㎝、短軸82㎝、深さ30㎝を測る。平面は円形を呈しており、底面はやや深い皿状で壁は緩やかに立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられるが、性格は不明である。

（和多田裕己）

19号土坑（第41図、図版17）

MQ－18グリッド北東に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は長軸95㎝、短軸26㎝、深さ30㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面は凹凸があり一部が深く落ち込み、壁はやや急に立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられるが、性格は不明である。

（菅原郁美）

20、41号土坑（第41図、図版17）

MR－18グリッド北に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は20号土坑が長軸44㎝、短軸28㎝、深さ12㎝を測る。平面は円形を呈しており、底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。41号土坑は長軸48㎝、短軸不明、深さ11㎝を測る。平面は円形を呈すると予想され、底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。20号土坑が41号土坑に切られている。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられるが、性格は不明である。

（丹沢菜美子）

21、42号土坑（第41図、図版17）

MR－19グリッド北西に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は平面で切り合いが確認できないため、両遺構合わせて長軸56㎝、短軸36㎝、深さのみ個々の遺構から測った。21号土坑は深さ18㎝を測る。平面は不明であり、底面は深く落ち込み、壁は急に立ち上がる。42号土坑は深さ22㎝を測る。平面は不明であり、底面は深く落ちこみ、壁は急に立ち上がる。撹乱のため、新旧は不明である。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられるが、性格は不明である。

（大河原務）

22号土坑（第42図）

MS－19グリッド北西に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は長軸1.8ｍ、短軸1.04ｍ、深さ28㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面は皿状で一部に凹凸が見られ、壁は緩やかに立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代中期以降と考えられるが、性格は不明である。

（菅原郁美）

23号土坑（第41図）

MT－20グリッド北東に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は長軸86㎝、短軸70㎝、深さ15㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面は凹凸があり壁は緩やかに立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられるが、性格は不明である。

（三船　咲）

24号土坑（第42図）

MU－20グリッド北西に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は長軸76㎝、短軸52㎝、深さ

24㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面は深い皿状で壁はやや急に立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられるが、性格は不明である。

（中泉雄太）

26号土坑（第42図、図版17）

ML－14グリッド北東に位置しており、第Ⅴ層中で検出された。北西部分では遺構が確認できなかったため、規模は確認できる範囲で長軸72㎝、短軸28㎝、深さ24㎝を測る。平面は長方形を呈すると予想され、底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。

出土状況　縄文土器・石器が遺構内の他、北西部分からも集中して出土している。遺構の全体の様相を把握できなかったため、この部分から出土した遺物が本遺構に伴うかは不明であるが、接合関係により本遺構に伴うものと判断した。

出土遺物（第45図２、４、図版26）

縄文土器　縄文土器２点（２、４）を図示した。

２は口縁部がやや波状であり、胴部文様は組紐縄文が施文されている。４は砲弾形の深鉢形土器である。口縁部から胴部にかけてほぼ残存している。底部は残存していないが、胴部下位からすぼまるため底部形状は尖底または丸底を呈していたと考えられる。口唇部にキザミを施し、胴部文様は３本の条を｛単節 LR（１）と RL（２）｝を他の条（０段の細縄）を以て縛り束ねた縄の束を横位施文したと考えられる。それぞれ胎土には繊維が混入している。なお、４は遺物包含層の出土遺物と接合しているが、一括遺物であったため接合関係を図示することはできなかった。

所見　時期は、遺構が確認された層位・出土遺物から縄文時代前期である。性格は不明であるが、本遺構が検出された場所は窪地のようにくぼんでいたため、その部分に遺物が流れ込んだ可能性が考えられる。

（吉田彩恵子）

27号土坑（第42図）

MN－16グリッド北西に位置しており、第Ⅴ層中で検出された。規模は長軸2.28ｍ、短軸0.84ｍ、深さ９㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面はやや凹凸があり壁は緩やかに立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられるが、性格は不明である。

（丹　洋輔）

28号土坑（第42図）

MP－17グリッド西に位置しており、第Ⅴ層中で検出された。規模は長軸70㎝、短軸60㎝、深さ18㎝を測る。平面は円形を呈しており、底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。

出土状況　縄文土器が出土しているが、小破片のため図示し得なかった。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられるが、性格は不明である。

（山本堅二郎）

29号土坑（第42図、図版18）

MM－16グリッド付近に位置しており、第Ⅴ層中で検出された。規模は長軸97㎝、短軸96㎝、深さ30

㎝を測る。平面は円形を呈しており、底面は皿状で壁の南側は緩やかに立ち上がり、北側はやや急に立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられるが、性格は不明である。

（金成愛子）

30号土坑（第42図、図版18）

MP－18グリッド北西に位置しており、第Ⅴ層中で検出された。規模は長軸2.2m、短軸1.34m、深さ10㎝を測る。平面は長方形を呈しており、底面はほぼ平坦で壁は緩やかに立ち上がる。

出土状況　縄文土器が出土しているが、小破片のため図示し得なかった。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられるが、性格は不明である。

（山本堅二郎）

31号土坑（第43図、図版18）

MO－18グリッド北東に位置しており、第Ⅴ層中から検出された。南東部分は掘り下げることができなかったため、規模は確認できる範囲で長軸1.96m、短軸1.64m、深さ1.96mを測る。平面は楕円形であると予想され、底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。本遺構は第Ⅴ層を掘り進めた際に、多量の剥片が出土したことで確認された遺構であるため、セクション図は作成できずエレベーション図で代用した。

出土状況　剥片・チップが南壁側の埋土中から出土した。剥片はおよそ48点出土し、その直下からチップが塊状で出土したが底面には見られなかった。

出土遺物（第48図15、図版27）

石器　整理段階で剥片15点が接合し、図示した（15）。

接合資料（15）は石核を作出したと考えられるが、本遺構からは石核は出土しなかったため、搬出されたと考えられる。自然石の大きさは復元可能であり、縦13.3cm、横30.5㎝である。不定形の剥片を剥離していたと推測され、未製品の石篦が１点接合する。石材は頁岩である。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられる。上部に剥片が集中し、チップが塊状に出土しているが製品はほとんど認められないことから、土坑埋没途中に廃棄された捨て場であると考えられる。

（塩野由理）

32号土坑（第43図）

ML－17グリッド西に位置しており、第Ⅴ層中から検出された。規模は長軸64㎝、短軸62㎝、深さ17㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面は緩い傾斜をなし壁は緩やかに立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられるが、性格は不明である。

（和多田裕己）

33号土坑（第43図、図版18）

MR－19グリッド北東に位置しており、第Ⅴ層中から検出された。規模は長軸1.38m、短軸1.16m、深さ17㎝を測る。平面は不整円形を呈しており、底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。

出土状況　１層から縄文土器・石器が出土した。

出土遺物（第47図12、13図版26）石器２点（12、13）を図示した。

石材は全て頁岩である。石匙（12）は縦型石匙であり、耕鎌形に分類できる。茎はつまみ状に作り出されている。石鏃（13）は凹基無茎鏃に分類できる。裏面に主剥離面を残している。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられるが、性格は不明である。

（宮部俊周）

34号土坑（第43図）

MP－19グリッド北西に位置しており、第Ⅴ層中から検出された。規模は長軸80㎝、短軸59㎝、深さ15㎝を測る。平面は円形を呈しており、底面は平坦で壁はやや急に立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられるが、性格は不明である。

（吉田彩恵子）

35号土坑（第43図）

MO－17グリッド北西に位置しており、第Ⅴ層中から検出された。規模は長軸2.2ｍ、短軸１ｍ、深さ20㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。

出土状況　３層から縄文土器・石器が出土した。

出土遺物（第45図３）

縄文土器　縄文土器１点（３）を図示した。

３は口唇部にキザミを施し、胴部文様は結束のある羽状縄文（結束第１種）が施文されている。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられるが、性格は不明である。

（中泉雄太）

36号土坑（第43図、図版18）

MF－18グリッド北東に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は長軸47㎝、短軸46㎝、深さ13㎝を測る。平面は隅丸方形を呈しており、底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。

出土状況　磨石（14）が遺構確認面から出土し、クルミを含む炭化物が１層から検出された。

出土遺物（第47図14、図版26）

石器　石器１点（14）を図示した。

磨石（14）は表面右上半部に黒色の炭化物が付着していることから、表面がスリ面であったと考えられる。表・裏・側面に凹みが見られる。石材は砂岩である。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられるが、性格は不明である。

（和多田裕己）

37号土坑（第43図）

ME－18グリッド北西に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は長軸28㎝、短軸17㎝、深さ10㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面は深い皿状で壁は緩やかに立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられるが、性格は不明である。

（大河原務）

39号土坑（第44図）

MC－14グリッド西に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は長軸66㎝、短軸53㎝、深さ８㎝を測る。平面は不整形を呈しており、底面は起伏が見られ、壁は急に立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられるが、性格は不明である。

（八木澤美香）

40号土坑（第44図）

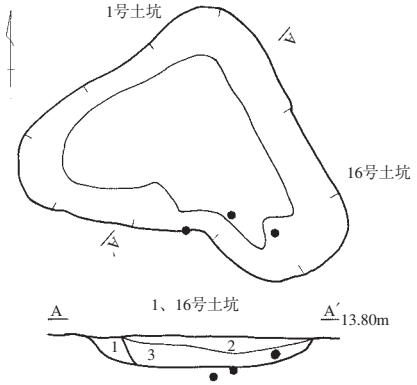
ME－18グリッド北西に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は長軸56㎝、短軸44㎝、深さ10㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面はやや起伏をなし、壁は緩やかに立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代中期以降と考えられるが、性格は不明である。

（大河原務）

第４表　土坑出土土器観察表

図番号	器種	法量(cm) 残存部位	色　調	含　有　物	文様・調整	出土位置	備考
第45図 1	深鉢	胴部片	外面：明黄褐(10YR7/6) 内面：浅黄橙(10YR8/3)	骨針３％・石英１％ 長石１％	文様：結束のある羽状縄文(結束第１種)を施文。 調整：不明。	10号 土坑	繊維混入。
第45図 2	—	口縁部片	外面：灰黄褐(10YR4/2) 内面：暗褐(10YR3/3)	石英１％	文様：組紐縄文を施文。 調整：不明。	26号 土坑	繊維混入。
第45図 3	深鉢	口縁部	外面：にぶい黄橙(10YR6/4) 内面：にぶい黄橙(10YR7/4)	石英２％・長石１％	文様：口唇部にキザミ。結束のある羽状縄文(結束第１種)を施文。 調整：内面ナデ。	35号 土坑	—
第45図 4	深鉢	口径：27.8 ほぼ完形	外面：灰黄橙(10YR6/2) 内面：暗灰黄(2.5YR5/2)	石英・長石１％ 白色砂粒１％	文様：口唇部にキザミ。3本の条｛単節 LR(２本)・RL(１本)｝を他の条(０段の細縄)を以て縛り束ねた原体で施文。 調整：内面ナデ。	26号 土坑	—

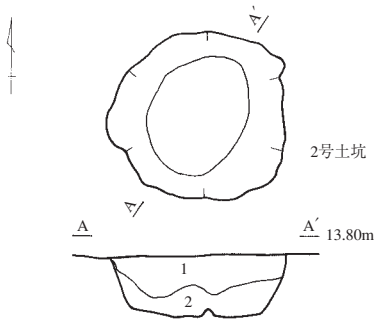


1号土坑

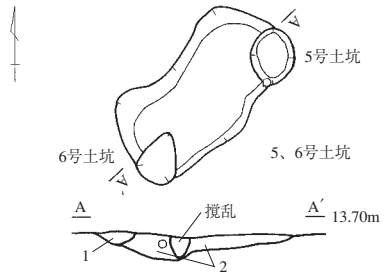
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	やや強い	やや強い	なし

16号土坑

層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
2	暗褐色（10YR3/4）	やや弱い	やや弱い	なし
3	にぶい黄褐色（10YR4/3）	やや強い	普通	ローム小ブロック微量混入



層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	黒褐色（10YR2/3）	やや弱い	普通	白色砂・炭化物微量混入
2	暗褐色（10YR3/3）	普通	やや強い	ローム小ブロック少量、炭化物微量混入

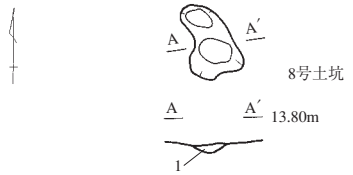


5号土坑

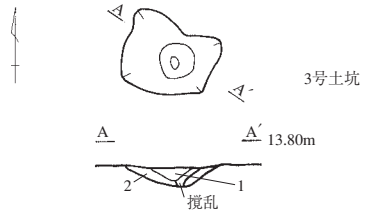
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	褐色（10YR4/4）	弱い	弱い	なし

6号土坑

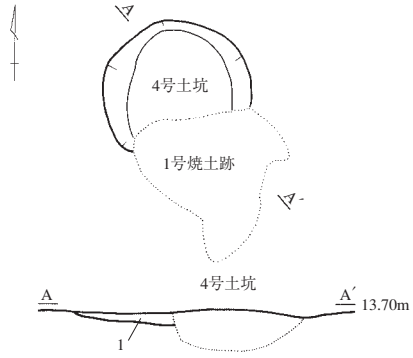
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
2	暗褐色（10YR3/3）	やや弱い	弱い	なし



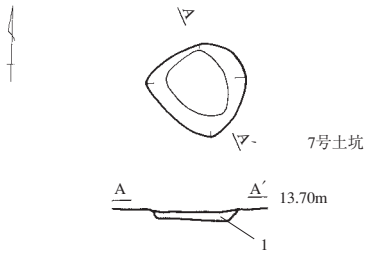
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	黒色（10YR2/1）	弱い	やや強い	なし



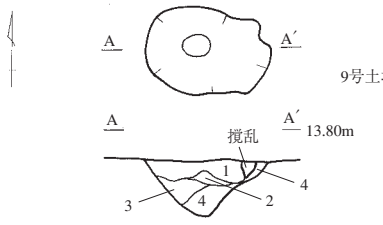
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	暗褐色（10YR3/3）	普通	やや強い	ローム極小粒子微量混入
2	褐色（10YR4/6）	やや弱い	やや強い	白色砂微量混入



層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	暗褐色(10YR3/4)	弱い	強い	なし

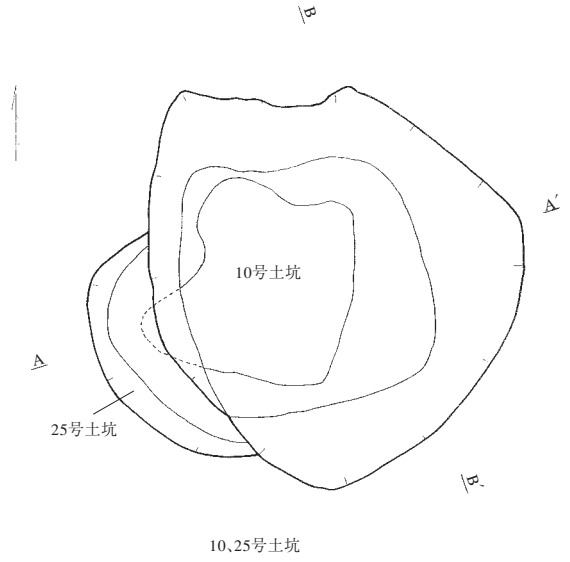


層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	暗褐色（10YR3/4）	弱い	強い	なし

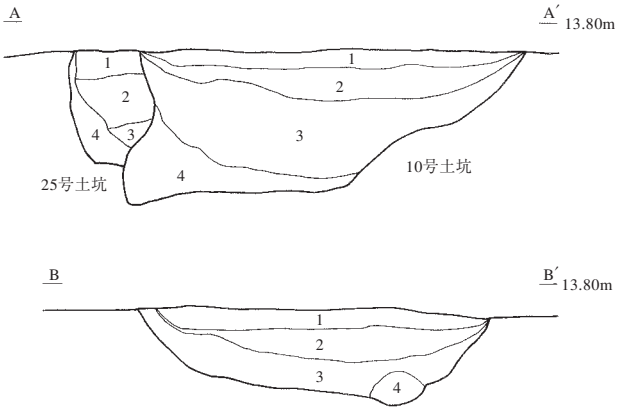


層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	褐色（10YR4/4）	弱い	やや強い	黒色砂微量混入
2	暗褐色（10YR3/4）	やや弱い	強い	黒色砂微量混入
3	褐色（10YR4/6）	弱い	普通	ローム中ブロック少量混入
4	褐色（10YR4/6）	やや弱い	やや強い	なし

第39図　土坑（1）

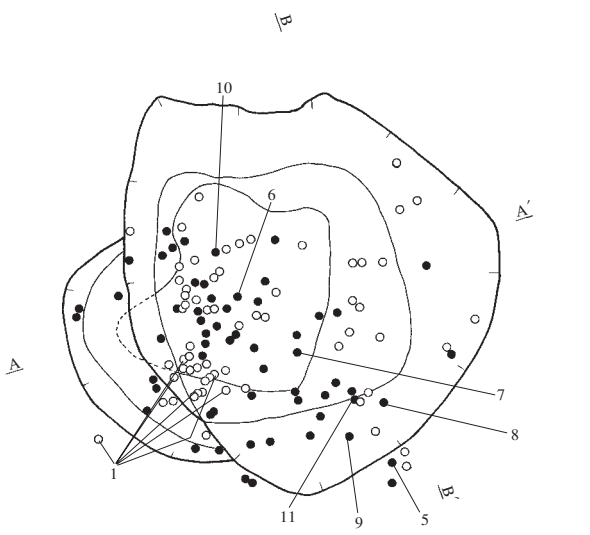


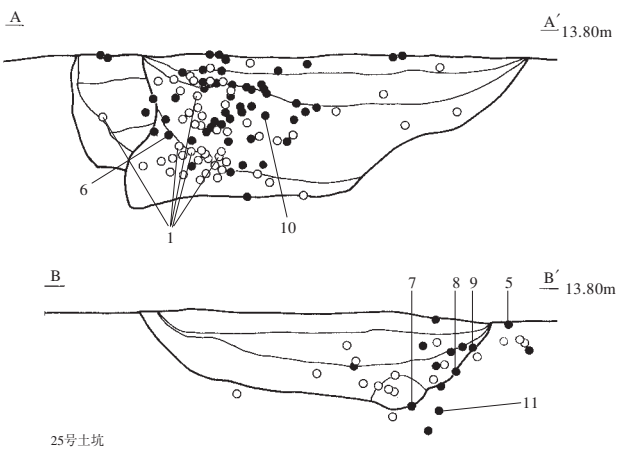
10、25号土坑



10号土坑

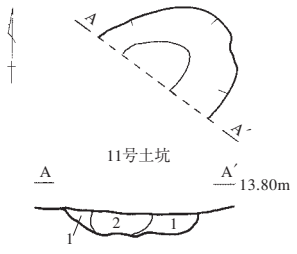
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	褐色（10YR 4 / 4 ）	弱い	普通	白色砂微量混入。
2	黄褐色（10YR 5 / 6 ）	普通	やや弱い	白色砂、ロームブロック微量混入
3	暗褐色（10YR 3 / 4 ）	やや弱い	やや強い	赤色砂、ロームブロック微量混入
4	褐色（10YR 4 / 4 ）	やや弱い	弱い	白色砂、ロームブロック微量混入



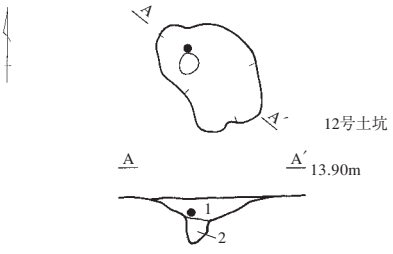


25号土坑

層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	明褐色（7.5YR5/8）	やや弱い	普通	白色砂微量混入
2	黄褐色（10YR5/6）	やや弱い	普通	白色砂微量混入
3	明褐色（7.5YR5/6）	やや弱い	やや弱い	白色砂微量混入
4	褐色（10YR4/4）	やや弱い	やや弱い	白色砂、赤色砂微量混入

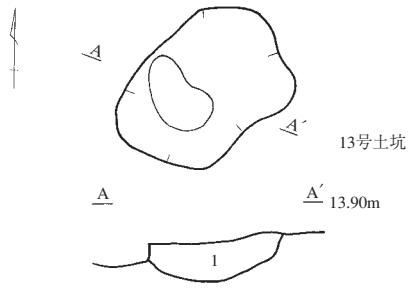


層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	褐色（10YR4/6）	弱い	普通	炭化物極小少量混入
2	黄褐色（10YR5/6）	弱い	普通	炭化物極小微量混入

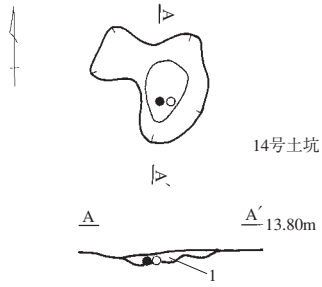


層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	黄褐色（10YR5/6）	弱い	普通	なし
2	褐色（10YR4/6）	弱い	やや強い	なし

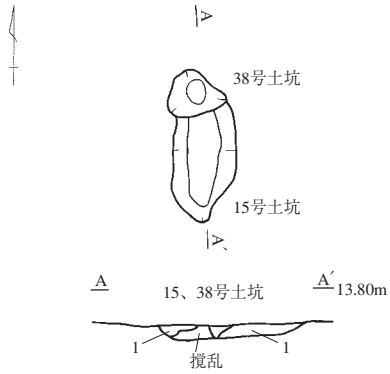
第40図　土坑（２）



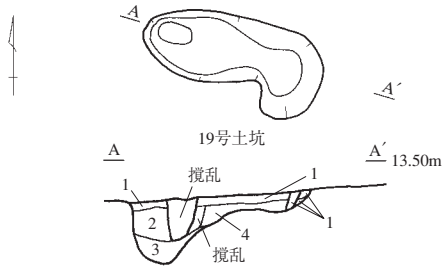
層位 色　調　粘性　締まり　含　有　物
1　褐色（10YR 4 / 4 ）弱い　やや強い　白色砂大微量混入



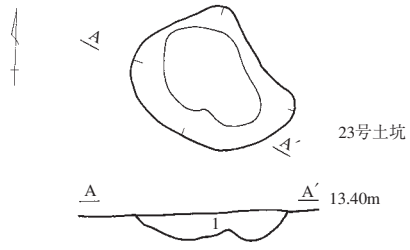
層位 色　調　粘性　締まり　含　有　物
1　暗褐色（10YR 3 / 4 ）やや弱い　普通　炭化物中微量混入



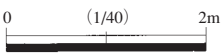
15号土坑
層位 色　調　粘性　締まり　含　有　物
1　黄褐色（10YR 4 / 4 ）弱い　普通　なし
38号土坑
層位 色　調　粘性　締まり　含　有　物
1　褐色（10YR 4 / 4 ）やや強い　強い　黒色粒子微量、
ロームブロック（中）少量混入

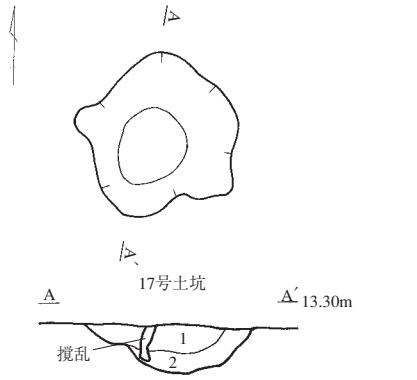


層位 色　調　粘性　締まり　含　有　物
1　黄褐色（10YR5/6）普通　やや強い　なし
2　褐色（10YR4/4）やや強い　やや強い　ロームブロック・炭化物微量混入
3　黄褐色（10YR5/8）普通　普通　なし
4　褐色（10YR4/4）やや弱い　やや強い　ロームブロック微量混入

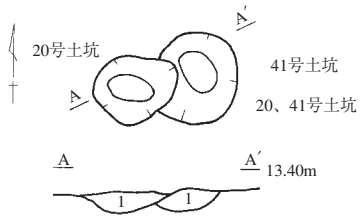


層位 色　調　粘性　締まり　含　有　物
1　褐色（10YR4/6）やや強い　普通　なし

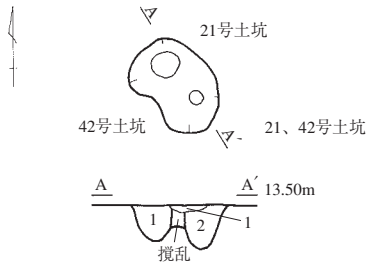




層位 色　調　粘性　締まり　含　有　物
1　褐色（10YR4/6）強い　普通　ローム大
ブロック微量混入
2　褐色（10YR4/4）やや強い　やや強い　なし

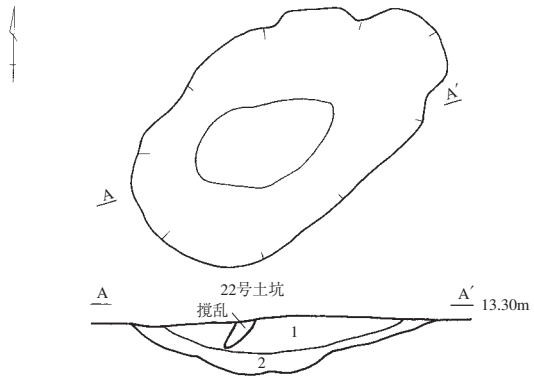


20号土坑
層位 色　調　粘性　締まり　含　有　物
1　褐色（10YR4/4）普通　やや強い　なし
41号土坑
層位 色　調　粘性　締まり　含　有　物
1　褐色（10YR4/6）やや弱い　やや弱い　なし

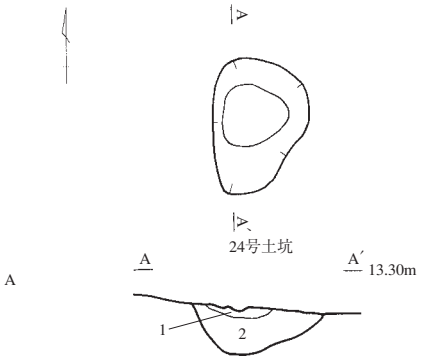


21号土坑
層位 色　調　粘性　締まり　含　有　物
1　褐色（10YR4/4）やや強い　やや強い　なし
2　暗褐色（10YR3/4）やや弱い　普通　なし
42号土坑
層位 色　調　粘性　締まり　含　有　物
1　褐色（10YR4/4）やや弱い　普通　なし

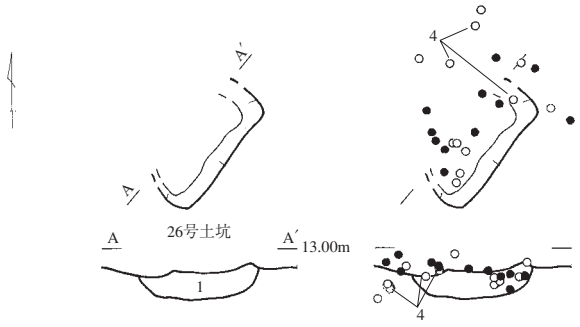
第41図　土坑（3）



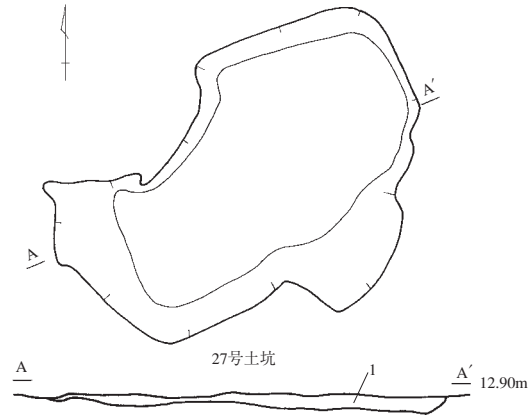
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	にぶい黄褐色（10YR5/4）	普通	やや強い	ローム大ブロック微量混入
2	黄褐色（10YR5/6）	やや強い	普通	なし



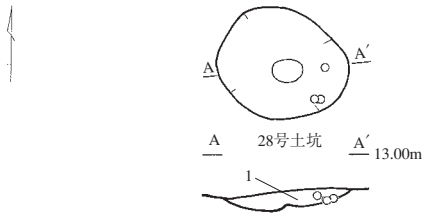
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	褐色（10YR4/6）	普通	やや弱い	炭化物極小微量混入
2	明褐色（7.5YR5/6）	普通	普通	炭化物極小微量混入



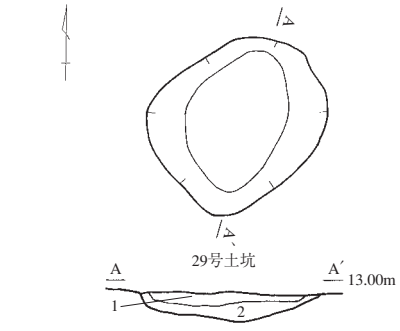
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	暗褐色（7.5YR3/4）	弱い	やや弱い	なし



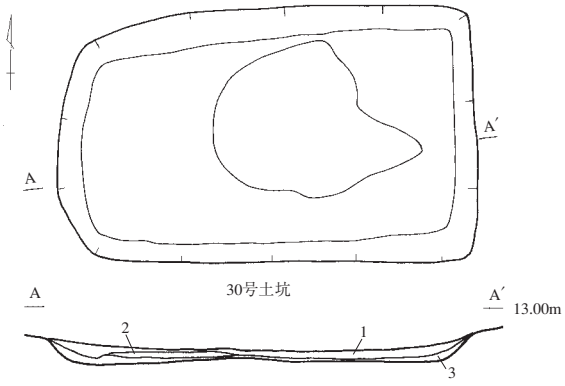
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	褐色（10YR4/6）	普通	普通	ロームブロック微量混入



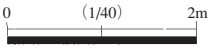
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	黒褐色（10YR2/3）	弱い	普通	なし



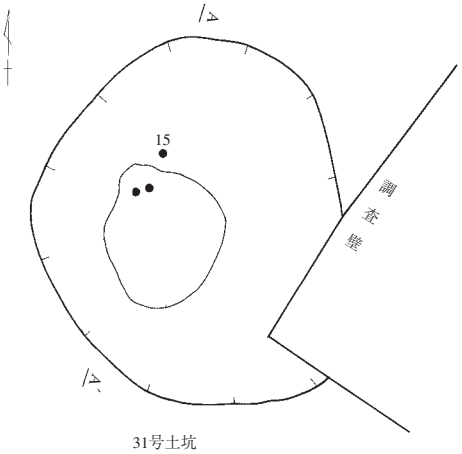
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	暗褐色（10YR3/4）	普通	やや弱い	炭化物極小微量混入
2	黄褐色（10YR5/6）	やや強い	やや強い	炭化物極小、ローム小ブロック微量混入



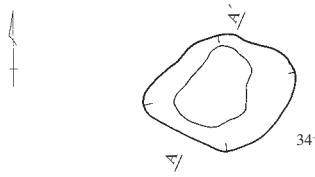
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	暗褐色（10YR3/3）	やや弱い	普通	炭化物微量混入
2	灰褐色（10YR4/1）	普通	強い	なし
3	褐色（10YR4/6）	やや弱い	普通	なし



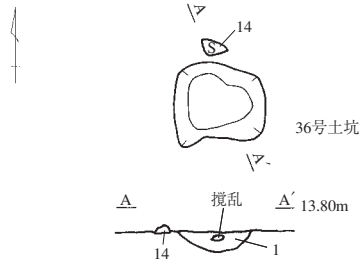
第42図　土坑（４）



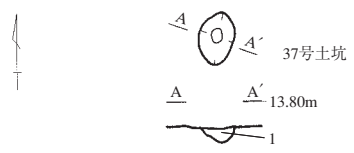
31号土坑



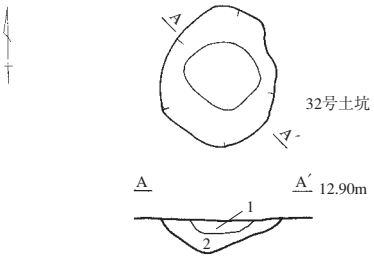
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	褐色（10YR4/6）	やや強い	普通	なし
2	黄褐色（10YR5/6）	普通	やや弱い	炭化物微量混入



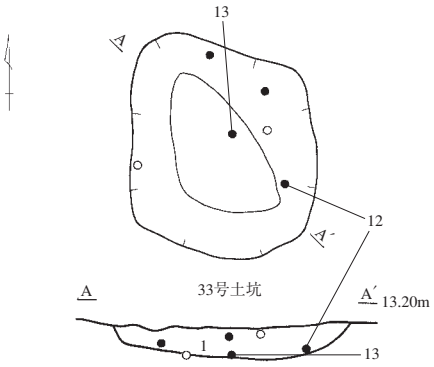
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	褐色（10YR4/4）	弱い	強い	黒色砂微量混入



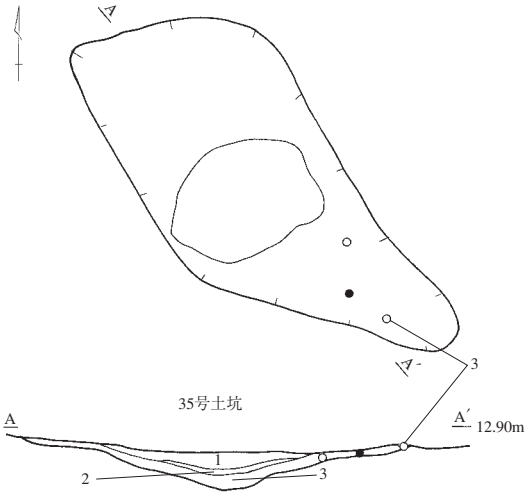
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	褐色（10YR4/4）	普通	やや強い	白色砂微量混入



層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	褐色（10YR4/4）	普通	普通	なし
2	褐色（10YR4/6）	やや強い	やや強い	白色砂微量混入

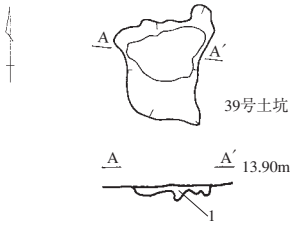


層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	暗褐色（7.5YR3/4）	やや強い	やや弱い	炭化物微量混入

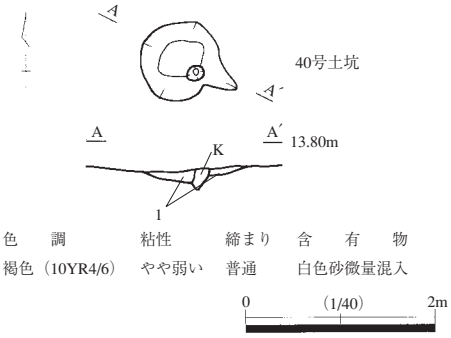


層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	暗褐色（10YR3/4）	強い	強い	炭化物極小微量混入
2	褐色（10YR4/6）	やや強い	強い	ローム小ブロック、炭化物極小微量混入
3	褐色（10YR4/4）	強い	強い	炭化物極小微量混入

第43図　土坑（5）

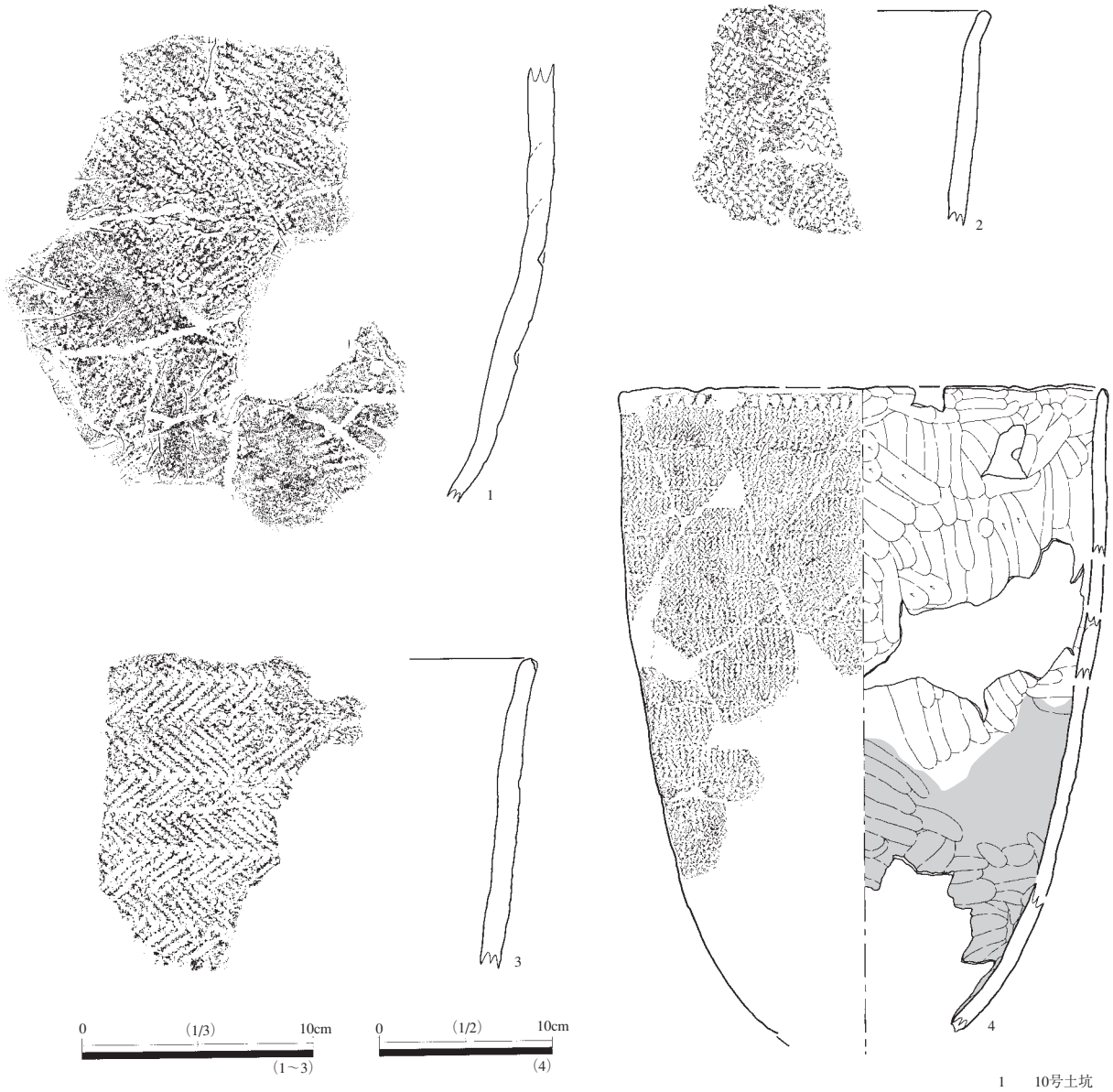


層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	褐色（10YR4/4）	普通	強い	炭化物微量混入



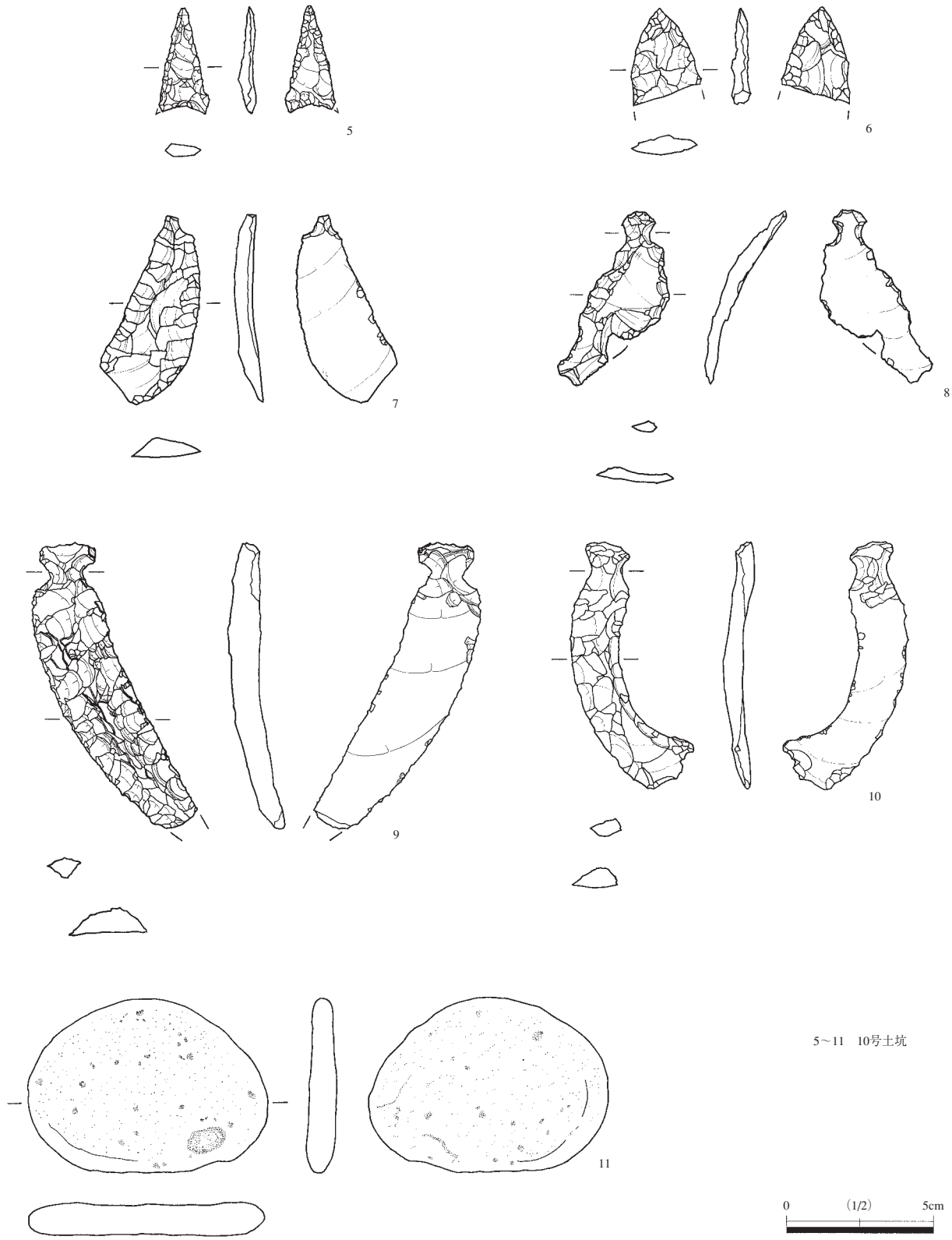
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	褐色（10YR4/6）	やや弱い	普通	白色砂微量混入

第44図　土坑（６）

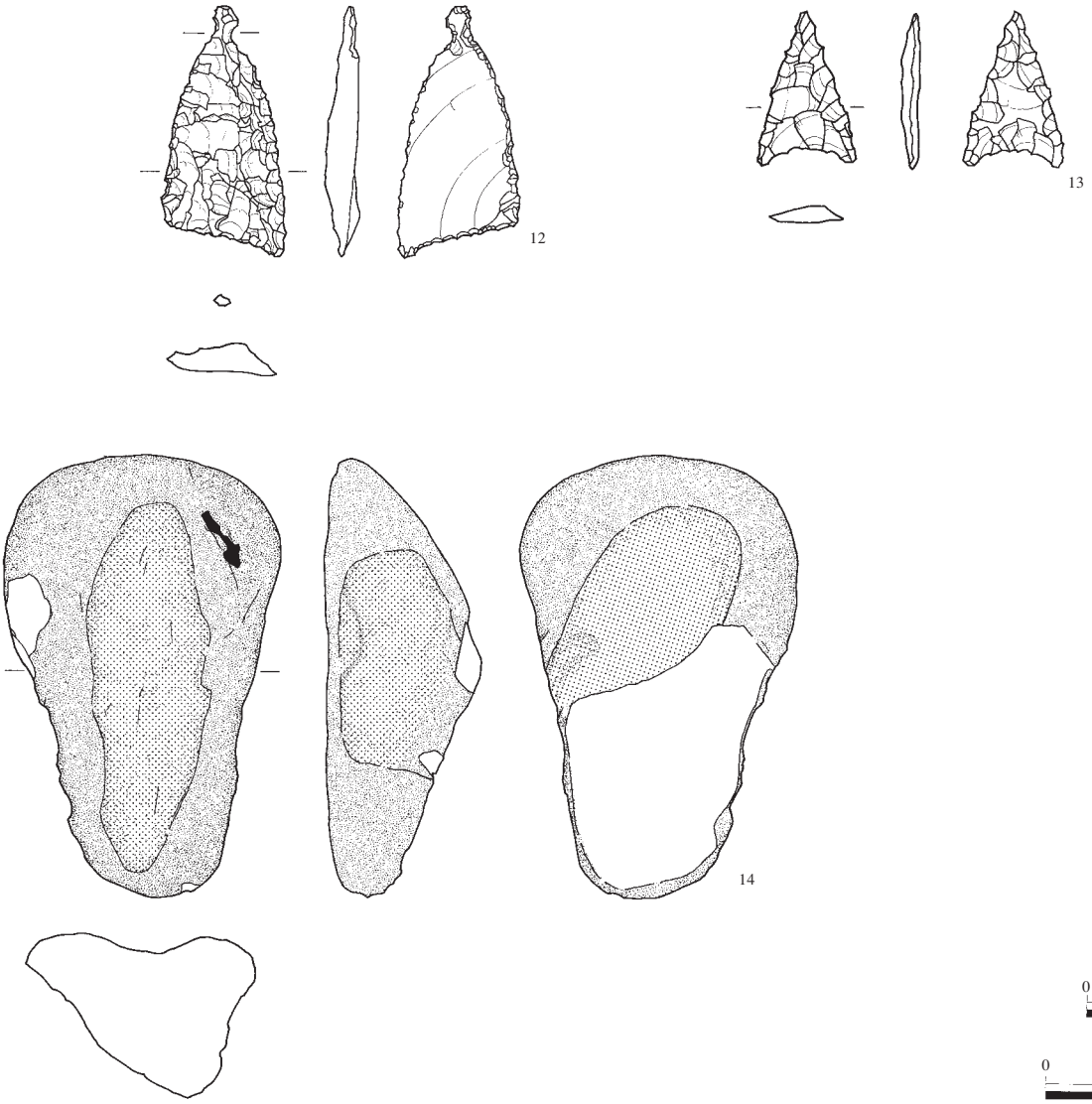


1　10号土坑
2、4　26号土坑
3　35号土坑

第45図　土坑出土遺物（１）



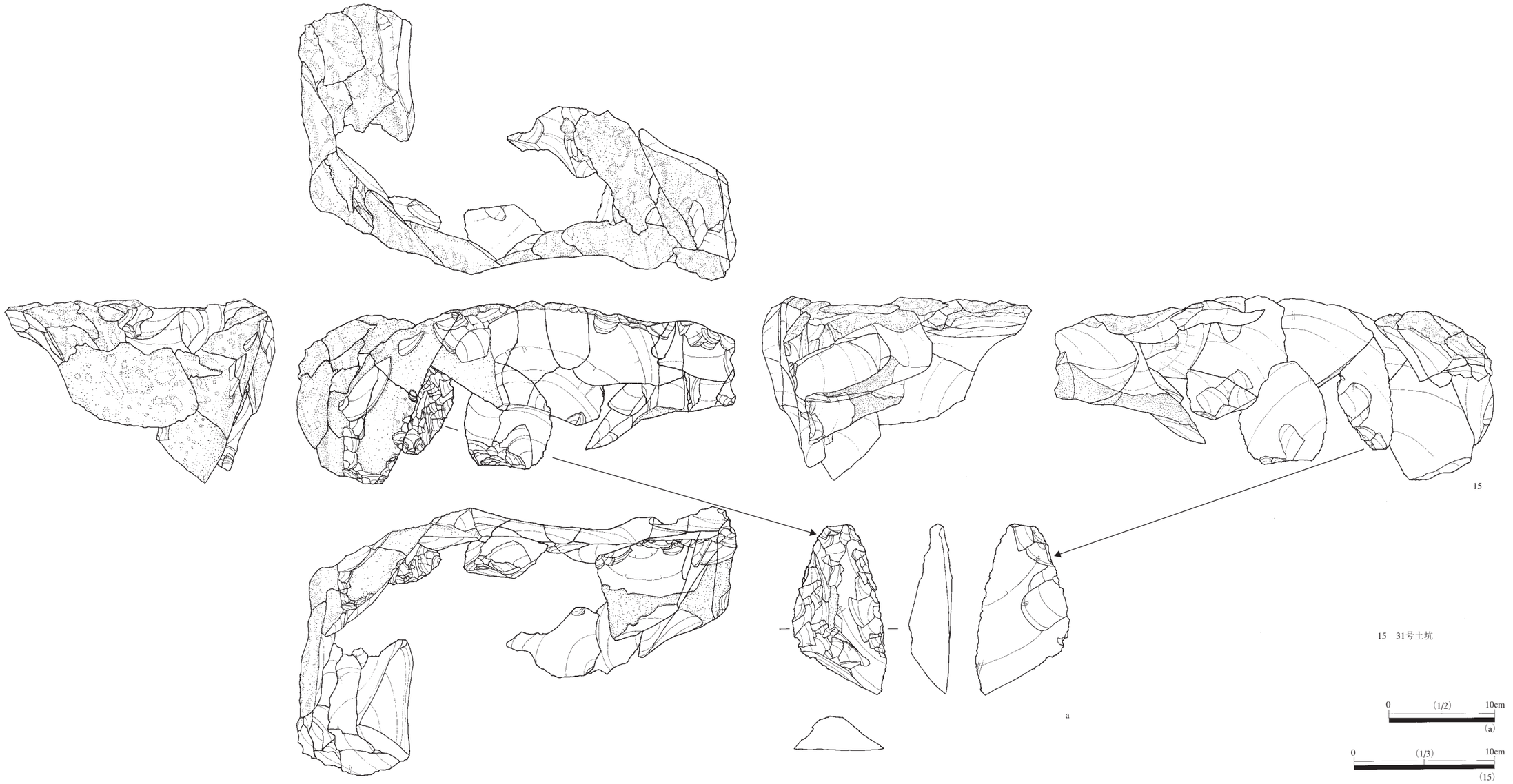
第46図　土坑出土遺物（２）



第47図　土坑出土遺物（３）

第５表　土坑出土石器観察表

図番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	出土位置	備　考
第46図5	石鏃	3.6	1.7	1.4	2.3	頁岩	10号土坑	縦長剥片を使用。完形。基部に浅い抉り。 両面調整で、裏面に主剥離面を残す。
第46図6	尖頭器	(3.0)	(2.4)	(0.7)	(4.2)	頁岩	10号土坑	尖頭器の尖端部で、薄手。両面調整。
第46図7	石匙	6.4	3.4	0.6	12.6	頁岩	10号土坑	縦長剥片を使用。先端部欠損。縦型で左方向に湾曲し、 つまみ部は不明瞭。 右側縁に急角度の調整。
第46図8	石匙	5.9	3.8	0.6	6.1	頁岩	10号土坑	縦長剥片を使用。完形。縦長で左方向にやや湾曲し、 つまみ部は小さい。 左側縁に急角度の調整。
第46図9	石匙	9.7	5.6	0.9	29.7	頁岩	10号土坑	縦長剥片を使用。完形。狭長な縦型で右方向に湾曲し、 つまみ部は大きい。厚さはほぼ均一。 表面に丁寧な調整。
第46図10	石匙	8.4	4.2	0.7	11.8	頁岩	10号土坑	縦長剥片を使用。完形。縦型で右方向に著しく湾曲し、 つまみ部はやや大きい。断面は三角形。 右側面は急角度の調整。



第48図　土坑出土遺物（４）

図番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	出土位置	備　考
第46図11	磨石	6.0	8.2	1.1	69.7	頁岩	10号土坑	扁平な楕円形。研磨が全体におよぶ。
第47図12	石匙	6.7	3.2	0.7	13.2	頁岩	33号土坑	縦長剥片を使用。完形。縦型で右側縁先端が鋭角に尖る。つまみ部は著しく小さい。 全体に丁寧な調整が施され、右側縁に急角度の調整。
第47図13	石鏃	2.1	1.4	0.2	0.4	頁岩	33号土坑	縦長剥片を使用。完形。小型で、基部に浅い抉り。 裏面に主剥離面を残す。
第47図14	磨石	11.8	7.4	4.3	318.0	砂岩	36号土坑	表面に楕円形の抉りが入る程度に磨られている。 裏面は叩き石として利用した可能性がある。右上半部に黒色の炭化物が付着。
第48図15	接合資料	13.1	30.9	—	1,621.0	頁岩	31号土坑	下面に打面を持ち、連続して不定形の剥片を剥離。 石核の中心部は搬出されたと推定される。

焼土遺構

本遺跡では、埋土が被熱した遺構が多く検出され、焼土遺構と呼称した。埋土中から炭化物や遺物が検出される遺構と、それらを全く含まない遺構の２種類に分けることができた。検討の結果、前者は掘り込みがあり焼土が堆積した遺構、後者は掘り込みがなく間接被熱を受けた遺構であると判断した。なお、掘り込みがある遺構については平面図に上端、下端を書き込んだ。

１号焼土遺構（第50図）

MB－17グリッド北西に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は長軸86㎝、短軸68㎝、深さ21㎝を測る。平面は不整形を呈しており、底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。４号土坑を切っている。

埋土　埋土は１層である。

出土状況　１層から縄文土器が出土したが、小破片のため図示し得なかった。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられる。（村木真由）

２号焼土遺構（第50図）

MB－17グリッド北西に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。間接被熱を受けており、被熱範囲は長軸76㎝、短軸52㎝、深さ５㎝を測る。平面は不整形を呈しており、底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代中期以降と考えられる。（清野大徳）

３号焼土遺構（第50図）

MR－25グリッド北西に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は長軸55㎝、短軸40㎝、深さ18㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面は皿状で一部が深く落ち込み、壁は段状に緩やかに立ち上がる。

埋土　埋土は２層に分けられ、２層中から炭化物が出土した。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられる。（和多田裕己）

4号焼土遺構（第50図）

MJ－20グリッド北西に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。間接被熱を受けており、被熱範囲は長軸53㎝、短軸50㎝、深さ28㎝を測る。平面は円形を呈しており、底面は凹凸があり壁は西側がやや急に、東側は緩やかに立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられる。（金成愛子）

5号焼土遺構（第50図）

MF－22グリッド北東に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。間接被熱を受けており、被熱範囲は長軸84㎝、短軸60㎝、深さ11㎝を測る。平面は不整円形を呈しており、底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期以降と考えられる。（市川岳朗）

6号焼土遺構（第50図）

MM－17グリッド西に位置しており、第Ⅴ層中から検出された。規模は長軸86㎝、短軸82㎝、深さ13㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。

埋土　埋土は１層で、炭化物が出土した。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられる。（金成愛子）

7号焼土遺構（第50図、図版20）

MO－15グリッド北東に位置しており、第Ⅴ層中から検出された。間接被熱を受けており、被熱範囲は長軸86㎝、短軸70㎝、深さ26㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面は深い皿状で壁は緩やかに立ち上がる。

出土状況　埋土中からチップが多数出土した。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられる。（野澤宏光）

8号焼土遺構（第51図）

MN－19グリッド北西に位置しており、第Ⅴ層中から検出された。南西部分では遺構が確認できなかったため、規模は確認できる範囲で長軸2.1ｍ、短軸0.77ｍ、深さ20㎝を測る。平面は楕円形を呈すると予想され、底面はほぼ平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。第Ⅴ層中から掘り込まれ、底面は第Ⅵ層に達する。

埋土　埋土は２層に分けられる。

出土状況　縄文土器・石器が２層中から出土しているが、小破片のため図示し得なかった。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられる。（菅原郁美）

9号焼土遺構（第50図、図版20）

MK－18グリッド西に位置しており、第Ⅴ層中から検出された。間接被熱を受けており、規模は長軸84㎝、短軸70㎝、深さ２㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面は皿状で壁はやや急に立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられる。（宮部俊周）

10号焼土遺構（第50図）

MK－18グリッド西に位置しており、第Ⅴ層中から検出された。間接被熱を受けており、規模は長軸75㎝、短軸32㎝、深さ７㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられる。（吉田彩恵子）

11号焼土遺構（第51図）

ML－16グリッド北西に位置しており、第Ⅴ層中から検出された。規模は長軸1.22ｍ、短軸0.82ｍ、深さ16㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面はほぼ平坦で一部深く落ち込み、壁はやや急に立ち上がるが、東側の方が急である。

埋土　埋土は１層で、炭化物が出土した。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられる。（菊池栄輝）

12号焼土遺構（第51図）

ML－17グリッド西に位置しており、第Ⅴ層中から検出された。規模は長軸１ｍ、短軸0.74ｍ、深さ37㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面は皿状で壁は南側が急に、北側は緩やかに立ち上がる。

埋土　埋土は２層に分けられ、１層中から炭化物が出土した。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられる。（金成愛子）

13号焼土遺構（第51図）

ML－17グリッド西に位置しており、第Ⅴ層中から検出された。規模は長軸60㎝、短軸40㎝、深さ20㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面は緩い傾斜をなし壁は緩やかに立ち上がる。

埋土　埋土は１層で、炭化物が出土した。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられる。（金成愛子）

14号焼土遺構（第51図）

MQ－17グリッド北西に位置しており、第Ⅴ層中から検出された。規模は長軸1.8ｍ、短軸1.78ｍ、深さ27㎝を測る。平面は円形を呈しており、底面はやや起伏が見られ壁は緩やかに立ち上がる。

埋土　埋土は１層で、炭化物が出土した。色調は遺構の周辺部の方がより強い。

出土状況　縄文土器・石器が出土したが、小破片のため図示し得なかった。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられる。（和多田裕己）

15号焼土遺構（第51図）

MP－18グリッド西に位置しており、第Ⅴ層中から検出された。南西部分では遺構が確認できなかったため、規模は確認できる範囲で長軸1.54ｍ、短軸0.74ｍ、深さ56㎝を測る。平面は方形を呈すると予想され、底面は皿状で壁は底面近くでは緩やかに、途中から急に立ち上がる。

埋土　埋土は２層に分けられる。

出土状況　縄文土器が５層から出土した。

出土遺物（第54図１）

縄文土器　縄文土器１点（１）を図示した。

１は乳頭状突起をもつ丸底土器である。胴部下位から底部にかけて、文様は主体となる条（直前段反撚 LLR）を他の条（繊維束）を以て縛り止めた原体で斜行縄文を施文したと考えられる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられる。　（山本堅二郎）

16号焼土遺構（第52図）

MO－17グリッド北西に位置しており、第Ⅴ層中から検出された。規模は長軸７㎝、短軸８㎝、深さ13㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。

埋土　埋土は３層に分けられる。

出土遺物　縄文土器が１層、石器が３層中から出土した。遺構外出土遺物・石器集中地点の一括遺物と接合関係にある。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられる。　（吉田　愛）

17号焼土遺構（第52図）

MP－17グリッド西に位置しており、第Ⅴ層中から検出された。規模は長軸1.66ｍ、短軸1.04ｍ、深さ32㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面はほぼ平坦で壁は緩やかに立ち上がる。

埋土　埋土は１層である。

出土遺物　縄文土器・石器が出土したが、小破片のため図示し得なかった。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられる。　（山本堅二郎）

18号焼土遺構（第52図）

MP－19グリッド付近に位置しており、第Ⅴ層中から検出された。北西部分では遺構が確認できなかったため、規模は確認できる範囲で長軸120㎝、短軸60㎝、深さ24㎝を測る。そのため平面は不明であり、底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。

埋土　埋土は１層で、炭化物が検出された。

出土状況　縄文土器が出土した。

出土遺物（第54図２）

縄文土器　縄文土器１点（２）を図示した。

２は胴部文様にループ文（単節 LR）が多段に施文されているもので、内面に条痕が見られる。最短距離で約28.4ｍ離れた石器集中地点と約5.64ｍ離れた遺物包含層の出土遺物（点上げNo.451と近辺の一括遺物）と接合している（第72図25）。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられる。　（山本堅二郎）

19号焼土遺構（第52図、図版20）

MK－15グリッド北西に位置しており、第Ⅴ層中から検出された。規模は長軸160㎝、短軸74㎝、深さ20㎝を測る。平面は長方形を呈しており、底面は緩い傾斜をなし、壁は緩やかに立ち上がる。

埋土　埋土は３層に分けられ、１、２層中から炭化物が出土した。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられる。　（市川岳朗）

20、21号焼土遺構（第52図）

MK－15グリッド北西に位置しており、第Ⅴ層中から検出された。規模は、20号焼土遺構が長軸98㎝、短軸74㎝、深さ25㎝を測る。平面は方形を呈しており、底面は皿状で一部が深く落ち込み、壁は緩やかに立ち上がる。21号焼土遺構は長軸1.4ｍ、短軸0.8ｍ、深さ18㎝を測る。平面は方形を呈しており、底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。20号焼土遺構が21号焼土遺構を切っている。

埋土　埋土は２層に分けられ、１、２層中から炭化物が検出された。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられる。　（市川岳朗）

22号焼土遺構（第52図、図版20）

MM－15グリッド北西に位置しており、第Ⅴ層中から検出された。間接被熱を受けており、規模は長軸91㎝、短軸35㎝、深さ18㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面は緩い傾斜をなし、壁はやや急に立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられる。　（青木純一郎）

23号焼土遺構跡（第53図）

MS－19グリッド北東に位置しており、第Ⅴ層中から検出された。北西部分では遺構が確認できなかったため、確認できる範囲で規模は長軸1.34ｍ、短軸１ｍ、深さ28㎝を測る。平面は半円形を呈しており、底面はやや起伏が見られ、壁はやや垂直に立ち上がる。

埋土　埋土は２層に分けられる。

出土状況　縄文土器が２層中から出土しているが、小破片のため図示し得なかった。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられる。　（宮部俊周）

24号焼土遺構（第53図）

MQ－14グリッド北西に位置しており、第Ⅴ層中から検出された。間接被熱を受けており、規模は長軸88㎝、短軸60㎝、深さ10㎝を測る。平面は不整形を呈しており、底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられる。　（菅原郁美）

25号焼土遺構（第53図）

MQ－17グリッド西に位置しており、第Ⅴ層中から検出された。規模は長軸116㎝、短軸86㎝、深さ19㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。

埋土　埋土は２層に分けられ、１層中から炭化物が出土した。

出土状況　縄文土器・剥片が１層中から出土した。

出土遺物（第54図３）

縄文土器　縄文土器１点（３）を図示した。

３は胴部文様に主体となる条（環付の単節 RL）を他の条（０段の細縄）を以て縛り止めた原体でループ文が施文されている。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられる。　（吉田　愛）

26号焼土遺構（第53図）

MQ－17グリッド西に位置しており、第Ⅴ層中から検出された。規模は長軸110㎝、短軸90㎝、深さ26㎝を測る。平面は楕円形を呈しており、底面は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。

埋土　埋土は２層に分けられ、１層中から炭化物出土した。

出土状況　縄文土器が１層中から出土したが、小破片のため図示し得なかった。

所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代前期と考えられる。　（山本堅二郎）

27号焼土遺構（第53図）

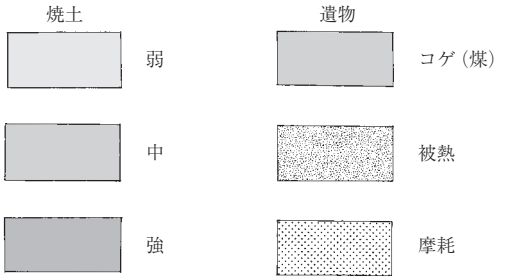
MP－18グリッド北東に位置しており、第Ⅳ層中から検出された。規模は長軸76㎝、短軸40㎝、深さ14㎝を測る。平面は不整形を呈しており、底面は平坦で一部が深く落ち込み、壁は急に立ち上がる。

埋土　埋土は３層に分けられ、２層中から炭化物が出土した。他の焼土遺構に比べ、強い赤味を帯びている。

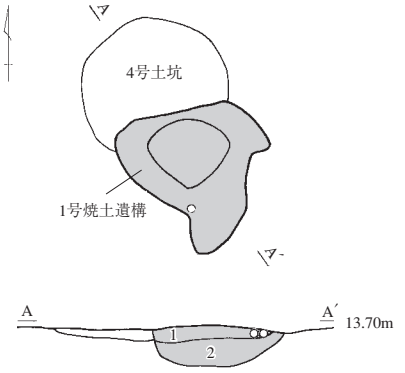
所見　時期は、遺構が確認された層位から縄文時代中期以降と考えられる。　（有坂恭祐）

第６表　焼土遺構出土土器観察表

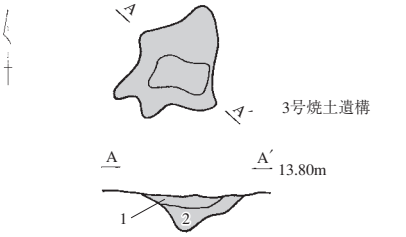
図番号	器種	法量(cm) 残存部位	色　調	含　有　物	文様・調整	出土位置	備考
第54図 1	深鉢	底部片	外面：にぶい黄橙(10YR6/4) 内面：にぶい黄橙(10YR7/4)	石英・長石２％ 白色砂粒３％	文様：主体となる条(直前段反撚 LLR)を他の条(繊維束)を以て縛り止めた原体で結節回転文を伴う斜行縄文を施文したと思われる。 調整：内面ナデ。	15号 焼土遺構	—
第54図 2	—	胴部片	外面：明黄褐(10YR6/6) 内面：にぶい黄橙(10YR6/4)	骨針・石英１％ 長石３％ 白色砂粒２％	文様：ループ文(単節 LR)を多段に施文。 調整：内面条痕。	18号 焼土遺構	—
第54図 3	—	胴部片	外面：明黄褐(10YR7/6) 内面：にぶい黄褐(10YR5/4)	骨針・石英１％ 長石１％	文様：主体となる条(環付の単節 RL)を他の条(０段の細縄)を以て縛り止めた原体で結節回転文を伴うループ文を施文。 調整：内面ナデ。	25号 焼土遺構	—



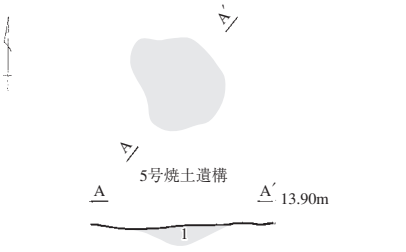
第49図　焼土遺構および遺物実測図（土器・石器）の表示凡例図



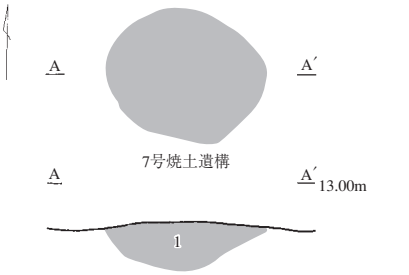
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	赤褐色（2.5YR4/6）	弱い	強い	なし
2	褐色（10YR4/4）	弱い	強い	なし



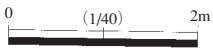
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	褐色（10YR4/6）	弱い	やや強い	なし
2	褐色（10YR4/4）	弱い	やや強い	炭化物混入

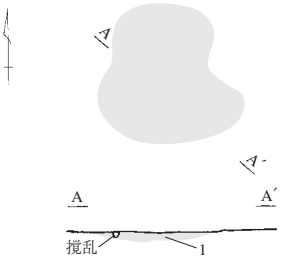


層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	黄褐色（10YR5/8）	弱い	普通	白色砂混入

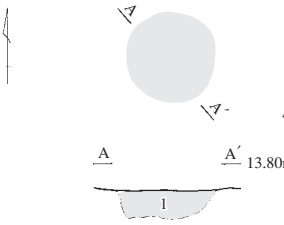


層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	褐色（7.5YR4/4）	弱い	やや強い	なし

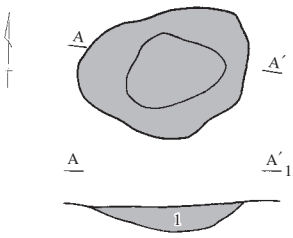




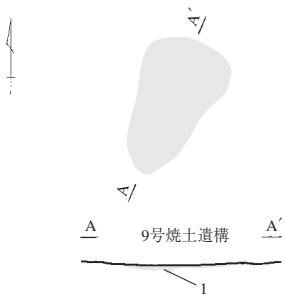
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	赤褐色（2.5YR4/8）	やや弱い	強い	なし



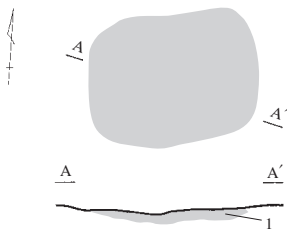
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	褐色（7.5YR4/4）	弱い	強い	なし



層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	にぶい赤褐色（5YR4/4）	やや弱い	普通	炭化物極小微量混入

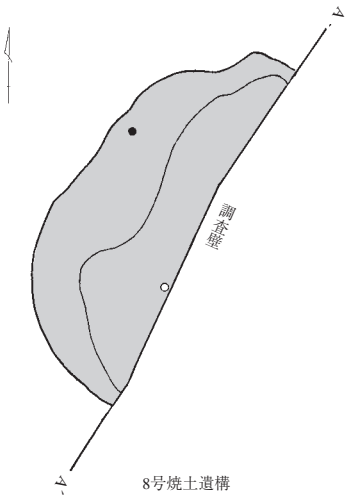


層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	赤褐色（2.5YR4/8）	普通	やや弱い	なし

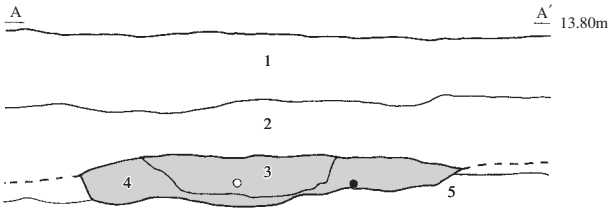


層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	赤褐色（2.5YR4/8）	普通	やや強い	なし

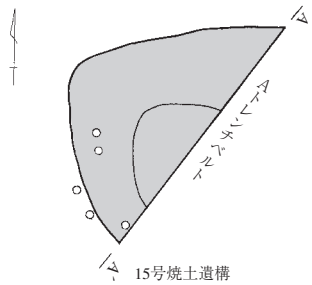
第50図　焼土遺構（1）



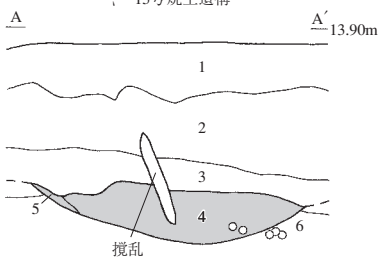
8号焼土遺構



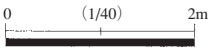
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	第Ⅳ層			
2	第Ⅴ層			
3	暗褐色（5YR3/3）	普通	やや強い	なし
4	にぶい赤褐色（5YR4/4）	普通	普通	なし
5	第Ⅵ層			

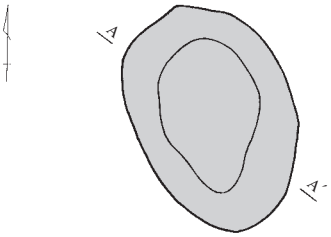


15号焼土遺構



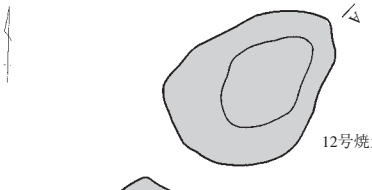
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	第Ⅲ層			
2	第Ⅳ層			
3	第Ⅴ層			
4	暗赤褐色（10YR3/3）	やや弱い	普通	炭化物・焼土ブロック微量混入
5	褐色（10YR4/6）	やや強い	やや強い	炭化物微量混入
6	第Ⅵ層			





11号焼土遺構

層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	暗赤褐色（5YR3/6）	やや強い	やや弱い	炭化物微量混入



12号焼土遺構

13号焼土遺構

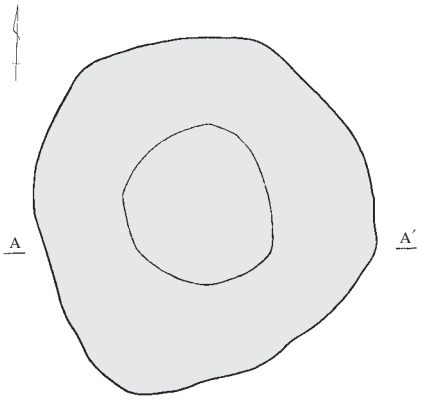
12、13号焼土遺構

12号焼土遺構

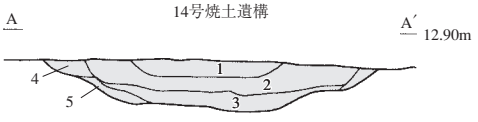
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	暗赤褐色（5YR3/6）	やや弱い	やや強い	炭化物極小微量混入
2	褐色（10YR4/6）	やや強い	普通	なし

13号焼土遺構

層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	褐色（7.5YR4/6）	普通	普通	炭化物極小微量混入

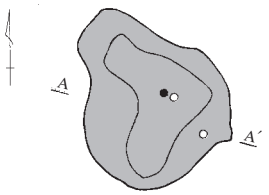


14号焼土遺構



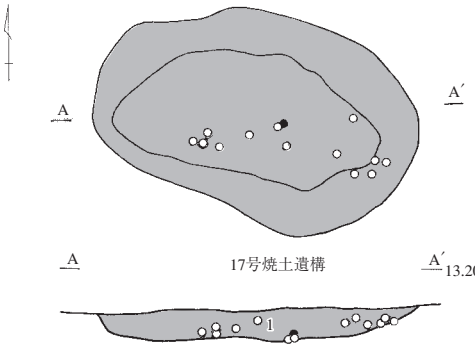
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	褐色（10YR3/4）	普通	普通	なし
2	にぶい赤褐色（2.5YR4/4）	やや強い	強い	白色砂、炭化物、ロームブロック微量混入
3	暗赤褐色（2.5YR2/2）	弱い	やや強い	白色砂、炭化物微量混入
4	褐色（7.5YR3/3）	弱い	やや強い	なし
5	灰褐色（7.5YR6/2）	弱い	弱い	白色砂多量混入

第51図　焼土遺構（２）



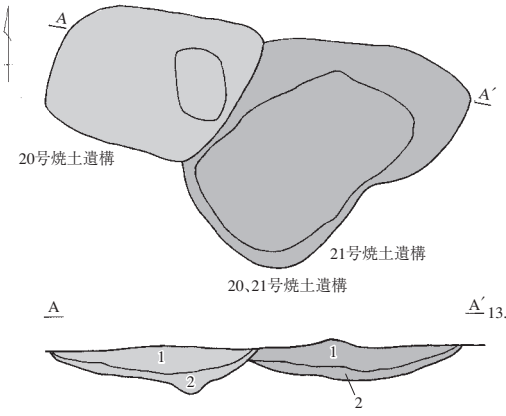
16号焼土遺構

層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	明褐色（7.5YR5/8）	弱い	やや弱い	なし
2	褐色（7.5YR4/6）	やや弱い	普通	ロームブロック多量混入
3	褐色（10YR4/6）	やや弱い	普通	ロームブロック少量混入



17号焼土遺構

層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	暗赤褐色（5YR3/4）	普通	やや弱い	炭化物微量、ロームブロック少量混入



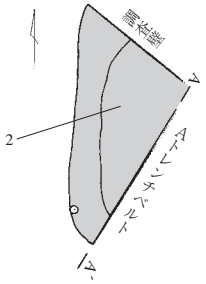
20、21号焼土遺構

20号焼土遺構

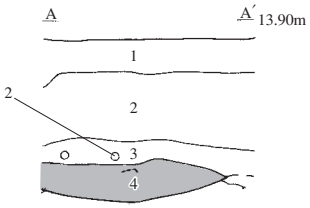
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	褐色（7.5YR4/4）	弱い	やや強い	赤色砂、炭化物極小微量混入
2	黄褐色（10YR5/6）	普通	やや弱い	赤色砂、炭化物極小微量混入

21号焼土遺構

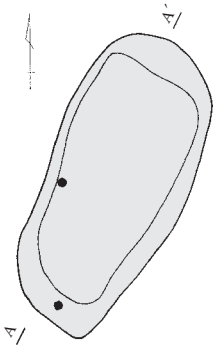
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	褐色（7.5YR4/6）	やや弱い	やや弱い	赤色砂、炭化物極小微量混入
2	褐色（10YR4/6）	やや弱い	やや強い	白色砂、炭化物極小微量混入



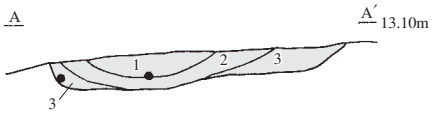
18号焼土遺構



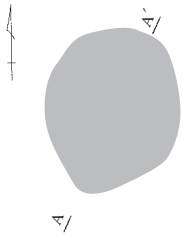
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	第Ⅲ層			
2	第Ⅳ層			
3	第Ⅴ層			
4	暗赤褐色（10R3/3）	やや弱い	普通	炭化物微量混入



19号焼土遺構



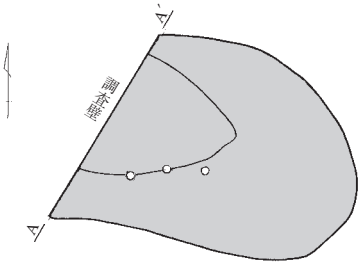
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	褐色（7.5YR4/6）	やや強い	普通	赤色砂、炭化物極小微量混入
2	明褐色（7.5YR5/6）	普通	強い	赤色砂、炭化物極小微量混入
3	褐色（10YR4/6）	やや強い	やや強い	白色砂混入



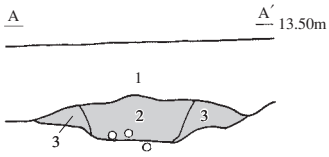
22号焼土遺構

層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	にぶい赤褐色（2.5YR4/4）	普通	やや強い	なし

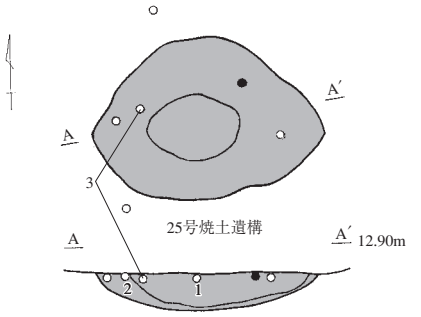
第52図　焼土遺構（3）



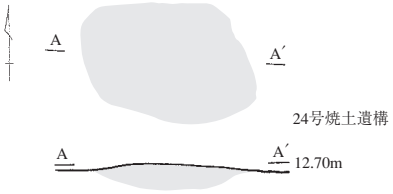
23号焼土遺構



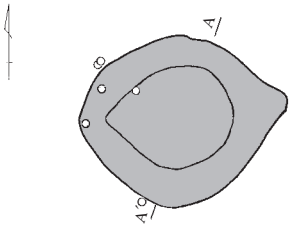
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	第Ⅳ層			
2	褐色（7.5YR4/6）	やや強い	普通	なし
3	褐色（7.5R4/4）	やや強い	やや強い	なし



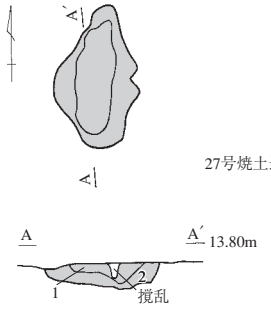
層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	赤褐色（2.5YR4/6）	普通	やや弱い	炭化物微量混入
2	褐色（7.5YR4/6）	やや強い	普通	なし



層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	にぶい赤褐色（5YR4/4）	普通	やや強い	なし
2	褐色（7.5YR4/6）	やや強い	やや強い	なし

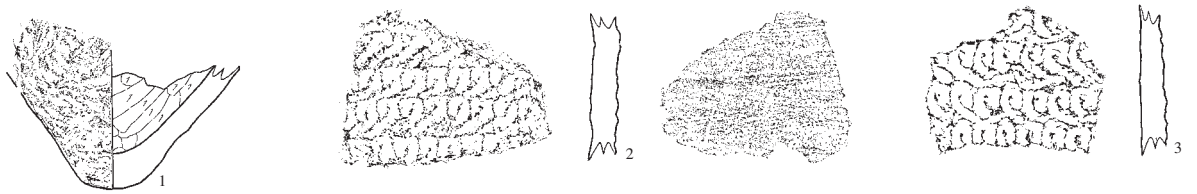


層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	赤色（10YR4/6）	普通	やや強い	炭化物微量混入
2	にぶい赤褐色（5YR4/4）	普通	やや強い	粘土ブロック少量混入



層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	黒褐色（10YR2/3）	弱い	やや強い	なし
2	にぶい赤褐色（5YR4/4）	やや弱い	強い	炭化物小微量混入

第53図　焼土遺構（４）



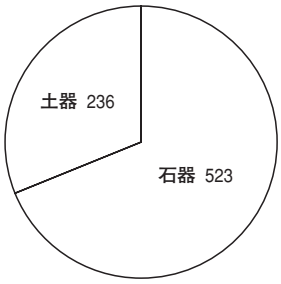
1　15号焼土遺構
2　18号焼土遺構
3　25号焼土遺構

第54図　焼土遺構出土遺物

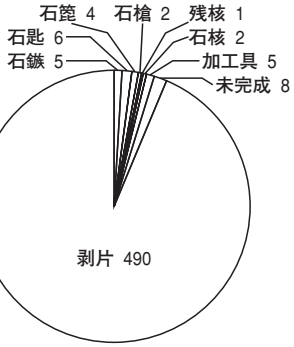
石器集中地点（第55～59図、図版21）

３区 MW－21～26グリッドより西において、石器集中範囲を南北20.56ｍ、東西８ｍの範囲に確認した。地形は南と東に向かって傾斜している。層位は12層に分けられ、１～７層まではローム質、８～12層は砂質である。１、２層は基本層序の第Ⅰ、Ⅱ層と同一層である。また MY－23付近に径約80㎝の焼土範囲や径約40㎝、深さ約25㎝のピットが確認できた。なお、焼土範囲に掘り込みは見られなかった。

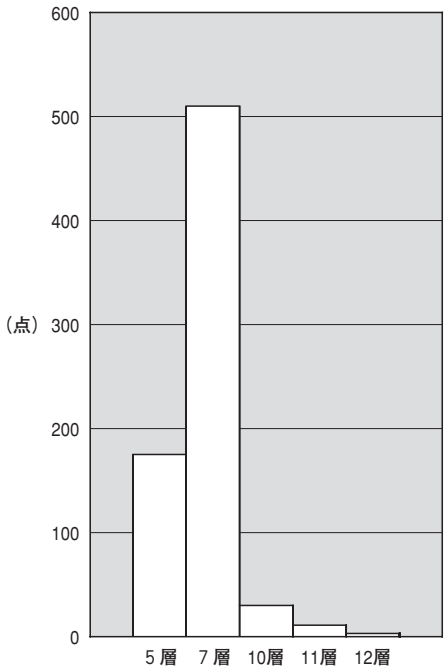
出土状況　総点数759点であり、縄文土器236点、石器523点であった。MY－23付近に特に集中し、５層から点上げ総数の25％、その下層の７層からは72％が出土している（第55～57図）。焼土範囲からはクルミ、ピットからは多量のチップが出土した。また、遺物包含層と18号焼土遺構の一括遺物と接合したことにより（第72図25）、基盤となる層位は異なるが同時期であることが確認できた。なお、チップ・剥片が多く出土し、製品は少量であった。



第55図　石器集中地点出土遺物組成



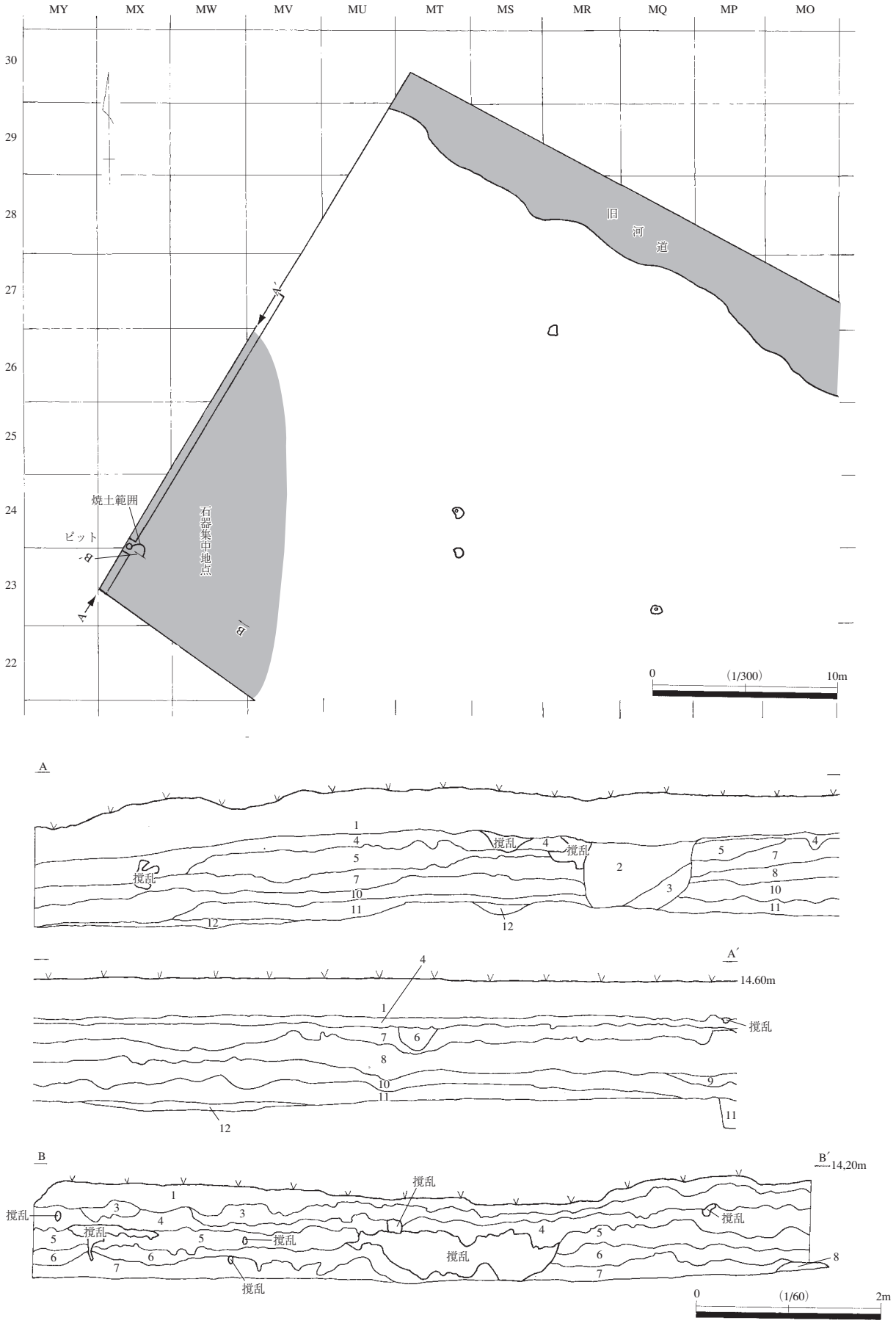
第56図　石器集中地点器種組成



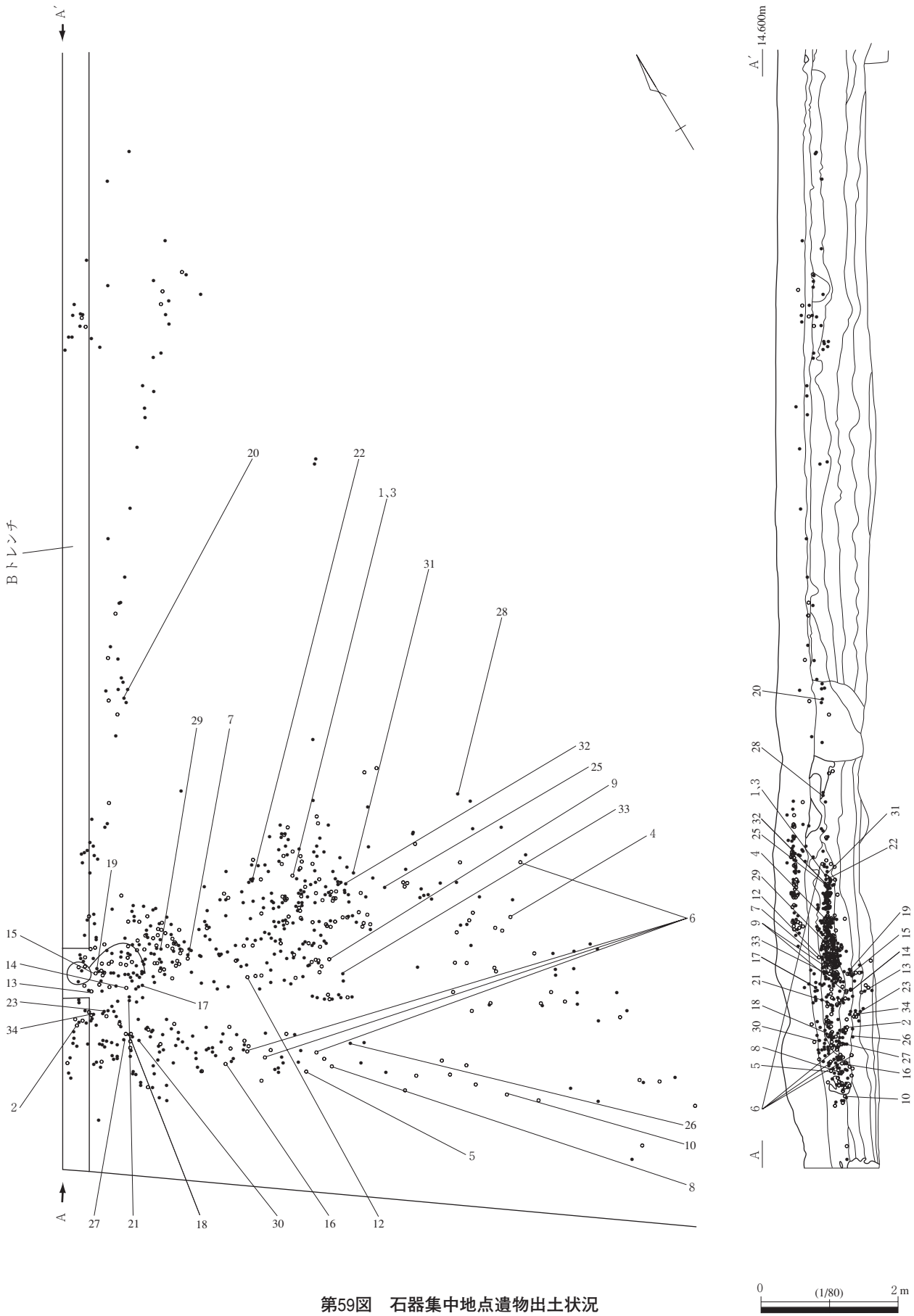
第57図　石器集中地点遺物出土層位

石器集中地点層序

層位	色　調	粘性	締まり	含　有　物
1	第Ⅰ層			
2	褐色（10YR4/6）	強い	強い	黒色砂少量混入
3	褐色（10YR4/6）	普通	普通	黒色砂少量混入
4	第Ⅱ層			
5	暗褐色（10YR3/4）	普通	普通	なし
6	黄褐色（10YR5/6）	強い	強い	黒色砂少量混入
8	黄褐色（10YR5/8）	やや弱い	やや弱い	なし
9	褐色（10YR4/6）	弱い	普通	白色砂少量混入
10	褐色（10YR4/6）	やや弱い	普通	なし
11	黄褐色（10YR5/8）	弱い	やや弱い	なし
12	第Ⅵ層			



第58図　石器集中地点全体図



第59図　石器集中地点遺物出土状況

出土遺物

縄文土器　縄文土器16点を図化した（第60、61図１～16、図版28）。縄文土器は鉢が主体であり、繊維の混入が認められるものもある。以下、文様によって土器を分類した。

①斜行縄文と羽状縄文を主体とする土器は８点図示した（１～８）。斜行縄文を主体とするものは７点あり、単節・複節によるもの（２～４、７、８）、主体とする条に他の条を縛り付けた原体によるもの（５、６）に分類できる。なお、５、６は施文原体により多段に施文される斜行縄文間に横位に走る連続文が見られる。３は口唇部にキザミを施しており、８の底部外面には成形の際に使用された網代の痕跡が確認できる。羽状縄文を施文するものは１である。結束されていない羽状縄文が施文されており、口唇部が先細る。

②竹管による沈線文が見られる土器は３点図示した（10～12）。10、11は平行沈線文を交錯させて格子目状に施文している。12は縦方向に走る波状の沈線文を垂下させている。どの破片資料も断片的であるため、全体的な文様構成を把握することはできない。

③胴部に結節部のみを横位回転させた連続文を主体とする土器は４点図示した（13～16）。13、15は口縁部片であり、口縁部に明確な稜が見られ、その直下に刺突文もしくは爪形文を施文している。16は波状口縁であり、波の頂点に条の先端による圧痕が見られる。さらに口縁部に沿って節の大きな単節縄文を２段にわたり押圧施文し、渦巻き状に押し付けた痕跡も確認できる。

９は残存状況が悪いために文様は不明であるが、底面に成形の際に使用された網代の痕跡が確認できる。

石器　石器19点を図示した（第61～64図17～35、図版29、30）。石材は全て頁岩である。

石鏃（17～20）無茎鏃が主体を占め、17～19は平基無茎鏃であり、20は凹基無茎鏃である。長幅値の平均は、最大長3.3㎝、最大幅1.6㎝である。

石匙（21～25）全て縦型石匙に分類でき、25は尖頭器形を呈する。茎はつまみ状に作り出されたものが多い。長幅値の平均は、最大長7.74㎝、最大幅３㎝である。25は最大長11.3㎝と突出する。

石箆（26～30）29、30は基部が狭く刃部が直線的で広い撥形を呈する。長幅値の平均は、最大長8.5㎝、最大幅３㎝である。

石槍（31、32）31は弧状に整形された先端部と、直線状に整形し、末端が直線状を呈する基部をもつ。32は弧状に整形し、末端が尖頭状である基部をもつ。尖端部は欠損のため不明である。

残核（33）不定方向からの剥離が行われている。

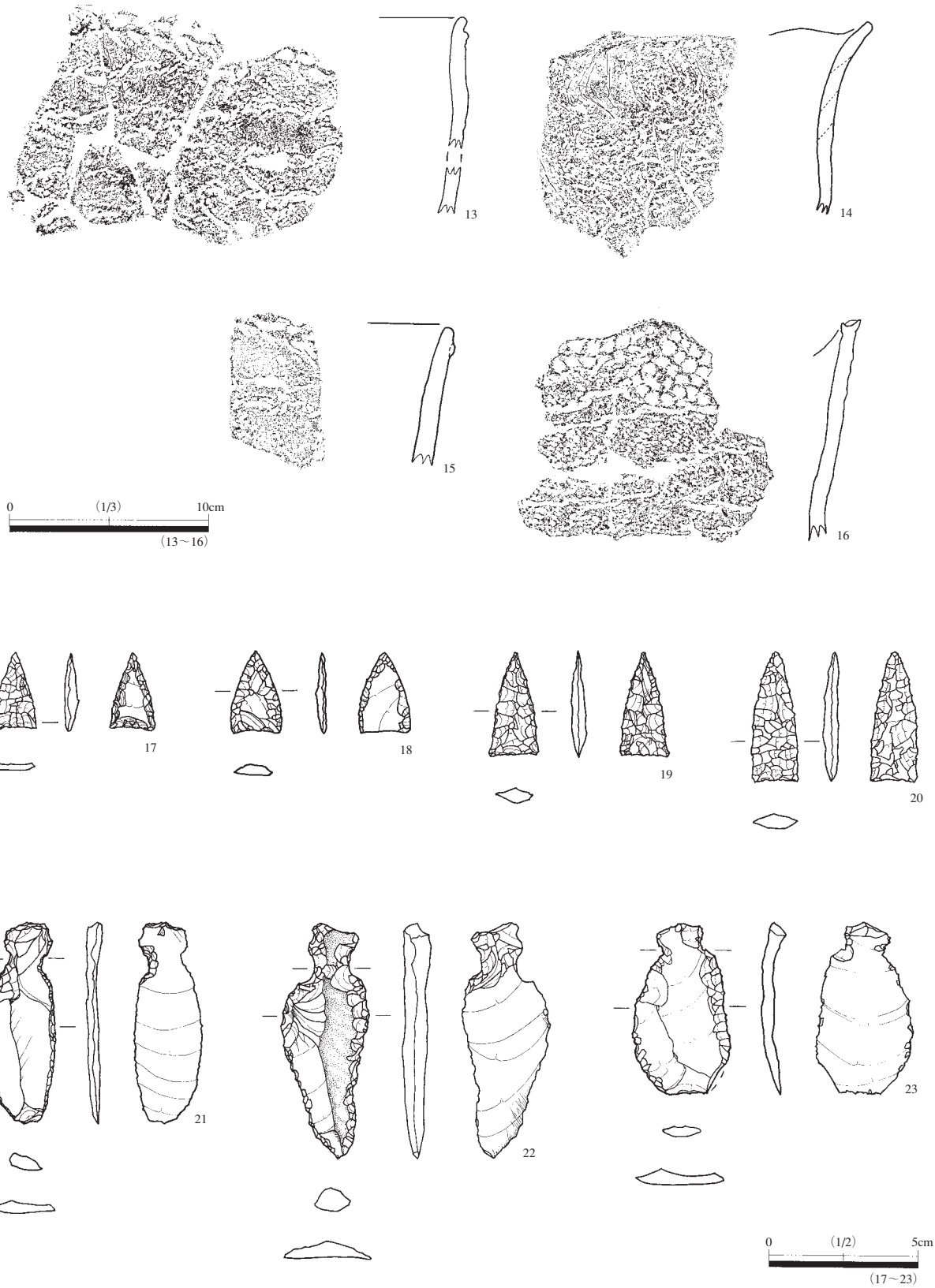
石核（34、35）２点とも角礫状の石核であり、34は表面を打面として保持しながら、残り５面で剥離を行い、35は全周から剥離を行う。

所見　時期は、出土遺物や遺物包含層との接合関係から縄文時代前期にあたる。出土した石器のうち剥片やチップ・残核・石核が多量に出土していることから、石器製作跡であった可能性が考えられる。また、11層のピットから多量のチップが出土しているが、接合関係などが確認できないため、石器集中地点との関連は不明である。　（石井直毅）

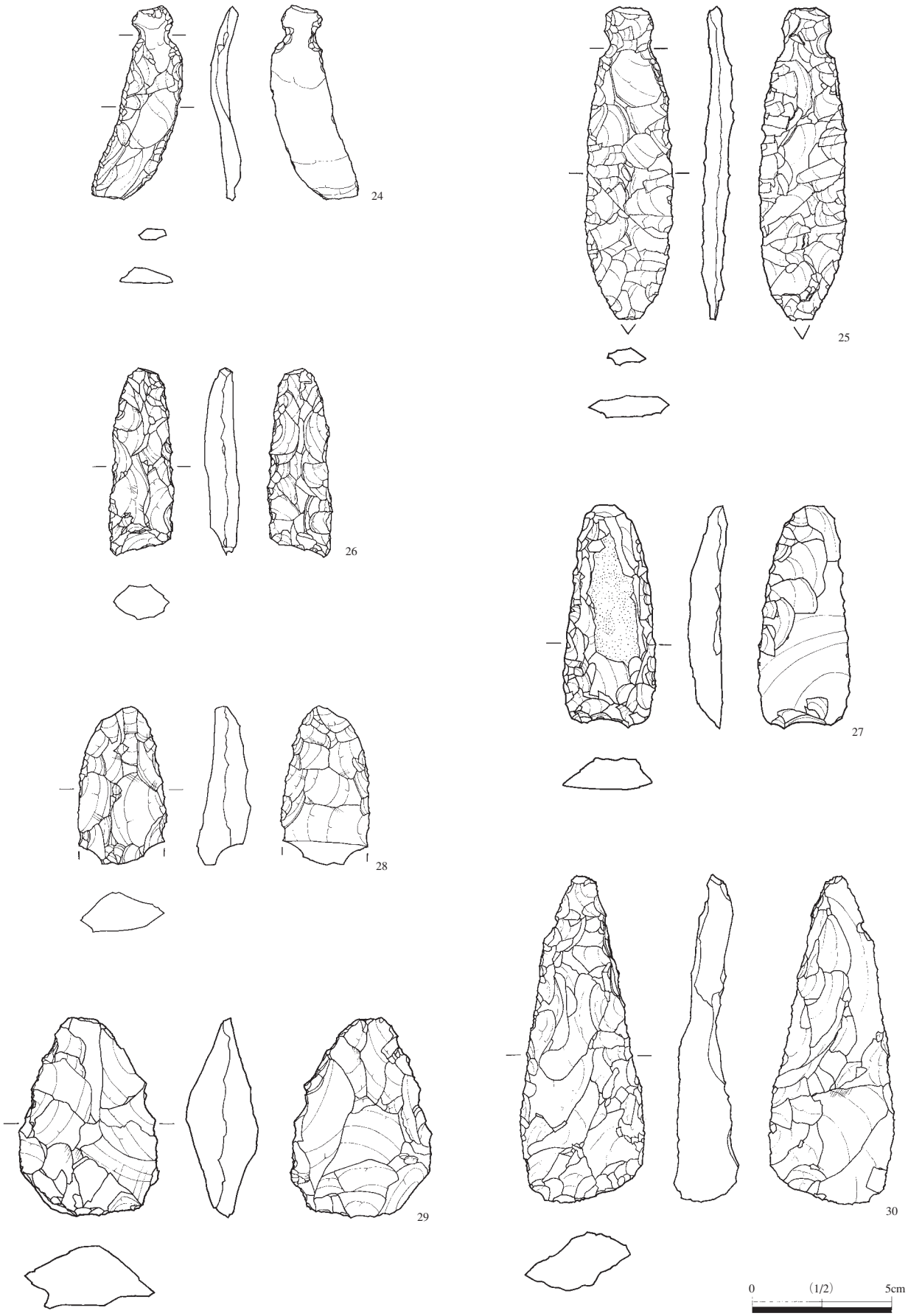
遺物包含層（第65～67図、図版22、23）

３区 MI・MP－13～22グリッドに集中して南北28.2m、東西40.8mの範囲に、第Ⅴ層から遺物の出土を確認した。第Ⅴ層は厚さが約40㎝の層であり、遺物の集中している範囲では比高差はほとんどない。

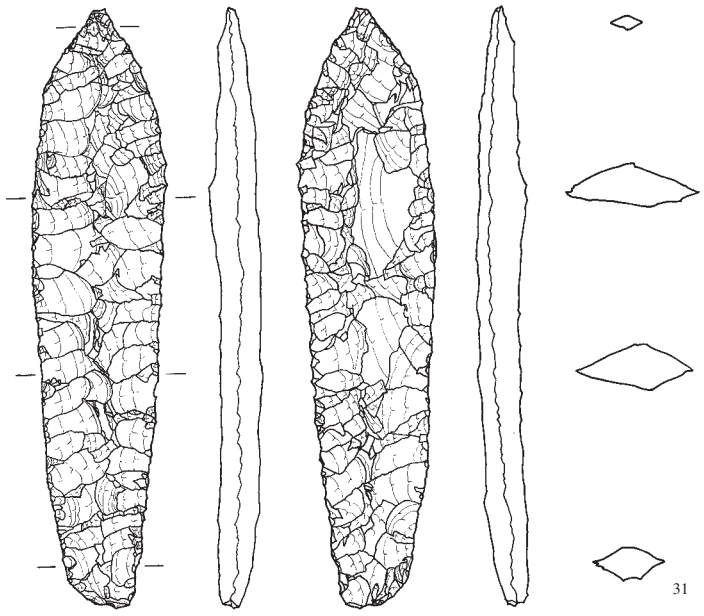
第60図　石器集中地点出土遺物（１）

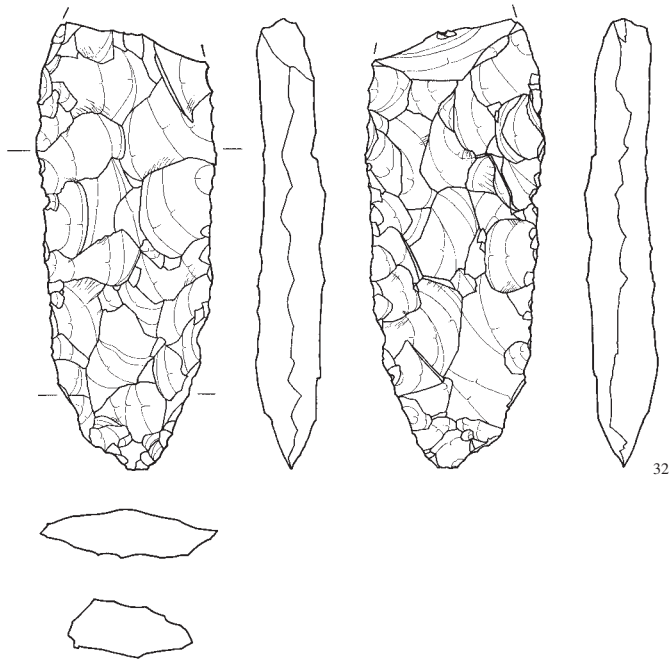


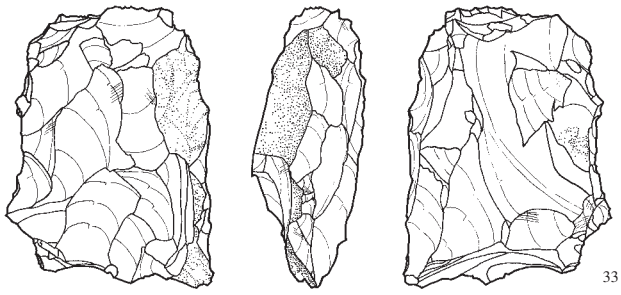
第61図　石器集中地点出土遺物（２）

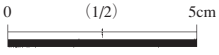


第62図　石器集中地点出土遺物（３）

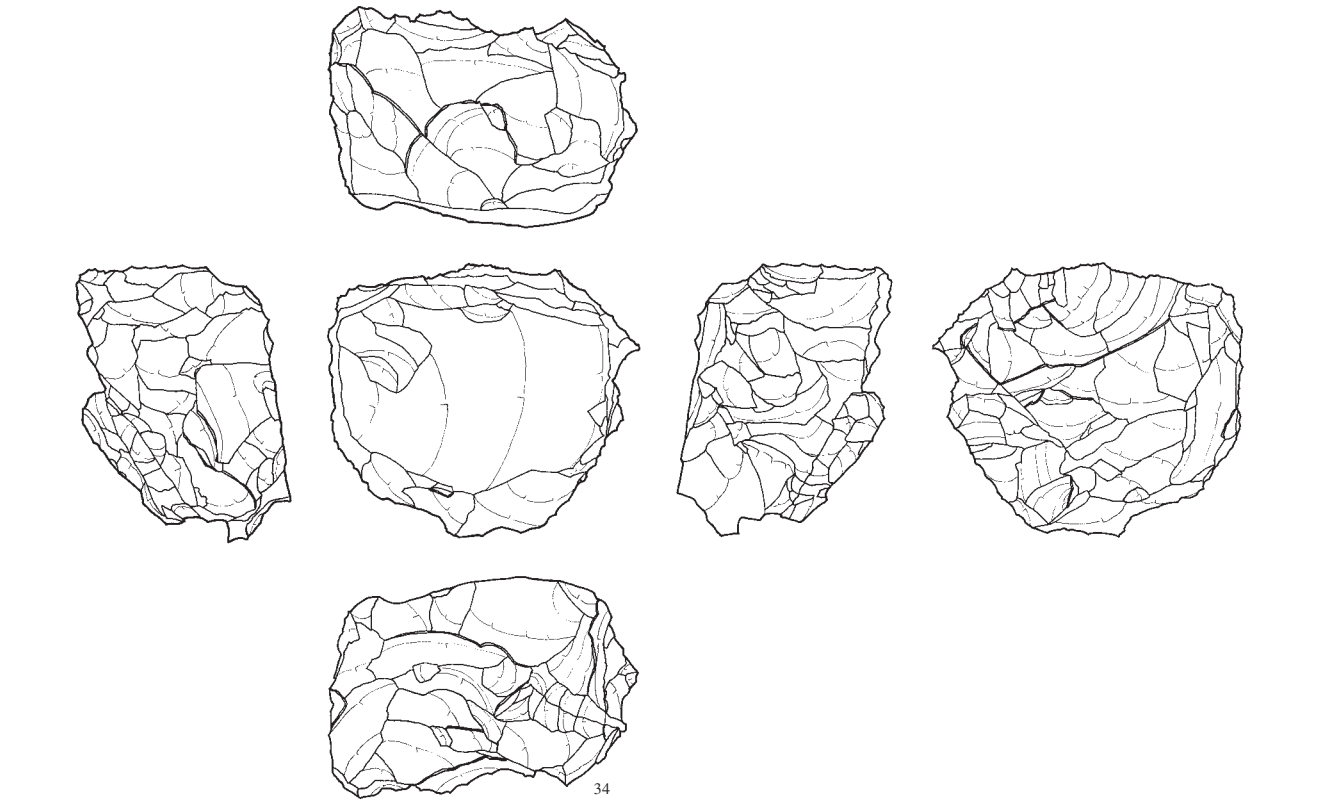


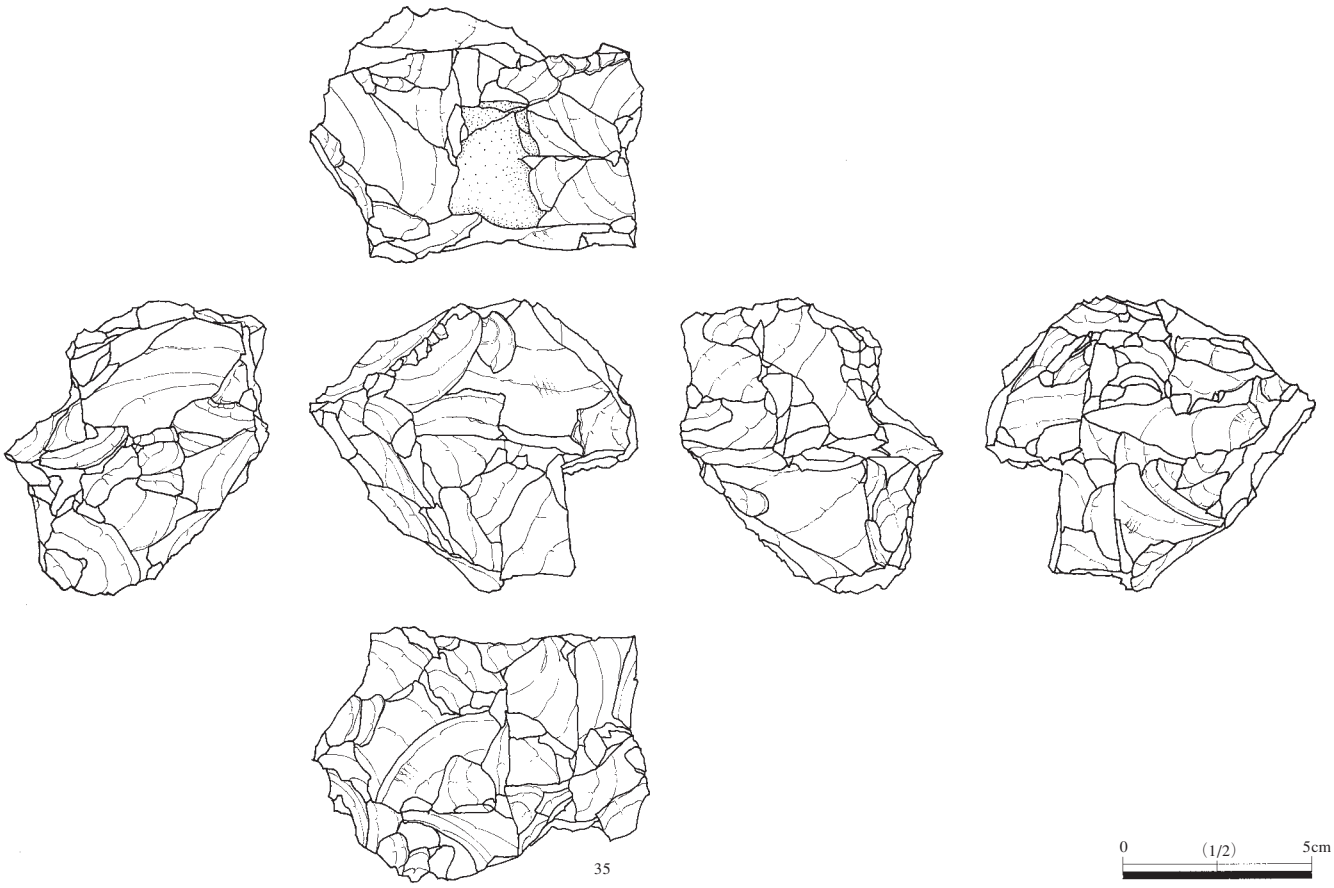






第63図　石器集中地点出土遺物（４）





第64図　石器集中地点出土遺物（５）

第７表　石器集中地点出土土器観察表

図番号	器種	法量(cm) 残存部位	色　調	含　有　物	文様・調整	出土位置	備　考
第60図 1	深鉢	口径：(40.2) 口縁部	外面：褐灰(10YR4/1) 内面：にぶい黄橙(10YR7/4)	輝石・骨針１％ 石英２％	文様：結束のない羽状縄文を施文。 調整：内面ナデ。	MW－23	—
第60図 2	—	口径：(17.0) 口縁部片	外面：にぶい黄褐(10YR7/4) 内面：にぶい褐(7.5YR5/4)	骨針・石英１％	文様：斜行縄文(単節 RL)を施文。 調整：内面ナデ。	MX－23	補修孔。
第60図 3	—	口縁部片	外面：にぶい黄橙(10YR6/3) 内面：にぶい黄橙(10YR7/4)	石英１％・長石２％	文様：口唇部にキザミ。斜行縄文(単節 RL)を施文。 調整：不明。	MW－23	—
第60図 4	—	口径：(11.8) 口縁部片	外面：にぶい黄橙(10YR7/4) 内面：にぶい黄橙(10YR6/4)	骨針・石英１％	文様：斜行縄文(複節 LR)を施文。 調整：内面ミガキ。	MW－20	—
第60図 5	—	胴部片	外面：にぶい黄橙(10YR6/4) 内面：橙(7.5YR7/6)	石英・長石１％	文様：主体となる条(０段多条の単節 LR)を他の条(０段の細縄)を以て縛り止めた原体で結節回転文を伴う斜行縄文を施文。 調整：不明。	MX－22	—
第60図 6	深鉢	底径：6.5 胴部～底部片	外面：橙(5YR7/6) 内面：明赤褐(5YR7/6)	石英１％	文様：胴部は主体となる条(単節 RL)を他の条(０段の細縄)を以て縛り止めた原体で結節回転文を伴う斜行縄文を施文、胴部下位はナデ消されている。 調整：外面(底部)ナデ。内面ナデ。	MX－22	コゲ付着。
第60図 7	—	底径：(8.5) 底部片	外面：にぶい黄橙(10YR7/4) 内面：灰黄(2.5YR7/2)	骨針・石英１％	文様：斜行縄文(複節 LR)を施文。 調整：内面ミガキ。	MX－20	—
第60図 8	深鉢	底径：(11.5) 胴部～底部片	外面：明赤褐(5YR5/6) 内面：橙(7.5YR7/6)	石英・長石１％	文様：斜行縄文(単節 LR)を施文。 調整：内外面ナデ。	MX－22	コゲ付着。
第60図 9	—	底径：14.0 底部片	外面：明黄褐(10YR7/6) 内面：にぶい黄橙(10YR7/4)	石英・長石１％	文様：文様は不明であるが、胴部下位はナデ消されたと思われる。 調整：外面(底部)ナデ。 内面ナデ。	MW－22	コゲ付着。
第60図 10	—	胴部片	外面：にぶい黄褐(10YR6/4) 内面：灰黄褐(10YR4/2)	骨針・石英１％	文様：竹管による平行沈線文を交錯させて格子目状に施文。 調整：不明。	MW－22	—
第60図 11	—	胴部片	外面：灰黄褐(10YR5/2) 内面：にぶい黄褐(10YR5/3)	輝石・石英１％	文様：竹管による平行沈線文を交錯するように施文。 調整：不明。	一括	—
第60図 12	—	胴部片	外面：にぶい黄褐(10YR6/4) 内面：褐灰(10YR4/1)	石英・長石１％ 白色砂粒２％	文様：工具は不明であるが縦方向に波状の沈線文を垂下させる。 調整：不明。	MX－22	—
第61図 13	深鉢	口径：(17.4) 口縁部片	外面：にぶい黄橙(10YR7/4) 内面：にぶい黄橙(10YR6/3)	骨針１％・石英３％ 長石１％	文様：口縁部は刺突文(爪形文？)、胴部は結節部のみを強調して回転させた結節回転文を施文。 調整：不明。	MX－23	—
第61図 14	—	口径：(11.4) 口縁部片	外面：浅黄(2.5YR7/4) 内面：浅黄(2.5YR7/4)	石英２％・長石１％	文様：結節部のみを強調して回転させた結節回転文を施文。 調整：不明。	MX－23	コゲ付着。
第61図 15	—	口縁部片	外面：にぶい黄橙(10YR6/3) 内面：灰黄褐(10YR5/3)	骨針１％・石英３％ 長石１％	文様：口縁部は刺突文(爪形文？)、胴部は結節部のみを強調して回転させた結節回転文を施文。 調整：不明。	MX－23	—
第61図 16	深鉢	口径：(14.0) 口縁部片	外面：褐(7.5YR4/3) 内面：暗褐(7.5YR3/4)	石英１％	文様：波上口縁の頂点に棒状工具による圧痕が見られる。口縁部の文様帯は節の大きな条(単節 LR)を波状口縁に沿って施文した側面圧痕文(２段)と渦巻状側面圧痕文で構成される。胴部は結節部のみを強調して回転させた結節回転文を施文。 調整：内面ナデ。	MX－22	—

第８表　石器集中地点出土石器観察表

図番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	出土位置	備　考
第61図 17	石鏃	4.4	1.6	0.5	3.2	頁岩	MX－23	縦長剥片を使用。完形。狭長な形を呈し、平基。鋸歯縁を持つ。 表裏面に丁寧な微細剥離。
第61図 18	石鏃	3.5	1.7	0.5	2.1	頁岩	MX－22	縦長剥片を使用。完形。狭長な形を呈し、平基。両面調整。
第61図 19	石鏃	2.7	1.7	0.4	1.5	頁岩	MX－23	縦長剥片を使用。完形。平基。 表裏面に主剥離面を残す。
第61図 20	石鏃	2.6	1.5	0.2	1.1	頁岩	MX－23	縦長剥片を使用。完形。基部に浅い抉り。裏面に主剥離面を残す。
第61図 21	石匙	6.9	3.3	0.6	10.2	頁岩	MX－22	縦長剥片を使用。先端部一部欠損。狭長な縦型で、両側縁に丁寧な鋸歯縁。 表面に主剥離面を残す。
第61図 22	石匙	7.9	3.0	0.8	13.6	頁岩	MW－23	縦長剥片を使用。完形。縦型で先端部が尖り、つまみ部はやや大きい。 やや粗い調整で、表面に自然面を残す。
第61図 23	石匙	6.8	2.2	0.4	6.8	頁岩	MX－22	薄手の縦長剥片を使用。完形。狭長な縦型であり、つまみ部は大きい。 微細剥離が全周し、表裏面に主剥離面を残す。

図番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	出土位置	備　考
第62図24	石匙	5.8	3.3	0.6	8.5	頁岩	一括	薄手の縦長剥片を使用。一部欠損。幅広な縦型。 表裏面に主剥離面を残し、表面右側縁部に微細剥離。
第62図25	石匙	11.3	3.1	0.7	30.5	頁岩	MW－22	縦長剥片を使用。先端部を一部欠損。縦型であり、つまみ部はやや大きい。 両側縁が平行し、ほぼ均一な厚さ。両面調整。
第62図26	石篦	6.8	2.3	1.3	16.0	頁岩	MX－22	完形。刃部がやや波状。粗い両面調整。
第62図27	石篦	8.0	3.4	1.1	31.8	頁岩	MX－22	縦長剥片を使用。完形。やや幅広の刃部は浅く抉れる。 表面には自然面を残し、裏面は主剥離面を残す。
第62図28	石篦	(5.7)	(3.1)	(1.4)	(28.2)	長石	MW－22	刃部欠損。粗い両面調整。
第62図29	石篦	7.2	5.0	2.2	69.0	頁岩	MX－23	完形。器体中央部に最大厚。粗い調整。
第62図30	石篦	11.8	4.5	1.9	73.0	頁岩	MX－22	縦長剥片を使用。完形。器体中央部でややねじれる。 両面調整で、右側縁に階段状剥離。
第63図31	石槍	15.9	3.6	1.3	56.4	頁岩	MW－22	縦長剥片を使用。完形。やや反りを持ち、大型で両側縁はほぼ平行。鋭利な尖端部を持ち、厚さは均一。 両面調整が丁寧に施され、部分的に斜方位の調整。
第63図32	石槍	(11.9)	(4.8)	(1.3)	(90.5)	頁岩	MW－22	縦長剥片を使用。先端部欠損。両側縁はほぼ平行し、ほぼ均一な厚さ。両面調整。
第63図33	残核	7.5	5.4	—	112.0	頁岩	MX－22	不定方向からの剥離が行われている。
第64図34	石核	7.2	8.2	—	348.0	頁岩	MX－23	角礫状の石核。 表面を打面として保持しながら、残り５面で剥離を行う。
第64図35	石核	7.9	8.7	—	414.0	頁岩	一括	角礫状の石核。全周から剥離を行う。

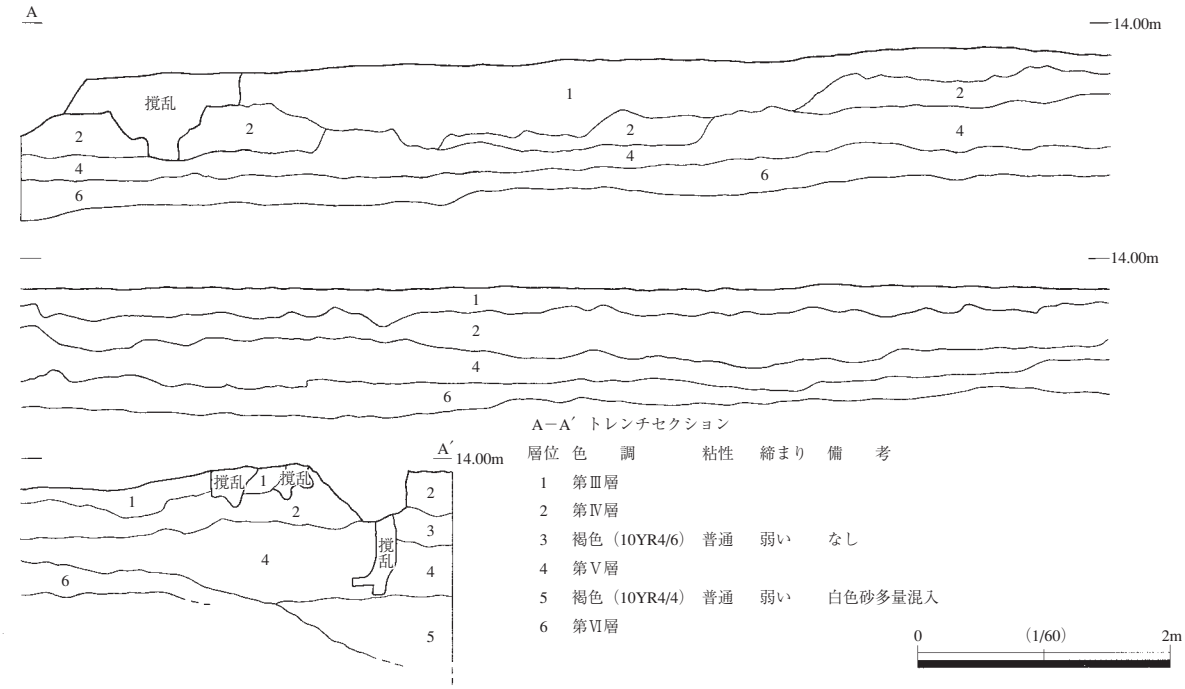
また、第Ⅴ層からは遺物以外に遺構も多く検出され、26～35号土坑、６～26号焼土遺構がそれに該当する。

出土状況　総点数513点であり、縄文土器188点、石器323点であるが、縄文土器が出土遺物の主体をなしていた。第Ⅴ層は北側の平坦面から南側へ緩く傾斜しているが、平坦面よりも傾斜面に集中して遺物が出土した。第Ⅴ層は約40㎝の厚さをもつ層であるが、上面と下面の遺物は接合関係にあるため、第Ⅴ層内での時期差はないと考えられる。また、接合関係にある遺物の多くは近接して出土しているが、25は石器集中地点と18号焼土遺構の一括遺物と接合しており、注目される。

出土遺物

縄文土器　縄文土器38点を図示した（第68～74図１～38、図版31～33）。縄文土器は深鉢が主体であると考えられる。口縁部は平縁（口唇部にキザミを施すものが大半を占める）、波状突起のあるものが見られ、底部は平底・尖底気味の径の小さな平底・乳頭状突起のある丸底がある。また、胎土に繊維が混入している土器も認められ、海綿体骨針を含有するものも多く見られる。以下、文様によって土器を分類した。

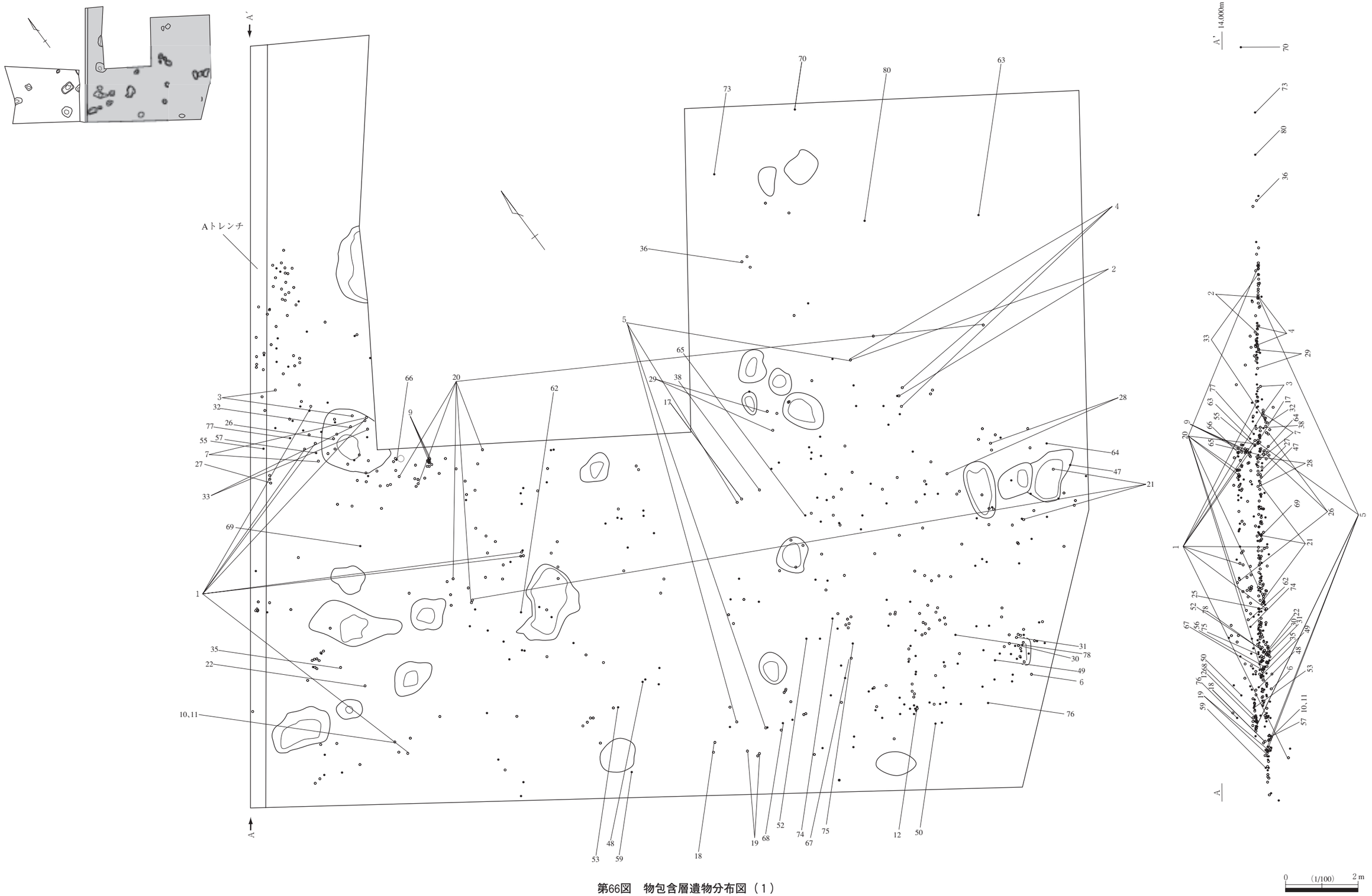
①斜行縄文と羽状縄文を主体とする土器は21点図示した（１～19、30、37）。斜行縄文を主体とするものは19点あり、その多くは口唇部にキザミを施している。文様は単節による斜行縄文を主体とするもので（１～５、７～８、13、16、30、37）、７、８、30、37については口縁部・底部等に竹管による刺突文・押引文等を施文している。特に７は口縁部文様帯が特徴的であり、竹管による２条の波状沈線文を横位に巡らし、沈線文間の２段１単位の押引文は口縁部に並行するもので、円弧状に連続するものが見られ、パターンの異なる文様構成をしている。他に、結束された単節による斜行縄文を施文するもの（８～11）、主体とする条に他の条を縛り付けた原体による斜行縄文を施文するものが認められ（６、12、



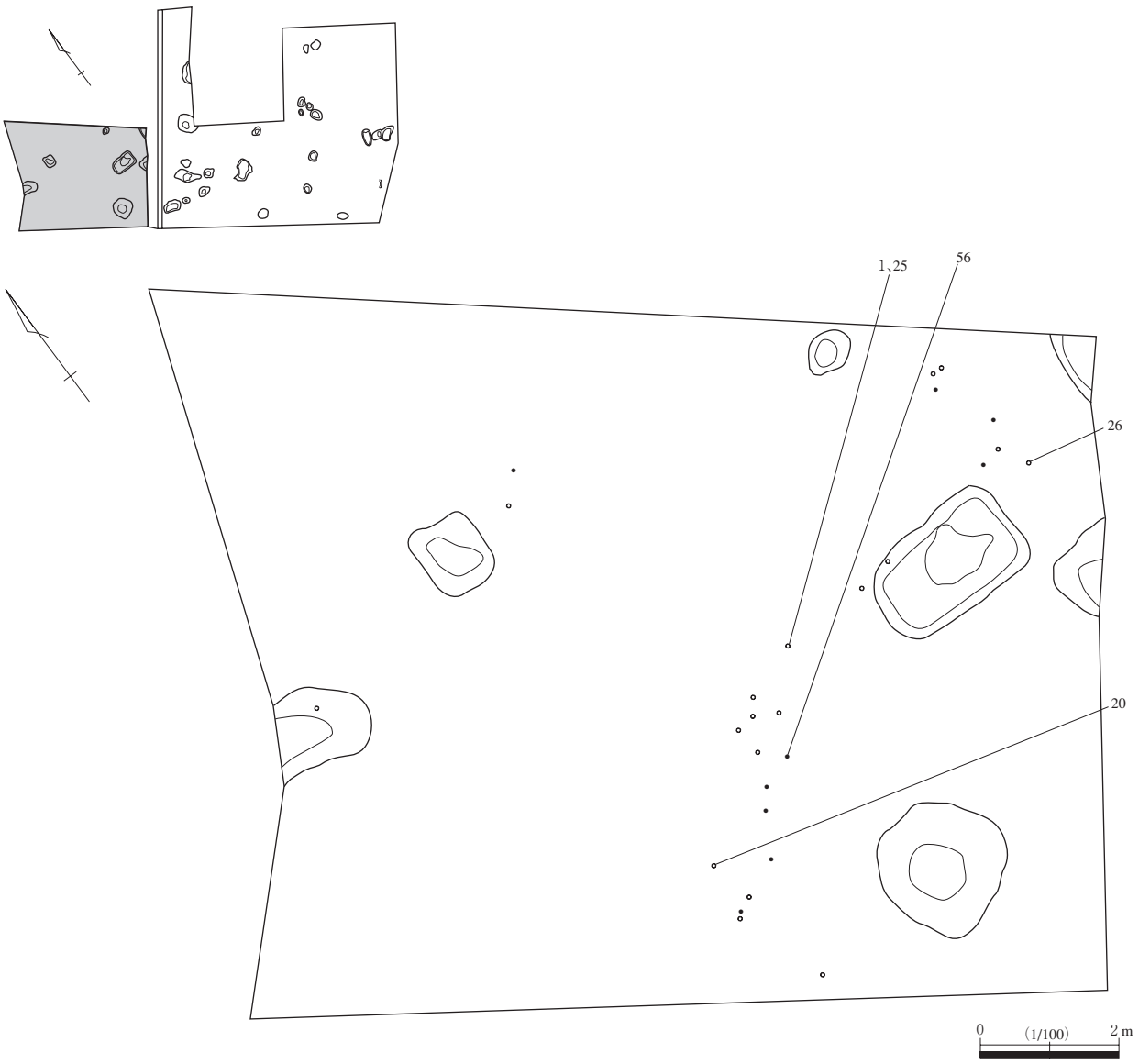
A－A′ トレンチセクション

層位	色　調	粘性	締まり	備　考
1	第Ⅲ層			
2	第Ⅳ層			
3	褐色（10YR4/6）	普通	弱い	なし
4	第Ⅴ層			
5	褐色（10YR4/4）	普通	弱い	白色砂多量混入
6	第Ⅵ層			

第65図　遺物包含層全体図



第66図　物包含層遺物分布図（1）



第67図　遺物包含層遺物分布図（２）

17、19）、６、17、19については口縁部・底部等に竹管による刺突文・沈線文等を施文しているものである。施文原体は単節 LR：４点（８～11）、単節 RL：11点（１～６、12、16、18、30、37）、直前段反撚 LLR：１点（17）、直前段反撚 RRL：３点（７、13、19）を使用している。単節を使用するものがほとんどであるが、なかには０段多条（１、３、６、12）の単節や直前段反撚の原体も見られた。

②羽状縄文を施文するものは14、15の２点のみで、施文原体は結束第１種を使用している。

③ループ文を主体とする土器は９点図示した（20～28）。21～28については単節によるループ文を主体とし、特に23、28は口縁部・底部等に刺突文を施文している。20については主体とする条に他の条を縛り付けた原体を用いたループ文を施文している。施文原体は単節 LR：３点（21、26、27）、単節 RL：６点（20、22～25）を使用している。

④刺突文のみが確認できる土器は４点図示した（29、31、32、38）。29は口縁部片で、口唇部に竹管による連続刺突文が見られ、口縁部の文様帯はコンパス文を２段にわたって施文し、コンパス文間には

円形竹管による連続刺突文が横位に巡っている。胴部は竹を細く縦割りしたものを束ねた櫛歯状の工具による押圧痕と考えられる。施文原体は竹管状の工具を多種多様に使用している。31、32は連続刺突文を多段に施文している。31は口縁部片で、口唇部にキザミを施し、胴部は竹管による平行沈線文の割付けに従って連続刺突文が施文され、刺突列間にはコンパス文が横位に巡っている。連続刺突文の施文原体ついては、先端を加工した竹管を使用したと思われる。31、32は器形・文様等の特徴から表館式に相当する。38は胴部下位から底部にかけて残存しており、胴部から底部にかけてＳ字状の連続刺突文によって構成された円弧状の刺突列、その下には並行に巡る刺突列が確認できる。底面は環状の刺突列が見られる。どの破片資料についても残存状況が悪いため、断片的な文様構成のみしか把握することができなかったので、あえて刺突文を主体とする土器とは表記しなかった。

その他の文様については、結節部のみを横位回転させた連続文を施文するもの（33）、絡条体を回転させて施文するもの（34）、縄の束を横位施文するもの（35）、組紐縄文を施文するもの（36）が少数見られる。

石器　石器42点を図化した（第74～78図39～80、図版34、35）。石材は頁岩が主体を占めているが、76のみ砂岩である。

石鏃（39～45）無茎鏃が主体を占めるが、45は尖基鏃である。なお、42は平基無茎鏃であり、39、40、43、44は凹基無茎鏃である。41は基部が欠損しているため、不明である。長幅値の平均は、最大長2.4㎝、最大幅1.4㎝である。

尖頭状石器（46）石鏃未製品の可能性がある。

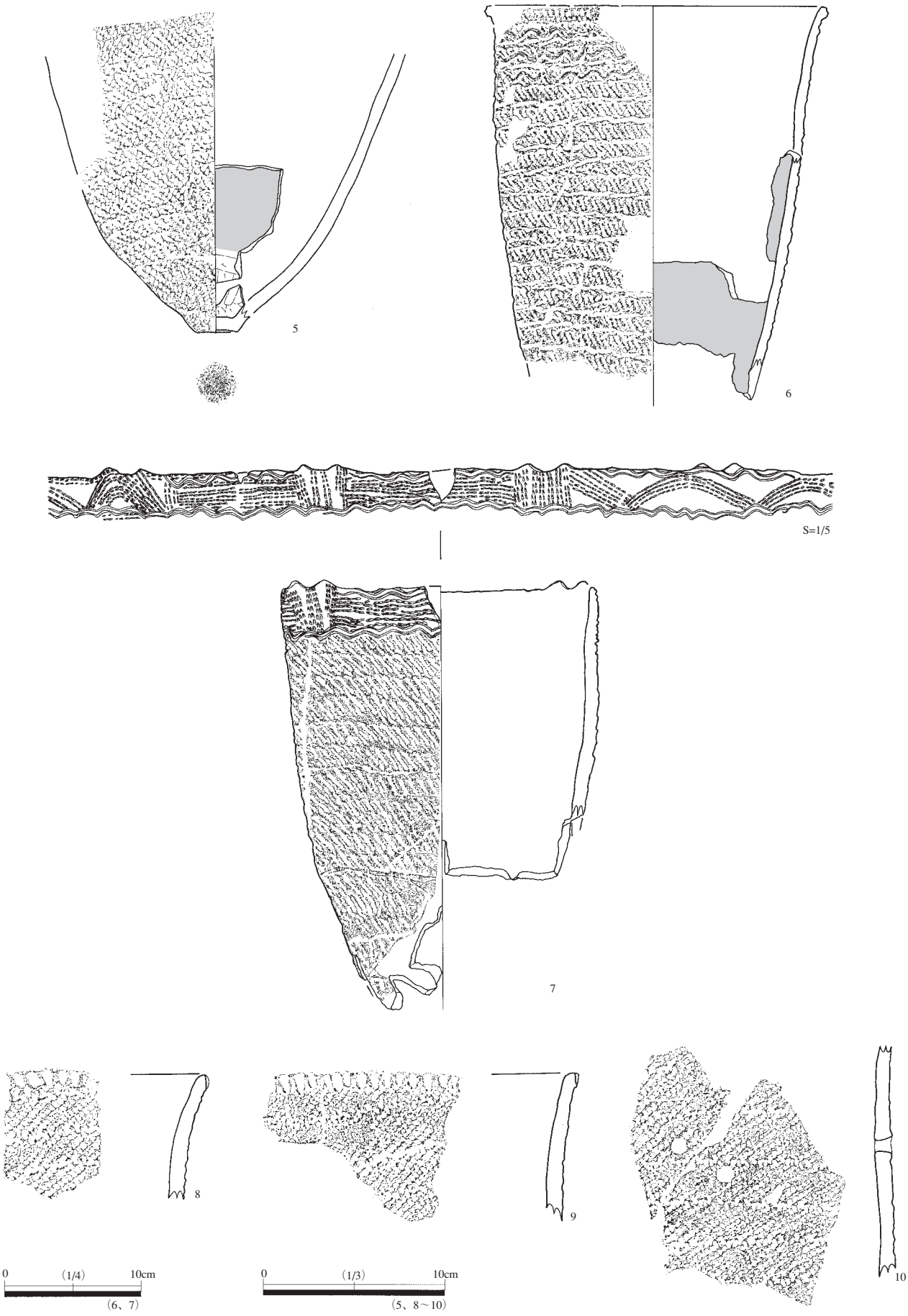
石匙（47～69）全て縦型石匙に分類でき、右側縁先端を鋭角に尖るように整形した耕起鎌形が比較的多く（51、52、58～63）、69は尖頭器形を呈している。茎はつまみ状に作り出されたものが多いが、身部の肩からなだらかなカーブを突き出す棒状の茎をもつ石匙もある（57、68）。長幅値の平均は、最大長6.2㎝、最大幅3.2㎝である。大半の石匙は平均値の付近に集中するが、69は最大長11㎝を測る。

石箆（70～78）側縁が平行し基部が丸いものが多い（71、72～75、77）。長幅値の平均は、最大長7.1㎝、最大幅3.2㎝である。

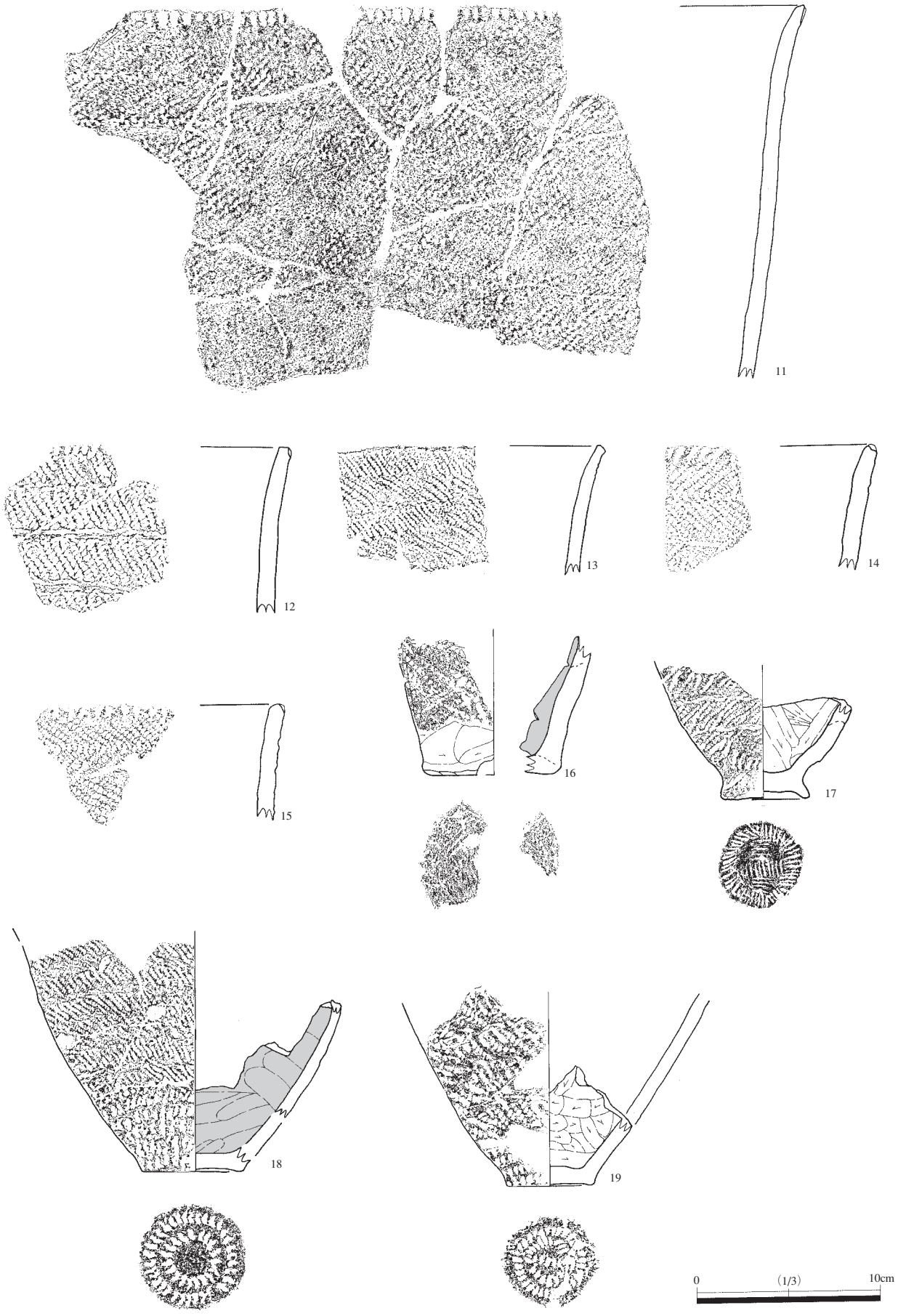
スクレイパー（79、80）80は横長剥片を使用している。長幅値の平均は、最大長6.4㎝、最大幅2.8㎝である。

所見　出土遺物のうち、表館式土器が出土しているため縄文時代前期と考えられる。また、遺構に伴わない遺物の他、同一層から焼土遺構が多く検出された。住居跡は未確認であるが、焼土遺構が火を焚いた炉跡の可能性があり、縄文前期の土器が出土することから、焼土遺構は当時の生活の痕跡であることが考えられる。（中山雄市）

第68図　遺物包含層出土遺物（1）

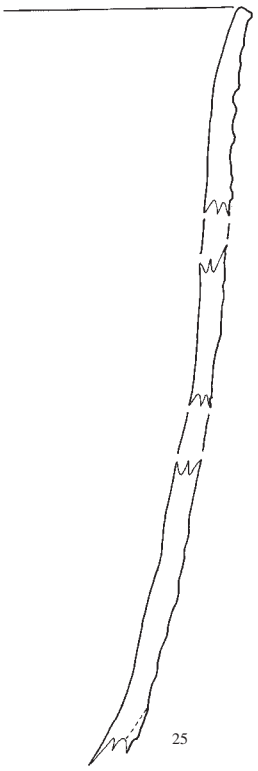


第69図　遺物包含層出土遺物（２）

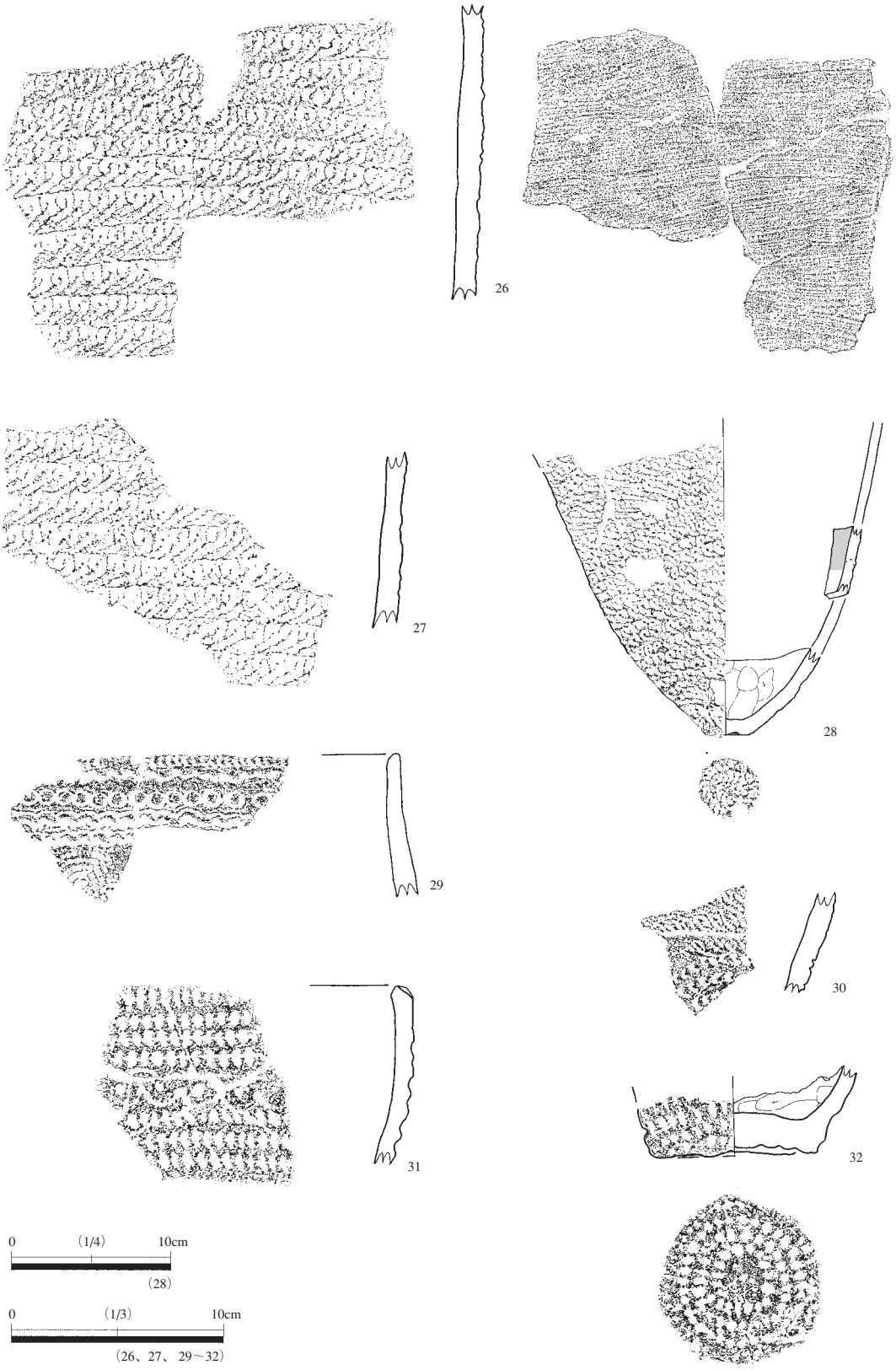


第70図　遺物包含層出土遺物（３）

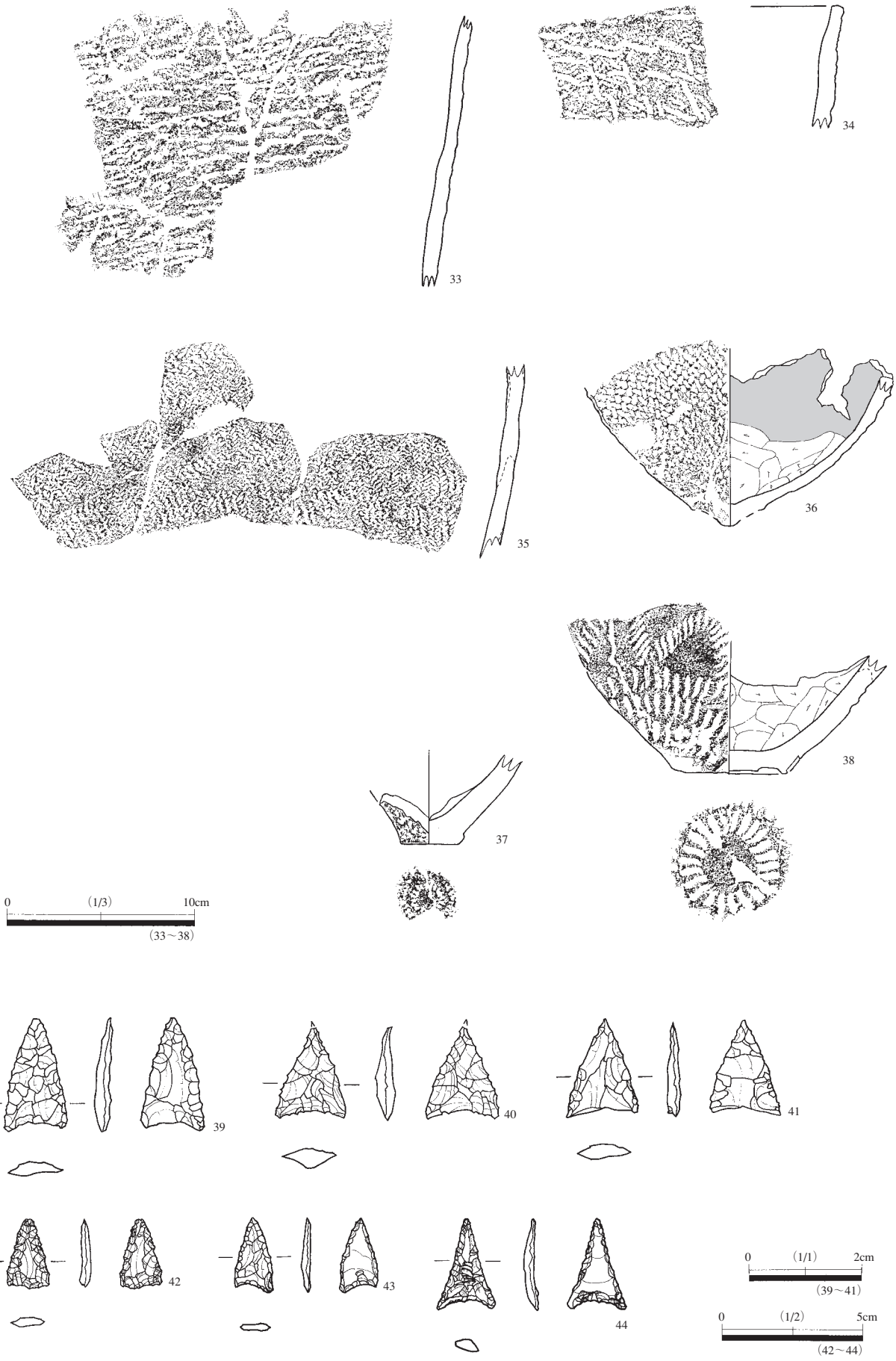
第71図　遺物包含層出土遺物（４）



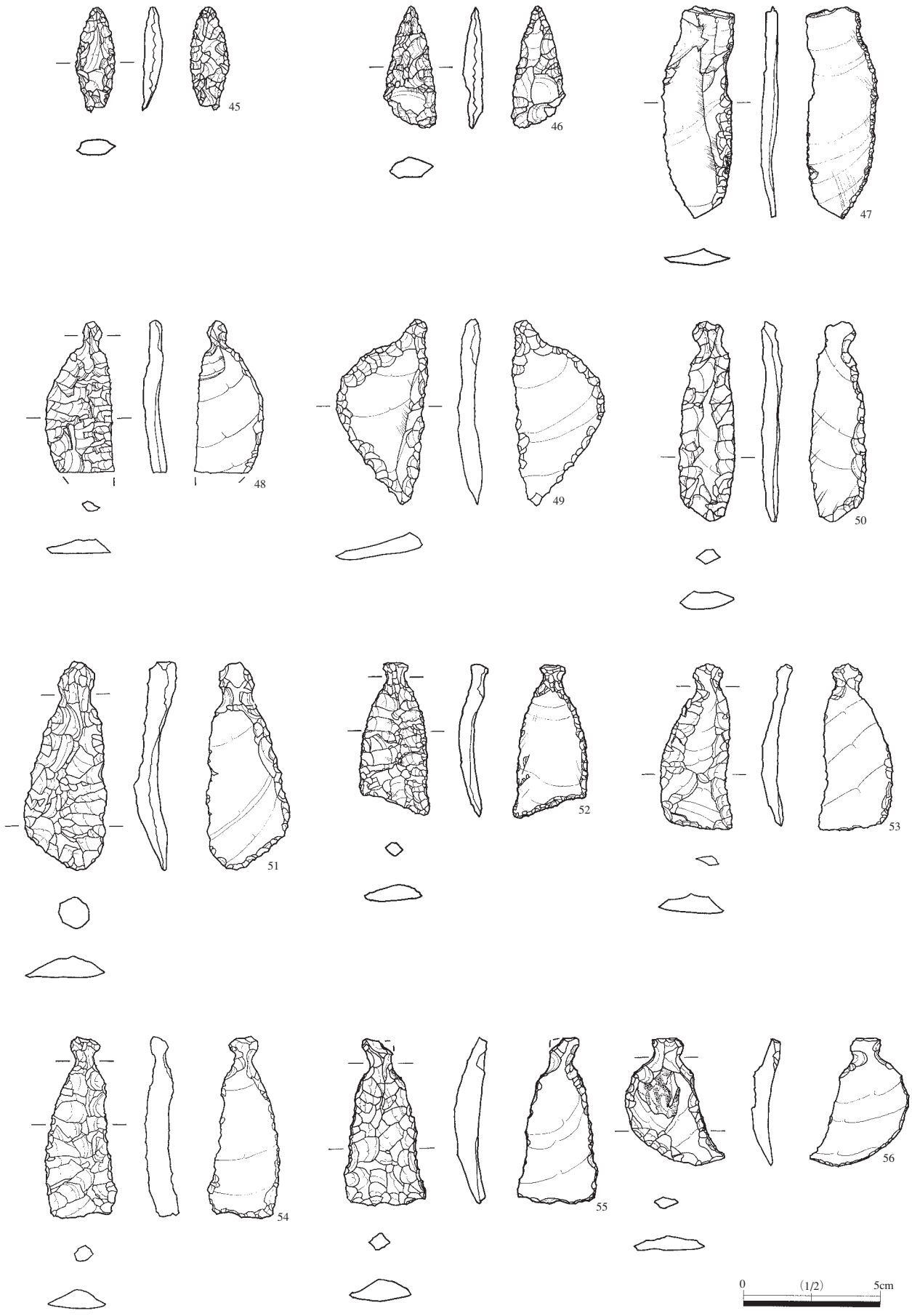
第72図　遺物包含層出土遺物（５）



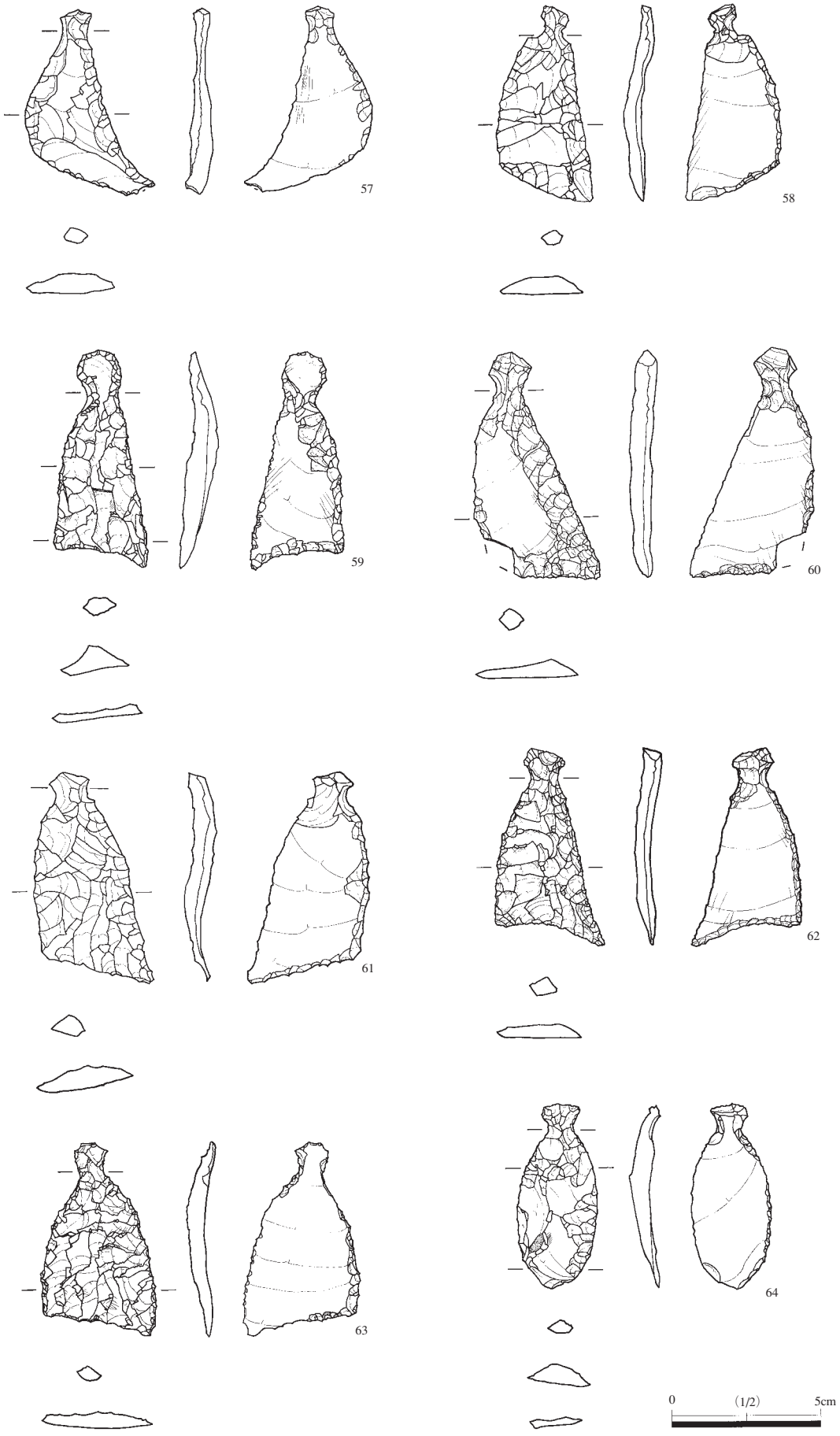
第73図　遺物包含層出土遺物（６）



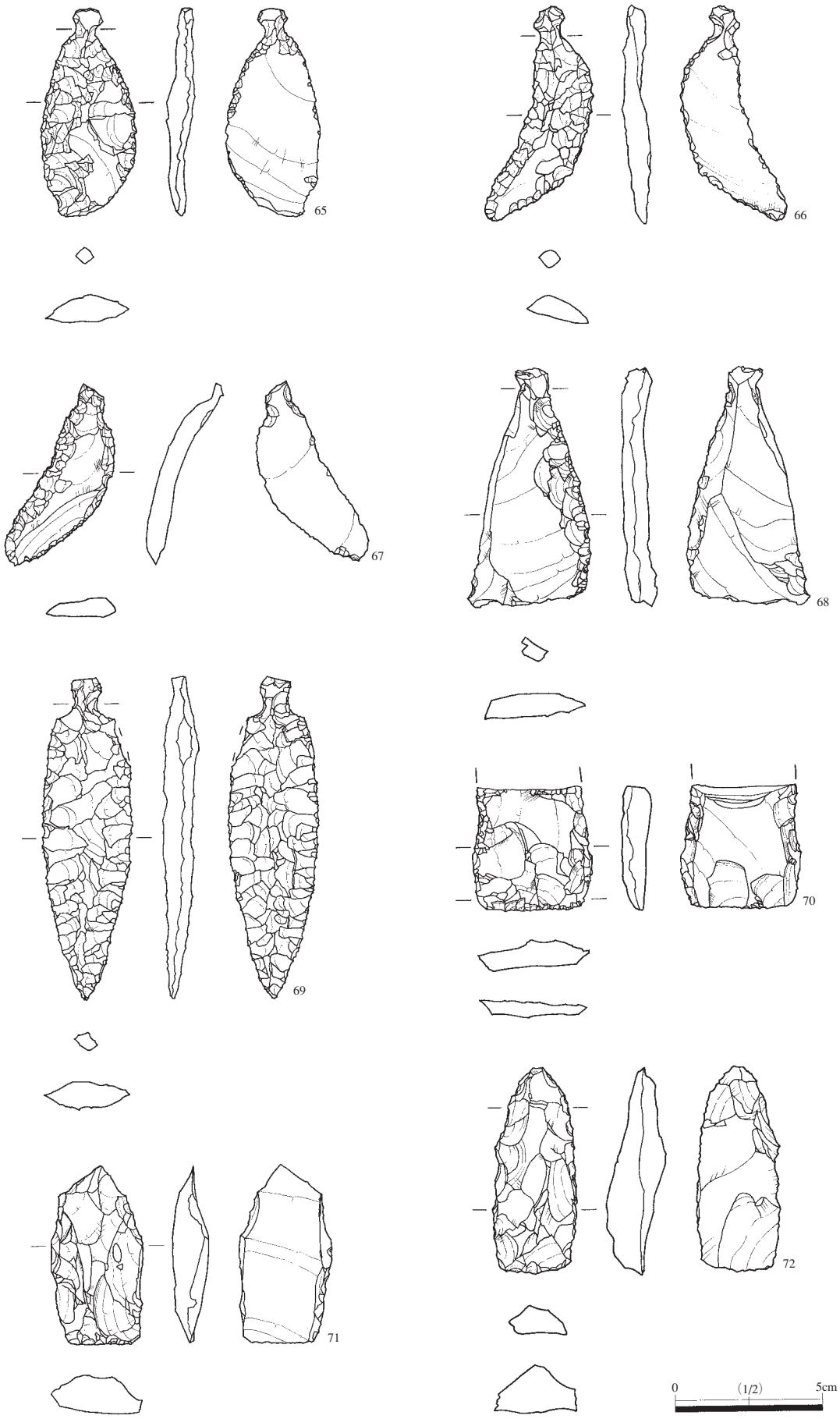
第74図　遺物包含層出土遺物（７）



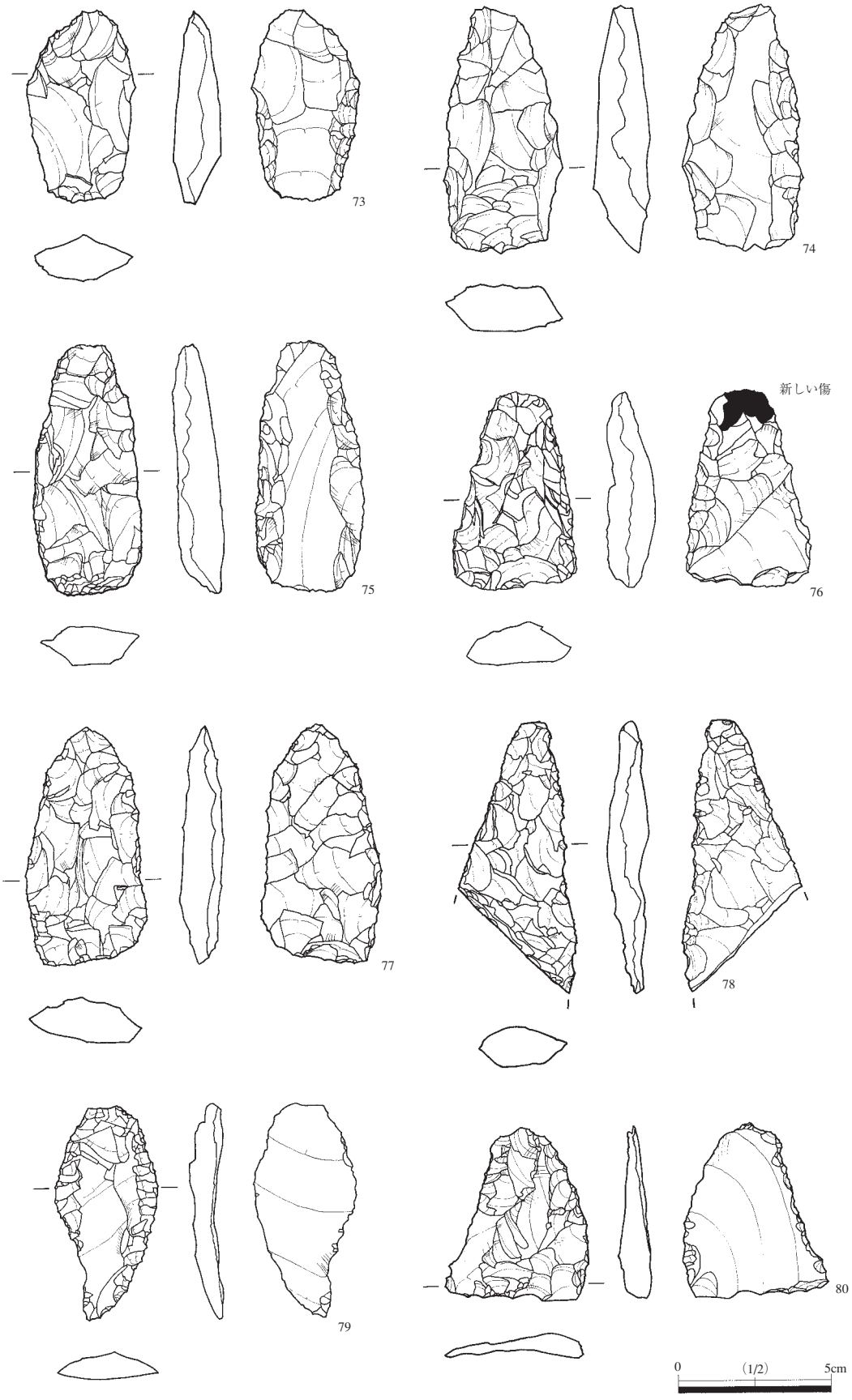
第75図　遺物包含層出土遺物（８）



第76図　遺物包含層出土遺物（９）



第77図　遺物包含層出土遺物（10）



第78図　遺物包含層出土遺物（11）

第９表　遺物包含層出土土器観察表

図番号	器種	法量(cm) 残存部位	色　調	含　有　物	文様・調整	出土位置	備　考
第68図 1	深鉢	口径：(49.6) 口縁部	外面：にぶい褐(7.5YR5/4) 内面：明褐(7.5YR5/6)	骨針１％・石英２％ 長石１％ 白色砂粒３％	文様：口唇部にキザミ。０段多条の単節RLの原体を斜位施文。 調整：内面ナデ。	MN－16 MO－18 MP－16	—
第68図 2	深鉢	口径：(31.2) 口縁部	外面：明黄褐(10YR6/6) 内面：明黄褐(10YR7/6)	輝石・石英１％ 長石１％	文様：口唇部にキザミ。斜行縄文(単節RL)を多段に施文。縄の先端を少し曲げて回転させることで、斜行する条の末端が連なる形をしている。 調整：内面ナデ。	ML－16	—
第68図 3	深鉢	胴部片	外面：黄橙(7.5YR7/8) 内面：橙(7.5YR7/6)	石英・長石３％ 白色砂粒２％	文様：０段多条の単節RLの原体を斜位施文。 調整：内面ナデ	MO－18	—
第68図 4	深鉢	口径：(37.0) 口縁部	外面：にぶい黄褐(10YR4/3) 内面：にぶい黄橙(10YR6/4)	輝石・骨針１％ 石英３％・長石１％	文様：口唇部にキザミ。斜行縄文(単節RL)を多段に施文。縄の先端を少し曲げて回転させることで、斜行する条の末端が連なる形をしている。 調整：内面ナデ。	ML－16 MK－16	—
第69図 5	深鉢	底径：3.0 胴部～底部片	外面：明黄褐(10YR6/6) 内面：にぶい黄橙(10YR6/3)	石英・長石２％	文様：胴部は斜行縄文(単節RL)を多段に施文。縄の先端を少し曲げて回転させることで、斜行する条の末端が連なる形をしている。底面は環状刺突列が見られる。 調整：内面ナデ。	ML－16 MM－16 MN－15	コゲ付着。
第69図 6	深鉢	口径：20.8 ほぼ完形	外面：にぶい黄褐(10YR5/4) 内面：にぶい黄褐(10YR5/3)	骨針・石英１％ 長石１％	文様：口唇部は半截竹管による連続刺突文、胴部は波状沈線文(３条)、主体となる条(０段多条の単節RL)を他の条(０段の細縄)を以て縛り止めた原体で結節回転文を伴う斜行縄文を施文。 調整：内面ナデ。	一括	繊維混入。
第69図 7	深鉢	口径：22.6 ほぼ完形	外面：にぶい褐(7.5YR5/3) 内面：橙(7.5YR6/6)	石英・長石２％ 白色砂粒３％	文様：口縁部の文様帯は竹管による波状沈線文(２条)、沈線文間を押引文が円弧状(２～４条)及び並行(４～５条)に施文され、並行刺突列は縦方向と横方向のパターンが交互に施文されている。胴部は斜行縄文(直前段反撚RRL)を多段に施文。竹管は先端部にキザミを入れたものを使用している。 調整：内面ナデ。	MO－18	繊維混入。
第69図 8	—	口縁部片	外面：にぶい黄褐(10YR5/3) 内面：にぶい黄橙(10YR6/4)	骨針１％・石英２％ 長石２％	文様：口唇部にキザミ。結束のある斜行縄文(単節LR)を施文。 調整：内面ナデ。	一括	—
第69図 9	—	口縁部片	外面：にぶい黄橙(10YR6/4) 内面：にぶい黄橙(10YR6/3)	輝石・骨針１％ 石英・長石１％	文様：口唇部にキザミ。結束のある斜行縄文(単節LR)を施文。 調整：内面ナデ。	MN－17	—
第69図 10	深鉢	胴部片	外面：にぶい褐(7.5YR5/4) 内面：にぶい黄褐(10YR6/4)	輝石・骨針１％ 石英１％・長石２％	文様：結束のある斜行縄文(単節LR)を施文。 調整：内面ナデ。	MP－16	補修孔。
第70図 11	深鉢	口径：(30.8) 口縁部	外面：橙(7.5YR7/6) 内面：明黄褐(10YR6/6)	骨針１％・石英２％ 長石１％ 白色砂粒１％	文様：口唇部にキザミ。結束のある斜行縄文(単節LR)を施文。 調整：内面ナデ。	MP－16	—
第70図 12	—	口縁部片	外面：橙(5YR7/6) 内面：にぶい黄褐(10YR5/3)	石英３％・長石１％	文様：口唇部にキザミ。主体となる条(０段多条の単節RL)を他の条(繊維束)を以て縛り止めた原体で結節回転文を伴う斜行縄文を施文。 調整：内面ナデ。	MM－14	—
第70図 13	—	口径：(14.4) 口縁部片	外面：黒褐(10YR3/2) 内面：橙(5YR6/6)	石英・長石２％	文様：斜行縄文(０段多条の直前段反撚RRL)を施文。 調整：内面ナデ。	一括	—
第70図 14	—	口縁部片	外面：明褐(7.5YR5/6) 内面：にぶい黄橙(10YR6/4)	石英・長石１％	文様：口唇部にキザミ。結束のある羽状縄文(結束第１種)を施文。 調整：内面ナデ。	一括	—
第70図 15	深鉢	口縁部片	外面：灰黄褐(10YR4/2) 内面：にぶい橙(7.5YR6/4)	輝石・石英１％	文様：口唇部にキザミ。結束のある羽状縄文(結束第１種)を施文。 調整：内面ナデ。	一括	—
第70図 16	深鉢	底径：7.4 胴部～底部片	外面：浅黄(2.5YR7/4) 内面：にぶい黄(2.5YR6/3)	骨針・石英１％	文様：胴部は斜行縄文(単節RL)を施文、底部付近はナデ消されている。 調整：外面(底部)ナデ。内面ナデ。	一括	—
第70図 17	深鉢	底径：(4.4) 胴部～底部片	外面：にぶい黄橙(10YR7/4) 内面：にぶい黄橙(10YR7/4)	骨針・石英１％	文様：主体となる条(直前段反撚LLR)を他の条(繊維束)を以て縛り止めた原体で斜行縄文を施文、高台部はヘラ状工具による並行刺突列(２段)、底面は環状刺突列の後に十字状刺突列が見られる。 調整：内面ナデ。	MM－16	—
第70図 18	深鉢	底径：5.4 胴部～底部片	外面：にぶい褐(7.5YR5/4) 内面：にぶい黄橙(10YR7/4)	石英２％・長石１％ 白色砂粒１％	文様：斜行縄文(単節RL)を磨り消しながら施文、胴部下位から底部は竹管による並行刺突列(５段)、底面は同心円状刺突列(２重)が見られる。 調整：内面ナデ。	MN－15	コゲ付着。

図番号	器種	法量(cm) 残存部位	色　調	含　有　物	文様・調整	出土位置	備　考
第70図 19	深鉢	底径：4.7 胴部～底部片	外面：橙(7.5YR6/6) 内面：橙(7.5YR7/6)	石英２％・長石１％ 白色砂粒１％	文様：胴部は斜行縄文(直前段反撚 RRL)を施文、底部は竹管による並行刺突列(４段)、底面は同心円状刺突列(２重)の中心を通るように刺突列が見られる。 調整：内面ナデ。	MN－14	—
第71図 20	深鉢	口径：24.4 ほぼ完形	外面：灰黄褐(10YR5/2) 内面：にぶい黄褐(10YR7/4)	石英１％ 白色砂粒１％	文様：主体となる条(環付の単節 RL)を他の条(１段の細縄)を以て縛り止めた原体で結節回転文を伴うループ文を多段に施文。 調整：内面ナデ。	MK－16 MO－16	—
第71図 21	深鉢	口径：(29.4) 口縁部	外面：にぶい黄橙(10YR7/4) 内面：明黄褐(10YR7/6)	骨針１％・石英２％ 長石３％	文様：ループ文(単節 LR)を多段に施文。 調整：内面条痕。	MK－15 MO－16	—
第71図 22	深鉢	口径：(45.0) ほぼ完形	外面：にぶい黄橙(10YR6/4) 内面：にぶい黄橙(10YR7/4)	石英・長石１％ 白色砂粒１％	文様：口唇部にキザミ。ループ文(単節 RL)を多段に施文。 調整：内面ナデ。	MP－16	—
第71図 23	—	口縁部片	外面：にぶい黄橙(10YR7/4) 内面：明黄褐(10YR7/6)	石英・長石１％	文様：口縁部は沈線文(２条)、胴部はループ文(単節 RL)を多段に施文。 調整：内面ミガキ。	一括	—
第71図 24	—	口縁部片	外面：橙(7.5YR7/6) 内面：にぶい黄橙(10YR7/4)	石英・長石１％	文様：口唇部にキザミ。ループ文(単節 RL)を多段に施文。 調整：内面ナデ。	一括	—
第72図 25	深鉢	口径：(44.0) 口縁部～胴部片	外面：にぶい黄橙(10YR6/4) 内面：明黄褐(10YR6/6)	骨針１％・石英２％ 長石１％	文様：ループ文(単節 RL)を多段に施文。 調整：内面条痕。	一括	繊維混入。石器集中地点出土の土器と接合。
第73図 26	深鉢	胴部片	外面：にぶい黄褐(10YR5/4) 内面：にぶい黄橙(10YR6/4)	輝石・骨針１％ 石英１％・長石２％ 白色砂粒１％	文様：ループ文(単節 LR)を多段に施文。 調整：内面条痕。	MO－18	—
第73図 27	深鉢	胴部片	外面：にぶい黄橙(10YR7/4) 内面：黄橙(7.5YR7/8)	骨針１％・石英３％ 長石２％ 白色砂粒１％	文様：ループ文(単節 LR)を多段に施文。 調整：内面条痕。	MO－18	—
第73図 28	深鉢	底径：2.7 胴部～底部片	外面：明黄褐(10YR6/6) 内面：にぶい黄橙(10YR6/4)	石英・長石１％	文様：胴部はループ文(０段多条の単節 RL)、胴部下位から底部は竹管による並行刺突列(２段)、底面は同心円状刺突列(２重)が見られる。 調整：内面ナデ・ミガキ。	MK－15	—
第73図 29	—	口径：(27.4) 口縁部片	外面：にぶい黄褐(10YR5/3) 内面：にぶい黄橙(10YR6/4)	輝石・骨針１％ 石英１％・長石１％	文様：口唇部は竹管による連続刺突文、口縁部の文様帯はコンパス文と円形竹管による刺突列、胴部は細く縦割りした竹を一つに束ねた櫛歯状工具で施文したと思われる。 調整：内面ミガキ。	ML－16	—
第73図 30	—	胴部～底部片	外面：黄橙(10YR8/6) 内面：浅黄橙(10YR8/4)	石英・長石１％	文様：胴部は斜行縄文(単節 RL)、底部は竹管による刺突列が見られる。 調整：内面ミガキ	一括	—
第73図 31	—	口縁部片	外面：にぶい黄褐(10YR5/4) 内面：にぶい黄橙(10YR7/4)	石英・長石１％ 白色砂粒１％	文様：口唇部にキザミ。竹管による平行沈線文で割付された刺突列が見られ、刺突列間にはコンパス文を横位に巡らしている。 調整：不明。	ML－14	—
第73図 32	—	底径：7.4 底部片	外面：にぶい黄橙(10YR6/4) 内面：明黄褐(10YR7/6)	石英１％・長石２％	文様：胴部下位から底部はヘラ状工具による刺突列が多段に見られる。底面は同心円状刺突列(４重)が見られる。 調整：内面ナデ。	MO－18	—
第73図 33	深鉢	胴部片	外面：黒褐(2.5YR3/2) 内面：にぶい黄褐(10YR5/4)	骨針・石英１％ 長石１％	文様：結節部のみを強調して回転させた結節回転文を施文。 調整：不明。	一括	—
第73図 34	—	口縁部片	外面：明赤褐5YR5/6) 内面：にぶい黄橙(10YR7/4)	輝石・石英１％ 長石１％	文様：口唇部は縄の先端による圧痕、口縁部以下は撚糸Ｒを軸に結節部ができるように縛り付けた原体で施文したと思われる。 調整：不明	一括	—
第74図 35	深鉢	胴部片	外面：にぶい黄橙(10YR6/4) 内面：にぶい黄橙(10YR6/3)	骨針１％・石英２％ 長石１％	文様：４本の条｛無節Ｌ(２本)・Ｒ(２本)｝を他の条を以て縛り束ねた原体を磨り消しながら施文。 調整：内面ナデ。	MP－17	—
第74図 36	深鉢	胴部～底部片	外面：橙(7.5YR6/6) 内面：明黄褐(10YR7/6)	石英・長石１％	文様：組紐縄文を施文。 調整：内面ナデ。	ML－17	コゲ付着。
第74図 37	深鉢	底径：3.0 胴部～底部片	外面：明赤褐(5YR5/6) 内面：にぶい橙(5YR6/4)	石英・長石１％ 白色砂粒１％	文様：胴部は斜行縄文(単節 RL)、胴部下位から底部は竹管による並行刺突列(３－２－３段)、底面は同心円状刺突列(２重)が見られる。 調整：内面ナデ。	一括	—
第74図 38	深鉢	底径：5.5 胴部～底部片	外面：橙(5YR6/6) 内面：橙(7.5YR6/6)	骨針１％・石英３％ 長石２％ 白色砂粒３％	文様：胴部下位は連続するＳ字状刺突文により構成された円弧状刺突列(８単位)と並行刺突列(３段)、底面は環状刺突列が見られる。 調整：内面ナデ。	MM－16	—

第10表　遺物包含層出土石器観察表

図番号	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	出土位置	備　考
第74図39	石鏃	2.0	1.1	0.3	0.5	頁岩	ML－16	縦長剥片を使用。完形。基部に浅い抉り。裏面に主剥離面を残す。
第74図40	石鏃	1.6	1.3	0.3	0.3	頁岩	MO－16	完形。小型で、基部にやや浅い抉り。両面調整。
第74図41	石鏃	1.7	1.3	0.2	0.3	頁岩	MM－15	基部欠損。小型。両側縁に微細剥離。
第74図42	石鏃	2.5	1.5	0.3	1.1	頁岩	MN－16	縦長剥片を使用。完形。平基。表裏面に主剥離面を残す。
第74図43	石鏃	2.6	1.4	0.3	1.1	頁岩	MN－16	縦長剥片を使用。完形。基部に浅い抉り。表面に微細な鋸歯状剥離を施し、裏面に主剥離面を残す。
第74図44	石鏃	3.2	2.0	0.4	1.3	頁岩	ML－16	縦長剥片を使用。完形。鋸歯縁を持ち、基部に浅い抉り。表面は全面調整、裏面に主剥離面を残す。
第75図45	石鏃	3.8	1.4	0.6	3.4	頁岩	MM－16	完形。尖基鏃で、鋸歯縁を持つ。表面に主剥離面を残す。
第75図46	尖頭状石器	4.4	1.9	0.7	3.5	頁岩	MW－22	縦長剥片を使用。石鏃未製品か。表面は粗い調整を施し、裏面は主剥離面を残す。
第75図47	石匙	(7.8)	(2.5)	(0.6)	(11.1)	頁岩	MK－15	薄い縦長剥片を使用。つまみ部欠損。縦型。微細剥離が全周。
第75図48	石匙	(5.5)	(2.5)	(0.5)	(8.8)	頁岩	MN－15	縦長剥片を使用。先端部は欠損。縦型で、つまみ部は小さい。両側縁の微細剥離が著しい。
第75図49	石匙	6.7	3.2	0.7	13.4	頁岩	ML－15	縦長剥片を使用。完形。縦型であり、つまみ部が棒状。微細剥離が全周し、右側縁にやや急角度の刃部調整。
第75図50	石匙	7.3	2.1	0.6	12.1	頁岩	MM－14	縦長剥片を使用。完形。縦型で、つまみ部はやや大きい。表裏面に主剥離面を残し、右側縁は表面からの調整、左側縁から末端縁にかけては両面調整。
第75図51	石匙	7.6	3.0	0.8	20.0	頁岩	一括	縦長剥片を使用。完形。縦型で右側縁先端が鋭角に尖り、つまみ部はやや大きい。左側縁部は表裏面からの調整。
第75図52	石匙	5.6	2.7	0.6	8.2	頁岩	MM－15	縦長剥片を使用。完形。縦型で右側縁先端が鋭角に尖り、つまみ部は小さい。微細剥離が全周し、全体に丁寧な調整。
第75図53	石匙	6.0	2.6	0.7	7.8	頁岩	MN－15	縦長剥片を使用。完形。縦型。微細剥離が全周し、表面に主剥離面を残す。
第75図54	石匙	6.6	2.6	0.7	11.3	頁岩	ML－18	縦長剥片を使用。完形。縦型で、つまみ部は小さい。やや甲高で、断面は三角形。裏面に主剥離面を残す。
第75図55	石匙	6.1	2.9	0.8	12.7	頁岩	MO－18	縦長剥片を使用。つまみ部一部欠損。縦型で器体中央部に最大厚を持ち、つまみ部は大きい。全体に丁寧な調整
第75図56	石匙	4.7	3.6	0.6	8.1	頁岩	一括	縦長剥片を使用。完形。やや小型の縦型で、つまみ部は小さい。微細剥離が全周し、表面に自然面を残す。
第76図57	石匙	6.2	4.4	0.7	0.7	頁岩	MO－18	薄手の縦長剥片を使用。完形。つまみ部は棒状。
第76図58	石匙	6.6	3.3	0.6	13.6	頁岩	一括	縦長剥片を使用。完形。縦型で右側縁先端が鋭角に尖り、つまみ部がやや小さい。左側縁に裏面からの微調整。
第76図59	石匙	7.4	3.2	0.9	15.4	頁岩	MO－15	縦長剥片を使用。完形。縦型で右側縁先端が鋭角に尖り、つまみ部は大きい。微細剥離が全周。

図番号	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	出土位置	備　考
第76図60	石匙	7.7	4.3	0.9	16.0	頁岩	一括	縦長剥片を使用。末端縁一部欠損。縦型で右側縁先端が鋭角に尖り、つまみ部はやや大きい。右側縁に微細剥離が集中し、左半は主剥離面を残す。
第76図61	石匙	7.1	4.1	0.7	18.8	頁岩	MO－17	縦長剥片を使用。完形。縦型で右側縁先端が鋭角に尖る。左側縁は表裏面から調整。
第76図62	石匙	6.6	3.7	0.6	11.2	頁岩	MN－16	縦長剥片を使用。完形。縦型で右側縁先端が鋭角に尖り、つまみ部はやや小さい。表面は丁寧な斜方向の調整。
第76図63	石匙	6.6	3.8	0.6	14.4	頁岩	MJ－16	縦長剥片を使用。完形。縦型。胴部が幅広く右側縁先端が鋭角に尖り、つまみ部は小さい。表面右側縁に微細剥離が著しい。
第76図64	石匙	6.2	2.7	0.7	8.5	頁岩	MK－15	縦長剥片を使用。完形。縦型でつまみ部が小さい。表面右側縁に微細剥離が著しい。
第77図65	石匙	7.1	3.2	0.9	15.8	頁岩	MN－16	やや幅広な縦長剥片を使用。完形。縦型で、つまみ部はやや小さい。表面に丁寧な調整。
第77図66	石匙	7.3	3.7	0.9	12.8	頁岩	MO－17	縦長剥片を使用。完形。縦型で表面左側にやや湾曲し、つまみ部は小さい。微細剥離が全周。
第77図67	石匙	6.2	3.8	0.7	10.1	頁岩	MM－15	縦長剥片を使用。完形。狭長の縦型で、つまみ部は不明瞭。右側縁に急角度の調整を施し、左側縁は微細剥離。
第77図68	石匙	8.1	4.2	0.8	27.7	頁岩	MN－14	縦長剥片を使用。完形。縦型で、つまみ部は棒状。素材となった剥片の形態を活かし、右側縁に微細剥離が著しい。
第77図69	石匙	11.0	3.1	1.0	31.6	頁岩	MO－17	縦長剥片を使用。左側縁は一部欠損。縦型で尖端は石槍状に尖り、つまみ部はやや小さい。両面調整であり、斜方向の剥離。
第77図70	石篦	(4.2)	(4.1)	(1.0)	(23.6)	頁岩	MK－18	縦長剥片を使用。器体上半部欠損。刃部はほぼ直線で、両側縁は平行。刃部に微細剥離。
第77図71	石篦	6.1	3.1	1.2	23.6	頁岩	一括	縦長剥片を使用。完形。刃部はほぼ直線。片面調整で裏面には主剥離面を残し、両側縁は粗い階段状剥離。
第77図72	石篦	7.0	2.8	1.6	34.1	頁岩	MW－22	縦長剥片を使用。完形。甲高であり、断面は三角形。裏面に主剥離面を残す。
第78図73	石篦	6.3	1.5	3.6	11.2	頁岩	ML－18	完形。全体に粗い調整を施し、表裏面に主剥離面を残す。右側縁に急角度な調整を施し、両面調整。
第78図74	石篦	8.1	3.9	1.5	50.2	頁岩	MM－15	縦長剥片を使用。完形。調整が粗く、裏面に主剥離面を残す。
第78図75	石篦	8.2	3.5	1.3	44.1	頁岩	MM－15	縦長剥片を使用。完形。刃部がほぼ直線。全体に丁寧な剥離を施し、裏面に主剥離面を残す。
第78図76	石篦	6.4	4.0	1.3	34.3	砂岩	ML－14	完形。全体に丁寧な剥離を施し、両面調整。
第78図77	石篦	7.8	3.9	1.5	37.1	頁岩	MO－18	刃部欠損。先端部はゆるやかに尖る。丁寧な両面調整。
第78図78	石篦	(8.9)	(3.9)	(1.3)	(27.1)	頁岩	ML－14	基部欠損。両面調整であり、欠損部には階段状剥離。
第78図79	スクレイパー	7.0	0.9	3.4	17.3	頁岩	一括	縦長剥片を使用。完形。鋸歯縁を持つ。表面に調整が集中。
第78図80	サイドスクレイパー	5.7	4.7	1.0	19.8	頁岩	MK－17	横長剥片を使用。完形。片面調整であり、裏面に主剥離面を残す。

表採遺物

土器３点、石器４点を図示した（第79図）。１はMI－18グリッド付近の調査区壁から出土し、２はMV－26グリッド付近の遺構確認面から出土した。

出土遺物

縄文土器（第79図１～３、図版36）

１は深鉢形土器である。口縁部から胴部にかけてほぼ残存しており、口径28.3cm（推定）を測る。口唇部にキザミを施し、胴部文様にループ文（単節RL）が多段に施文されている。２は頸部から口縁部に向かって大きく外側に開く波状口縁（８単位）の深鉢形土器である。口縁部から胴部にかけてほぼ残存しており、口径33.2cmを測る。また底部は残存していないが、胴部中位から底部に向かってすぼまっている。口縁部文様はループ文（単節RL）が施文され、頸部以下の文様は結束のない羽状縄文が多段に施文されている。器形・文様等の特徴から大木１式に相当する。３は口縁部文様にループ文（単節LR）が施文されている。

石器（第79図４～７、図版36）

石鏃（４）右脚部が欠損している。石材は頁岩である。

石匙（５、６）５は右側縁先端が鋭角に尖り、左側縁は鋸歯状であり、石材は長石である。６は先端部が平坦である。石材は頁岩である。

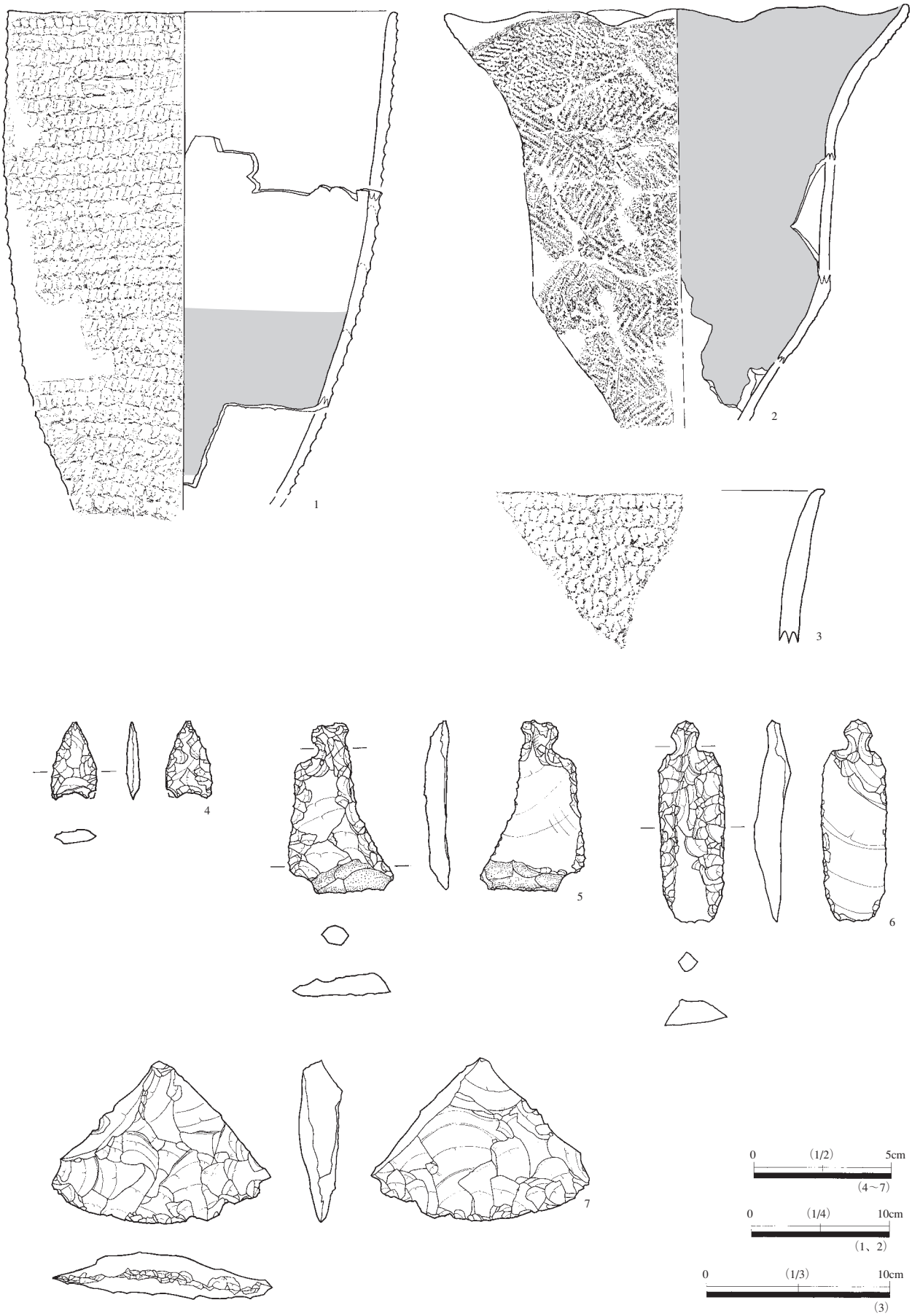
スクレイパー（７）横長剥片を使用している。（中山雄市）

第11表　表採遺物

図番号	器種	法量(cm) 残存部位	色　調	含　有　物	文様・調整	出土位置	備　考
第78図1	深鉢	口径：(28.3) ほぼ完形	外面：にぶい黄褐(10YR5/4) 内面：にぶい黄橙(10YR7/4)	石英１％ 長石１％	文様：口唇部に条の還付部を連続して押圧施文。ループ文(単節RL)を多段に施文。 調整：内面ナデ。	遺構外	繊維混入。
第78図2	深鉢	口径：33.2 ほぼ完形	外面：明褐(7.5YR5/6) 内面：黒褐(7.5YR3/1)	長石１％ 白色砂粒１％	文様：口縁部はループ文(単節RL)、頸部以下は結束のない羽状縄文を多段に施文。 調整：内面ナデ。	遺構外	繊維混入。
第78図3	—	口縁部片	外面：明黄褐(10YR6/6) 内面：にぶい黄橙(10YR7/4)	骨針・石英１％ 長石１％	文様：ループ文(単節LR)を多段に施文。 調整：内面ナデ	遺構外	繊維混入。

第12表　表採石器観察表

図番号	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	出土位置	備　考
第79図4	石鏃	3.8	1.6	0.4	1.8	頁岩	MO－17	右脚部欠損。粗い両面調整。
第79図5	石匙	6.2	3.8	0.8	16.1	長石	MU－22	縦長剥片を使用。ほぼ完形。縦型で右側縁先端が鋭角に尖る。 左側縁は鋸歯状で、右側縁に急角度の剥離。
第79図6	石匙	7.3	2.4	0.9	17.3	頁岩	MP－22	縦長剥片を使用。完形。縦型で先端部は平坦であり、つまみ部は小さい。 表面に一部主剥離面を残す。
第79図7	スクレイパー	(5.9)	(8.0)	(1.4)	(53.7)	頁岩	LZ－17	横長剥片を使用。左側縁一部欠損。 両面調整を施し、刃部に微細剥離。



第79図　表採遺物

第４章　河原崎遺跡の自然科学分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

河原崎遺跡は、秋田県秋田市雄和相川字河原崎地内に所在し、雄物川左岸の沖積低地に立地する。標高は約14ｍで、雄物川との比高は約10ｍである。本遺跡は、縄文時代前期と中期、平安時代の複合遺跡であり、発掘調査区からは竪穴住居跡２軒（縄文時代中期）、土坑51基（縄文時代前期・中期、平安）、溝跡１条（縄文時代）、焼土遺構64基（縄文時代前期）、土器埋設遺構２基（縄文時代前期）の遺構が検出されている。

今回の分析調査では、３区の基本土層及び、縄文時代中期の竪穴住居跡内に認められた石囲炉より採取した試料を対象とし、古環境・植物利用に関する情報を得ることを目的として、珪藻分析、花粉分析、微細物分析を実施する。

１　層序と試料

基本層序は、下位から第Ｘ層～第Ⅰ層に分層されている。最下位の第Ｘ層は明黄褐色粘質土からなる。第Ⅸ層は灰白色砂、第Ⅷ層は明黄褐色砂、第Ⅶ層は褐色砂である。第Ⅵ層は堅く締まる黄褐色砂、第Ⅴ層は明黄褐色砂・明黄褐色粘質土からなり、第Ⅵ層、第Ⅴ層はいずれも縄文時代前期の遺物包含層とされている。また、場所により第Ⅳ層と第Ⅴ層の間に褐色砂や明黄褐色粘質土、灰白色土等が堆積している箇所や、上層で確認された層が下層にもぐり込んだ状況が確認された。これは調査区が雄物川に近接していることから、川の氾濫等の影響を受け、互層状に堆積していると考えられている。第Ⅳ層はやや粘性がある黄褐色砂である。第Ⅲ層は暗褐色砂で、縄文時代中期の遺物包含層とされている。第Ⅱ層は黄褐色粘質土の混じる暗褐色土からなる造成土、第Ⅰ層は暗褐色土からなる表土・耕作土である。この基本層序の内、３区のＣ－Ｃ'ライン断面の第Ⅴ層で採取された土壌試料について、珪藻分析、花粉分析各１点を実施する。

また、３区ＳＩ01は縄文時代中期とされる竪穴住居跡であり、住居の主軸上に並列して２基の炉が確認された。北側は土器埋設炉で、南側は石囲炉である。切り合い関係から、石囲炉が新しい。２基の炉の埋土は９層に分層されており、最下位の９層は住居を構築した際の貼床である。８層から６層は土器埋設炉の構築土であり、埋設土器を据えた際に使われた土器片が検出されている。５層から３層は石囲炉の構築土である。また、４、３層は５層の一部であり、被熱を受けて赤く変色している。なお、炭化物は検出されず、おそらく削平されて間接被熱を受けた層のみが残存したと考えられている。２層は構築後に堆積した土であり、１層は表土である。このうち、石囲炉の覆土試料（試料名「１号集石　赤砂」）について、微細物分析１点を実施する。

２　分析方法

⑴　珪藻分析

試料を湿重で７ｇ前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・科学処理を施して、

珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer & Lange-Bertalot（1986、1988、1991a、1991b）、渡辺（2005）、小林ほか（2006）、などを参照し、分類体系はRound, Crawford & Mann（1990）に従う。なお、壊れた珪藻殻の計数基準は、柳沢（2000）に従う。

同定結果は、中心類（Centric diatoms；広義のコアミケイソウ綱 Coscinodiscophyceae）と羽状類（Pennate diatoms）に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類（Araphid pennate diatoms：広義のオビケイソウ綱 Fragilariophyceae）と有縦溝羽状珪藻類（Raphid pennate diatoms；広義のクサリケイソウ綱 Bacillariophyceae）に分ける。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分する。

各種類の生態性については、Vos & de Wolf（1993）を参考とするほか、塩分濃度に対する区分はLowe（1974）に従い、真塩性種（海水生種）、中塩性種（汽水生種）、貧塩性種（淡水生種）に類別する。また、貧塩性種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。堆積環境の解析にあたり、淡水生種（貧塩性種）については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性についてはAsai & Watanabe（1995）、渡辺（2005）の環境指標種を参考とする。

表1　珪藻分析結果

種　　類	生態性			環　境	3区
	塩分	pH	流水	指標種	第V層
Bacillariophyta（珪藻植物門）					
Centric Diatoms（中心型珪藻類）					
Aulacoseira ambigua（Grun.）Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N,U	1
Aulacoseira granulata（Ehr.）Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,U	1
Aulacoseira islandica（O.Mull.）Simonsen	Ogh-ind	ind	l-ph	U	1
Aulacoseira italica（Ehr.）Simonsen	Ogh-ind	ind	l-ph	U	1
Coscinodiscus sp.	Euh				1
Paralia sulcata（Ehr.）Cleve	Euh			B	2
Cyclotella omarensis（Kupts.）Loseva & Makarova	Ogh-ind	unk	l-ph		1
Thalassiosira sp.	Euh				1
Araphid Pennate Diatoms（無縦溝羽状珪藻類）					
Araphidineae（無縦溝類）					
Grammatophora hamulifera Kuetzing	Euh				1
Thalassionema nitzschioides（Grun.）Grunow	Euh			A,B	3
海水生種					8
海水～汽水生種					0
汽水生種					0
淡水～汽水生種					0
淡水生種					5
珪藻化石総数					13

凡例

H.R.：塩分濃度に対する適応性　pH：水素イオン濃度に対する適応性　C.R.：流水に対する適応性

Euh　：海水生種　al-il：好アルカリ性種　l-bi　：真止水性種

Ogh-ind　：貧塩不定性種　ind　：pH不定性種　l-ph　：好止水性種

Ogh-unk：貧塩不明種　unk：pH不明種

環境指標種群

A：外洋指標種，B：内湾指標種（小杉，1988）

N：湖沼沼沢湿地指標種，M：湖沼浮遊性種（安藤，1990）

U：広域適応性種（Asai & Watanabe，1995）

⑵ 花粉分析

試料約10ｇについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

⑶ 微細物分析

試料 200cc（465.5g）を粒径0.5㎜の篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて種実や炭化材などの植物質遺物を抽出する。検出された炭化材は、48時間70℃乾燥後の重量を求める。

3 結 果

⑴ 珪藻分析

結果を表１に示す。３区第Ⅴ層試料は、珪藻化石の産出状況が悪く、合計で13個体と少ない。少ないながらも産出する珪藻化石をみると、海水生種と淡水生種が混在している。海水生種は、海水浮遊性の Paraliasulcata、Thalassionema nitzschioides、海水付着性の Grammatophora namulifera 等が産出する。淡水生種では、淡水浮遊性種の Aulacoseira ambigua, Aulacoseira granulata, Aulacoseira islandica, Aulacoseira italica 等が産出する。

表２ 花粉分析結果

種 類	試料番号	３区第Ⅴ層
木本花粉		
トウヒ属	1	
マ ツ 属	1	
草本花粉		
ヨモギ属	1	
シダ類胞子		
シダ類胞子	2	
合 計		
木本花粉	2	
草本花粉	1	
シダ類胞子	2	
総 計	5	

⑵ 花粉分析

結果を表２に示す。３区第Ⅴ層からは検出される花粉化石数は少なく、定量分析を行うだけの個体数は得られなかった。検出された種類をみると、木本花粉ではトウヒ属、マツ属が、草本花粉でヨモギ属が、それぞれ１個体ずつ認められるのみである。また、検出された花粉化石の保存状態は悪く、いずれも花粉外膜が破損あるいは溶解している状態で産出した。プレパラート内の状況写真を図版１に示す。

⑶ 微細物分析

同定可能な種実や骨片は確認されず、最大３㎜角程度の炭化材９個（0.01ｇ未満）、菌類の菌核４個（0.01ｇ未満）が検出されるのみである。

4 考 察

⑴ 古環境

縄文時代前期遺物包含層とされる３区第Ⅴ層は、珪藻化石の産出が非常に少なく、堆積環境について検討する上での有意な数量が得られなかった。よって、珪藻化石の生態的特徴から堆積環境について検

討することは困難である。

なおこれについては、本遺跡が雄物川流域に形成された沖積低地内の微高地上に立地し、縄文時代前期～中期にかけての遺構・遺物が検出されること、該当する時期の層相が比較的砂質であることなどの事実から、当該期は基本的には離水した状況で風化が進みやすく、同時に雄物川の氾濫の影響などを受けやすいという環境条件下にあったことが原因である可能性がある。本遺跡は縄文時代前期にはすでに離水していたため本来水生珪藻の生育が悪く、また化石として堆積した後も風化の影響を受けやすかったことが想定される。さらに、珪藻化石はシルト粒子以下の微細な砕屑物と挙動を共にする（小杉，1988）とされることから、化石として堆積後天水や雄物川の増水などに伴う水の移動に伴って層外に流亡した可能性もある。以上の点に加え、今回産出した珪藻化石群集は生育環境の異なる海水生種と淡水浮遊生種とが混在していたことから、雄物川の集水域に点在する時代や堆積環境の異なる土壌が本地点に供給され、風化に強い種類が選択的に残存したことが推測される。なおこれらの海生種は、雄物川中～下流域に分布する天徳寺層や船川層などの新第三紀層から供給されたと考えられる。

一方花粉化石も産出状況が悪く、木本類ではトウヒ属、マツ属が、草木類ではヨモギ属が検出されるのみである。このことから、当時周辺域にはトウヒ属、マツ属等の針葉樹、ヨモギ属等の草本類が生育していたと考えられる。一般的に花粉やシダ類胞子は、腐触に対する抵抗性が種類により異なっており、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている（中村，1967；徳永・山内，1971；三宅・中越，1998など）。また、花粉が常に酸化状態に置かれている場所では、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている。今回検出された花粉化石は、比較的分解に強い花粉や分解が進んでも同定可能な種類であり、いずれの花粉外膜も破損・溶解している。さらに、前述したように、本試料堆積時の堆積環境は、好気的環境であったことが推定されている。以上より今回検出された花粉・シダ類胞子化石は、本試料堆積時に取り込まれた花粉がその後の経年変化により分解・消失し、分解に強い花粉が選択的に残存したと考えられる。

⑵ 植物利用

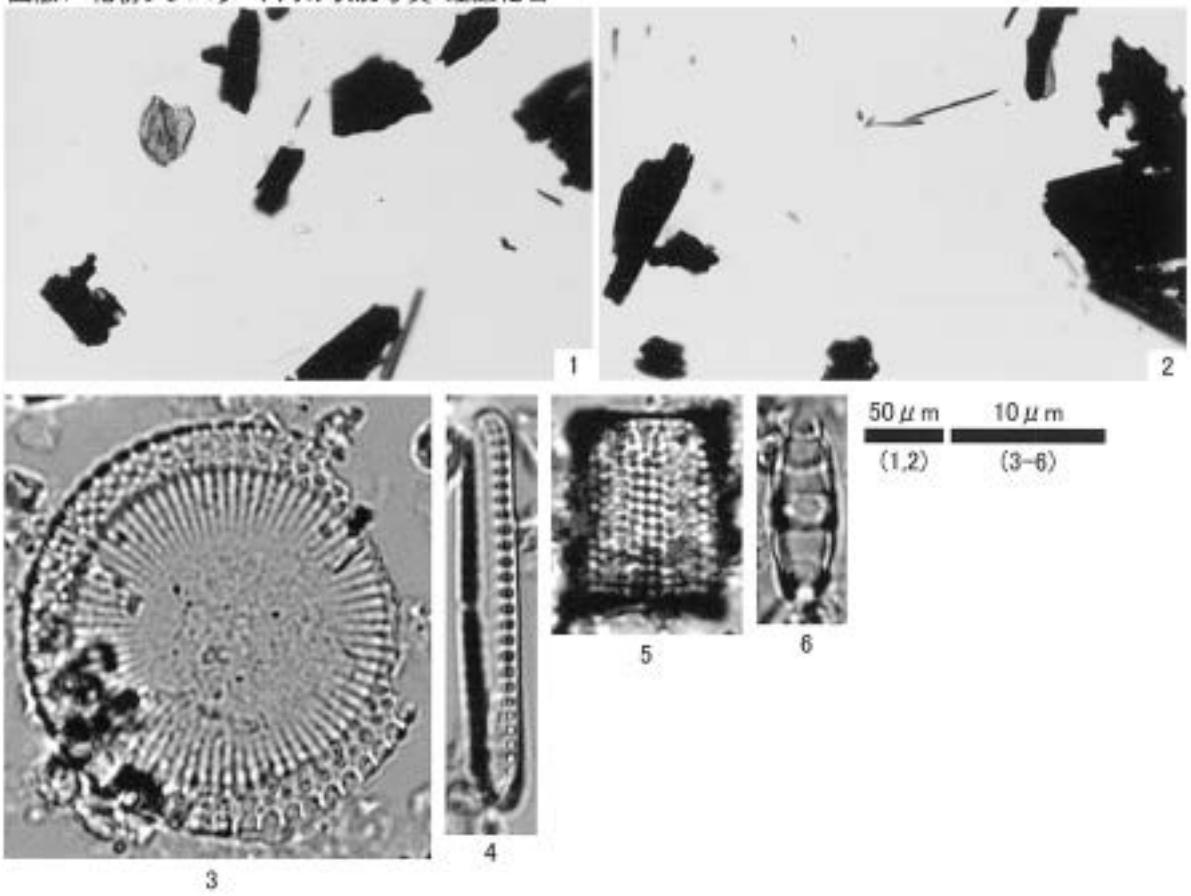
縄文時代中期の竪穴住居跡とされる３区 SI01 の石囲炉埋土（試料名「１号集石　赤砂」）からは、種実遺体や動物遺体は１個体も検出されなかった。わずかに、微小な炭化材、菌類の菌核が検出されるのみである。よって、当時の住居内石囲炉使用に伴う動植物利用について言及することは困難である。対象試料は被熱のため赤く変色しているが、発掘調査所見から上層が削平されて炉床に近い被熱層のみが残存した部分と考えられている。このことから、種実遺体が検出されなかったのは、炉埋土の大部分が削剥されてしまったことが原因と思われる。ただし、全ての埋土が削剥されているわけではないことから、検出された炭化材が石囲炉使用時に使用した燃料材の可能性もある。その場合、周辺植生に由来する木材を用いた可能性が想定されるが、得られた炭化材はごく微小であることから樹種同定を行うことはできなかった。

引用文献

安藤一男，1990，淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，73-88.
Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution（2）Saprophilous and saproxenous

taxa. Diatom, 10, 35-47.
原口和夫・三友清史・小林　弘，1998，埼玉の藻類　珪藻類．埼玉県植物誌，埼玉県教育委員会，527-600.
Hustedt, F., 1937-1939, Systematische und okologische Untersuchungen uber die Diatomeen-Flora von Java,, Bali und Sumatra. Archiv fur Hydrobiology, Supplement, 15 : 131-177, 15 : 187-295, 15 : 393-506, 15 : 638-790, 16 : 1-155, 16 : 274-394.
伊藤良永・堀内誠示，1991，陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，23-45.
小杉正人，1988，珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，1-20.
小林　弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲　保・長田啓五，2006，小林弘珪藻図鑑．第１巻，㈱内田老鶴圃，531p.
Krammer, K., 1992, PINNULARIA. eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J. CRAMER, 353p.
Krammer, K. & Lange-Bertalot,　H., 1986, Bacillariophyceae. 1. Teil : Naviculaceae. In : Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/1. Gustav Fischer Verlag, 876p.
Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1988, Bacillariophyceae. 2. Teil : Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In : Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2. Gustav Fischer Verlag, 536p.
Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991a, Bacillariophyceae. 3. Teil : Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. In : Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/3. Gustav Fischer Verlag, 230p.
Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991b, Bacillariophyceae. 4. Teil : Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula （Lineolatae） und Gomphonema. In : Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/4. Gustav Fischer Verlag, 248p.
Lowe, R.L, 1974, Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334p. In Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U. S. Environ. Protect. Agency, Cincinati.
三宅　尚・中越信和，1998，森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態．植生史研究，6，15-30.
中村　純，1967，花粉分析．古今書院，232p.
Round, F. E.., Crawford, R. M. & Mann, D. G. 1990, The diatoms. Biology & morphology of the genera. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
徳永重元・山内輝子，1971，花粉・胞子．化石の研究法，共立出版株式会社，50-73.
Vos,　P. C. & H. de Wolf, 1993, Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands ; methodological aspects. Hydrobiologica, 269/270, 285-296.
渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻　彰洋・伯耆晶子，2005，淡水珪藻生態図鑑．内田老鶴圃，666p.
柳沢幸夫，2000，Ⅱ-1-3-2-（5）計数・同定．化石の研究法―採集から最新の解析法まで―，化石研究会，共立出版株式会社49-50.

図版1　花粉プレパラート内の状況写真・珪藻化石



1．状況写真(3区;第Ⅴ層)
2．状況写真(3区;第Ⅴ層)
3．*Paralia sulcata* (Ehr.)Cleve(3区;第Ⅴ層)
4．*Thalassionema nitzschioides* (Grun.)Grunow(3区;第Ⅴ層)
2．*Aulacoseira islandica* (O.Mull.)Simonsen(3区;第Ⅴ層)
3．*Grammatophora hamulifera* Kuetzing(3区;第Ⅴ層)

第5章　ま　と　め

1　遺跡の立地について

河原崎遺跡は、標高約14ｍの沖積低地で雄物川が大きく蛇行する左岸の自然堤防上に立地する。

遺跡一帯は、昭和20年代に行われた水田整備の際に、縄文時代中期以降の生活面が大部分削平されたと考えられる。このことは、調査２、３区では表土除去後に縄文時代中期の第Ⅲ層が認められるのに対して、調査１区では第Ⅲ層は削平されており、直ぐに第Ⅴ層の縄文時代前期の遺構面となることからも確認できる。

また、遺跡にトレンチを５本設定して土の堆積状況を確認したところ、調査１区では南西から北東にかけて上位で認められた層が下位に潜り込み波状を呈して堆積していることが観察され、この一帯が雄物川の氾濫原であったことが考えられる。

2　検出遺構について

調査の結果、遺構は竪穴住居跡２軒、土坑53基、焼土遺構64基、溝跡１条、土器埋設遺構２基が確認された。

竪穴住居跡は調査３区の第Ⅳ層から２軒確認されたが、大部分が後世の削平によって失われていた。１号住居跡は床の一部と炉、２号住居跡は炉のみの確認である。炉は１号住居跡が土器埋設炉と石囲炉の２時期あり、前者が古いことが確認され、２号住居跡は土器埋設部と掘り込み部からなる複式炉で、炉の埋設土器はいずれも大木10式土器であることから、時期は縄文時代中期後葉である。周辺の当該期の遺跡で確認された大木10式期の住居跡は、本遺跡から北約2.7㎞の雄物川右岸の標高約83ｍに立地する駒坂袋Ⅰ遺跡[註1]（雄和椿川字駒坂袋）で２軒、北西約3.6㎞の雄物川右岸の標高約60ｍに立地する奥椿岱遺跡[註2]（雄和椿川字奥椿岱）で４軒、北西約3.9㎞の雄物川右岸の標高約61ｍに立地する上祭沢遺跡[註3]（河辺戸島字上祭沢）で１軒、北約4.6㎞の雄物川右岸の標高約37ｍに立地する井戸尻台Ⅰ遺跡[註4]（河辺戸島字井戸尻台）で７軒、北西約5.3㎞の雄物川右岸の標高約20ｍに立地する鹿野戸遺跡[註5]（雄和椿川字鹿野戸）で１軒確認されている。しかし、これらの遺跡は河岸段丘上に立地しており、沖積低地の雄物川岸で発見された例は本遺跡が初めてであり、今後遺跡の分布などを調査するうえで注目しなければならないことが今回の調査で分かった。

土坑は53基確認された。形態は平面形が楕円形ないしは円形を呈し、小規模で浅いものが主体である。時期は、調査１区の11号土坑は４類土器が出土していることから、縄文時代前期と考えられる。６号土坑から回転糸切り無調査の赤褐色土器が、４号土坑からも底部を欠いているが同様の赤褐色土器が出土していることから、これらはいずれも９世紀後半頃のものと考えられる。調査２、３区は10号土坑から５類土器が、26号土坑から７類土器が出土している。また、25号土坑は10号土坑に切られていることから、これらは縄文時代前期のものと考えられる。22、40号土坑は第Ⅳ層で検出されたことから中期、他の土坑は第Ⅴ層から検出されたことから、前期前葉と考えられる。性格については、10、31号土坑から多量の石器剥片が出土していることから、石器製作の際に生じた剥片の捨て場として使用されたと考えられるが、その他については不明である。縄文時代前期前葉の土坑は、本遺跡から北西約８㎞の御所野台地縁辺部の標高約35ｍに立地する狸崎Ｂ遺跡[註6]や、北西約18㎞の旭川左岸の標高約20ｍに立地する地ノ

内遺跡[註7]などで確認されている。

焼土遺構は64基確認された。形態は、平面形が楕円形ないしは円形を呈する比較的小規模のものが主体をなし、強く焼けているものが多い。そして、焼土遺構に伴う竪穴住居跡や柱穴跡などの遺構は確認されていないことと、小範囲に密集して分布していることなどから、屋外で使用された炉の可能性が考えられる。時期は、確認された層位や焼土の中から出土した土器から、縄文時代前期前葉と考えられる。性格は、暖や調理をするための炉、漁労による捕獲品の加工に伴う施設などが考えられるが、性格を特定するには至らなかった。

土器埋設遺構は２基確認された。いずれも周辺に柱穴等が確認されなかったことや被熱が認められないことから、土器埋設炉としてではなく墓としての使用が考えられるが、断定はできなかった。時期は、１号土器埋設遺構の埋設土器は１類土器であることから縄文時代前期前葉の大木１式期と考えられる。

3　出土した縄文土器について

遺物は土器・土製品・石器等がコンテナで約35箱出土した。そのうち調査１区出土の土器について、施文様により13類に分類した。１類土器は、端部に環の付いた原体を、２類土器は側面に環の付いた原体を施すもので、大木１式土器にみられるものである。３類は不整撚糸文を施すもので大木２ａ式土器、４類は綾絡文を施すもので大木２ａ・ｂ式土器、５類は羽状縄文を施すもので大木２ａ・ｂ式土器にみられるものである。６類は結束のある原体で斜行縄文を、７類は組紐による原体で回転文を施すもので、１類や５類を含めて関山式土器にみられるものである。また、７類は円筒下層ａ式土器でも一部認められる。８類は網目状撚糸文を施すもので、円筒下層ｂ式期から認められるものである。10類の沈線で文様を施すものは、大木６式土器にみられるものである。９類の刺突を施すもの、11類の地文のみのもの、12類の無文のもの、13類の深鉢形土器の底部は、１～８、10類土器と同じ第Ⅴ層から出土していることや胎土と焼成が類似することから前期の土器と考えられる。これらの土器で、１類は秋田市寺内所在の児桜貝塚[註8]や山本郡二ツ井町（現能代市）所在の烏野上岱遺跡[註9]、２類は児桜貝塚、３～６、８、９類は児桜貝塚、秋田市御所野丘陵部遺跡群の坂ノ上Ｂ遺跡[註10]や狸崎Ｂ遺跡、同市添川所在の地ノ内遺跡、同市雄和向野所在の向野遺跡[註11]、７類は仙北郡南外村（現大仙市）所在の小出Ⅰ遺跡[註12]や平鹿郡大森町（現横手市）所在の下田遺跡[註13]で出土しており、縄文時代前期前葉に位置付けられる。10類土器は坂ノ上Ｂ遺跡などで出土しており、前期後葉に位置付けられる。

調査２、３区で出土した土器は、第Ⅳ層で検出された竪穴住居跡の土器埋設炉の土器に磨消縄文が施されていることから、縄文時代中期後葉の大木10式土器である。その他、第Ⅴ層検出の土坑や焼土遺構出土土器、および石器集中地点出土土器、それに第Ⅴ層出土土器は調査１区の１～９類土器と同様のものであることから、縄文時代前期前葉の土器である。

4　おわりに

今回調査を行った河原崎遺跡は、縄文時代前・中期、古代の複合遺跡であることが判明し、雄物川左岸の沖積低地に形成された自然堤防上に営まれたことが分かった。

縄文時代前期の遺構は、土坑・焼土遺構・土器埋設遺構が確認され、竪穴住居跡は認められない。そして、石錘が多く出土していることや、調査１区中央部や西側、それに調査２、３区10、31号土坑埋土、石器集中地点で剥片・チップ・残核・石核が多量に出土していることなどから、当該地は雄物川での狩

猟に関係する場所であったと推測され、居住域は近辺に所在していたと考えられる。

縄文時代中期末の遺構は竪穴住居跡２軒、古代の遺構は土坑２基が確認されたのみであるが、削平によって遺構が失われた可能性もあり、縄文時代前期と同様に狩猟の場として使用されたと考えられる。

調査は、これまで遺跡が確認されていなかった雄物川左岸の沖積低地上では初めての発掘調査であったが、縄文時代前期から古代にかけての利用状況が判明し、また、秋田市内で出土例が少なかった縄文時代前期前葉のまとまった土器資料が得られたことから、大きな成果をあげることができたと考えている。

註１　「秋田県立中央公園スポーツゾーン地域内遺跡発掘調査報告書－駒坂袋Ⅰ遺跡」　秋田県文化財調査報告書第92集　秋田県教育委員会　1982年３月

註２　「奥椿岱遺跡－秋田空港アクセス道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－」　秋田県文化財調査報告書第305集　秋田県教育委員会　2000年３月

註３　「高速交通関連道路整備事業（和田御所野）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－上祭沢遺跡－」秋田県文化財調査報告書第195集　秋田県教育委員会　1990年３月

註４　「井戸尻台Ⅰ遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ」　秋田県文化財調査報告書第313集　秋田県教育委員会　2001年３月

註５　「新秋田空港周辺遺跡鹿野戸遺跡発掘調査報告書」　秋田県文化財調査報告書第38集　秋田県教育委員会　1976年３月

註６　「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書　狸崎Ｂ遺跡」　秋田市教育委員会　1993年３月

註７　「地ノ内遺跡　－宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書－」　同和住研工業株式会社／大平不動産株式会社／秋田市教育委員会　1997年３月

註８　「児桜貝塚」　秋田考古学協会　1965年９月

註９　「烏野上岱遺跡－一般国道７号琴丘能代道路事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅥ－」　秋田県文化財調査報告書第406集　秋田県教育委員会　2006年３月

註10　「小阿地（下堤遺跡／坂ノ上遺跡）発掘調査報告書」　秋田市教育委員会　1976年３月

註11　「向野遺跡－携帯電話無線基地局建設工事に伴う緊急発掘調査報告書－」　秋田市教育委員会　2006年３月

註12　「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅷ－小出Ⅰ遺跡－」　秋田県文化財調査報告書第206集　秋田県教育委員会　1991年３月

註13　「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅳ－下田遺跡－」　秋田県文化財調査報告書第189集　秋田県教育委員会　1990年３月

参考文献

雄和町：「雄和町史」　1976年６月

雄和町：「雄和町史　追補篇」　1977年９月

安田忠市：「秋田市「坂ノ上Ｂ遺跡」採集の遺物について」　秋田市史研究第２号　1993年８月１日

新海和宏：「秋田県内の縄文時代前期初頭～前葉期土器群の様相再検討－烏野上岱遺跡Ⅱ群土器の再分類－」　秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第21号　2007年３月

調査区全景（北西から）

調査区全景（南東から）

図版 1

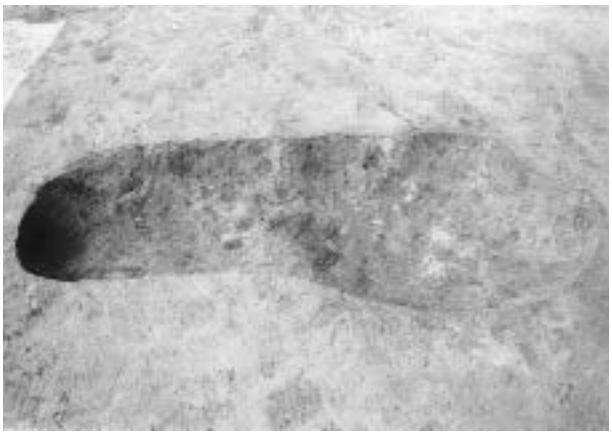
調査１区全景（南東から）

調査１区２号トレンチ土層堆積状況（南から）

図版 2

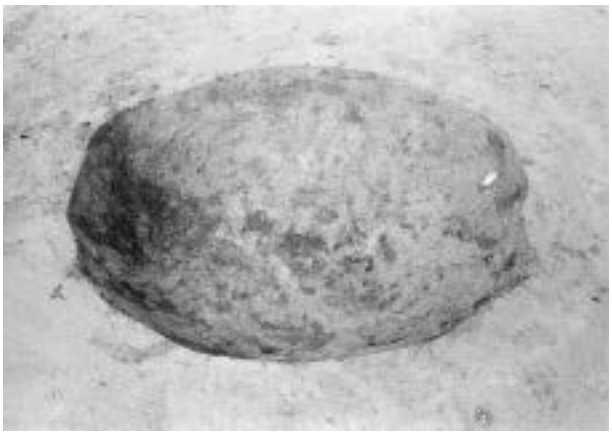
1号土坑（南から）

2、3土坑（西から）

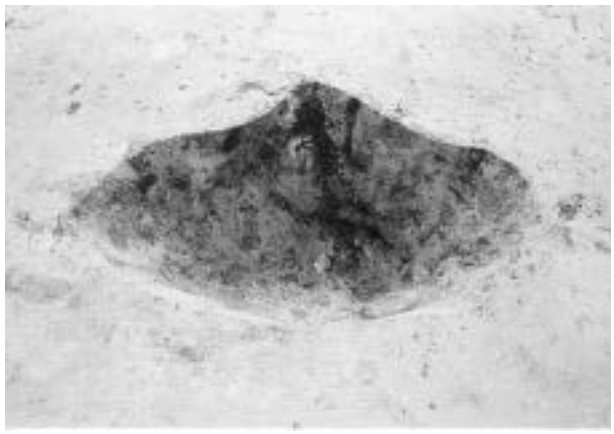


4号土坑（西から）

5号土坑（南から）



6号土坑（南から）



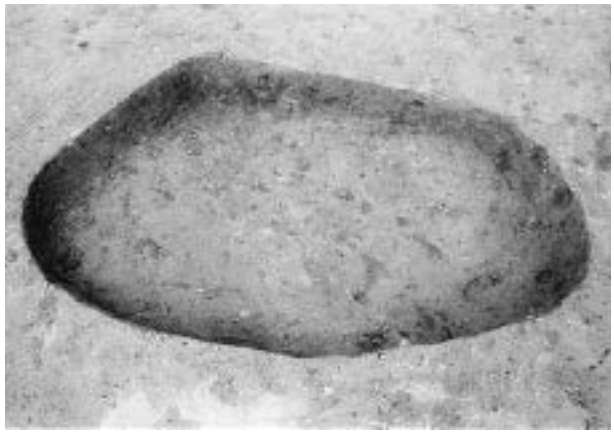
7号土坑（西から）

8号土坑（西から）

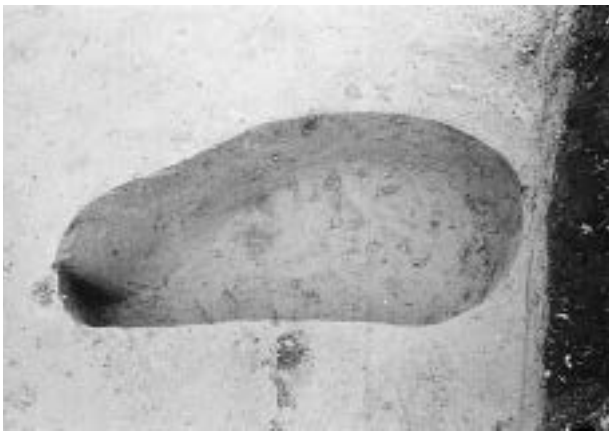
9号土坑（南から）

図版 3

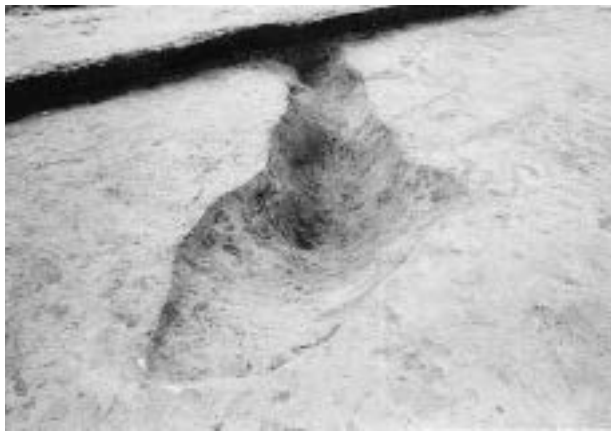
10号土坑（西から）



11号土坑（西から）



12号土坑（西から）



1 号溝跡（東から）

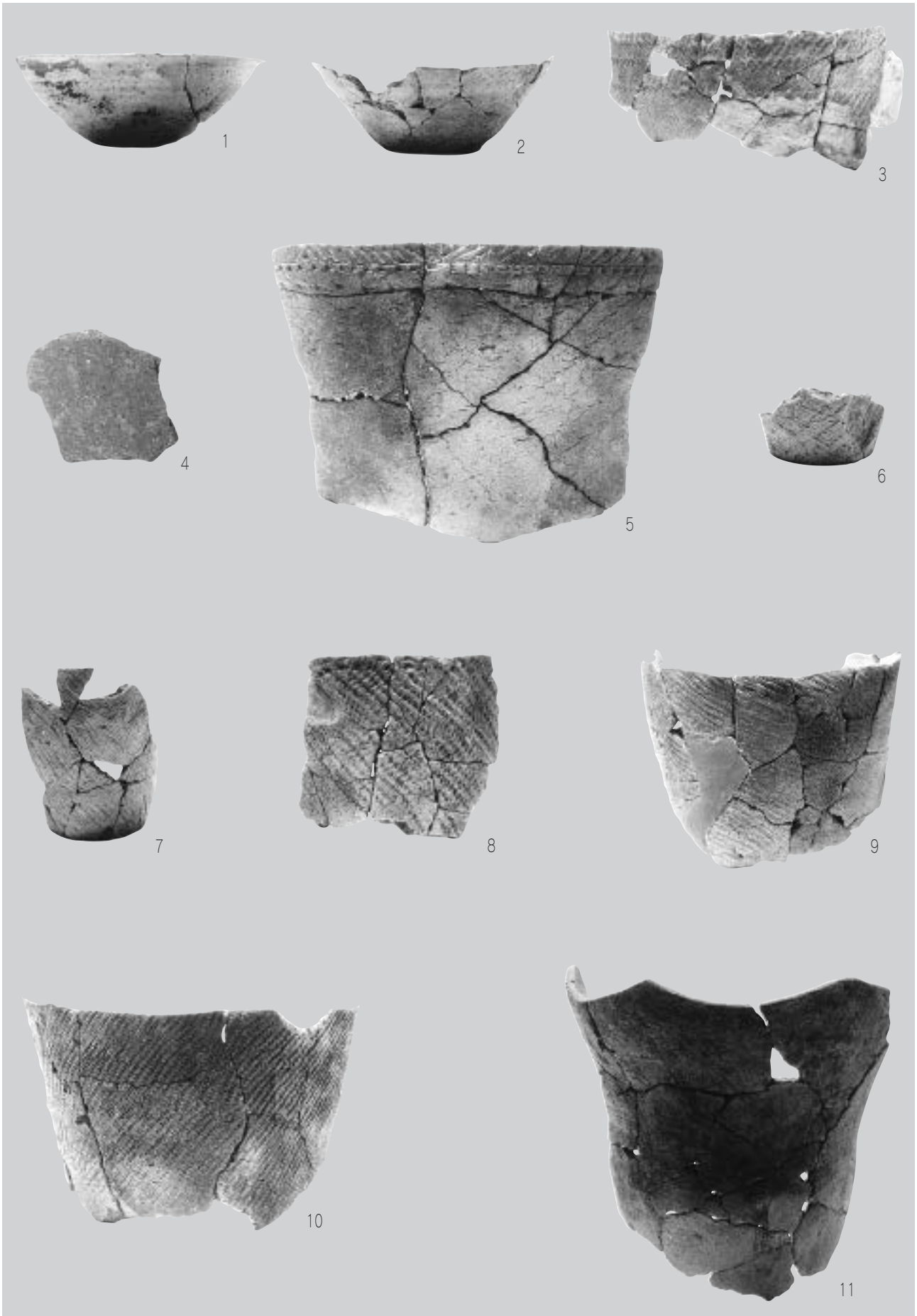
1 号土器埋設遺構（南から）

2 号土器埋設遺構（南から）

調査 1 区土器出土状況

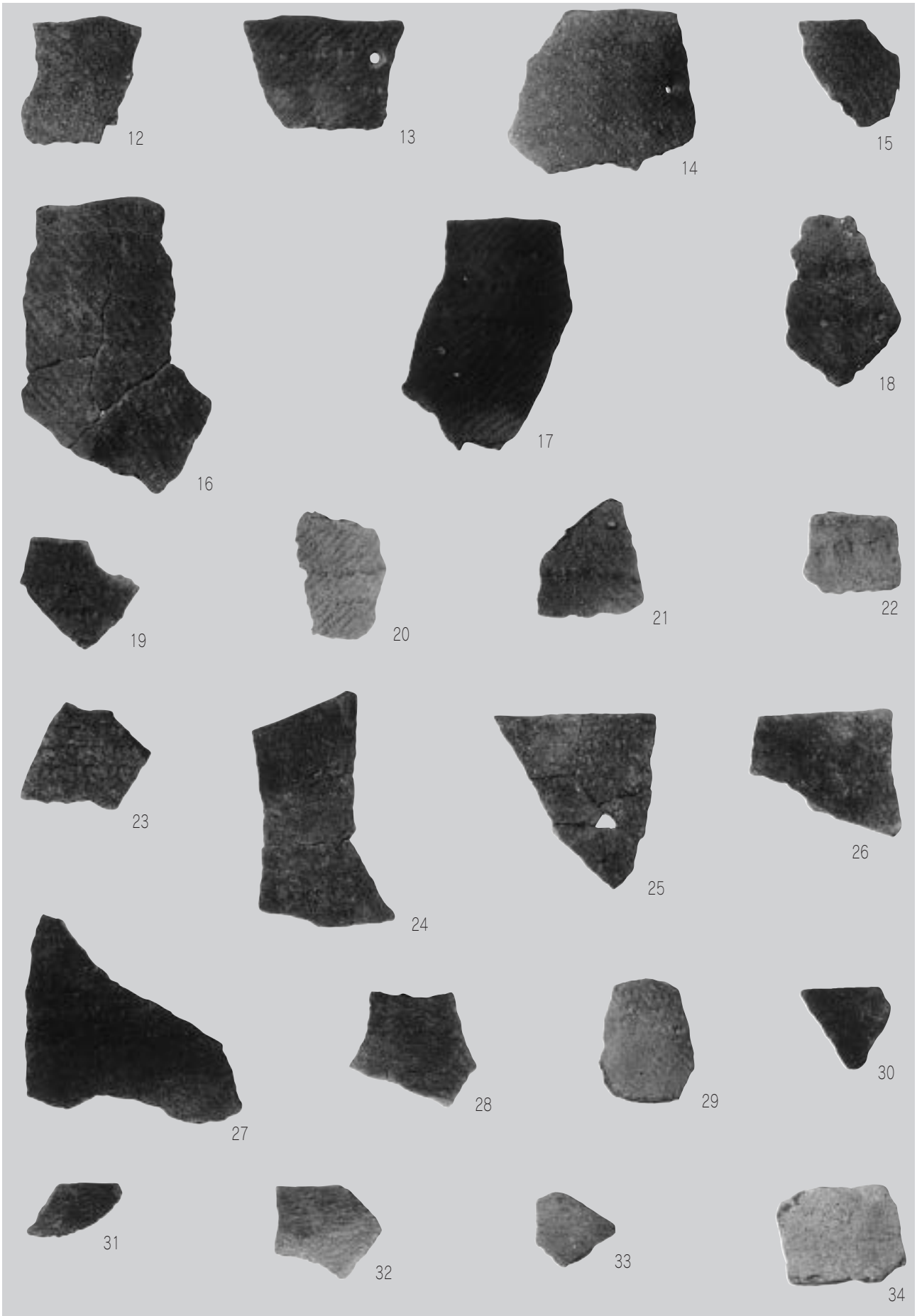
調査 1 区土器出土状況

図版 4



遺構内・外出土土器

図版 5

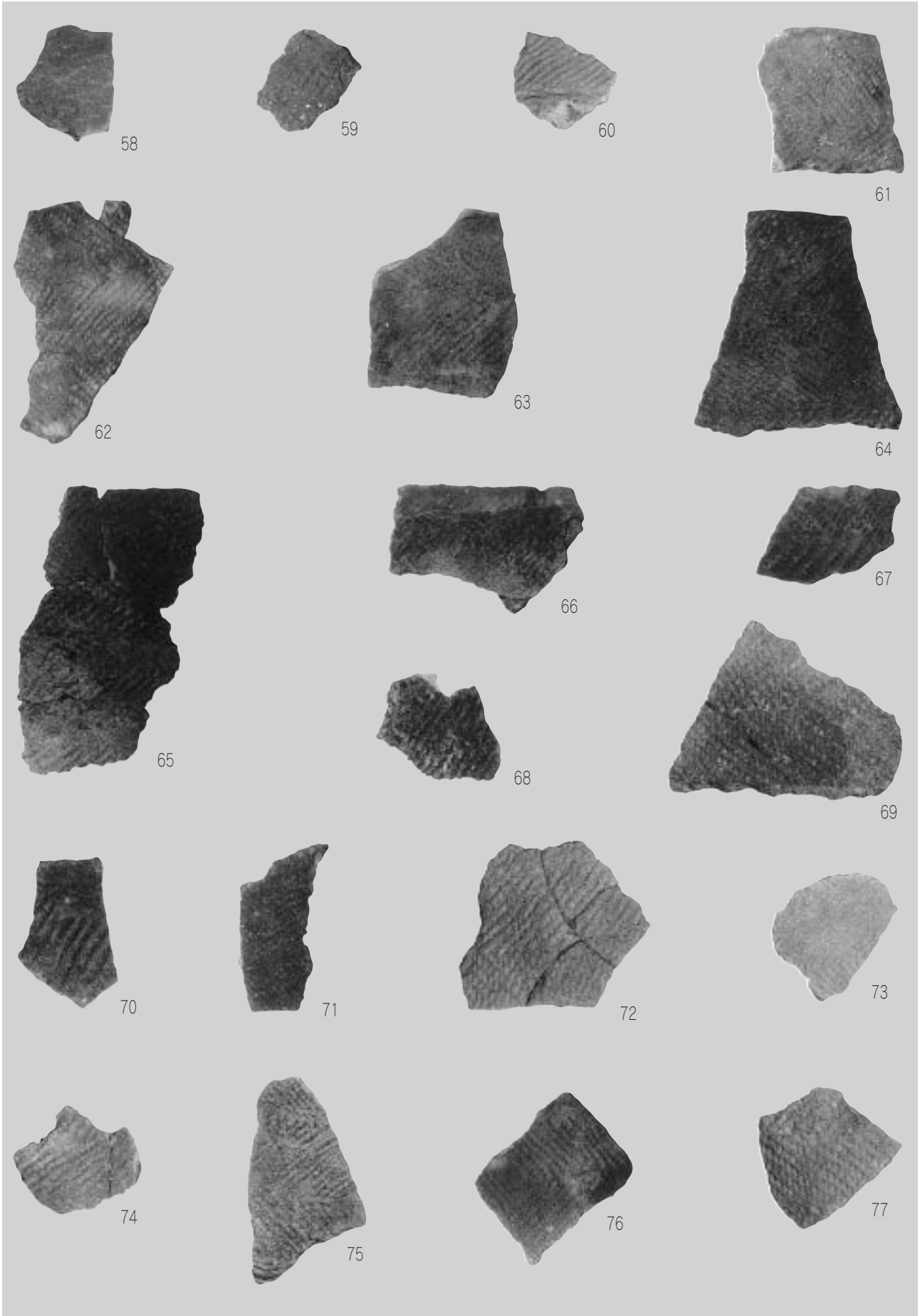


遺構外出土土器

図版 6

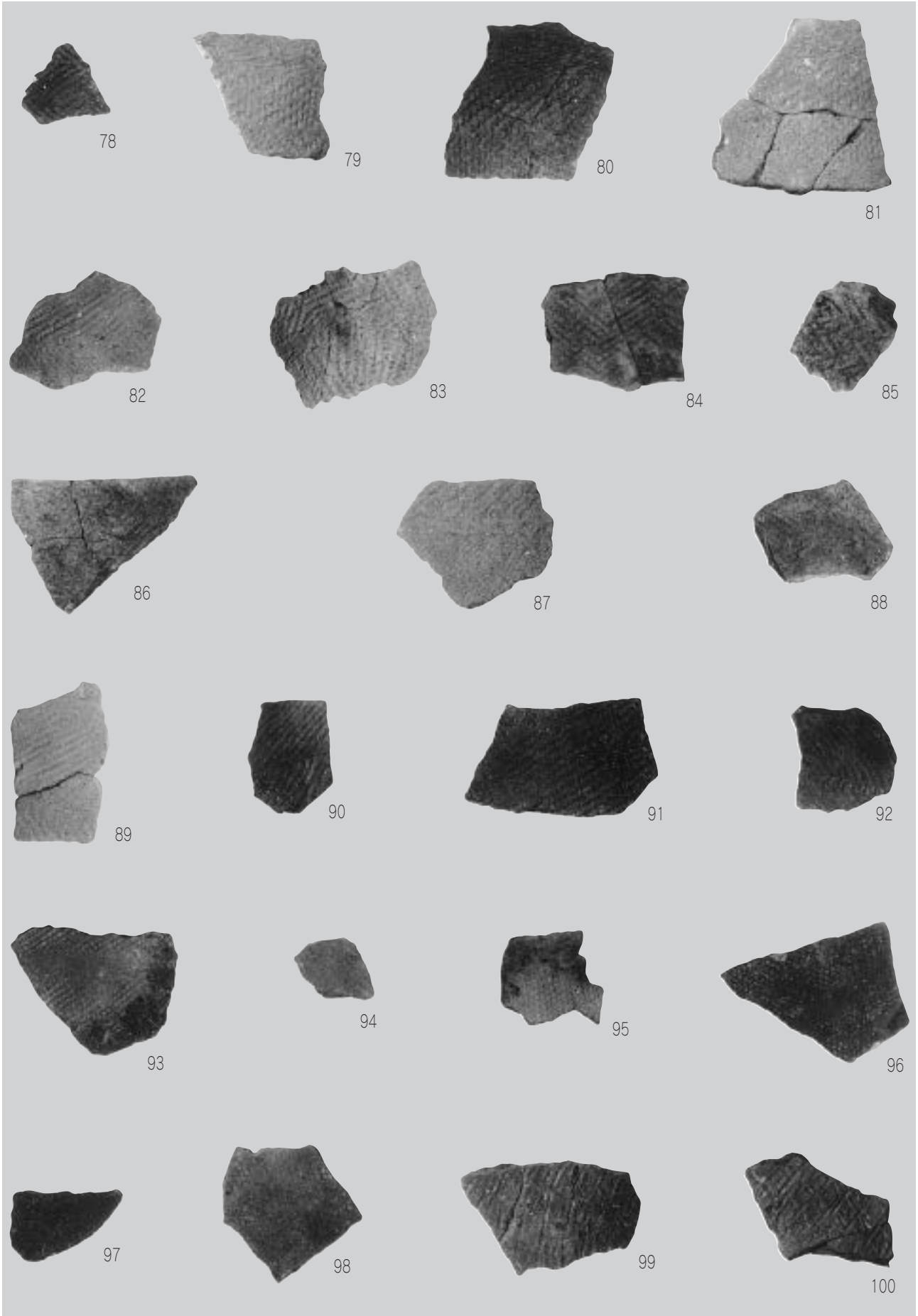
遺構外出土土器

図版 7



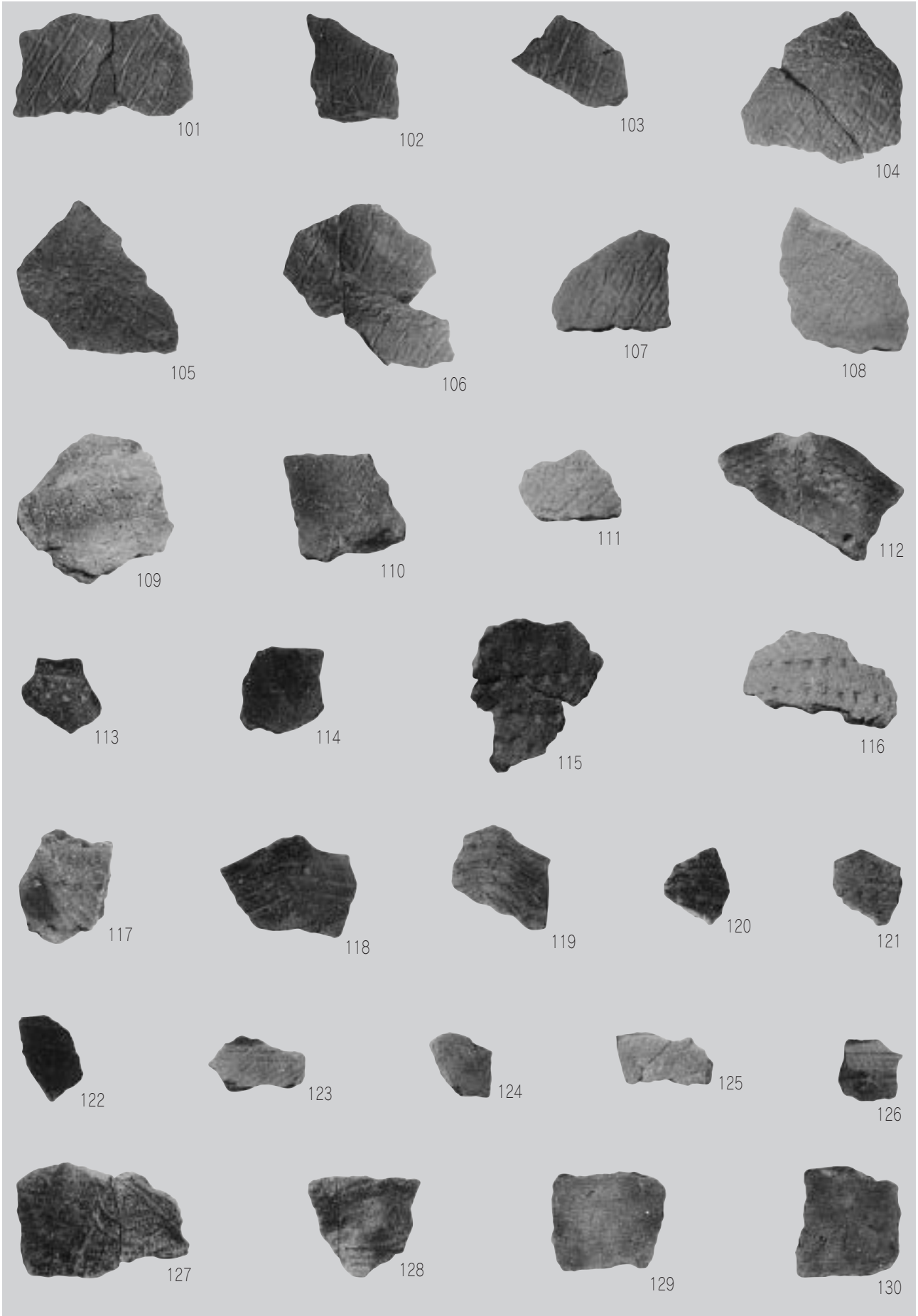
遺構外出土土器

図版 8



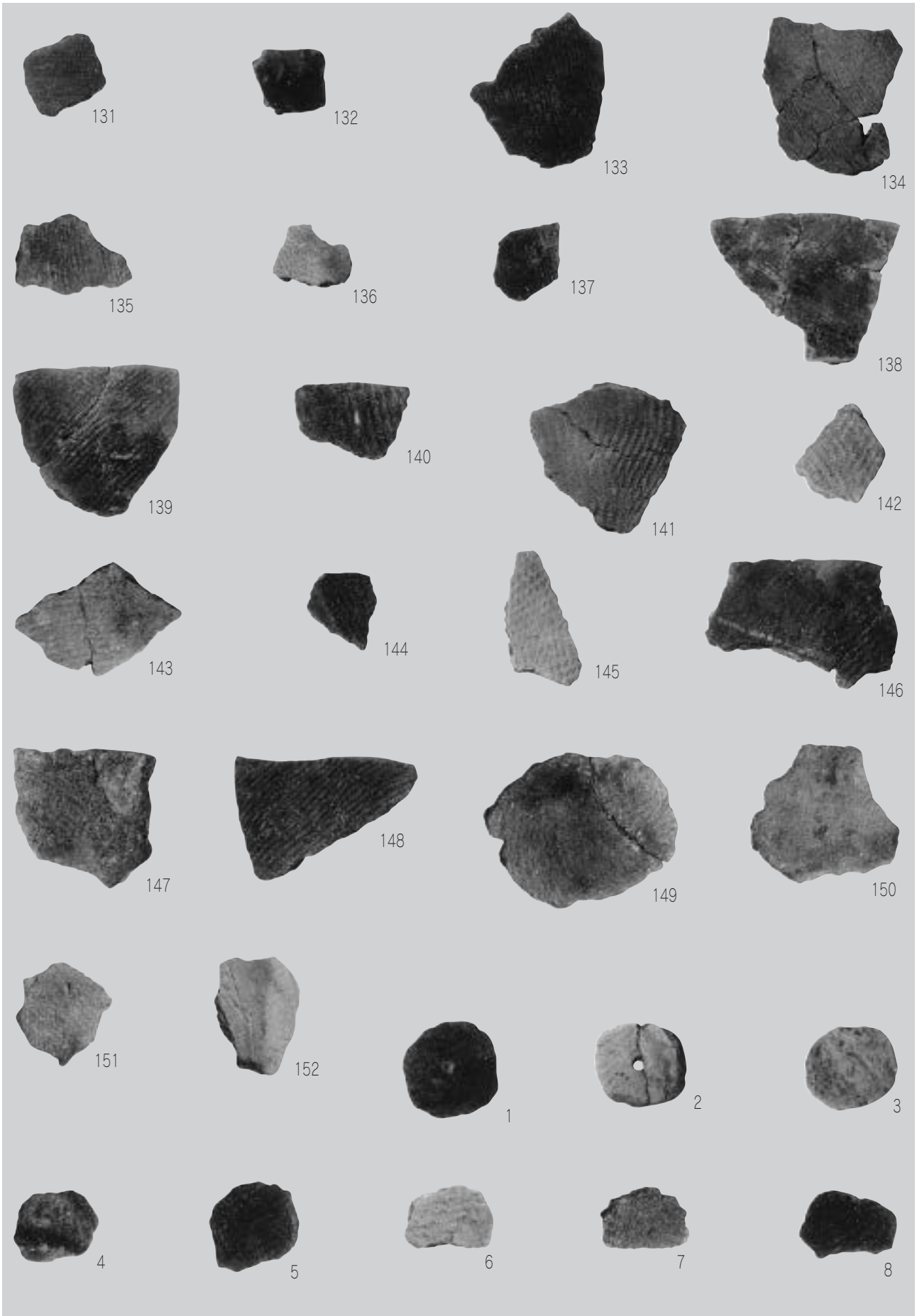
遺構外出土土器

図版 9



遺構外出土土器

図版10

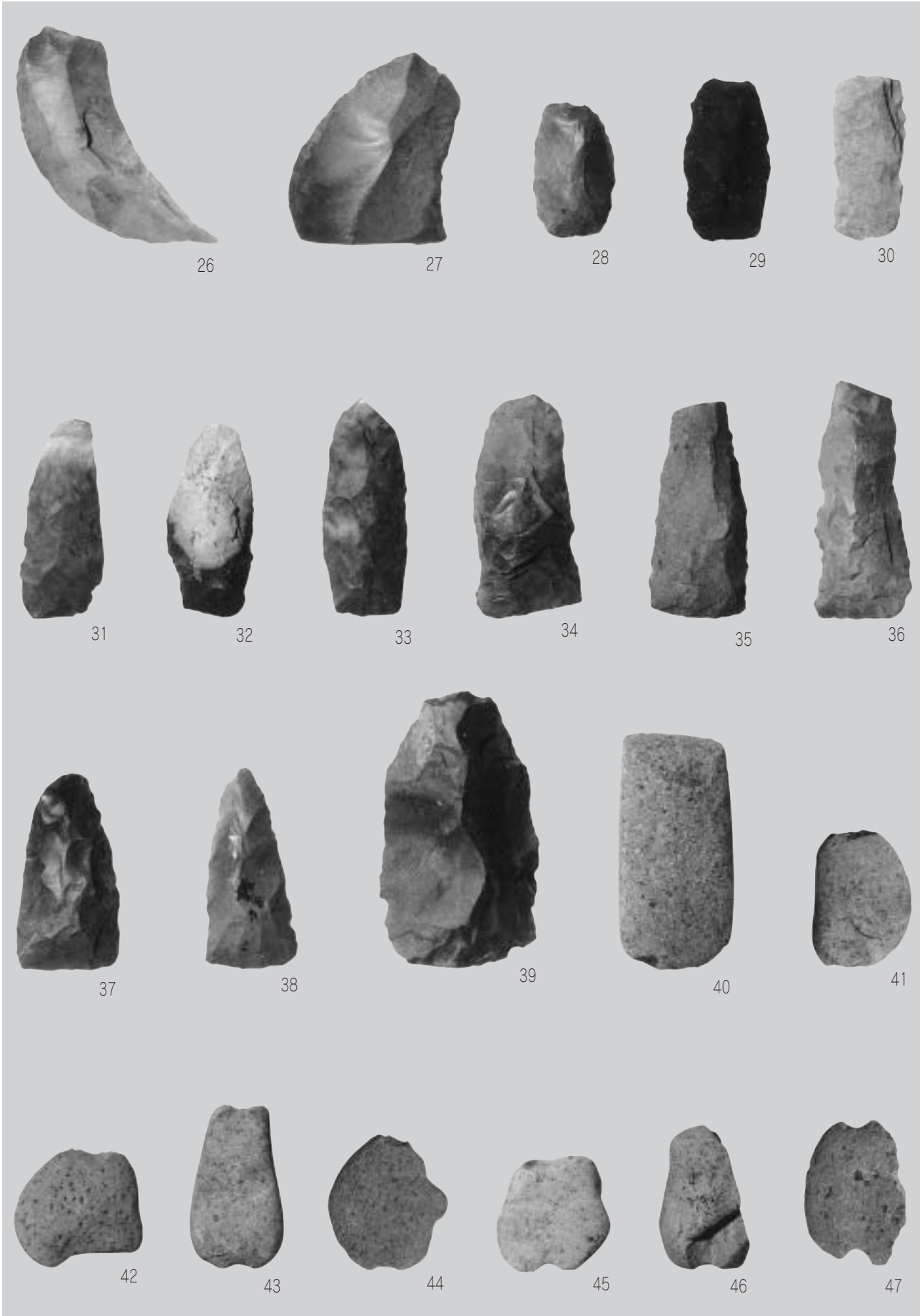


遺構外出土土器・土製品

図版11

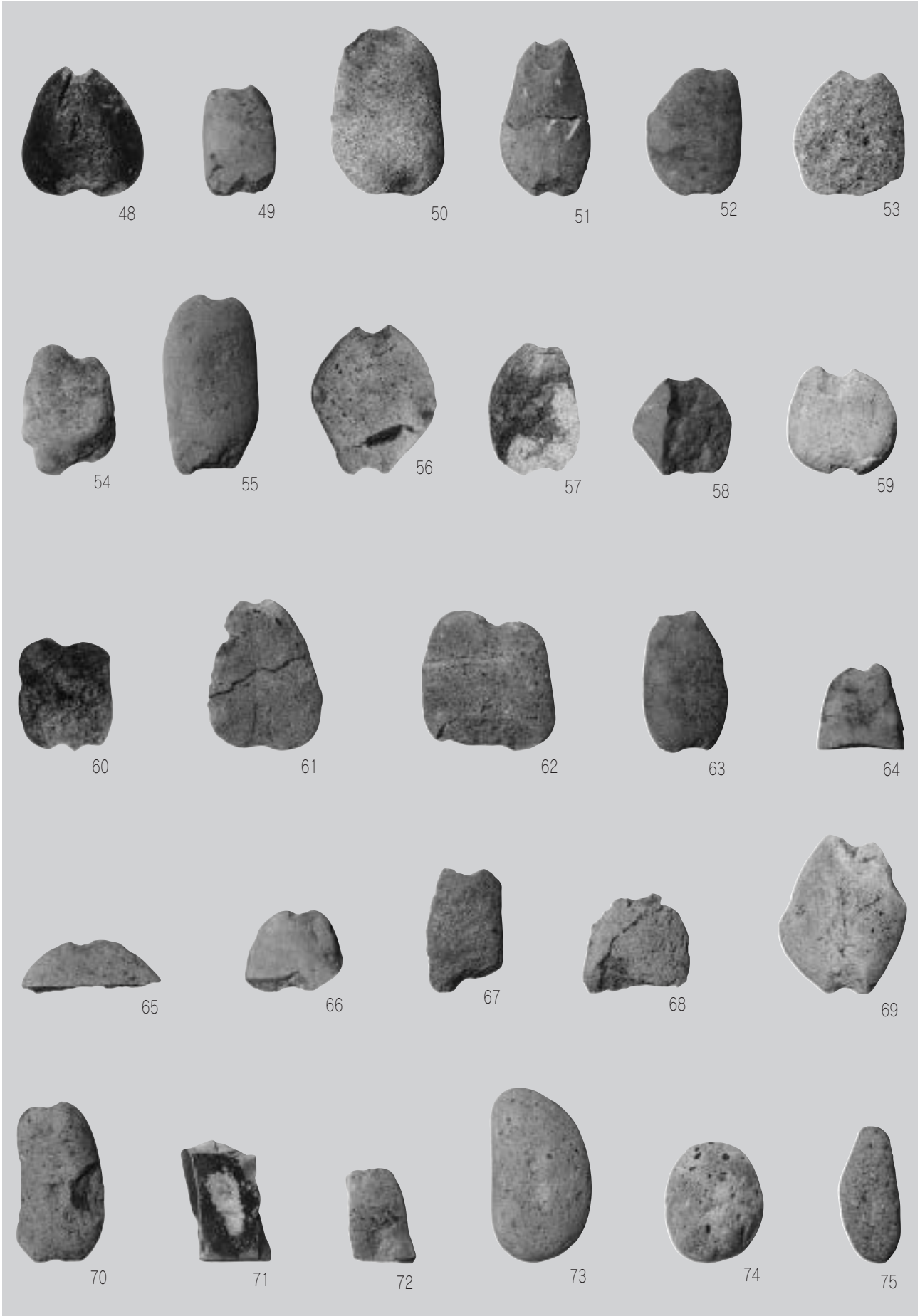
遺構外出土石器

図版12



遺構外出土石器

図版13



遺構外出土石器

図版14

調査２、３区全景

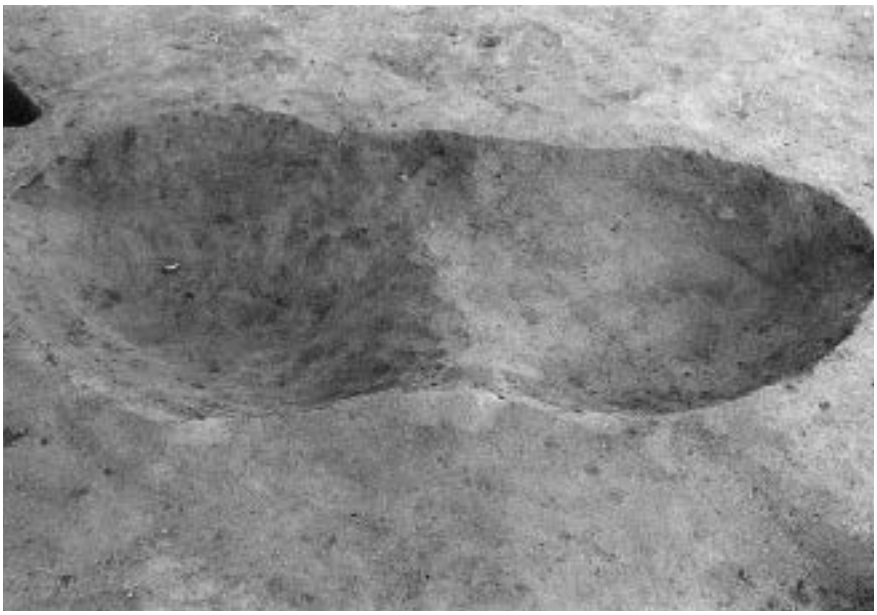
１号住居跡
炉検出状況（南から）

１号住居跡
完掘状況（南から）

図版15

2号住居跡
土器埋設炉検出状況（1）
（南東から）

2号住居跡
土器埋設炉検出状況（2）
（北から）



2号住居跡
完掘状況（西から）

図版16

8 号土坑（東から）

12号土坑（東から）

13号土坑（南から）

17号土坑（南から）

19号土坑（南西から）

20、41号土坑（南から）

21、42号土坑（南から）

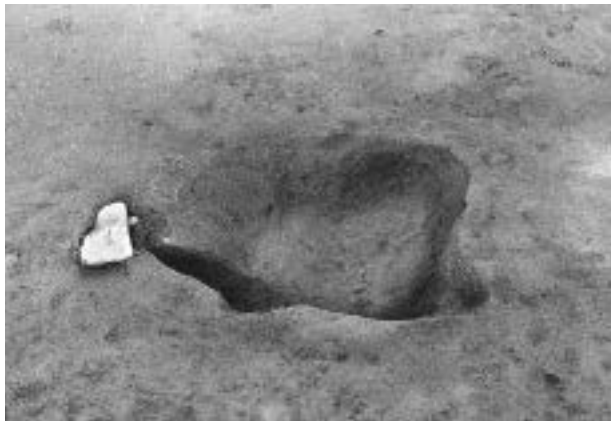
26号土坑（北西から）

図版17

29号土坑（南西から）

30号土坑（南から）

33号土坑（東から）

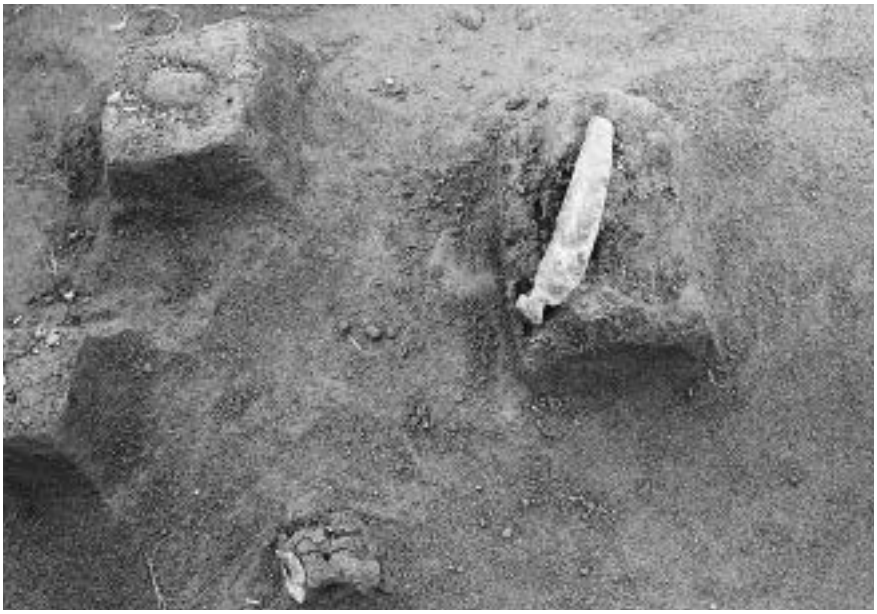


36号土坑（南から）

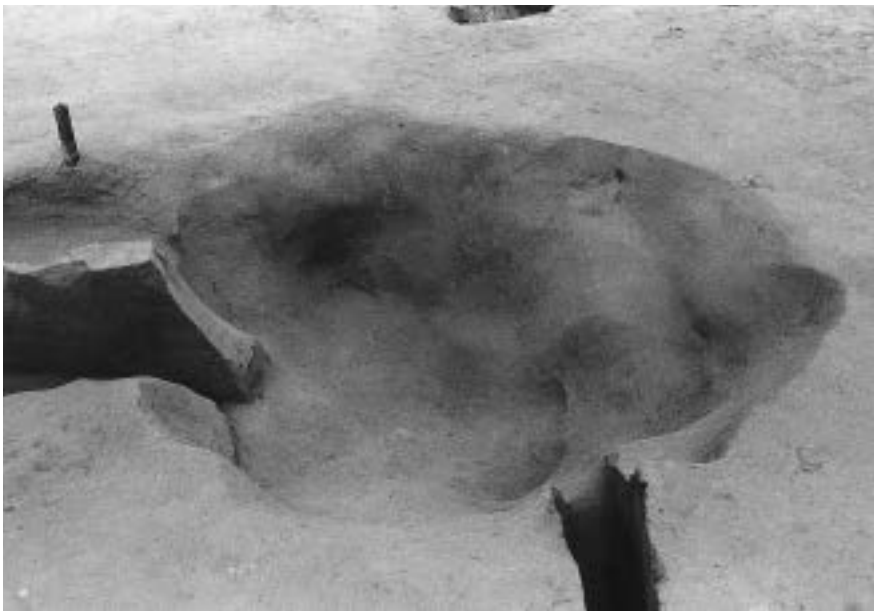
31号土坑剥片出土状況

図版18

10号土坑
遺物出土状況（１）
（南西から）



10号土坑
遺物出土状況（２）
（北から）

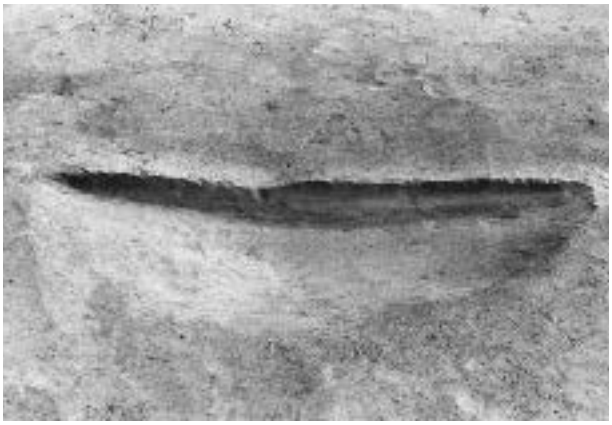


10号土坑
完掘状況（南から）

図版19

7 号焼土遺構　土層断面（南から）

7 号焼土遺構　完掘状況（南から）

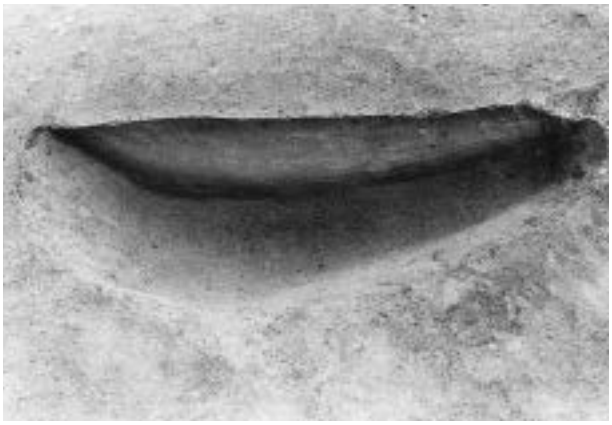


9 号焼土遺構　土層断面（南西から）

9 号焼土遺構（南西から）

19号焼土遺構　土層断面（南東から）

19号焼土遺構（南東から）



22号焼土遺構　土層断面（北西から）

22号焼土遺構（北西から）

図版20

石器集中地点
調査前状況（南東から）

石器集中地点
遺物出土状況（１）
（南東から）

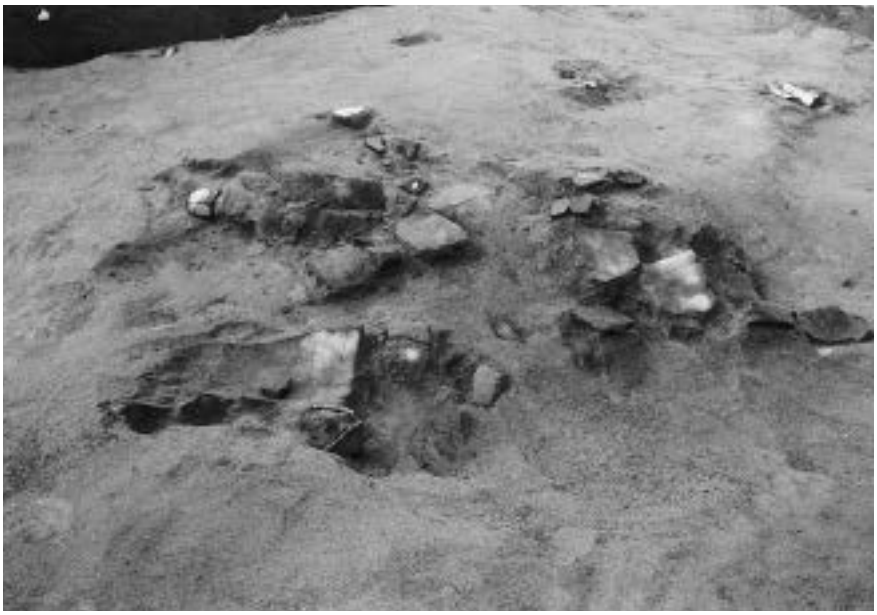
石器集中地点遺物出土状況（２）（北から）

石器集中地点遺物出土状況（３）（北から）

図版21

第Ⅴ層遺物出土状況（第69図６）

第Ⅴ層遺物出土状況



第Ⅴ層遺物出土状況
（第68図１、第69図７）

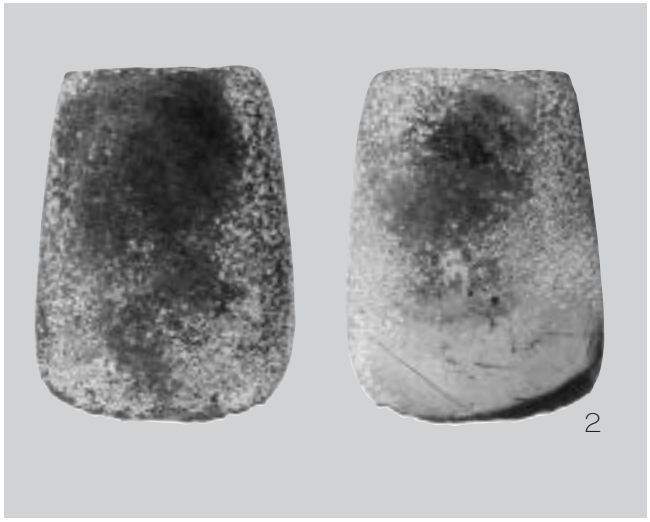
図版22

第Ⅴ層遺物出土状況
（第73図32、第74図33）

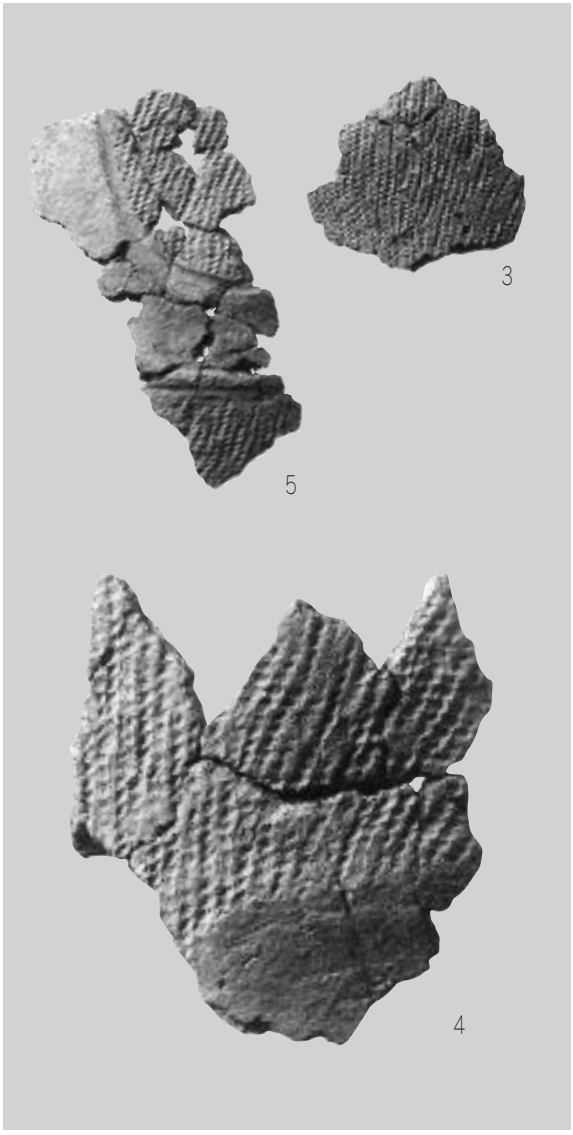
第Ⅴ層遺物出土状況
（第70図11）

第Ⅴ層遺物出土状況
（第68図２）

図版23



1 号住居跡出土遺物

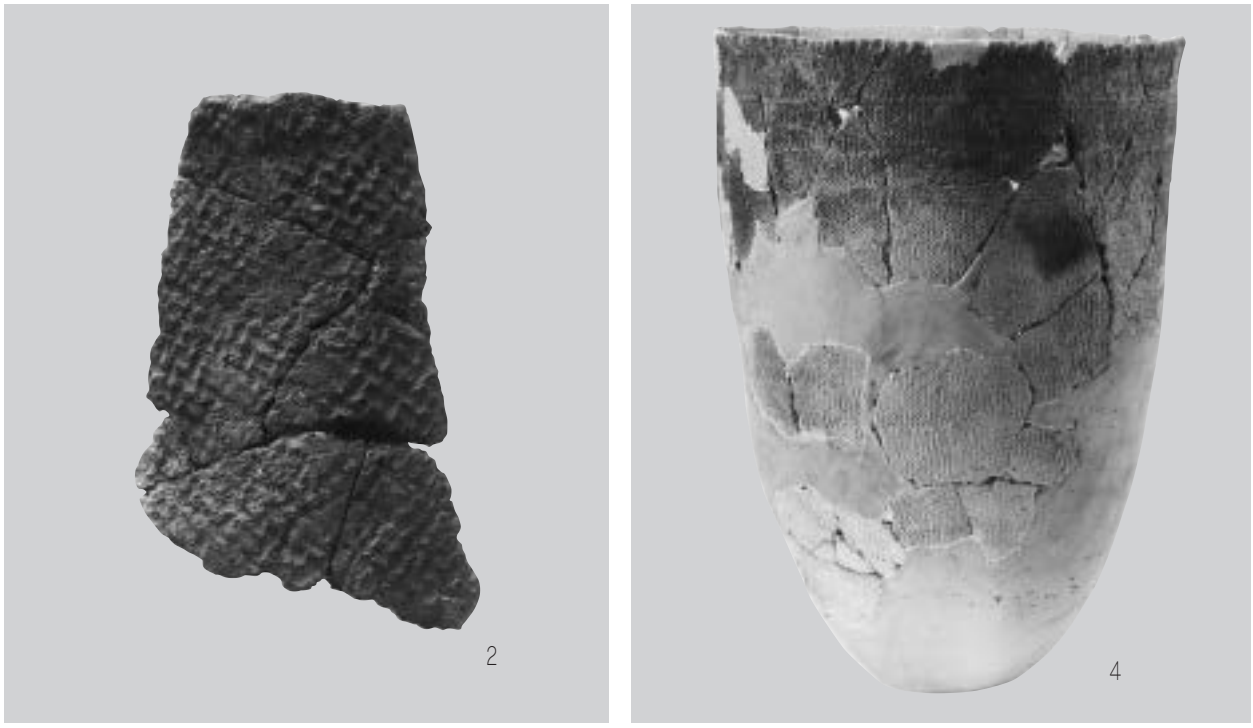


2 号住居跡出土遺物

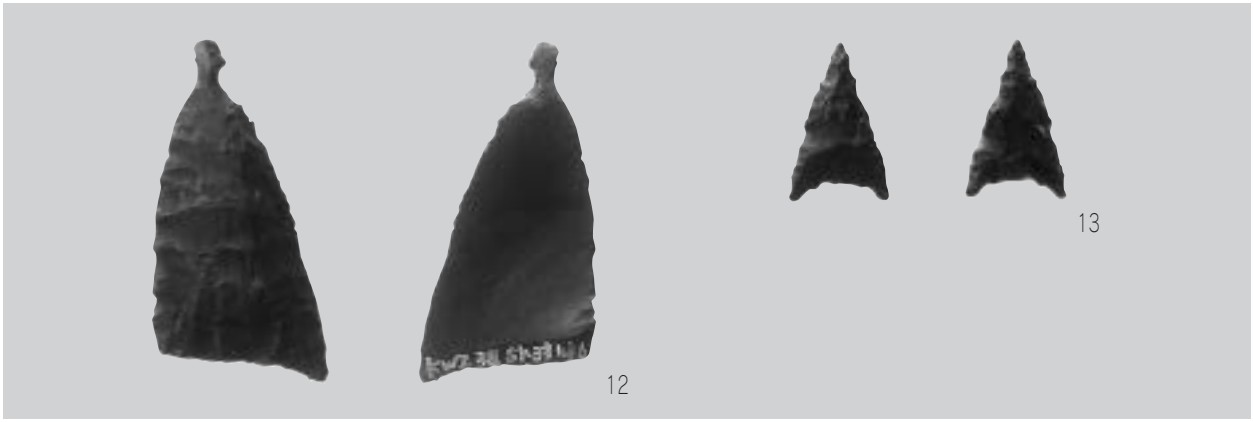
図版24

10号土坑出土遺物

図版25



26号土坑出土遺物



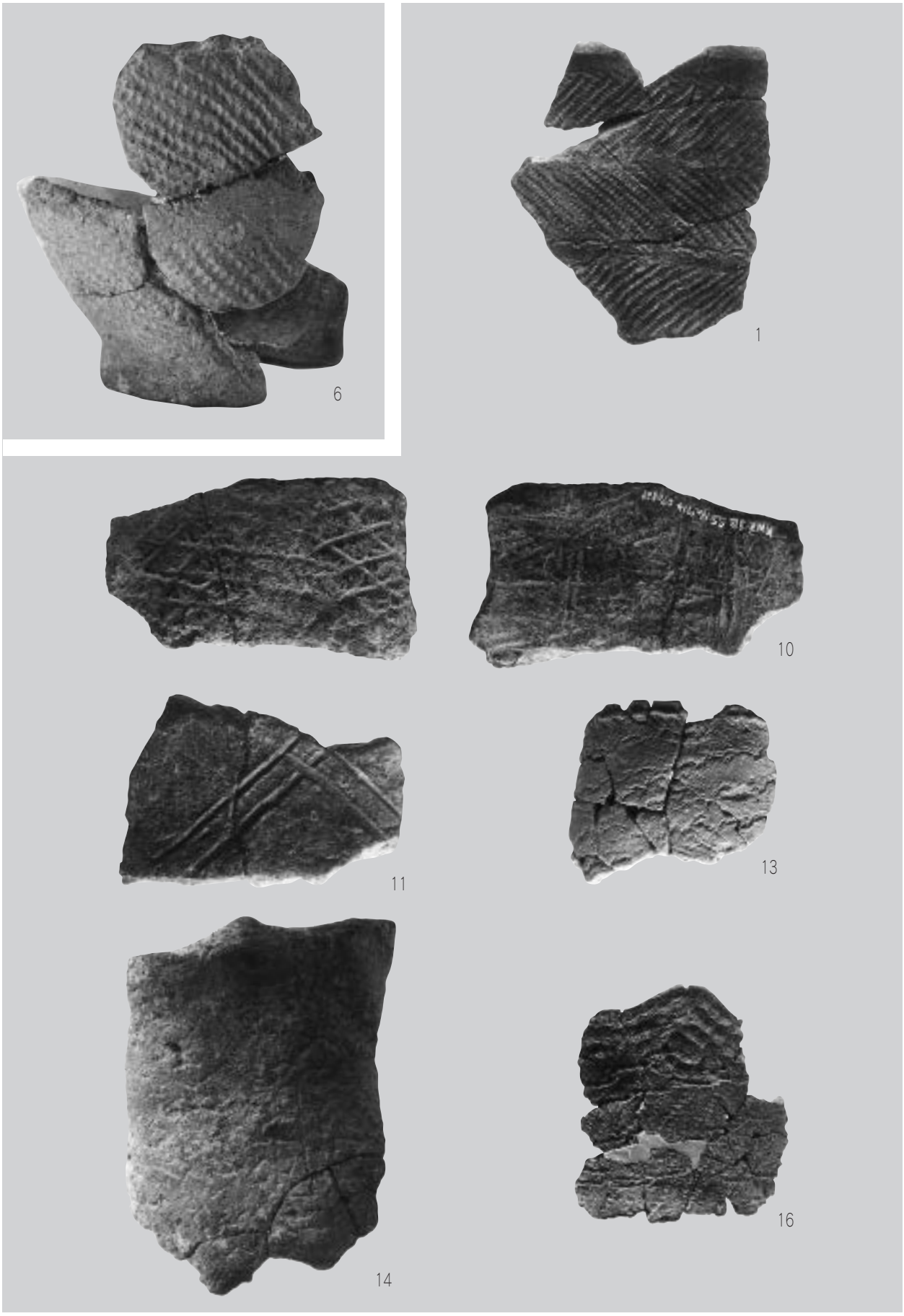
33号土坑出土遺物

36号土坑出土遺物

図版26

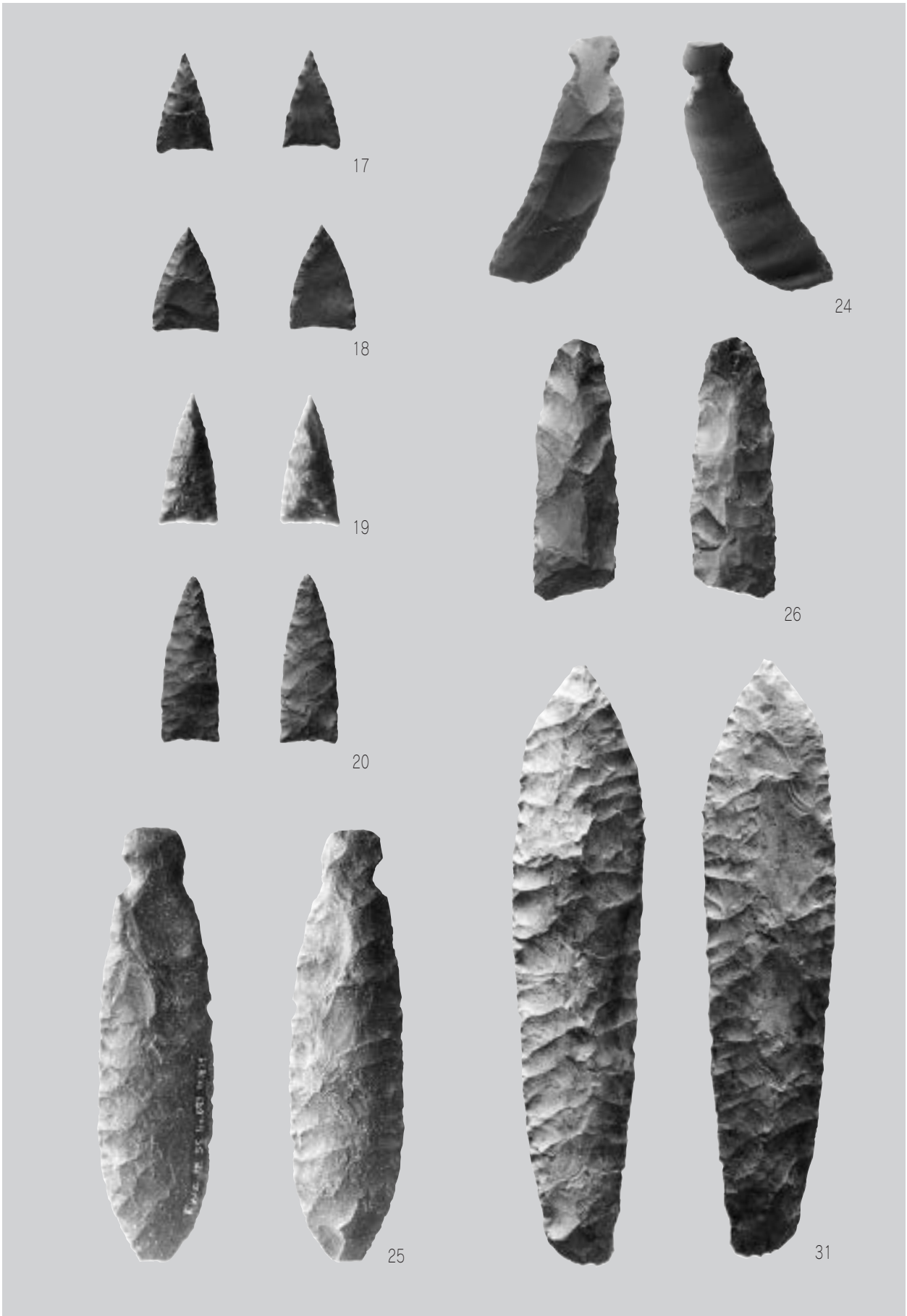
31号土坑出土遺物

図版27



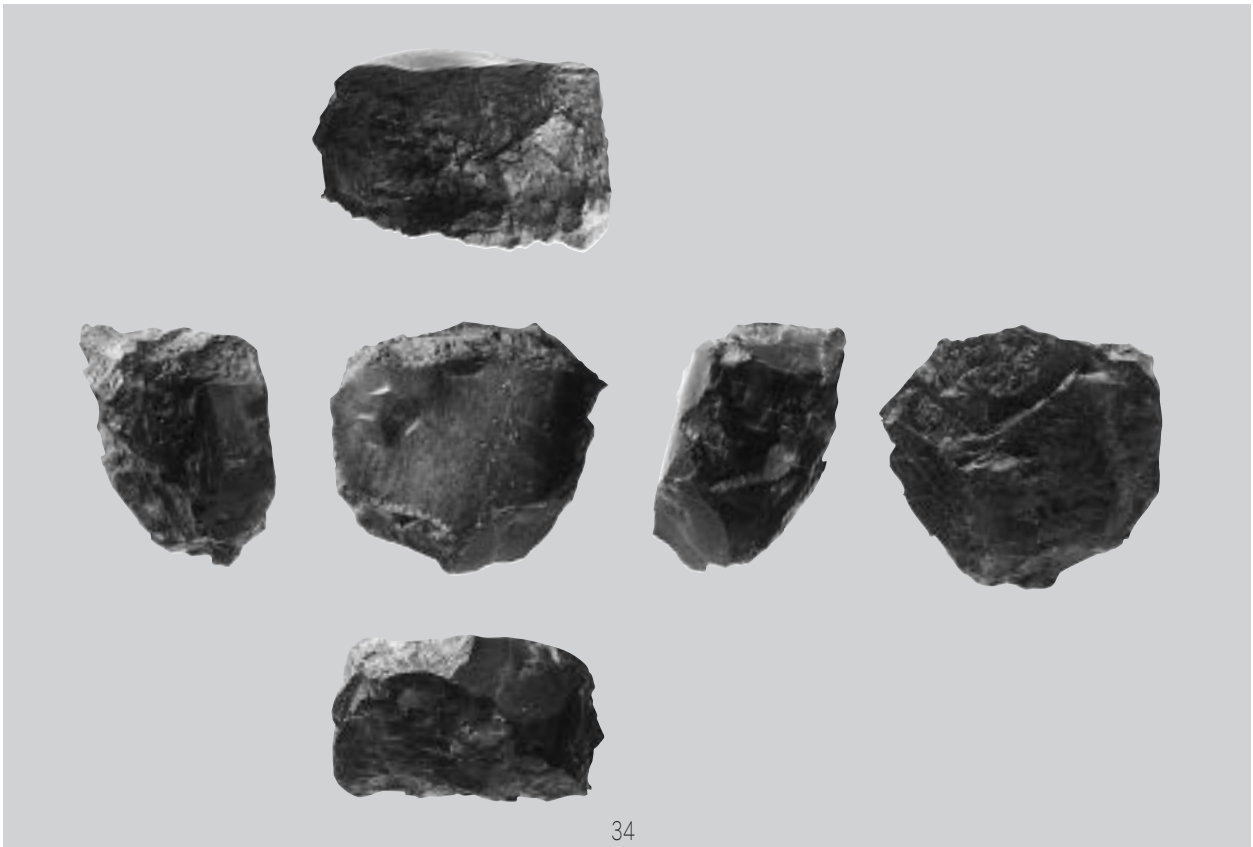
石器集中地点出土遺物（1）

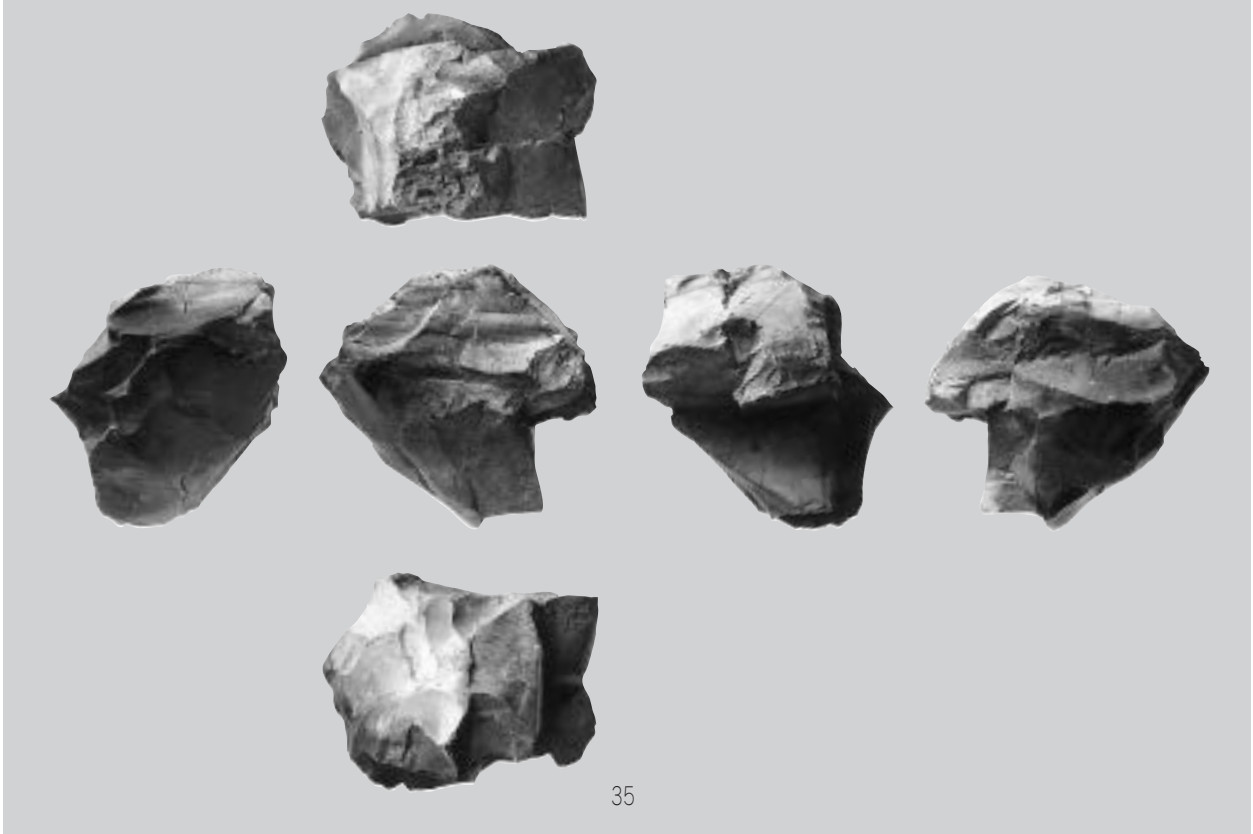
図版28



石器集中地点出土遺物（２）

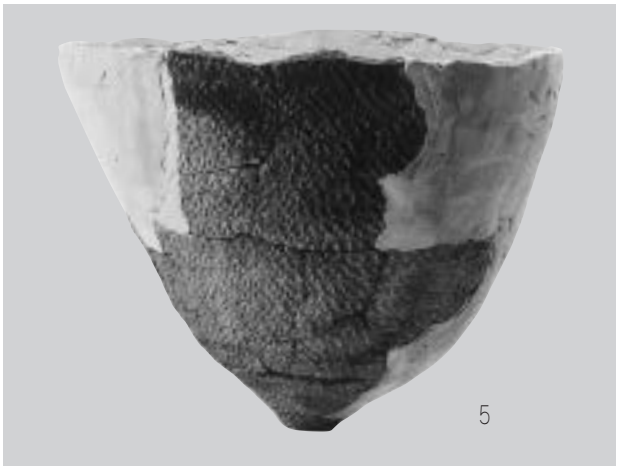
図版29

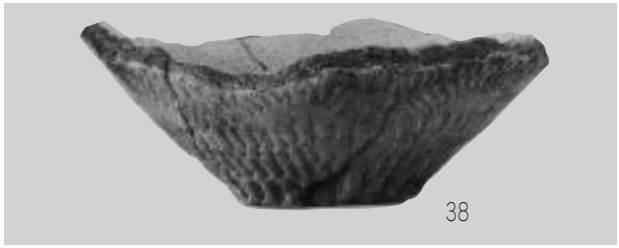


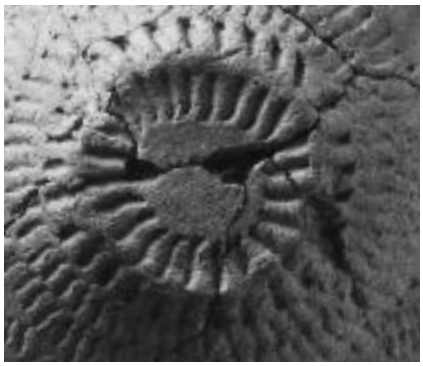


石器集中地点出土遺物（3）

図版30

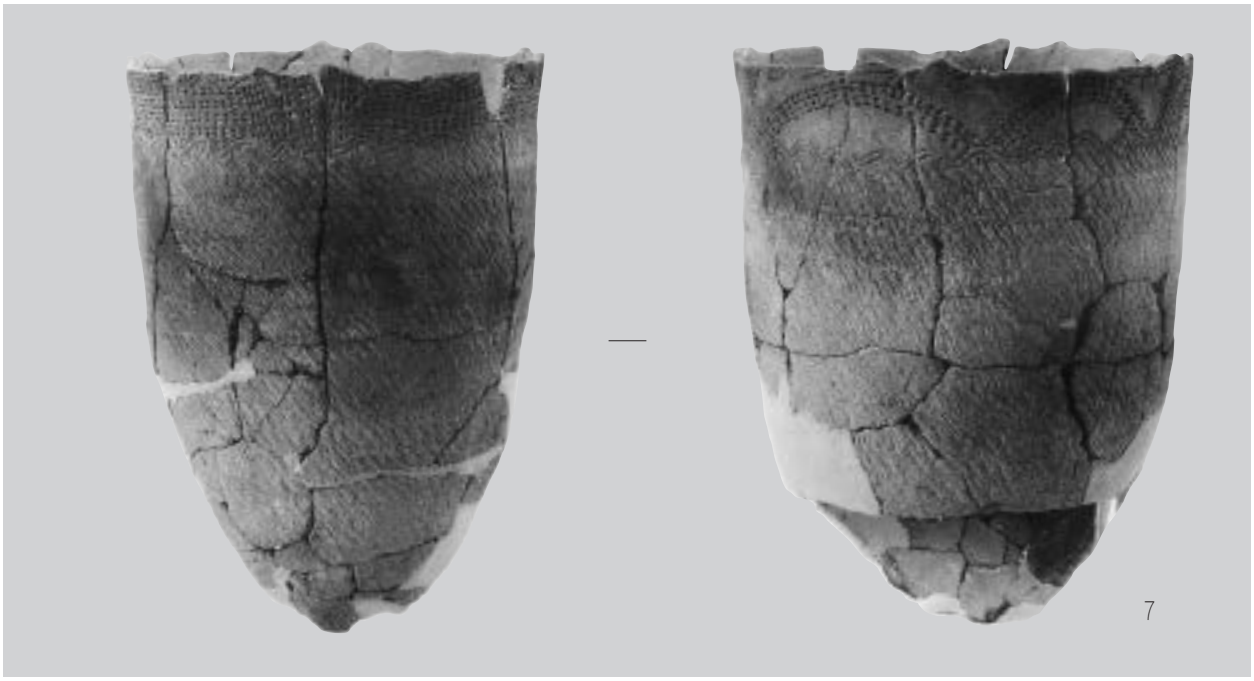


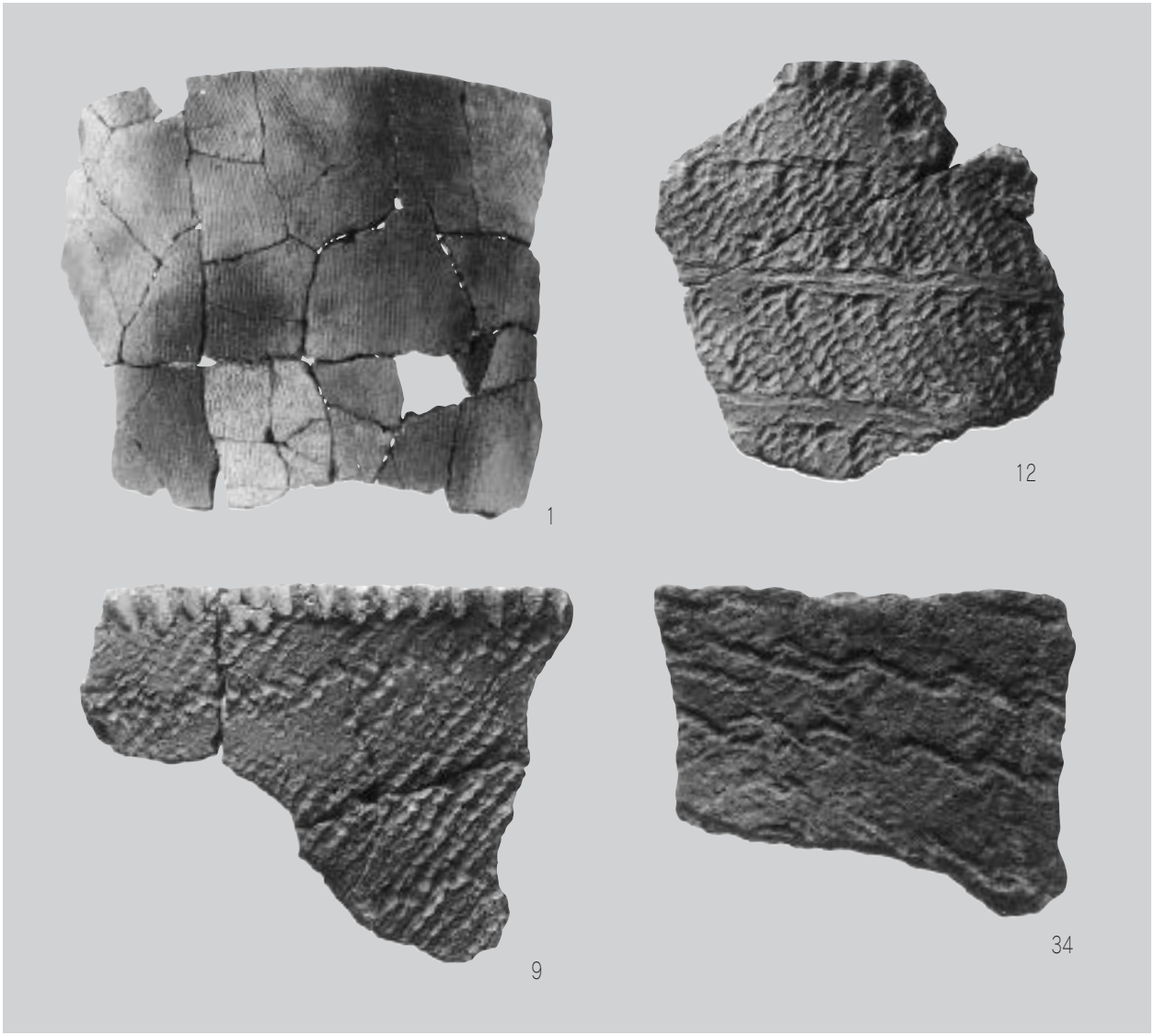




第Ⅴ層出土遺物（1）

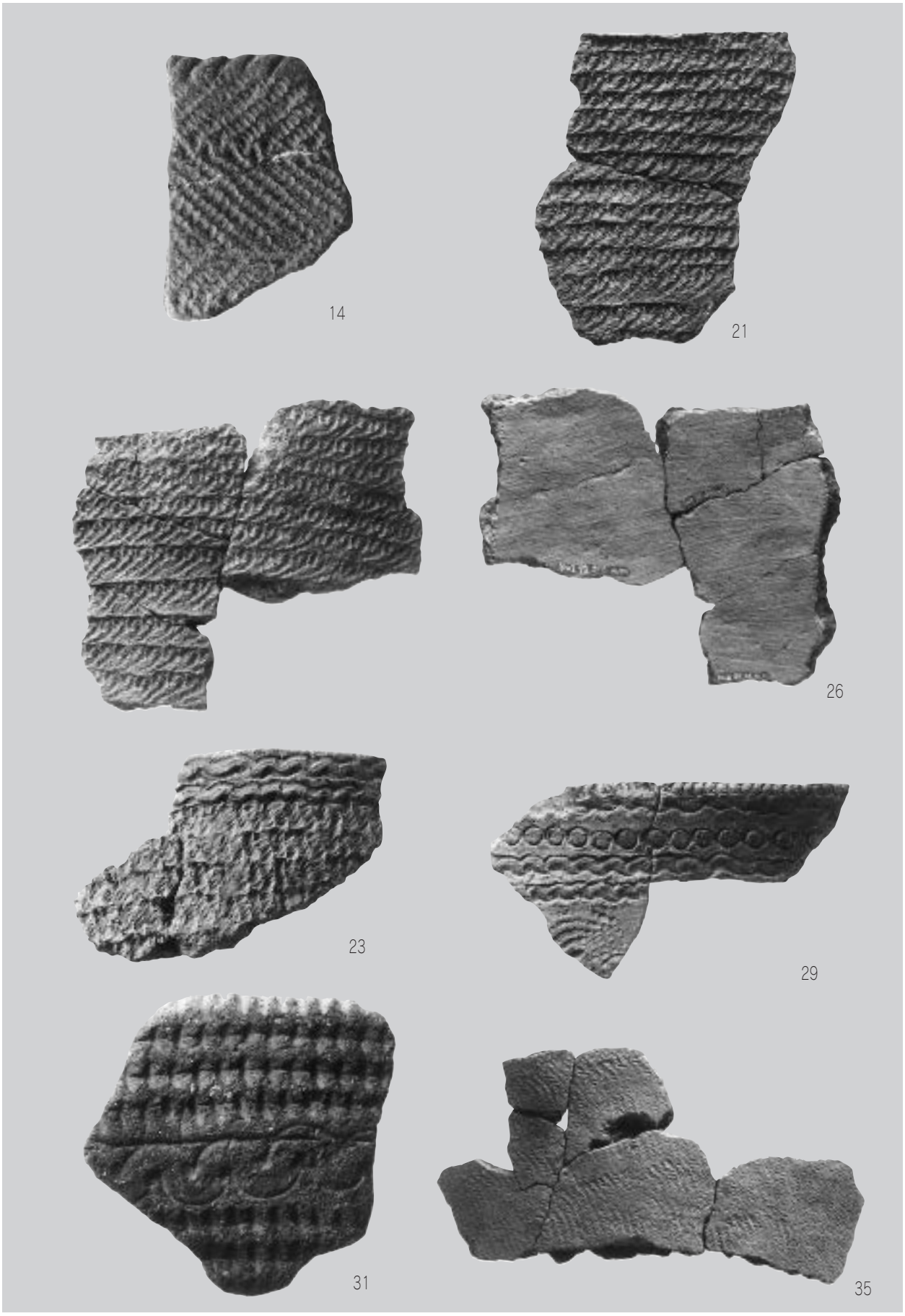
図版31





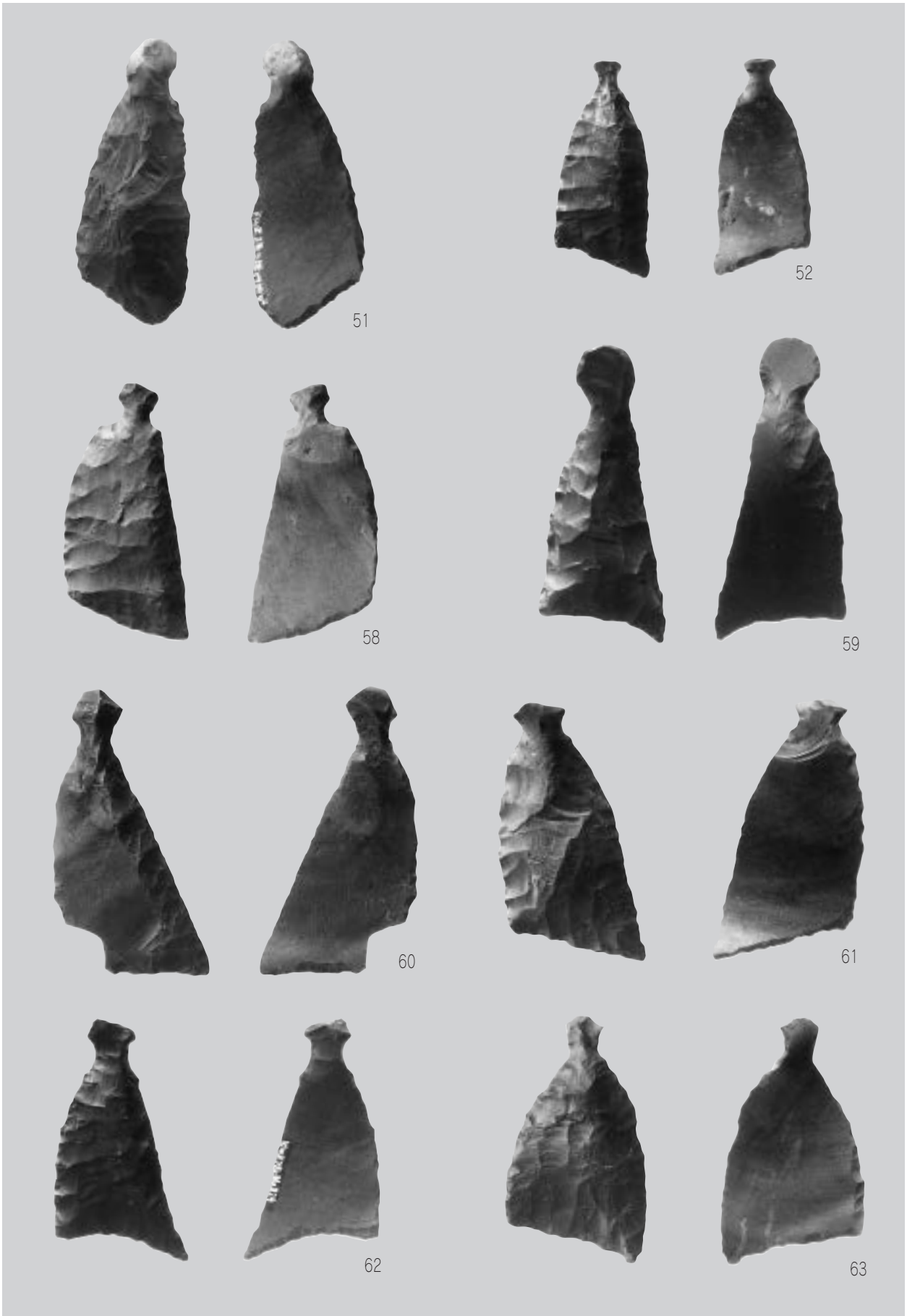
第Ⅴ層出土遺物（２）

図版32



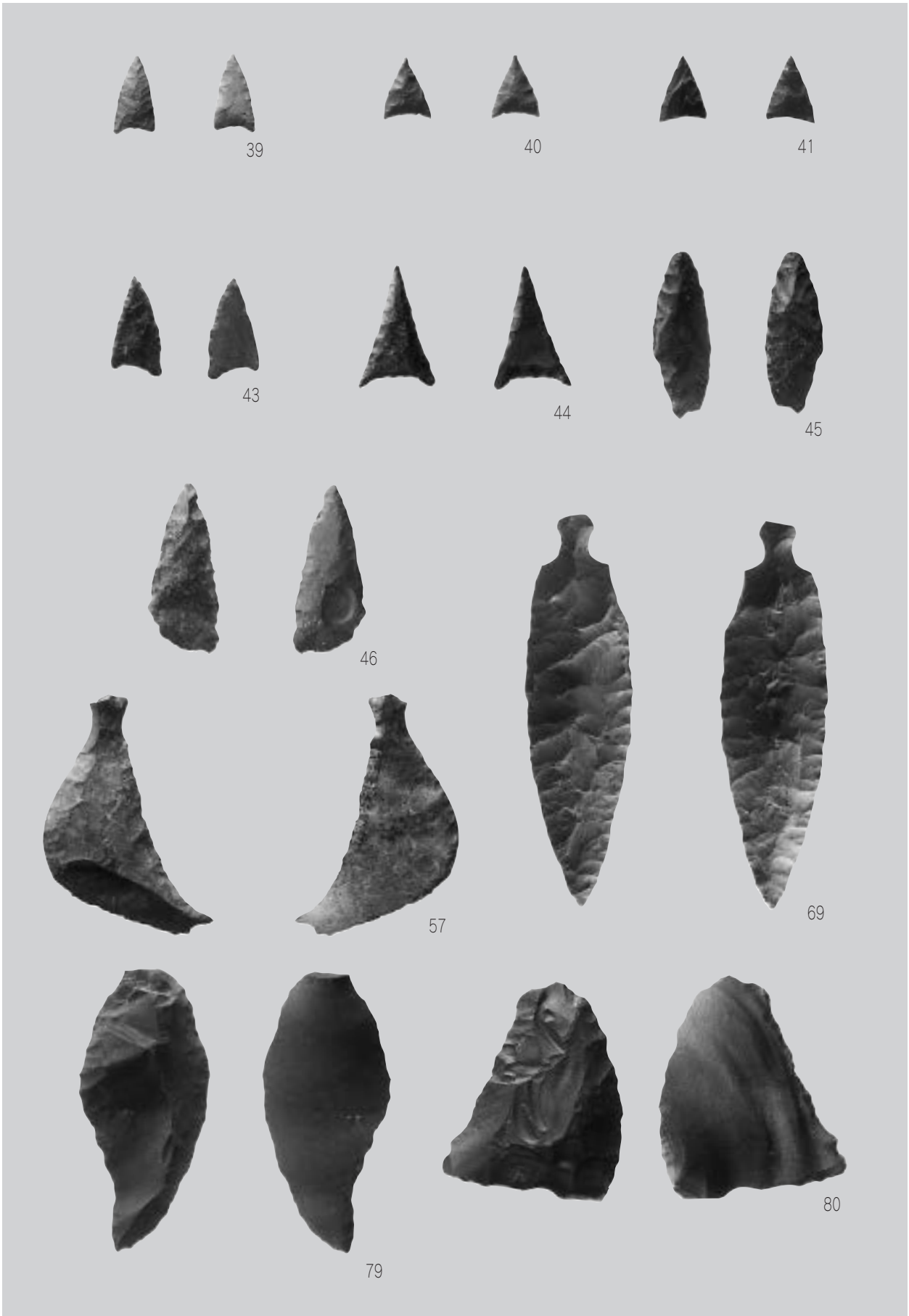
第Ⅴ層出土遺物（３）

図版33



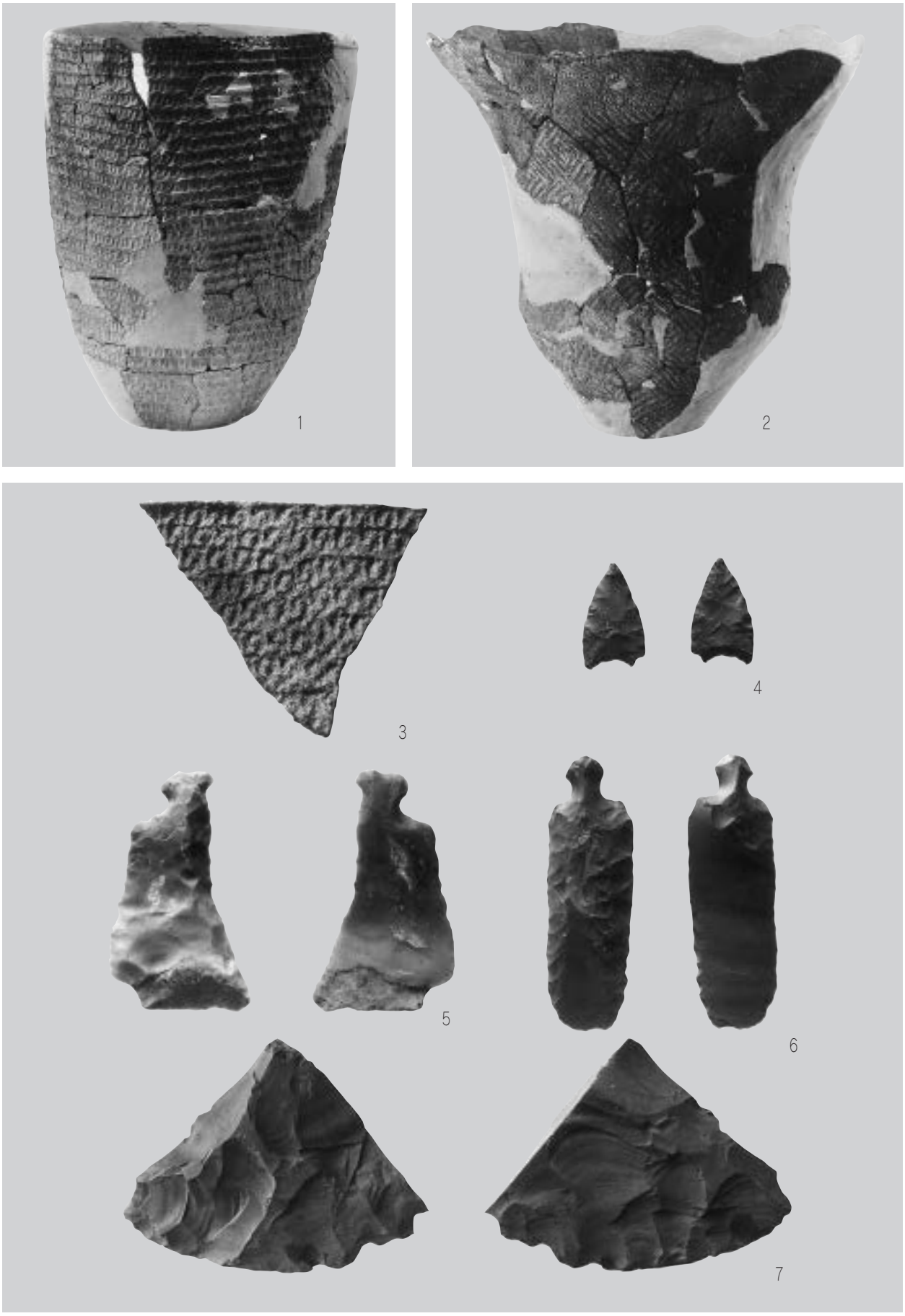
第Ⅴ層出土遺物（４）

図版34



第Ⅴ層出土遺物（５）

図版35



表採遺物

図版36

報 告 書 抄 録

ふ り が な	かわらざきいせき
書 名	河原崎遺跡
副 書 名	経営体育成基盤整備事業に伴う発掘調査報告書
巻 次	
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	安田忠市、進藤　靖、駒澤大学考古学研究会
編 集 機 関	秋田市教育委員会
所 在 地	〒010－0951　秋田県秋田市山王二丁目１番53号　山王21ビル内　　℡018－866－2246
発 行 年 月 日	２００９年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
かわらざきいせき 河原崎遺跡	あきたしゆうわあいかわあざ 秋田市雄和相川字 かわらざき 河原崎	05201	508	39° 35′ 50″	140° 12′ 29″	20070717～ 20071001	5,000	経営体育成基盤整備事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
河原崎遺跡	集落	縄文	竪穴住居跡　２軒 土坑　51基 焼土遺構　64基 溝跡　１条 土器埋設遺構　２基	縄文土器、土製品、石器	縄文時代前・中期、古代の複合遺跡。 竪穴住居跡は縄文時代中期（大木10式期）が２軒検出された。
		平安	土坑　２基	赤褐色土器	

要約

調査では、第Ⅴ層面から縄文時代前期の土坑や焼土遺構が、第Ⅳ層面から縄文時代中期末の竪穴住居跡が検出されている。

遺跡は、雄物川左岸の沖積低地に形成された自然堤防上に立地し、土の堆積状況から氾濫原であったと考えられる。これらのことから当該地は、縄文時代前・中期に狩猟のために火を焚いたり、石器の製作をした場所であると考えられる。

秋 田 市
河 原 崎 遺 跡
― 経営体育成基盤整備事業に伴う発掘調査報告書 ―

印刷・発行　平成21年３月
発　　行　秋 田 市 教 育 委 員 会
〒010-0951　秋田市山王二丁目１番53号
山王21ビル内
TEL 018-866-2246　FAX 018-866-2252
印　　刷　秋 田 活 版 印 刷 株 式 会 社